明治三十二年二月廿五日
第三種郵便物認可

明治三　五年四
毎　一　四五日發行

# 女學世界

## 第二巻第六號

口繪

花ふゞき（武内桂舟氏）
熊野御前（木村武山氏）
村雲日榮公
澁澤男爵夫人
箱根宮の下の風景
富山神通橋
朝鮮の風俗
臺灣士林女學校卒業式
赤間關實業補習學校
泰西名畫
其他



季節むき新柄流行品を階上階下總體に陳列いたし、尙ほ御休息室をも取設けおき候間、おなぐさみ旁々御子様方おつれ遊ばされ、ゆる／＼御遊覽なし下され度願上候

地方よりの御注文は、御手紙にて御申こし被下候はゞ、即日小包郵便にて發送可仕候、なほ注文御案内書御入用の節は御一報次第御送り可申上候

# 三井呉服店

東京日本橋駿河町　電話本局　特五二五　一二一七　一八六〇　二三二〇

大阪高麗橋三丁目　電話東　特四七三　一六五〇

# 女學世界第貳巻第五號目次


口繪寫眞（アントワネット 石版、銅版十二頁）

## 書畫手本

和歌と消息文……多田親愛先生・阪正臣先生筆
平安長春、双蝶尋香、牡丹、江山春霽……野口小蘋女史筆

## 論說

婦人之職業……參謀將校 山[illegible]

## 家庭

家庭評言……大町文學士
獨逸中等社會の家庭……女子大學講師 森[illegible]法學士
家庭隨感……ドクトル 川瀨元九郎
世帯の心得……×××
家庭小話……寒澤振作
下婢の使ひ方……黄[illegible]女史
室内裝飾……畫法師範 近藤嘉三
季節[illegible]の菓……春江女史
[illegible]の拵へ方……石井泰次郎

## 史傳……四九

ロラン、ポンピュール女史（上）……中内文學士
故中島湘煙女史の生涯（下）……羽仁もと子
本朝名媛佳話（續）……熊田千巵

## 文苑……六三

◎和歌（佐保姫、梅）……[illegible]諸名家
◎文章▲[illegible]の春（吉岡すみ子）▲[illegible]の夜（[illegible]すみ子）▲[illegible]（若[illegible]女史）▲黒衣の馬車（[illegible]女史）

## 學藝……八一

[illegible]（上）……女子高等師範學校講師 藤堂梅村
花の吉野山（上）（歴史地理）……文學士 喜田貞吉
[illegible]の話（化學）……松本女史
[illegible]の話（植物）……[illegible]生
食物の話（[illegible]）（完）……[illegible]女史
改良衣服の仕立方……野中女史
裁縫と算術……女子職業學校教師 [illegible]子鋼子
編物指南……女子職業學校教師 豐原繁尾
改良の婦人合羽……新潟女子師範講師 深田とよは
音樂の心得……[illegible]女史
生花講話……梶野智水
[illegible]繡講話（秋草、菊花）……武村耕靄

講義 ……一二九


枕草紙評釋(下) ……尾上文學士
漢文評釋(中)(下段續き) ……久保文學士
歷代和歌評釋(四)(古今集の部) ……臼井文學士


小說 ……一四三


藤黄繋綴(六) ……田村松魚
ねずみ洞(三) ……[illegible]


名家談叢 ……一六〇


女子非獨立談 ……高橋絹子刀自談
家庭教育に就て ……下田歌子女史
與服談(流行の變遷) ……杉山東洲翁


娛樂 ……一七〇


投子留○なぐさみ
のみ草
新案料理 ……春
春の小品詞 ……孔


才媛詞藻 ……一八一


◎和歌(東南、野遊)百餘首
◎雅文三篇
◎消息文四篇
◎雜文七篇


懸賞文披露(課題學びの窓)


▲甲(…ふじ子)▲乙(高井滋浪子)▲丙(菜花女)▲賞外佳作梅川むら子外八篇
◎月並懸賞文募集廣告
◎英語實習


雜報 ……二〇三


◎村雲日榮尼公◎[illegible]林女學校の卒業式◎女子寄宿舍學園の設立◎女子學院の卒業式◎高等學術の講義會◎京都淑女學校◎女子靜修學館◎ホーニームーンの起源◎新刊紹介

花ふゞき




（武内桂舟氏筆）

小川一眞製版印刷



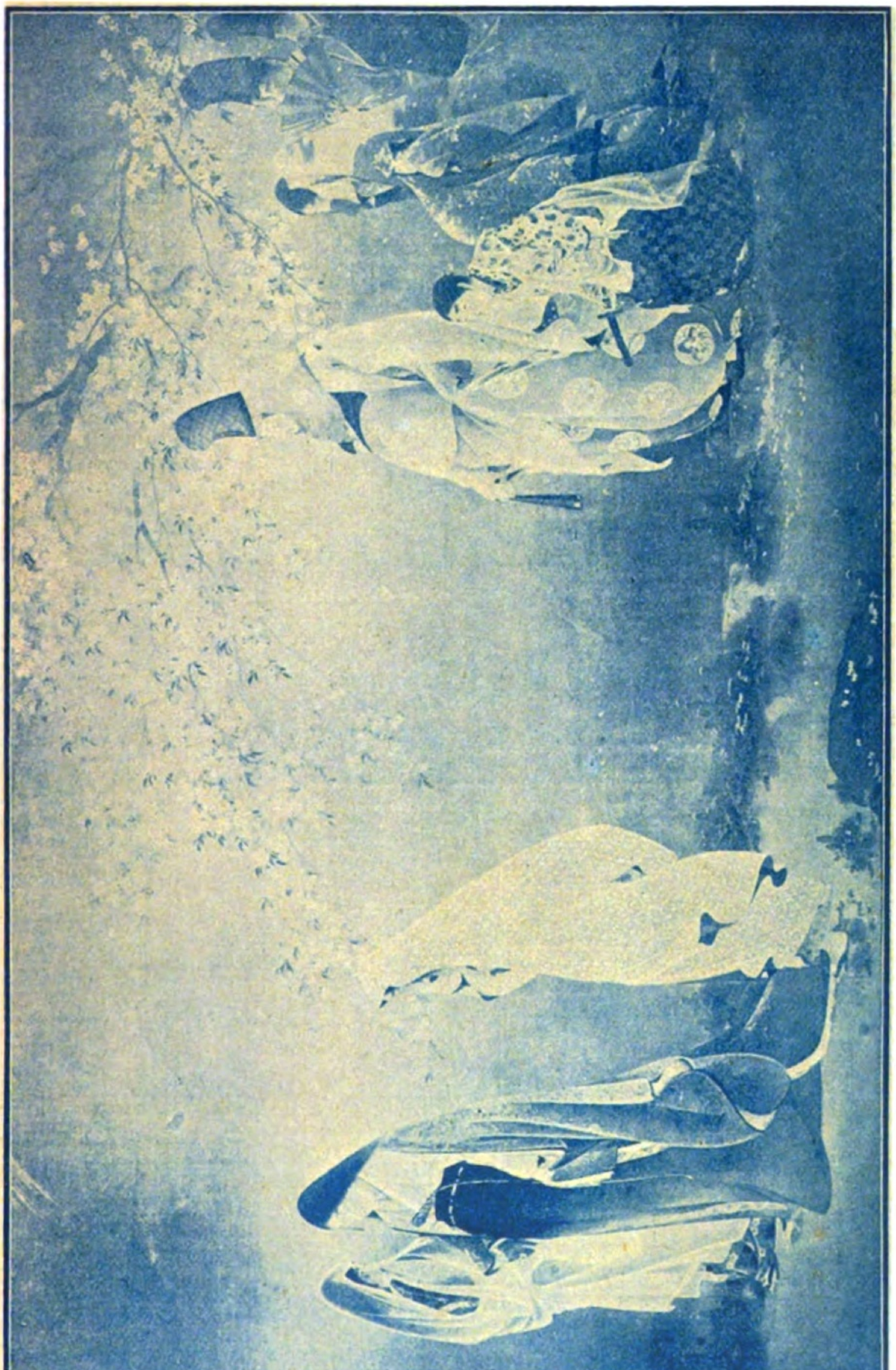
（雜報欄参照）

村雲日榮尊師

名流肖照



男爵夫人澁澤兼子



熊野御前の袂別

（木村武山氏筆）

# 帝國百科全書

文學士青木昌吉君著

## 邦語獨逸文章論

(第八十二編)(近刊)

本書は獨逸文典中の文章論を平易に講究したるものにして曩に出版したる獨逸文典に講述したる詞論と前後相俟て獨逸文典全部を完結するものなり普通の文典は詞論に於て已に接續詞の意義及用法を論ずる例なれども文章の種類及性質を知らずして漠然接續詞の意義を論ずるも初學者に何等の功あるとなし編者讀本及小説を閲讀の際に初學生に最も解し易きものと認めたるものゝみを採用し以て學生の頭腦を無益に苦しむるを避けしむる也

上製五十錢 郵稅十錢
並製卅五錢 郵稅八錢

文學士松井知時君著

## 邦語佛蘭西文典

(第八十三編)(近刊)

上製五拾錢 郵稅拾錢 並製卅五錢 郵稅八錢

本書は佛語を知らざる人に其大要を知らしめんとするものなれども稍進んだる人に對しても尙有用なるものたらしめんか爲めに普通の小文典には容易に見るを得ざる所まで立入りたる點なきにあらず然れども其編纂の方法は一面獨習に便し他の一面は教科書として遺憾なし加ふるに昨年九月佛國文部省より發布せし佛語文法改正令を參考して各所に之に關する注意を與へたり

東京日本橋區本町

博文館發兌

(甲の一)

新婦人觀第六

# 婦人と家庭

文學士寺内至誠君著◎山中古洞君畫 三月二十五日發行

婦人の生命は實に家庭に在り。家庭の二字を除いて、婦人を研究すると能はざる也。最後の『新婦人觀』の、筆を此大問題に着けたるもの即ち之に在り。卷頭家庭のいかなるものなるかを說き、姑嫁の關係、夫妻の間、はた女※學生上りの妻君の價値、いかにして家庭を始む可き乎、等を說き、婦人の爲めに無道の夫を責め姑を諭すあり。記述最も丁寧懇切、既に嫁せる婦人は以て其家庭を治む可く、未嫁の人は以て新家庭に入る可き準備となすべし。

正岡藝陽君著
一條美成君書

## 女流ハイカラー

＝全一冊 頗美本 定價貳拾錢 郵稅金四錢＝

明治の社會が產みたる怪物女流ハイカラーの眞相は奈何なるものぞ、乞ふ本書に就いて之を知れ。

◎全部六册完成 一部二十五錢●郵稅四錢 六部郵稅共金一圓六十錢 全部完成

新婦人會編纂

發行所 東京神田錦町 新聲社

# 中等夜學校生徒募集

一本校ハ晝間業務アル國民子弟ニ高等普通學ノ全般ヲ履修セムシルヲ目的トス●修業年限 中學五ヶ年ノ課程ヲ三ヶ年ニ短縮シ壹學年ハ中學三學年ニ相當ス●授業 三月一日開始シ每日自午后五時半至午后九時半四時間トス●入學資格 高等小學卒業生或ハ之レト同等ノ學力アルモノトシ三四兩月中ニ限リ一、二學年共入學ヲ許ス詳細ハ郵券貳錢ヲ添ヘ申込マバ規則書ヲ送付ス

校長代理 校務顧問ドクトルオフ、フヒロソフヒー 高木正義

校務主監講師 水津謙介

明治卅五年三月

東京神田 中等夜學校

(甲の二)

(甲の三)

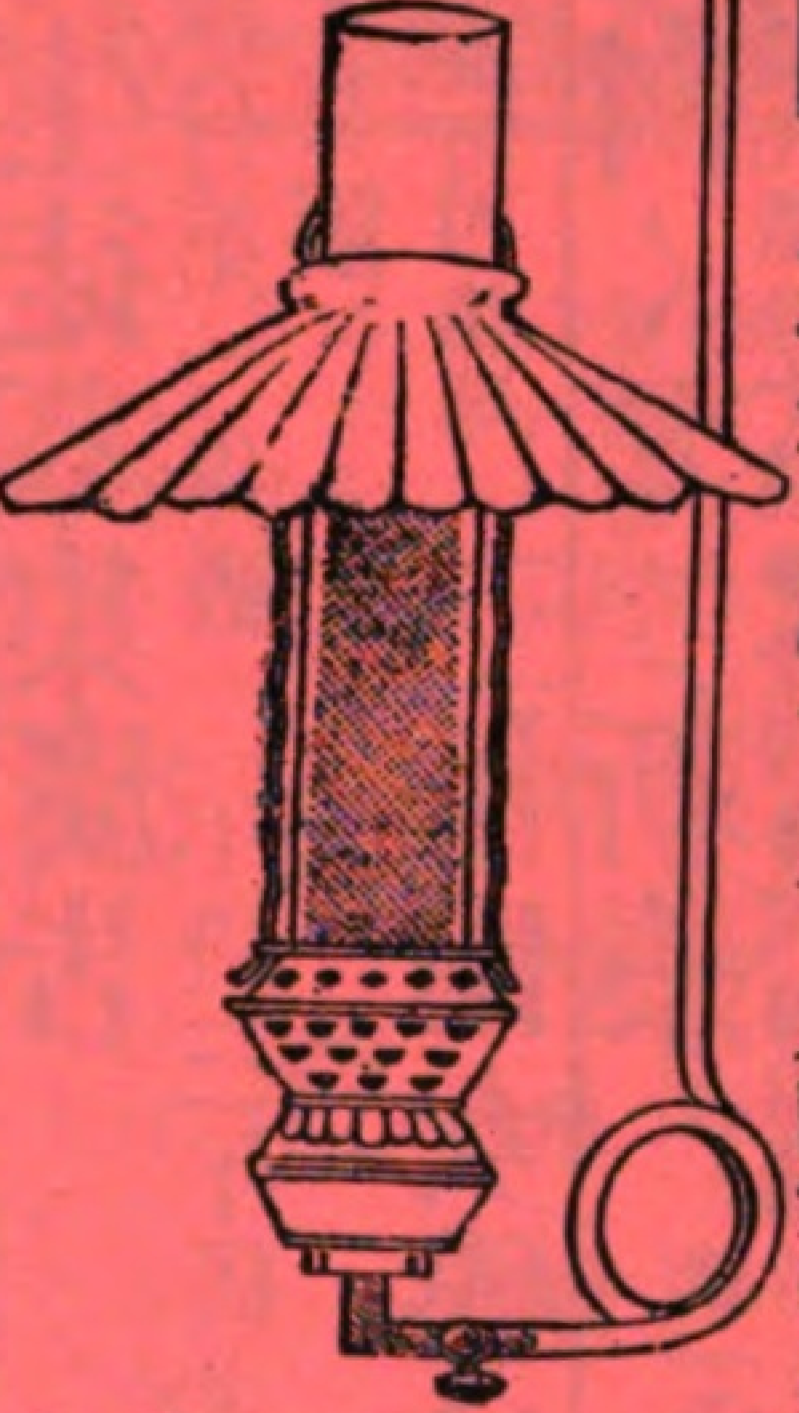
瓦斯は燈火用として陽氣に安全便利にして危險の憂なし

瓦斯は竈七輪風呂釜に應用して費用安くて大に人手を省く

工事費は六ケ月々賦前金拂御拂込にて御相談仕候

御申込は電話はがきにてよろしく手續を要せず

本社構内の瓦斯器陳列所にて諸器具縦覽に供す



## 白熱燈廉價販賣

白熱燈一組一圓四十錢以上最上等二圓四十錢

マントル一個十八錢以上最上等一圓十錢

近來一個人にて瓦斯會社と稱し意外の高價を以て白熱燈を販賣し又は瓦斯器の修繕を請負候もの有之哉にて往々御問合の向も御座候得共此等は當會社と全く關係無之候間瓦斯器の御注文並に器具の修繕等は總て當社へ御申込被下度候

## 東京瓦斯株式會社

神田區錦町三丁目　電話本局 一三番 五四八番 二三〇三番

瓦斯は動力用として使用輕便にして實用に適せ

---

## ●わきが（腋臭症）根治確證新藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增し

專賣　東京市神田五軒町拾九番地　日新舘藥房

---

## ○奏効確實 器械不要 簡易複寫インキ

謄寫版寒天版及び其他の印類又は器械藥品等を要せず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに同一の文書圖畫數百枚を印刷し得べし

○即ち此インキを以て書したる原稿より直接他の白紙へ字痕を透徹する者にして一枚の原稿より凡そ六十枚宛を寫し一瓶のインキにて原稿百數十枚を作り複寫壹萬餘枚を得る者なり（使用法說明書を附す）

●定價 二オンス 堅裝罐入 送料共金四拾錢 爲替神田郵便電信局 郵券壹割增●

發賣元　神田區末廣町三十八番地　中村屋商店

（甲の四）

新刊
柏軒松井廣吉君著

# 上杉謙信

全壹冊 洋裝菊判 金文字入美本
正價金貳拾錢 郵稅二錢

口繪 不識庵吟詠の圖 寫眞銅版

著者は謙信と同國に生れ、謙信の遺跡を歷訪し、其義烈を尊崇して、此著あり、謙信の面目風采生けるが如く、且つ當時の諸英傑及びナポレオン等に比較し來りて、謙信の面目彌々揚れり、落莫たる近時の讀書社會を殷はすもの恐くは此書なるべし

發兌元 東京本町 博文館

---

鼻耳咽喉科 診察每日 午前宅診 午後往診
東京京橋區木挽町一丁目十三番地
酒井好

---

高等師範學校各專門家執事

# 中學教科全書

全廿四冊

定價 一冊十二錢 ● 六冊前金六十五錢 ● 十二冊前金一圓廿錢 ● 廿四冊前金二圓廿錢 ● 郵稅一冊三錢宛

第一篇問答躰日本歷史 既成
第二篇問答躰日本歷史 既成
第三篇問答躰日本地理 既成
第四篇問答躰西洋歷史 既成
第五篇問答躰教授と管理 既成
第六篇問答躰教育學 既成
第七篇問答躰東洋歷史 既成
第八篇問答躰物理學 近刊
第九篇問答躰化學 近刊
第十篇問答躰動物學 近刊
第十一篇問答躰生理學 近刊
第十二篇問答躰植物學 近刊

第十三篇問答躰西洋地理
第十四篇問答躰日本文法
第十五篇問答躰英文法
第十六篇問答躰國文釋義
第十七篇問答躰漢文釋義
第十八篇問答躰算術
第十九篇問答躰代數
第二十篇問答躰幾何
第廿一篇問答躰地文
第廿二篇問答躰天文
第廿三篇問答躰鑛物及地質
第廿四篇問答躰法制及經濟

發兌元 東京京橋區弓町 松邑三松堂

---

虎之門内 東京女學館 生徒募集

（甲の五）

天皇皇后兩陛下天覽
皇太子皇太子妃兩殿下御覽

米國醫學士アンダーソン原著
文部省學校衛生主事兼高等師範學校敎授 三島通良譯補

# 室内體育

本書は貴婦人、女學生、學者、實業家等身體運動の爲に時と場所とを得るの困難なる人に對して室内に於て容易に行ひ得べき運動方法を說述したるものなるが今や斯學の泰斗三島先生の手に依て譯述せられたり。言文一致の文章、明快なる說明は、質問を要せずして直ちに體育の理論と方法とを何人にも理解せしめて餘りあり。體育論の勃興今日の如くにして未だ其良法を得ざるに方り本書は恰も世人の渴を醫するの淸涼劑ならむ

全壹册

總クロース美本
定價金五拾錢
郵稅六錢

米國體育會名譽會員
日本體育會講師
ドクトル 川瀬元九郎
日本女子大學校講師 川瀬富美子 共著

# 衛生美容術

本書は衛生學の原理を應用して筋肉の發育と骨骼の矯正とを謀るべき日常行ひ易き體操法を述べ次て男女老幼を問はず容姿を端麗にし身體を强壯ならしむるの術を講じたるものなり本書記述の事項は悉く著者の實驗に基き且挿畫は一々寫眞に據り文章は談話體を用ゐたれば一讀の下に其方法を會得すべし而して著者は斯道に於て多年熱心なる研究を遂げ其結果を公けにせられたるものなれば類似の書册と同一視すべからざる良書なり

全壹册

洋裝美本
演習挿畫四拾六個入
定價金參拾五錢
郵稅金四錢

發行所 東京市銀座一丁目廿二 大日本圖書株式會社
●大阪北久太郎町四丁目 同 支社

(甲の六)

堀内新泉子著

# 家庭讀本

大和綴美本
全四冊
定價各六拾錢
郵稅各四錢

目下淫猥なる小説の盛に行はるゝを憂ひ昨春以來專ら本書の著述に沈吟斷腸せし堀内新泉子の家庭讀本は今や全部完結せり子が着想の如何に高潔多趣味にして其着筆の穩顯優雅なるかは既に讀者の熟知せらるゝ所なれば今又此に何をか云はん本書の世に出づるや近來の出版物中實に稀有なる世の賞讃を得たり家庭の讀本として學校の賞與品として續々購求の榮を賜はらんことを

## 全部四卷目次


### 春之卷

（一）古稀賀　（二）自愛
（三）老船長　（四）花ちる里
（五）をもちや　（六）御國の風俗
（七）母の面影　（八）初旅
（九）おぼろ月夜

### 夏之卷

（一）庭の若葉　（二）螢狩
（三）游泳の名人　（四）雨後の月
（五）蚊やり火　（六）姫百合
（七）夕すゞみ　（八）夕立
（九）撫子

### 秋之卷

（一）秋の旅　（二）ゆく秋
（三）雁がね　（四）十三夜
（五）千草百草　（六）虫のね
（七）紅葉狩　（八）かくれ家
（九）暮れの鐘

### 冬之卷

（一）初時雨　（二）木枯
（三）霜の夜　（四）冬の月
（五）雪の日　（六）寒紅梅
（七）うづみ火　（八）水鳥
（九）歳の暮


横川回天謹編

東宮御慶事の記　附皇孫御降誕の記

美本　定價金卅五錢　郵稅金四錢

北村重敬著

土佐の長平　漂流談

定價金十六錢　郵稅四錢

發行所　開發社

東京市神田區小川町九番地
（電話本局二四二〇番）

（甲の七）

淋病は子宮病を起す基にして又子の出來ざる病源となる者故速に淋丸を服し根治せよ一回一丸を服し充分に効能著る

醫學博士
新發見藥




一回一丸服用効能著る

●急性淋病消渇にて汁膿澤山に出で痛み强きは三日で痛を治し二週間服すれば膿汁止りて全治す
●慢性淋病消渇にて痛なく膿汁少し宛出で尿通惡しく種々の醫療藥用も効なく數年根治せず四季の變りめに發病する難症も三週間服すれば殺菌防腐の効を奏し必ず根治すべし

藥價一日分十錢三日分卅錢一週分六十五錢三週分壹圓八十錢

本舖 東京日本橋區小網町一丁目 藥劑師 山崎太陽堂藥局

●其他全國到る處の藥店にて販賣す

# 治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致すべし

東京下谷上根岸町百十一（電話本局二二五九番）藥學得業士 金澤巖

●皇太子殿下毎號 御上覽

總裁一條公爵 議長本多男爵

# 青少年議事錄

## 筆戰場

●毎月一回十日發行

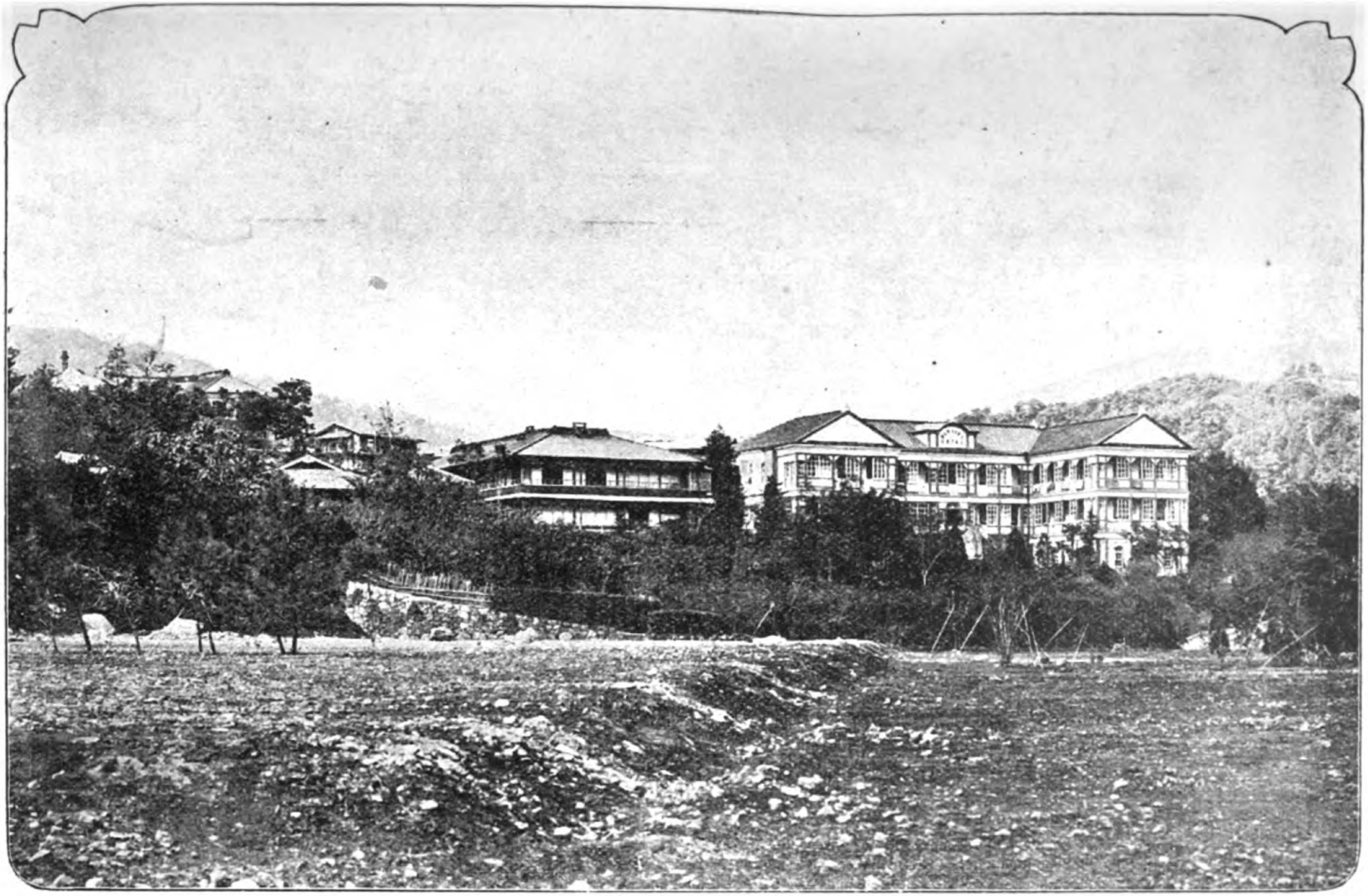
入會金十錢 會費一ヶ月九錢 半ヶ年五十錢 一ヶ年九十五錢

見本 郵券十錢

作文和歌俳句漢詩等各課專門の師擔任す
本號には本會獨特の議院制方法詳細あり
本會の支會支部は全國到る處に設置あり

東京神田千代田町二 電話本局（一四四） 帝國少年議會

（甲の八）



(光村利藻氏撮影)

箱根宮の下風景



下の關實業補習學校生徒




遊戲法研究會員　(第一講習會)

# 朝鮮婦人風俗



田舎の婦人



裹装



上流の士女

# 依田學海先生閲

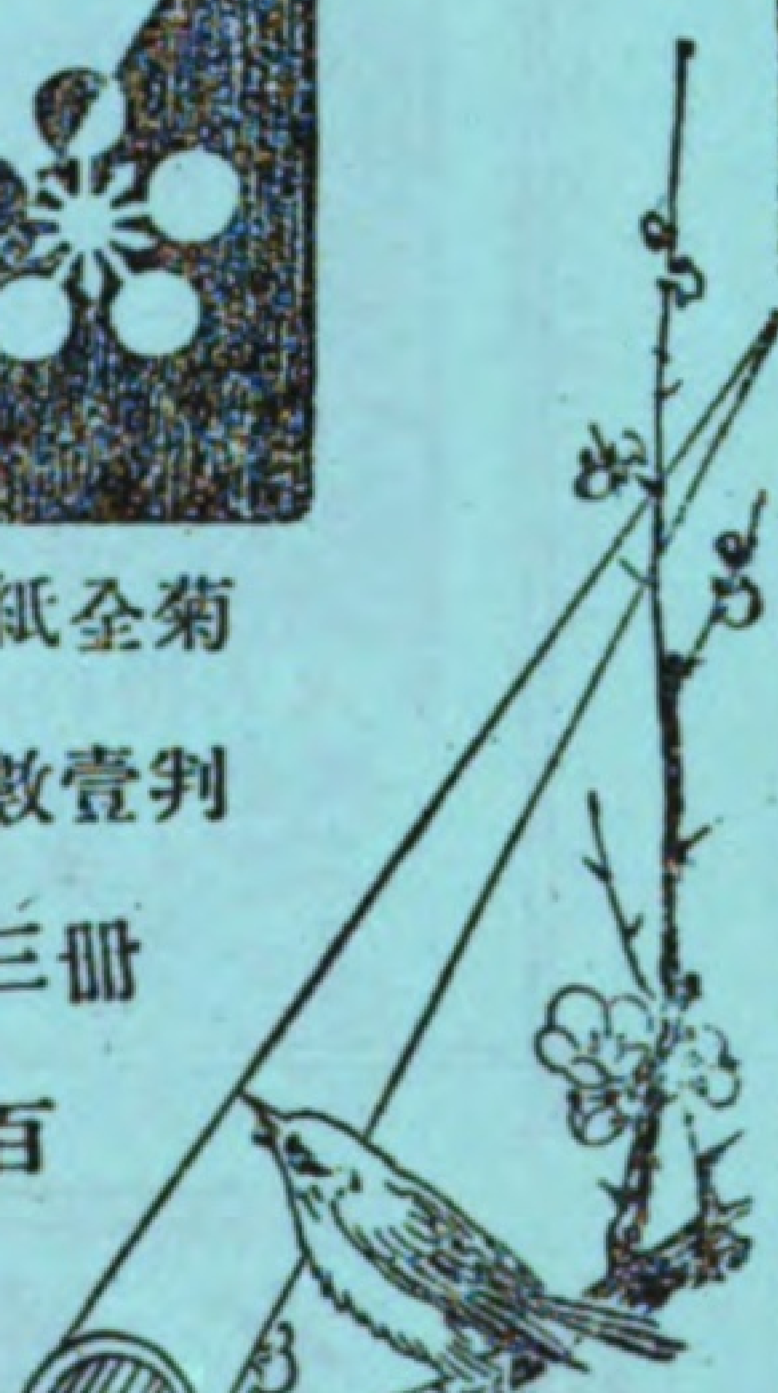
## 松林伯圓(最後唯一)講演
## 松林若圓筆記
製本既成

# 菅公

口繪

◎極彩色木版菅公訣別の圖……山中古洞畫伯筆
◎京都北野天滿宮◎大阪天滿天神宮◎東京龜井戸天神◎筑前太宰府天滿宮
◎全飛梅◎講演者松林伯圓及全若圓肖像(以上寫眞銅版摺)

本年は菅公一千年に相當するを以て都鄙至る所盛に祭祀を行はる於茲本館は講演家の泰斗松林伯圓氏(東玉)をして菅公一代記を演せしめ特に依田先生の校閲を經て之を世に公にす是れ伯圓氏最後の講演にして全編之を松梅櫻の三卷に分ち敍述縱橫慷慨切實讀者をして喜憂萬感の情に堪へざらしむ眞に是れ近來稀有の演史なり請ふ續々御愛購あらんことを



菊判
全壹冊
紙數三百
餘頁頗美本
正價卅五錢郵稅六錢

發兌元　東京本町　博文館

(乙の四)

# 少年史譚

全部拾貳册洋裝
大判美本 毎月一回發行 毎編讀切一册
定價 金拾五錢 六册前金八拾七錢 拾二册前金壹圓四拾錢 郵税壹册四錢
密書數個挿入

傳記は人生の嚮導者なり、慰藉者なり、譬へは雪中に印せられたる足跡の如し、後人之に據りて進むを得べし、人を鼓舞して勇往せしめ、又人を慰藉して艱苦の中にも失望せざらしむ、書を讀み志を立てむ者、座右常に傳紀なかるべからず。されど傳紀も描き方に由りては、毫も眞面目に躍動せざるとあり、唯新らしく觀察を以てすれば、數百年前の古人の傳にも、豈新世紀の餘師なからむや。此史譚の著者に、見識筆力共に優れたる當代の撰、而して平生私淑せる古人を擇ひ、滿腔の同情を寄せて、以て描寫せられたるもの、血あり、涙あり、古英雄の面目紙表に躍動す、實に傳紀中の好傳紀也。

## 第三編 旭將軍

文學士中内蝶二君著
筒井年峯畫

第一編 既刊 平相國 文學博士高山樗牛君著 小堀鞆音君畫
第二編 既刊 鬼吉川 文學士大町桂月君著 水野年方君畫
第四編 鎭西八郎 國府犀東君著 武内桂舟君畫
第五編 俠僧文覺 文學博士高山樗牛君著 鈴木華村君畫
第六編 北條時宗 國府犀東君著 頓田丹陵君畫
第七編 小楠公 文學士大町桂月君著 梶田半古君畫

第八編 眞田幸村 文學士中内蝶二君著 尾形月耕君畫
第九編 上杉謙信 國府犀東君著 武内桂舟君畫
第十編 俠商利兵衛 文學士大町桂月君著 富岡永洗君畫
第十一編 北條早雲 文學士中内蝶二君著 小林永興君畫
常磐御前 文學士大町桂月君著
第十二編 靜御前 國府犀東君著
奴小萬 文學士中内蝶二君著 小林永興君畫

發兌元 東京日本橋本町三 博文館 ◎ 大賣捌 東京神田表神保町 東京堂

(乙の五)

東京帝國大學 文科大學長文學博士井上哲次郎先生著(新刊)

# 巽軒講話集

## 初編

全壹册洋裝菊判
紙數三百餘頁
正價金七拾錢
郵税金拾貳錢

### 本書記載要目

(一)教育の方針に就て(二)教育上の宗教道徳問題(三)我邦徳育の前途(四)武士道と將來の道徳(五)道徳主義としての自主獨立(六)清國開發意見(七)十九世紀の哲學(八)歐洲碩學談(九)教育の過去及將來(十)女子教育談(十一)宗教の本躰に就て(十二)宗教及之に對する日本人の位置(十三)青年の宗教に對すべき態度(十四)青年の必要なる信念(十五)公法と私法(十六)道徳及宗教に就て(十七)教育雜感(十八)佐々木弘綱翁の十年祭に際し所感を述ぶ(十九)現今の教育問題(二十)日本社會目下の痛弊(二十一)東西洋倫理思想の題目(二十二)教育上に於る黨派心の弊害(二十三)言文一致に就て(二十四)裸躰畵論(二十五)法律と道徳の關係(二十六)日本現今の新聞を評す

正三位子爵福羽美靜先生講述

# 人事百話

全壹册菊判
正價參拾錢
郵税六錢

第九版

通俗的に高遠なる學理を說き其間復た社會萬端の事柄を評論し以て俗見の誤を正し論理一遍の非實理なるを打破す議論正確文字平易明治の今日に一異彩を放つものなり

文學博士男爵加藤弘之先生著

# 天則百話

全壹册菊判
正價參拾錢
郵税四錢

第五版

本書は人々處世の要道一百條を學德共に高き男爵が丁寧懇切に講述せられたるを筆記したるものにして何人を問はず必ず一本を坐右に供へざるべからず

(乙の七)

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

男爵金子堅太郎君題辭
黒澤格太郎君序文
津田梅子女史序文
飯島 立峯君著述

# 米國渡航案内

全壹册

洋裝中判上製美本
正價金四拾錢
郵稅金八錢

○○○米國風景風俗建築人物肖像寫眞銅版十數葉挿入

大平洋を隔つる東洋の新開國土地廣く資本饒かに學藝技術の進歩最も迅速なり、我同胞中、留學、視察、勞働等の各目的を以て渡航する者日に増し、既に二萬の多きに上り尚ほ底止する所を知らざるは宜なり。此事甚だ悦ぶべし。然れども其渡航の手續及準備と彼の地の事情とに通せざる爲に、渡航後困難する者又は渡航せんと欲して能はざる者多きを慨し、著者は自から既に久しくスタンフォールド大學に在りて實地に經驗する所に徵し、以て今後の渡航者の準備、渡航、職業、學事等の指針と爲す。苟も米國の事情を知らんと欲する者は必ず一讀せざるべからざる要書なり。

故大橋乙羽君著
## 歐山米水
（彩色美麗寫眞版及木版密畵挿入第三版）
全壹册特裝上綴
正價金壹圓五拾錢
郵稅金拾錢

鎌田榮吉君著
## 歐米漫遊雜記
（紙數四百二十四頁）
全壹册紙皮上製
正價金四拾五錢
郵稅金六錢

松井廣吉君著
## 米國漫遊實記
（寫眞版十六枚挿入）
全壹册紙皮上製
正價金參拾八錢
郵稅金六錢

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

（乙の八）



（藤本小糸氏寄贈）

臺灣臺北士林女學校卒業式



（光村利藻氏撮影）

富山神通橋



（史傳欄參照）

中島湘煙女史

幾內名蹟

(光村利藻君撮影)



攝津國中山寺

新日本の婦女子の必讀の新書出でたり

菊版　絹絲綴　美麗仕立　全一册

北海道教育會編纂

# 下田歌子先生 家政學講義 附女子教育講話

この書は華族女學校學監下田歌子先生が東西古今に渉れる該博高遠の學識を以て丁寧懇篤に最も解り易き女子の務むべきこと守るべきこと講演されたる者で家政學の總論から衛生、經濟、飮食、住居、衣服、育兒、敎育、養老、看病、交際、避難、婢僕使役のことまでも女子に必要なこと漏れなく記るしてある。そして假名つきで讀易く面白くて爲になる。常から先生の講義を聞きたいと思ふ人々は勿論世の妻たるもの、相談相手には此の上もない書物である。それで

定價金四拾錢　郵税八錢　紙數參百五拾餘頁

家政整理の任を重ずる婦女は此書を讀め

女子高等師範學校教授（佐方鎮先生 後閑菊野先生）共著

● 女子修身書 大和綴　一巻、二巻、定價各册錢郵税各四錢　三巻、四巻、定價各册五錢郵税各四錢

吉田潮平君校訂　志賀重昂君序　新治吉太郎君編輯

● 通俗家庭教育　優美和裝全一册挿畫數拾個入　定價金五拾錢　郵税金六錢

合資會社富山房編輯所編纂

● 女子敎科 家庭教育 大和綴　定價金廿五錢　郵税金四錢

發兌元　東京市神田區裏神保町（電話一〇三六番）　合資會社 富山房

（丙の一）

（丙の二）

第八卷第六號

# 少年世界四月增刊 動物園

四月十日發行

正價金拾錢
郵稅金壹錢五厘

此動物園には世界の動物園に見られないものがあります、それは昆蟲と云ふもので、こればかりは西洋の動物園にも飼つてない、いはゞ此動物園獨特のものであります、それからまた此動物園の動物は種々に活動して、妙な藝をするかと思ふと、學術的の説明もすると云ふのですから、こんな不思議な動物園はまたと他にあるものではないのです、四月十日の開園當日から、澤山御縱覽が願ひたいです。

## 口繪

(上野動物園眞景 ●麒麟 ●鰐魚 ●袋鼠 ●駱駝

(上野動物園新來の獅子 この獅子を寫眞に撮つて出すのは本誌が始めてす今迄あるのは石版畫や寫生畫で眞個のものではありません ●白熊 ●駝鳥 ●大象

(世界唯一の牛馬 ●エミウ

●動物合戰記……江見水蔭
●獅子の話……理學博士 石川千代松
●鰐魚……理學士 飯塚啓
●大動物園……理學士 西芳菲
●金魚の話……今井金牛
●犬神禍福……石橋思案

●世界大動物園……寺崎留吉
●動物平和會議……武田鶯塘
●大動物の話……林壽祐
●朝鮮城津の虎狩……淺野長白
●上野動物園……大澤天仙

大附錄 白熊 武内桂舟畫

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

(丙の四)

# 文藝倶樂部 四月增刊 京都と奈良

定價金貳拾五錢
郵稅金貳錢五厘

## 四月十五日發行

**口繪** （精巧密畫極彩色木版二頁大及寫眞銅版風景風俗美人數十葉挿入）

日本は世界に於ける大公園にして其公園中の公園とも稱すべき京都と奈良は今や京洛諸文士の精緻なる觀察と絢爛なる文章とに依て紹介されたり加ふるに關西旅行の栞なる一編を卷尾に添へ各地方の旅客をして漫遊探勝の資に便ならしむ而して其裝飾に至りては歌川國松氏が意匠になれる美麗なる表紙及挿畫と彼の優美の新風景と艶麗の京美人の寫眞を以てし讀者をして開卷先つ神飛魂消せしむるものあり之を外にしては旅中車中の侶伴となるべく之を內にしては春夜燈下の好友となるべし發行近きにあり大方の購讀を待つ

### 書中の細目


● 京都御苑……中川霞城
● 京都の山水……堀江松華
● 美術の京都……久保田米僊
● 京都の陶磁器……金子靜枝
● 法師吹……岡本橘仙
● 京の花……四明山人
● 兩本願寺……石倉翠葉
● 鞍馬の竹伐と火祭……村上文雅
● 京の紅葉……四明山人
● 西陣の機業……小自在庵
● 京都の料理……卅六文外史
● 都踊と鴨川踊……扼紅樓

● 京都の島原……饅頭庵
● 京の神事……四明山人
● 新京極……齋藤紫軒
● 京都の俳諧……花本聽秋
● 疏水の電氣……四明山人
● 加茂の競馬……洞翁
● 大佛涯隈……好奇樓
● 伏見と宇治……四明山人
● 京のいろ〳〵……三宅青軒
● 奈良の都……渡邊霞亭
● 奈良風俗……木崎好尙


發兌元 東京日本橋區本町 博文館

# 受驗問

## 本書答科

世の學生諸子の各種學校の入學試驗に應ぜんとするに際し科目の夥多なる一々普通の編纂書に依りて研究せんは到底其煩に堪へず暗記と早通とは問答書に依るに於て最捷經とす本館今回此等學生諸子の應試に便せん爲め受驗問答叢書を發行し最近諸官立學校入學試驗問題を標準として無數の新題を假設し之に付するに一々簡明適切なる答案を以てし一目の下あらゆる問題に附て直に解答を得せしめ科目は日本地理萬國地理日本歷史萬國歷史數學幾何和文英譯英文和譯國語漢文學を始め其他普通の試驗科目は悉く之を網羅し各科に付一冊つゝ合計二十四册を以て完結せしめんとす諸子乞ふ之によりて無益の勞力と時間とを省き速に受驗の素養を作らんことを

- 第一編 新撰日本地理問答
- 第二編 新撰日本歷史問答
- 第三編 新撰世界地理問答
- 第四編 新撰西洋歷史問答
- 第五編 新撰東洋歷史問答
- 第六編 新撰國文問答
- 第七編 新撰漢文問答
- 第八編 新撰算術問答

- 第十三編 新撰動物及植物問答
- 第十四編 新撰地文及天文問答
- 第十五編 新撰鑛物及地質問答
- 第十六編 新撰生理及衛生問答
- 第十七編 新撰倫理及教育問答
- 第十八編 新撰心理及論理問答
- 第十九編 新撰和英文典問答
- 第二十編 新撰會話及作文問答

發兌元　東京日本橋區

（丙の六）

# 答叢書

## 目次

- 第九編 ◉新撰 代數問答
- 第十編 ◉新撰 幾何問答
- 第十一編 ◉新撰 物理問答
- 第十二編 ◉新撰 化學問答
- 第廿一編 ◉新撰 法制及經濟問答
- 第廿二編 ◉新撰 商業要項問答
- 第廿三編 ◉新撰 農業要項問答
- 第廿四編 ◉新撰 工業要項問答

定價 ◉一冊金二十錢◉六冊金壹圓十錢◉十二冊金二圓十錢◉二十四冊金四圓◉郵税壹冊金四錢◉一冊紙數二百四十頁

宮田修君著 （新刊）

第弐編

## 新撰 日本歴史問答

全壹冊 洋裝袖珍
紙數三百四十五頁
正價金二拾錢
郵税金四錢

日本歴史に關する書頗る多しと雖も中學程度以上各學校入學受驗者の便益に資するものは甚だ稀なり偶々是れあるも煩冗杜撰にして編纂其當を得ず本書は主として最近の入學試驗問題を標準として無數の新題を設け努めて冗を避け要を摘みて簡明なる解答をなし上古中古近世及今代に區分して凡て日本歴史上の問題は網羅して漏す所なく指導し讀者をして自在に了得せしむる故に學生諸氏は此書に就て研習せば僅少の時間を以て日本歴史の要義に精通するを得べし

第壹編 既刊 ◉新撰 日本地理問答 … 中學世界記者 上村貞子君著

本町三丁目 博文館

(丙の七)

# 大日本女學會

新學期を開き會員を募集す

●本會は女子教育の普及發達を圖らんが爲に女子必須の諸學科を掲げたる女學の講義錄を發行し小學卒業後進みて女學校に入學し難き女子達に家庭の門を出でずして高等女學校の課程を講習せしむるを目的とす

●本會は小松大宮妃殿下を總裁に戴き有栖川宮小松若宮華頂宮梨本宮各妃殿下を始め奉り教育に熱心なる貴婦人方百餘名の贊成を受く

●本會は華族女學校女子高等師範學校日本女子大學校等の諸教授其他博士學士等諸名家に講義を囑托し其講義の平易懇到にして有益なるとは本會創立以來數萬人の講習者が經驗したる所なり

●本會は一般女子素養の程度に應じ講義錄を高等簡易兩種に分つ其簡易なる講義錄は尋常小學卒業者にも解し得らるべし

●本會高等科は束脩四拾錢月謝四拾錢簡易科は束脩貳拾錢月謝貳拾錢とす束脩月謝の送付あれば假入會を許し直に講義錄を送るべし

●當學期は昨年十一月より開始し目下講義錄第四卷まで發行せり何時入會ありても初卷より送付すべき準備あり高等簡易兩科共滿二箇年にて終了す

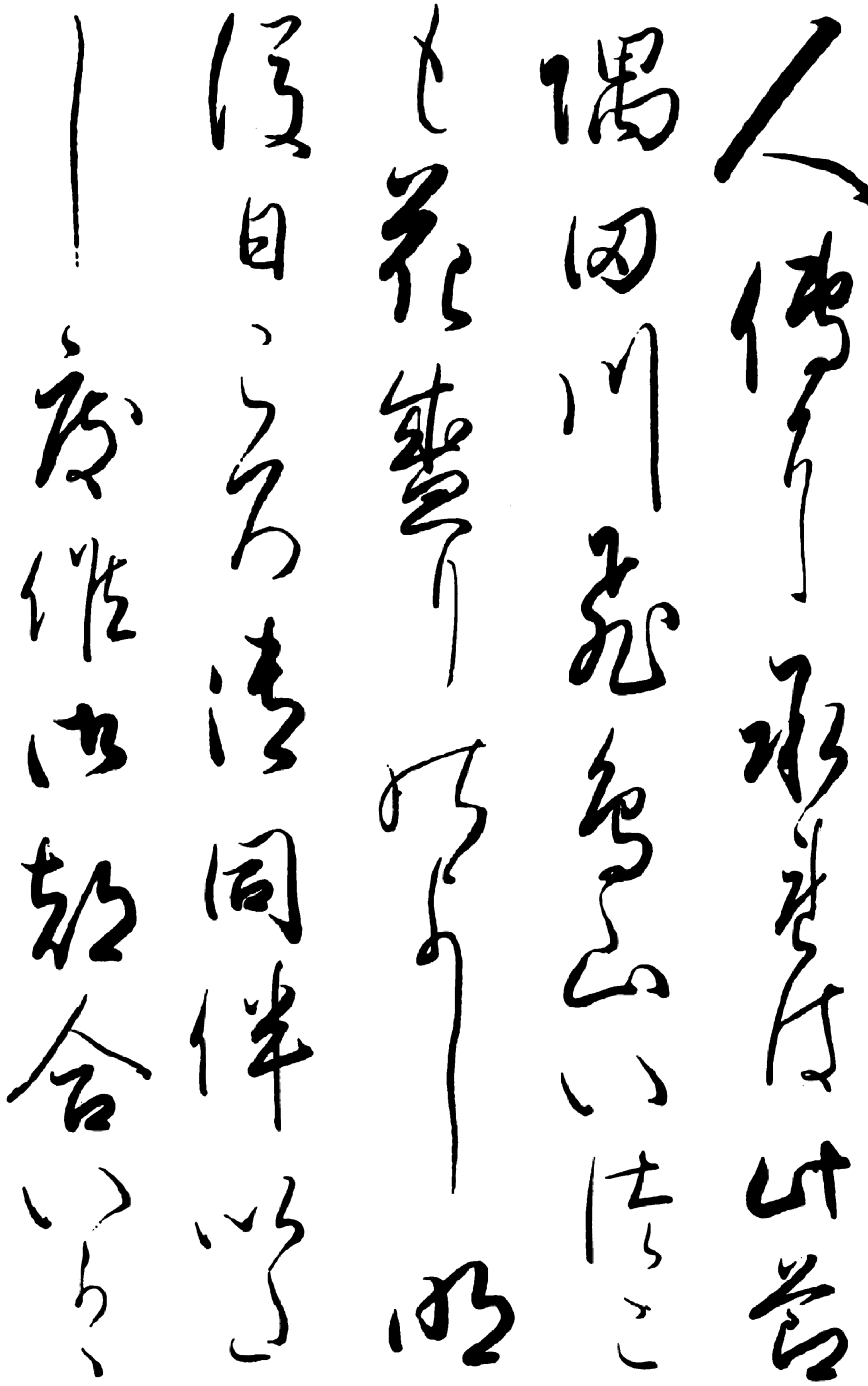
●詳細なる會則希望者には端書にて請求あり次第進呈すべし

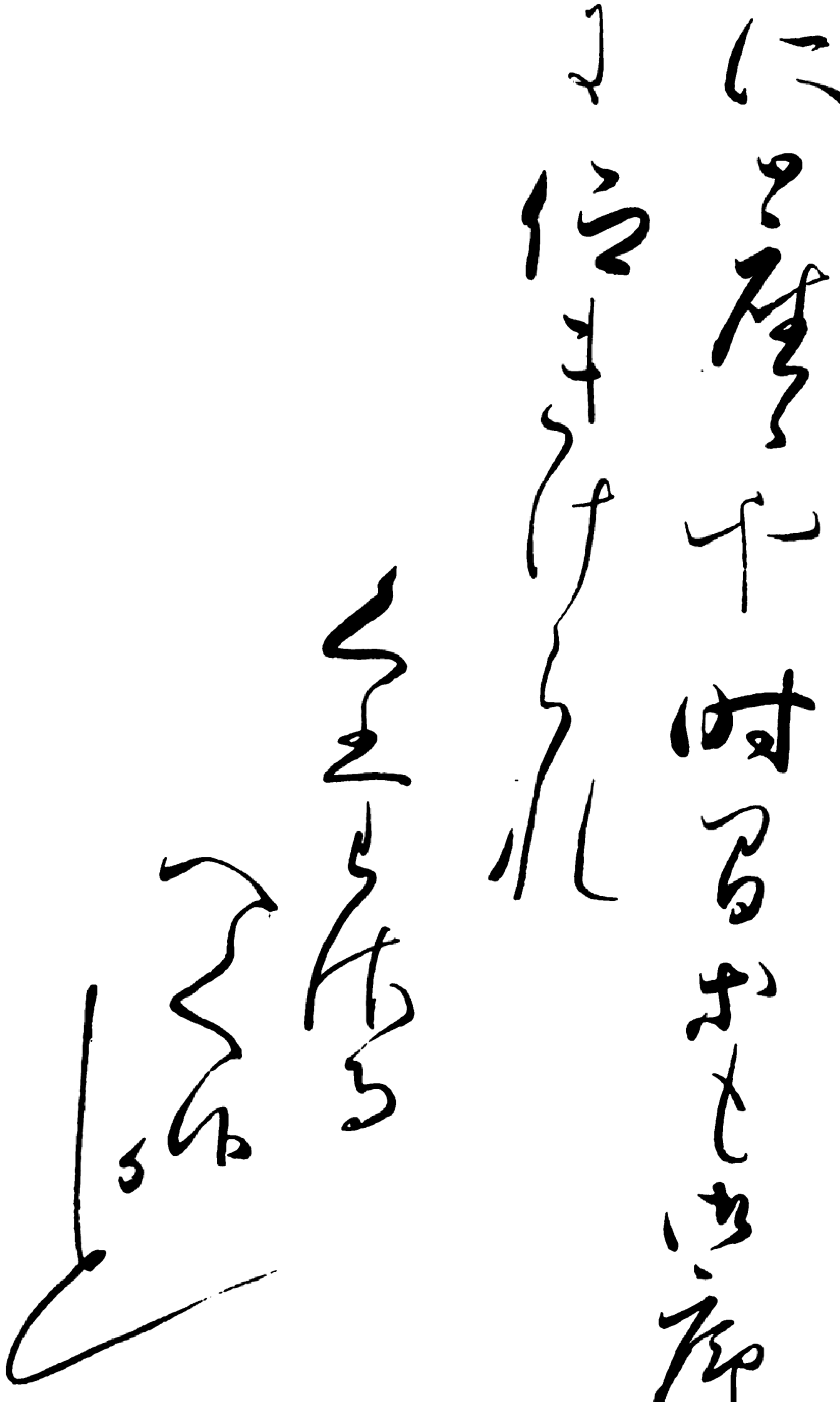
東京市麴町區下二番町三十七番地

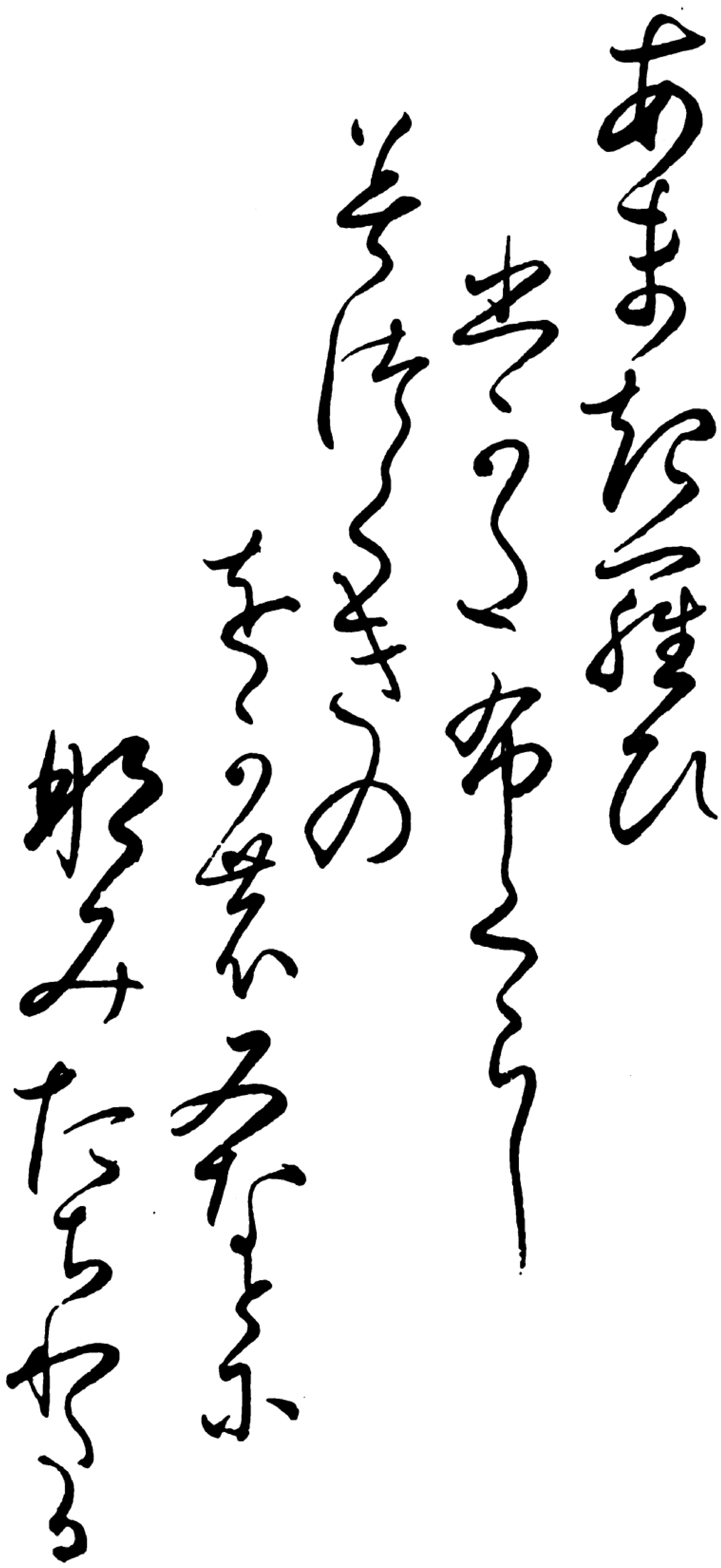
大日本女學會

（丙の八）

多田親愛先生筆







坂正臣先生筆

坂正臣先生筆

るはるかきこえのこゑをわ
らはのもとにいてゝゆきし竹
なりし　くすりも
ゐなりしまのこゑにはよ　家
はあまつらきをやまし　こ
あくはそすありき

# 平安長春



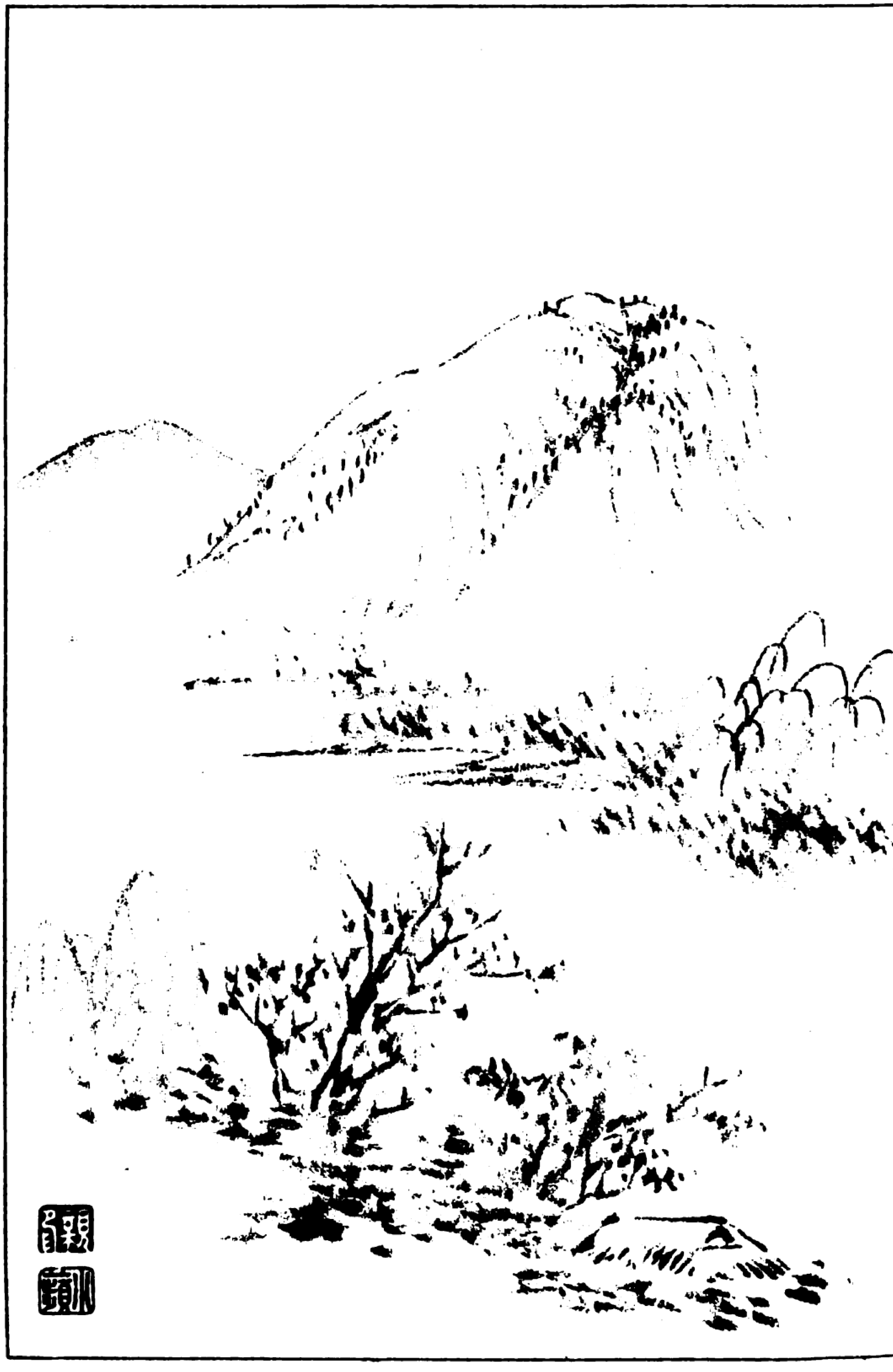
野口小蘋女史筆

雙蝶尋香

野口小蘋女史筆



# 江山春霽



野口小蘋女史筆

# 牡丹



野口小蘋女史筆

# 女學世界

第貳巻 第五號

明治三十五年四月五日發行

紀元二千五百六十二年 西暦一千九百〇二年（壬寅）

論説

## 婦人之健康

警察醫長
醫學士 山根正次

私は婦人の健康と云ふことに就て、此處に少しくお話を致さうと思ひます。婦人の健康と云ふことは、どう云ふ事かと申せば取も直さず、女の人の身體のすこやかなることで御座ります。是の事は一面から申しますれば婦人の健康と云ふことは、人生の幸福であります。それから他の一方から申しますれば國家の威力て御座ります。

私が斯う云ふことを述べると或は山根正次は奇妙の事を云ふ、女が丈夫であれば何故に人生の幸福であるか、それから婦人が健康であればどうしてそれが國家の威力であるか、兵隊や士官の達者なのこそ國家の威力であらうが女が健康であつたて、何も戰爭をするでもあるまいに、不思議なことを云ふ者だとお怪しみになる方もあるかも知れませんが、私は決して奇妙な事を申すのでも何でもありません、極めて素直な、たゞあたりまへの事を申すので御座ります。

凡そ生物に男女兩性の別あることは、自然の原則であ

りまして、古から定まつた事で御座ります、そうして人間にも男子と女子とありますが、男子も女子も之れを産むものは女子で御座ります、男子が兒を生んだ例はありません。それで如何なる兵隊でも士官でも皆、婦人から生れたので御座りまする、それだから若し婦人が健康でなくて婦人の身躰が薄弱であつた時には決して強壯な兵隊になる樣な人を生むことは出來ません。婦人の身躰が充分に發育して健康である時には、自から強壯なる子が生れまするから、兵隊や、士官のえらいのはいくらでも出來る道理であります。それでこの兵隊や士官のえらい人が多く居れば、敵國が畏れて仕舞ふ容易に攻めて來ることが出來なくなります。斯う云ふ次第でありまするから、私は婦人の健康は即ち國家の威力であると申すので御座ります。

それから人の一家を成すには男女互に和合して夫婦となりまして家庭を形作くるのであります、然るに若し

（二）

婦人が不健康であつた塲合には決して完全なる家庭を造くることが出來ません。甚しきに到ると夫婦の中に最愛の子兒をまうけることが出來なかつたり、また折角いとしい子供があつても其子の成長せぬ内に死てしまうそれが爲めに其子供はいろ〱艱難を致す樣な事になります、それから死なないまでも常に身躰が病身であると、子供の教育を充分にすることが出來ません、また子供の無い時でも、婦人が不健康であると、家事の治まらないのみならず、夫婦間の情交を調和して圓滿なる樂みを家庭に滿すことが出來ませぬから、自から親和を缺く樣なことが起ります、是れは決して事六づかしき理窟でもなんでもない、世上にいくらも實例のあることで御座りまして、私が申すまでもなく皆樣にも御存じの事と思ひます。

それで婦人の方が健康であれば最愛の子供もある其子供も健康である敎育も充分に出來る、子供の出世を見

ることも出來る、家事もよく修まる、夫に對する情交も圓滿である友白髪までも存らへて金婚式の慶事まで擧げて、限りなき快樂を受くることが出來ます、此の如き家庭は實に人生の幸福で御座りまする、そうして是れは婦人の健康に依りて始めて全ふすることが出來るので御座ります。

斯樣に申しまするど婦人の健康と云ふことが世間に最も大切なる事柄であることがおわかりになりませうと存じます、それでこれからどうすれば身躰を健康にして往くことが出來るかと云ふことに就て少しく私の考へを述べませう。

婦人の身躰を健康にするには先づ身躰の發育を謀らなければなりません、どうすれば身躰が充分に發育するかと申しまするど、それは衛生法を守りて體育を盛んにするので御座ります、そうして躰育を盛んにする方法は身躰の榮養を盛んにして運動を勉めるにあるので御座ります、身體の養ひになる力の多い食物を喫べて、そうしてよく手足を働かせると云ふ事でありまするが、此事に就ては婦人は殊更種々なる關係を調べなければなりませぬ。

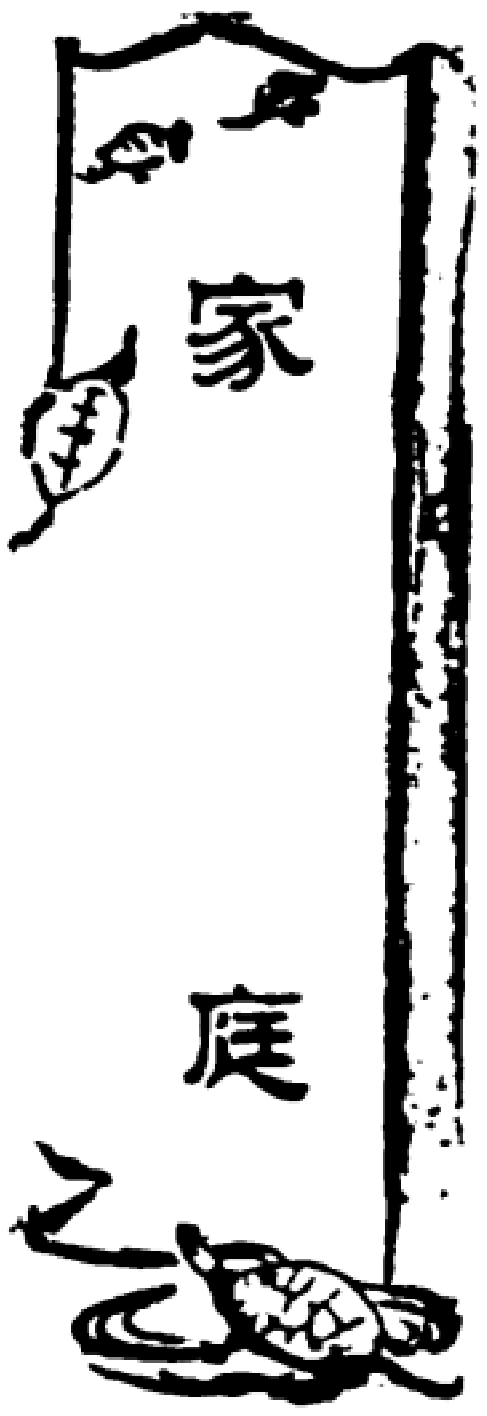
一躰日本の婦人は古來の習慣がだん／＼良くない方に推移つて參りまして此節では殊に都會の女子上流社會の婦人達は次第に躰育が衰ろへ參りました。世界各國の人を比較しまするど日本の婦人は最も躰格の惡るい仲間で御座ります私は先年官命を受けて佛蘭西に參りまして其節萬國衛生會や萬國躰育會などに出席しましていろ／＼躰育上の取調を致し猶ほ英國及米國にも立寄りまして婦人躰育の事を視察いたして歸りましたので御座りますが、歸朝してからよく我國の婦人と歐米各國の婦人とを比較して見まするど甚だ遺憾の次第で御座りまするが、どうも我國の婦人は其躰力健康遙かに歐米各國の婦人に及ばない事實を發見致しましたそ

れから私は此事を甚だ殘念に思ひまして何とかして此の婦人躰育の改良と云ふことを至急に實行致さなければならぬと考へまして種々調査して見まするど日本の婦人が外國の婦人に及ばざる所以は全く躰育と云ふことが外國婦人に及ばぬからであると云ふことを悟りました。

それで日本婦人が歐米婦人の樣に躰育が行はれないのみならずして更に日本婦人は天然の身躰を害なふ樣な即ち躰育衛生法に全く反對して居る惡習慣のあることを認めました、是れは併し誠に容易ならぬ事柄で御座ります、此の事は常に日本に居りまして日本の婦人許りを見て居るのみで歐米各國の婦人を見ぬ人は別に何とも思ひ樣はありませんがさて一朝歐米各國の婦人を見てそれから日本婦人を見まするとどう考へても躰力の低位にあることが爭はれない、斯う申すと正次は外國婦人の肩を持つ何でも赤髯の美人にても性根を奪はれたのではあるまいかと思し召す方もあるかも知れませんが、私は決してそうでありません、日本婦人の肩を持つ精神でありますから、日本の婦人達が斯う薄弱の躰力では前に申しました國家の威力を發揚することが出來なくなると云ふことを憂へて居るからて御座ります、日本婦人の躰力はどうかして歐米婦人に劣らないものに致したいと申すのが私の希望で御座ります。

編者曰く、山根先生の女子健康論は、始に其概論を述べ、次に其方法を述べられしが、本篇に掲げしは其概論のみ、更に次號に於て其の方法を掲載すべし。






# 家庭時言

文學士 大町桂月

## 日本の家庭

冷かなる哉、日本の家庭。主人は宛然たる君主也。妻子は臣妾也。主人ひとり私情私慾をほしいまゝにして、妻子はあれども、なほ無きが如き也。

食ふ饌、既に異也。饌に上る食物も亦從つて異也。主人ひとり美酒に醉ひ、佳肴に飽く。妻子は骨をしやぶり、澤庵をかじる。卓を共にし、食を分ちて、和氣洋々たるの風は、之を日本の家庭に見るべからざる也。

たまく外に遊ぶも、妻子は之にあづかるを得ず。主人ひとり氣儘に旅行し、妖婦を伴ふて、之に數十百金を擲つて惜まざるも、細君への土産は、何一つも買はず。而して親睦會、歡迎會、送別會など會何ぞ多きや。會の歸りは、いつも何ぞおそきや。憐れむべし、知らぬが佛の細君は、もしや途上怪我はなきかなど、夫の身上を案じつゝ、燈下に針仕事しつゝ、夫をまちく夜を徹することもあるぞとよ。概して日本の紳士は、家庭の樂を知らざる也。外に遊ぶも、家庭を擧つて遊ぶことを知らざる也。

語を寄す、日本の紳士、我家の爲めに忠實に立ちはたらく妻をあはれとは思はずや。にこくほゝゑむ子を可愛くは思はずや。よる年波と幾度の出產とに、よしや妻の顏はやつれたりとも、糟糠の妻は、堂より下さずと云ひしにあらずや。背きては惡口たゝかるゝとも知らず、うはべばかりの笑ひに迷ひ、いつはりの淚を喜ぶ今の紳士こそは世に馬鹿げたるものなれ。畢竟するに日本の家庭の冷かなるは、今の紳士が樂を内に求めずして、外に求むるに由る也。而して今の紳士は何故に樂を外に求むるぞや。

さらでだに浮氣なるは、男子の常也。況して趣味ひくき男性をや。社會の風紀頹廢して、世はたゞ肉慾に

呼ぶ動物の腐染する巷となりぬ。誘惑物は到る處に笑を含んで待つ。柳下惠ならざる凡夫にして純潔をたもたむこと、抑もまた難い哉。社會既に此の如し。之に内にして、細君たるもの、其夫を社會の誘惑物より奪ひ去るの魔力と方術とありや否や。

夫に狎れて、敬意を失ひ、つゝしみを無くし、横着になり、癖を出し、氣隨氣儘にふるまふ細君なき乎。他をうらやみて、夫を見くびる細君なき乎。姑を袖にし、夫を尻にしく細君なき乎。夫の共に談ずるに足らざる細君なき乎。抑も一家を面白くせむとて、自から家庭の中心となり、よく客に接し、よく夫をあしらひ、快活にして談話に富み、さばけて わけが居る細君多き乎。余輩は一方に今の紳士の趣味低きを咎むると共に、一方には今の細君の今少し知識を開きて、家庭を面白くするに足るべき力を養ひ、方法を講ぜむとをすゝめざるを得ず。

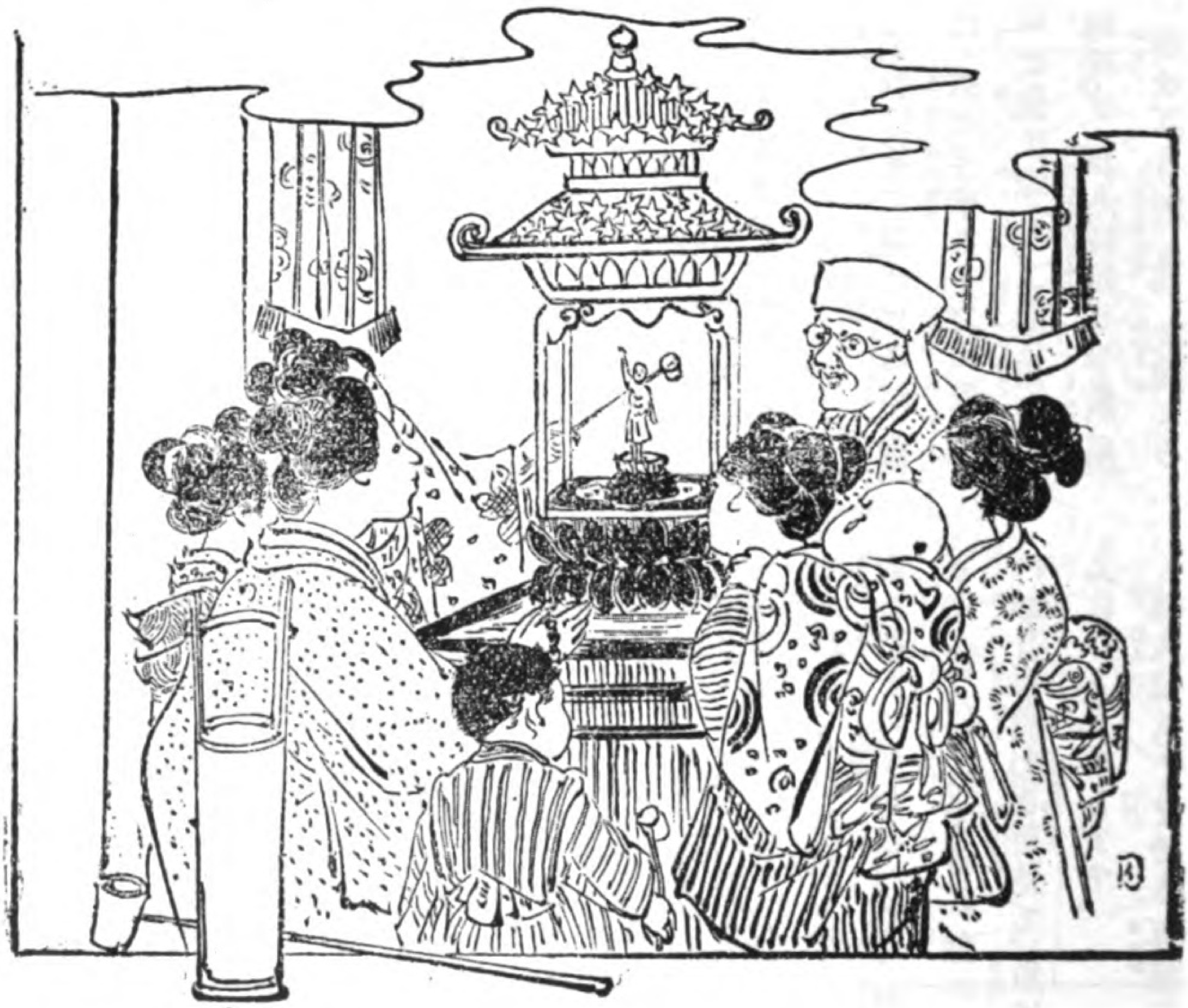
## 家の内外

世間に出てゝは、働きもあり、勢力ありて、多數の人に尊敬せらるゝ人が、家にありては、案外におとなしく、妻子にやさしくし、婢僕にやさしくし、甚しきは細君の尻にしかれて、自から甘んずるもあり。之に反して、家にありては威張りちらし、氣むつかしく、小言を言ひ、如何にもゑらさうに見ゆる人が、世間に出てゝは、地位もなく、勢力もなく、腕前もなく、とんと頭のあがらぬもあり。前者は社會をわが活動場となし、そこに力を揮ひ、そこに戰鬪し、そこに人を壓服して家にかへれば、唯休息と安逸とを求む。また家庭に向つて、氣焔を吐くを要せざる也。後者は社會にては幅がきかず、氣焔も吐けず。幅をさかし、氣焔を吐きうるの地は、ただ家庭のみ也。社會に屈するが故に、家庭に伸びむとする也。且つ怒を移すは、小人の常態、長官に對する不平を、役所にては洩すを得ず、腹に怒りて面に笑ひ、ひよこ〳〵と頭をさげ、さて家にかへりて、之を散ずる也。朝には長官にお目玉を頂戴し、夕にはその代りにお目玉を下女にくらはして自から霽す也。同僚にへこまされて、ぐうの音もいでず、澁面つくつて歸り來り、

その腹いせに細君を叱りとばして自から慰む也。かゝる人の下にある家庭こそ憐れなれ。

## 家庭教育者とその女子

女子は一面に於て、家庭の教育者也。女子の性質、素行の如何は、兒童に影響を及ぼすと極めて大なるものあり。概して女子は周密也。氣かよくつく也、多少神經質的也、小心也、剛毅嚴正なる能はず。男親の剛、母親の柔、こゝに家庭の教育を完うするを得れども、さりとて、母親たるもの餘り柔



に過ぎては、却て子女を誤るべし。女は概して子を甘やかし過ぎて、やゝもすれば、たゞッ子となり易く、子をやさしくし過ぎて、意志弱き所謂薄志弱行の人となし易し。女は理性十分ならずして、感情に偏し易く、細事をやかましく言ふかと思へば、肝腎の大事をよそに閑却し、叱るべきに叱らざるかと思へば、下らぬ事に腹立てゝ、叱りとばして、子女をして自然にこせつかしめ、少し危き事あれば、忽ち驚きて之をとゞめ、木にのぼる

な、水に入るな、危き事をするなと、よろづ小心にしてひかへ目にするを以て、人を雄大にそだつる能はず、よろづこせつく小人物とならしむると多し。要するに、女のやさしく、温きは、家庭教育上一方にかくべからざるとなれども、甘に過ぎ、情に偏し、小心にして消極的なる、人を大成せずして、反て人を小成す。これ女子の家庭教育者としてつゝしみ戒しめざるべからざる所也。

## 寡婦

男やもめに蛆がわき、女やもめに花が咲く。鰥寡孤獨の四つの不幸ものゝ中にも、女やもめこそは面白けれ。

そもや忠臣二君に事へず、貞女二夫に見えざるは、東洋道徳の理想也。西洋にては、夫の生前こそ之を愛し、之を大事がれ、夫死すれば直に他に嫁す。高靑邱の歌ひけむ、見よく名を成し、妾嫁せず、良人瞑目せむ黃泉の下の趣は、到底西洋婦人の解せざる所也。我國よろづ西洋の文物風俗を容るゝにつれて、再嫁を可とする道徳學者もあり。知らず、再嫁を婦女の道とすべき乎、二夫に見えざるを婦女の道とすべき乎。

生前之を愛し、之を敬し、死後なほ其愛敬を失はず、再び肌をあだし男に許さゞるは、道徳の理想としては最も進歩せるもの也。西洋の婦女、こゝに到る能はざるは、その道徳の理想の低きに由る也。他の事情をばなれて、單に道徳の眼より見れば、再嫁せざるに如かざる也。されど、多き寡婦の中には、空閨の寂しさに堪へずして、ひそかに役者買ひするものなきに非ず。すべて善き事は、知られ難くして、惡き事は知られ易し。よしや實際かゝる不品行なくとも、寡婦が男と親しく話して居れば、これは怪しいと直に噂をたてられ、思はぬ濡衣を着るが多かるべし。而して二三の惡例をたてにとりて、寧ろ再嫁するに如かずと說く者あり。これ河豚の如き毒魚あるを見て、魚はすべて食ふべからずと云ふにひとしからずや。

吾人はあくまでも再嫁せざるを婦女の道とし、道德

の理想とせむと欲す。されど、また境遇の如何をも察せざるべからず。武家世襲の世にありて衣食の憂なきのみならず、夫に代りて嗣子をそだて、家をつがするの必要あり。かゝる社會にありて、寡婦をたて易く、また寡婦をたてざるべからざる必要ありし也。されど、家に財産なく、身に覺えたる藝能もなく、夫なくては生活する能はざる女をして、强ひて寡婦をたてしめむとするは、無理なる注文也。また子の有無、年齢の老若をも察せざるべからず。要するに、再嫁せざる



を理想とし、而かも境遇の如何によりて、必ずしも之に拘泥せざるを可とすべき也。

寡婦は不幸なるに相違なし。されど、十年夫につれ添ふも、五十年つれ添ふも、さむれば、ひとしく是れ夢ならずや。世に憐れむべきは、肉交以外の樂を知らざるもの也。古來の女性を見るに、多く事業をなし、物のあはれを傳へたるは、幾んどみな寡婦もしくは嫁せざる人也。加賀の千代寡居して、「起きて見つ寢て見つ蚊帳のひろさ哉」の句ありしにあらずや。矢部芳子寡居

して、「秋にあひて枯れにしものを今更に何驚かす荻の上風」の歌ありしにあらずや。紫式部は寡婦となりて、源氏物語を作りしにあらずや。阿佛尼は寡婦となりて十六夜日記を作りしにあらずや。神功皇后寡居して三韓を征伐し給へり。政子寡居して尼將軍となれり。春日局、阿茶局、蓮月尼など、いづれか寡婦にあらざる。而して之を見ぬ古に求むるまでもなし。今の世の女性にして學問、敎育、文學に名あるもの、亡き税所敦子、樋口一葉をはじめとし、寡婦もしくは嫁せざるものが多かるべし。

人、肉慾に飽けば墮落す。たとへば飽食せる犬のぐた〳〵と眠るが如し。肉慾の滿足を得ざるは、俗人より見れば、不幸なるが如きも、精神上の慾に向つて亢進す。進歩せる人の快樂も慰藉もその間にある也。且つや小人閑居して不善をなす。人は精神上となく、肉躰上となく、常に暇なきこそよけれ。精神上の慾望も嗜好も盛ならば、安んぞ愁聲を洩す餘地あらむや。

## 婢僕

（一〇）

『雪の日やあれも人の子樽拾ひ』、人をつかふもの、心には慈悲の涙なかるべからず。無學無智の婢僕、やさしくしすぐれば、つけあがりて、人を馬鹿にするものなれば、多少の威嚴なかるべからず。されど、威の中に恩なかるべからず。

今の世の主人公が婢僕に對する態度こそあやしけれ。少し氣に入らぬものは、直ちに追ひ出すくせに、少し氣に入れば、容易にひまをやらず、三年居れの、五年居れのと、すかしつ、をどしつ、一種の人身賣買、多くの家庭に實行せられつゝある也。

夜はおそくまで起し置き、朝は早くより起し、終日いたはりもせずほびつかひ、食物とては香の物のみをかじらせ、さなくば、食ひあましもの、くさりかゝりたるものをくはせ、人として取扱はずして、犬猫と同樣にとりあつかひ、常に小言をくはし、嫁期をおくれしめて、氣の毒にも思はず、一寸病氣になれば、すぐに宿に追ひ出す。殘酷なる哉、無情なる哉、今の紳士涙なき乎、今の細君血なき乎。婢僕に對する態度を改むるは、家庭改

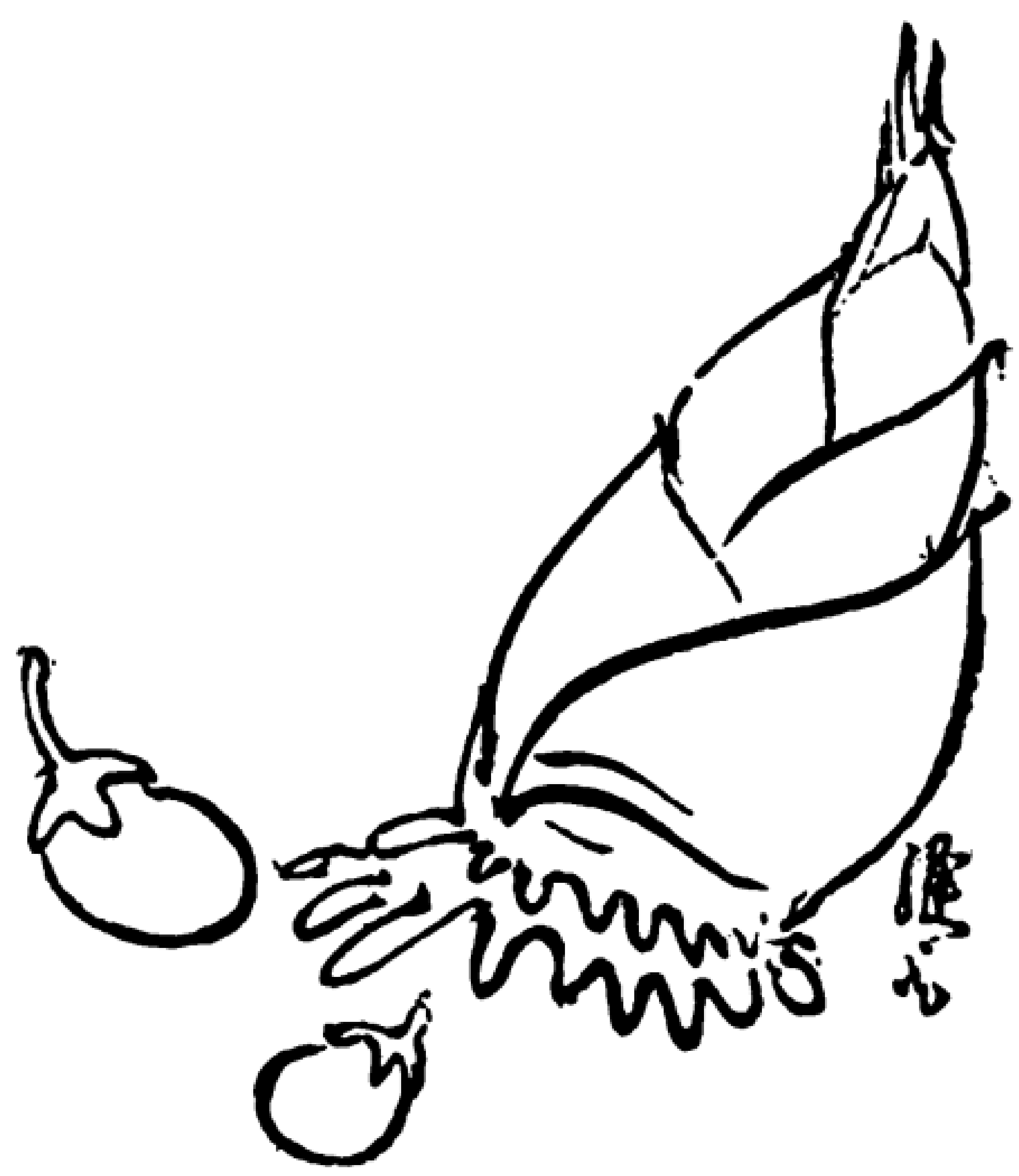
良の中の一の要件也。

## 小題七則

●なまもの知りの害あるは、半熟のくだものゝ害ある如し。男も、女も、學ぶ以上は、半熟以上まだ進みたきもの也。

◉今の女學生の生意氣なるは、その學問の未練なるに由る也。例へば、水の充滿せざる瓶の音するが如し。而して之に水みたば、音なからむ。而して之にこりて、女子の學問を非とするは、半熟の菓物をくらひて、菓物食ふべからずと云ふが如し。

◉さるにても、學問して理想が高尚になれば、現實の社會や家庭の低きに堪へざることあるべし。蘇東坡が人生書を讀むは、憂患の始と云へるも、一理あること也。されど、學問しつくせば、自から大悟せむ。現實は到底理想と一致するものに非ず。現實を理想に近づけむとする處に、人生の苦もあれば、樂もある也。



◉書物より得たる知識は、ひろく且つ高けれども、眞にその人と融化し難し。經驗より得たる知識は、よしやせまく且つ低しとも、確實也。人はなるべく多く經驗せざるべからず。一家の事、一寸見れば、何の造作もなきが如くなれども、實際之をあつかうて見れば案外に複雜也。家庭の主宰者たる女子、注意に注意を加へて、家庭の經驗をつまざるべからず。

◉すべて世の中の物事は、知らねば知らぬてすむもの也。酒をのまぬものが、飲むものよりも快樂少しといふべきことなければ、芝居を見たるものが、見ざる者より幸福なりといふべき筈もなし。人は成るべく奢侈贅澤の味を覺えぬこそよけれ。一旦贅澤の味を覺えたるものが、贅澤する能はざるときは、非常に苦痛を感ずべ

し。

●貧しき家に生れて、親のしつけを受け、よその娘の如く美衣をきる能はず、琴、三味線ヲ習ふ能はず、物見遊山に出掛くる能はさるは、不幸の如くなれども、實は幸福也。かゝる人は、後來たとひ逆境に陷るとも、さまて苦しからざるべく、順境に立ては、非常に樂しかるべし。

●世の無邪氣なる女心こそ悲しけれ。余が知れる人の妻、若くして美也。肺をやみて危篤也。その夫、何か言ひ置くことなきかと問ふ。答へて曰く、唯一つの望あり。君と共に寫眞をとりて、然る後死にたしと。既にして病やゝおこたる。夫と共に行きて、寫眞をとらむことをすゝむ。夫何思ひけむ、共にゆくことを肯んぜず、さらばとて、獨りゆきて、獨りうつし、歸り來りて曰く、これにて世の中に思ひ殘すことなしと。可憐なる女子よ、虎は死して皮をとゞめ、士は死して名をとゞむ。卿は死して美貌をとゞめむとする乎。

# 獨逸中等社會の家庭（上）

法學士　森山守次

歐洲に於ろ家庭の狀態—獨逸の主婦—音樂—繪畫—戯曲と劇—語學研究—女子教育—食事—交際—贈物—下婢—旅行—宗教—結婚—夫婦の關係—親子の關係

＊　＊　＊　＊　＊　＊

●●●●●●●●●●
歐洲に於る家庭の狀態を觀察するに、素より大體東洋とは違つて居て、又國に依りて多少其趣を異にして居ることは言ふまでもないが、概して英吉利よりは佛蘭西、佛蘭西よりは獨逸と、段々に其土地が東に進むに從つて、東洋の風に似寄つた點が自ら追々と增して居るのは、面白い現象と謂はねばならぬ、併し今各國に亘つて一々精しき說明をする暇は無いから、玆には先づ獨逸の——主として中流社會の家庭——に就て自分が實驗した所を、憶出す儘に一二かい摘んで述べて見たいと思ふ、秩序も立たず强て興味の滋い話でもないが、若し讀者の家庭に對し聊かにても寄與する所あ

らは幸ひである、

▲獨逸の主婦　　は英吉利の主婦が上流社會に進めば進む程、多くは家庭の事を放擲して盛に交際場裡に出入し、競て贅澤を衒ふの風あるに比すれば、頗る質素で節儉で自ら世帶の勞を厭はぬ風のあるのが第一に眼に付く點である、先づ朝食が濟めば下婢を連れて市場に出掛け日用の必需品を買ひ調へ、還りて臺所の業に從事し食事の準備をする間に、最早午前の時間が過ぎて仕舞ふ、晝食後には又裁縫を爲し諸般の家事を營んで日を暮すが常で、夕食後の時間が重に修養を娯樂とに充てらるゝのである。

▲音樂　　先づ娯樂だが、獨逸の家庭に於て上下押なべて普く行はるゝ娯樂は即ち音樂で、恐らくピヤノの無い家は無く、ピヤノの奏けぬ婦人は無い、少く餘裕のある家では無論バイオリン以上のものをも備へて居る、總じて獨逸人は音樂の趣味を感ずること深く、皆音樂を解し得る耳を有つて居る、で家によりては婦人のみならず男子も奏く、夫で一週又は一月に何度と日を定め音樂を催して樂しむのである、進んでは音樂會も多く、公開の大音樂會も、會員組織の小音樂會も共に盛に流行する、

▲繪畫　　次に婦人の樂みとするところは繪畫で、之を畫いて樂む風が多い、之は元來獨逸では男子よりも女子の人口が多く、從て生涯結婚することの出來ぬ婦人が年々增して來る傾向があるので、親たるものも女兒には先づ財產を分與するの心配を爲す外に、幼き時より自活の道を授くることを勉むる結果であつて、繪畫は優美なる婦女の天性に適する恰好の內職であるから、自然と婦人社會には繪畫の技を備ふる者多きに至る所以だらう、

▲戯曲と劇　　其外夜分には新聞や小說や其他の書籍を讀むこともあり、又男女相集りて戯曲を誦して樂むこともある、之は夫々役割をして置て順々に讀んで行くので、終りて批評などをも試みる、勿論獨逸の戯曲は文章も善く、事柄にも不倫猥褻の事なく、眞に有益無害のものであるから羨しい、又一家手を携へて劇を觀に

往くこともある、劇も亦是高尚優雅なもので、親子夫婦相倶に之を觀ても決して顏を背けるべきことなく、面白く見物して歸る、此觀劇も普通夕食後三四時間で濟むを例とする、

**▲語學研究**　次に娛樂と云ふよりも寧ろ婦人のたしなみとして、其修養の策として、特筆すべき事は外國語の研究である、母も娘も一緒になりて六七人の仲間を語らひ、大概午後に日を定めて輪番に宿に當り、親しき外國人を敎師として招き寄せ、珈琲を啜りビスケットを嚙りつゝ、不審を糺し發音を直して貰ふので、年を取ても尙孜々として勉强を怠らぬのは感心なものである、其外國語といふは多くは佛蘭西語で、これは諸學校に於て佛語が第一外國語として重く課せられて居るからである、

**▲女子敎育**　語學研究會の序に此處で女子敎育の事を一言するが、獨逸では高等女學校は八年の課程になつて居て、其豫備としては學校に入ると家庭敎育に依るとの別があるが、何れも約そ三年かゝる、即ち十一年で嫁入するに適當なるだけの敎育を卒へるので、是は年數から見ても、學科程度から見ても、日本の高等女學校卒業と大差が無い、更に進んで女子大學へ入學する者は主として婚嫁の望なき女子で、大學卒業後嫁入するなどの例は殆ど見ない、

**▲食事**　別問題に移るが食事は獨逸にては、朝は八時九時の間にパンに珈琲に卵位で淡泊なる朝食を取り、晝は一時乃至三時に正式なる各種の御馳走があり、晩は六時乃至八時に晝食の殘物を用ひ冷肉などで夕食を濟すのであるが、英吉利では晝はパンと鹽肉などに止りて、其代りに五時乃至六時の夕食に正式の献立をするのであるから、獨逸と英吉利とは丁度相反對して居る、そして偶然の來客には別に食物を饗することは無いが、極親しい間柄の者には家族と一同卓で同一の品を出すのが常である、

**▲交際**　家庭間の交際や物品の贈酬は日本よりも少い、つまり日本の交際は弘くて淺く、彼れは狹くて深い、何故かといふに獨逸では私交と公交とが截然として別

れて居て、家族と家族との交際は其職業などに拘らぬ純粹の私交であるから、餘り多くは無い代りに甚だ親密の度が深い、之に反し職業とか身分とかの關係より起る公の交際は極めて淡然としたもので、人を訪問しても要事のみ話せば、直ちに還つて仕舞ふのである、訪問の時間は婦人に對しては十一時より一時迄と三時より五時迄とで、男子は朝が今少し早い、其は婦人は朝身仕舞に時間を要する爲である、交際の專ら盛な季節は重に十二月から三四月頃までゞあつて、其間に二度位各知己を(組を違へて)招待して饗應するのが交際社會の慣例である、隨つて舞踏なども多く行はれ、青年男女が約婚する事も此季節に多い、

▲贈物　吉凶禍福の場合は矢張品物を贈る、就中クリマスと誕生日との贈物は最も盛である、父母の誕生日には其兒からも、小さき頭腦を絞つて彼か此かと考へた末、愛を籠めたる贈物をするのである、子供に對しては朝未だ眼覺めぬ間に、其好むもの思ひも寄らぬものを奇麗に並べて置てやるので、覺めたときの驚喜は眞に無邪氣な樂しげな樣である、年頃の娘などは努めて自分で造つたものを贈り、又は買つたにしてもこれに自分の手を加へて贈るのを見得とする、ハンケチならば刺繡を施したり、繪を書いたり、手提籠ならば美麗なる花飾を付けたりなどして贈る、是は贈物の本旨に適ひ最も嘉すべき風習であること勿論だ、

▲下婢　獨逸では前述の如く主婦たるものが頗る世帶染みて居るから下婢を使ふことが少く、中流社會では大抵一人だけで、二人以上置くは稍上流に屬する家である、下婢には二週間毎に半日宛の休暇を與へる習慣で、其は通例日曜の午後である、故に日曜の午後は客の方で氣兼して、極懇意な家でなければ訪問を見合すことになつて居る、

▲旅行　前に冬より春へ掛けて交際の季節であると言たが、之と同じく年々七月より九月迄は即ち旅行の季節である、此季節には一家老幼相伴ひて思ひ〳〵に出掛けて往く、實に旅行の出來ぬを恥とする程の勢であつて、全く旅行をせぬ者は殆ど無い、或は風冷しく波

靜かなる海邊に向ひ、或は天高く氣清き南獨逸の山村に赴き、富豪社會は遠く瑞西の湖畔に遊ぶもあり、强健氣銳の壯士はアルプス登嶽を企つるもある、概ね皆廣大なる建築の中で所要の室だけ賃借して、其處に住て居るものだから、錠さへ卸して置けば心配なく一家總出となることが出來るのである、尤も一軒の家屋を控へて居るものは留守番を一人付けて置く、

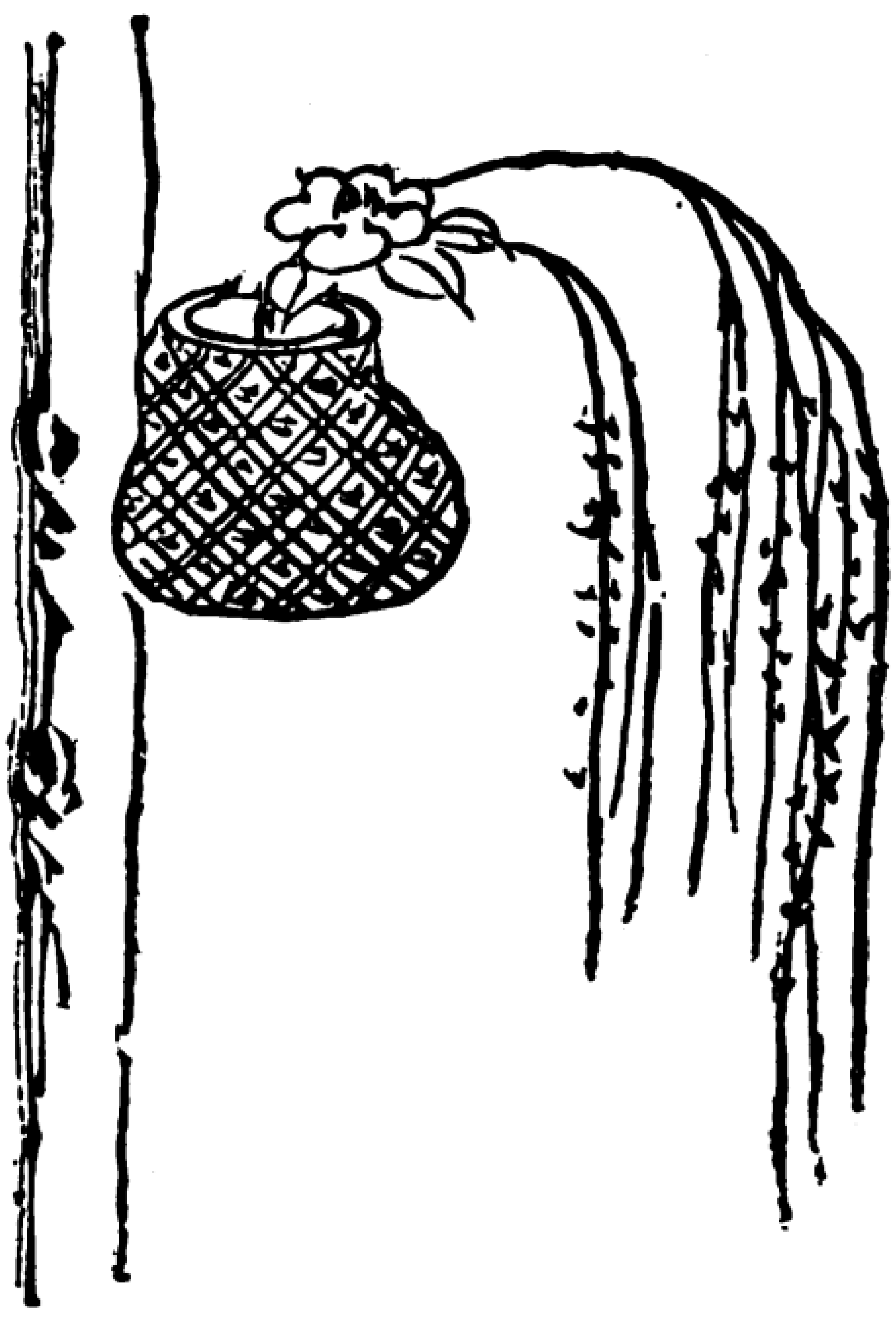
▲宗敎　宗敎は北方は新敎で寺院の數少く、東北より南方へ掛けては舊敎だから寺院が多い、新敎地方の者は比較的宗敎に冷淡で、寺院には普通一ヶ月に一回位行くに過ぎない、甚しきは丸で寺院に足踏せぬ者さへ多く、其每週禮拜を缺かざる輩の如きは特別に殊勝なる信徒僅々に止る有樣である、

▲結婚　概して極端なる自由結婚ではなく、親の方て充分に撰擇する風がある、いはゞ佛國風と日本風との間に位する樣なものだ、で愈よ約婚が成立てば、其より短くて半年、長くて三年の間待た上て漸く婚禮を行ふ、其故は諸種家事の都合や、女の持參金調達の都合もあるべく、又男の職業の關係もあり、且相互に氣心を知り合つて充分間違の無いを期する爲に、多少の日月を過すので、其間は男が女を訪ねて共に散步することなどは公然許されて居る、但し親に於て其萬一の不心得を慮り、氣を利かして大抵小兒を一人、道伴實は監督として尾けて行る、それから獨逸では一般に陸軍士官が交際社會の花であつて、彼等は自ら勉めて身の廻りを華奢にし、加ふるに巧言令色の致を極むる習であるから、頗る妙齡の處女の視線を惹き、其歡心を得ることゝなるので、茲までは罪のない話だが、其癖彼等は豪奢の結果首の回らぬ程の借金を脊負つて、果は豪商の愛孃と政略的の結婚を急がねばならぬ樣な艶聞を流すに至る、此等は弊風といへば弊風だらう、

▲夫婦の關係　は英國などの如く絕對的男女同權ではなくて、特に夫が頭の上らぬ譬へば前項士官の樣な事情あるものゝ外は、概して妻が夫に一目置て居る、そして離婚は、舊敎では全く之を許さず、新敎では或條件の下に許されて居るが、實際には破鏡の悲劇に極めて

少い、要するに第一社會の制裁が嚴なる爲と、次には妻の持參金が、流石夫の慾心を繋ぐ媒となるからでもあらう、しかし眞に感情の融和せぬ夫婦が永く同居して居られる筈は無いから、離婚には至らぬもの丶、夫婦家を別にして住むことは珍しくない。

▲親子の關係　獨逸あたりでは儒教流の孝道といふことを見ることが少からうと豫期して行たが、案外にさうでなく、彼の親子の關係は日本と異ならざるのみか、子が母親に拂ふの尊敬に至ては日本よりも遙に深い事を發見した、其は要するに一般の風敎の然らしむる所で、倘母が通例高等女學校卒業までの敎育を受けて素養がある爲、所謂親馬鹿にせられぬのと、且は子の方で他日の遺產分配のことに考を及ぼしての御都合主義も幾分か原因をなして居ると思ふ、親が子に對しては、中學程度までは監督頗る嚴重で、一歩も假借しない(學校の方針亦然り)、親しき客の來た時など、兒童が歡んで之を迎へることがあつても、若し勉强の時間中ならば、父母が一言の下に之を逐ひ斥けるのである、それも追々成長して進んで大學に入るに至れば、最う直ちに之を放任して檢束を加へぬ樣にする、其移り換りの時は如何にも未練なく斷然と方針を一變するところが面白いと思ふ。



# 家庭隨感

川瀨元九郎

先年海外に遊學して居つた頃、一旅舍の食堂で午餐を食して居た所へ、二人の紳士が這入て來て直ぐ隣りの食卓に着席した、一人は廿五六才の青年で、他の一人は五十才許りの中年者であつた、兩人の談話を聞て居ると、青年は近々の中に結婚式を擧げるので結婚後に住居する目的

を以て家屋を新築した、して青年は其新築家屋に付て自慢話をするのであつた。是れが日本人であるならば、門が何形で其の用材が何だとか、玄關が何風であるとか、客間の天井は何の板で床柱が何だとか、人の目に着く箇所に一番深く注意して建築し、そして是等の箇所を大自慢にするのが通例である。然るに此の青年は全く反對で、玄關や客間に付ては一言もしなかつた、が彼が建築用地に付て第一に談話を始めた、土地の撰定に付ては何理學士と何醫學士に協議し、且其排水工事の監督を理學士何某に依頼した、臺所其他の下水の排水法には何式を應用し工人何某を雇ひ、暖室法には何會社製造の暖爐を据へ付けたとか、寢室は家の何れの部に取つたから一日中日光が射入して都合がよいとか、寢臺は何商店にて求めたとか、其他空氣の流通には如何なる處置を設けたとか、彼は多くは人の目に見へぬ箇所に就て驕て居つた、彼は家屋を建築するに當て衛生を主とし、次に家族全躰の生活の安樂と愉快に深く意を用ひた。是れは此の青年一人のみでない、歐米人は一般に男女共に斯樣な心懸を持て居る、歐米の婦人は上流社會の人々でも臺所の構造や臺所の器具の完備に留意して居る、それて調理用の器具も年々改良せらるる許りである、我國の御勝手道具に何れ丈けの發明改良が出來たか、客間ては立派な金銀の器具を使つて居て壯麗な裝飾がしてあつても、臺所と云へば家屋中で一番怠られて居る部である、數十年前と同じて一も改良がしてない、是れは全く日本人が家庭の快樂とか安樂とか云ふことには無頓着であるからである。

日本の男子には夫れそれ道樂がある、然して其道樂は自分一人で樂むので家族の他のものは更に其利益に浴しない、書畫の道樂位は最上等であるが　其他道德上非難すべき、道樂すら色々あるに、其道樂には幾何程の金錢でも費すが、家庭の改頁には一文でも吝む傾きがある、然し是れは男子のみの罪でない、婦人も亦家庭のことを深く考へない、婦人の第一の道樂は衣裳で、生命よりも大切にして居る、朝から晩迄年が年中着物のこと許り考へて居て一も着物二も着物と云ふ鹽梅である、

食費を削減してても自分や娘達の衣類を新調するのである、其次に一番多い道樂は芝居見物である、斯様に日本人は男女共に家庭を重んじないで自分勝手な事許り考へて居る、西洋人と比較すると實に黒白雲泥の差異がある。

過去四十年間に於ける我が國の進歩は實に驚くべきものて學問や、政治法律や、運輸交通機關や、工商業等の方面に於ては歐米人に一歩も讓らないでよい、然し國民の基礎根本たる家庭なるものは一番怠られて居る、明治の家庭も天保時代の家庭も大差はない樣である、家庭の改良は目今の急務である、家庭の改良と云ふも其範圍は廣いが其の一方面に付て聊か希望を茲に述べし。

日本の家屋は何れの方面から論するも改良せねばならぬが、是れを改築することは容易なことでないから第二着として、第一着に改良すべきことは何か、第一には疊の上に座はる風習を全廢することである、疊の上に座はることは我が國民の健康上體格上影響することは少々でないことは、識者を待たずして明かである、老人は暫時椅子に倚りかゝつて居ると非常に疲勞を感ずるものである、是れは即ち身体の強壯ならざるを證明するのである、余生の短き老人は何れにしても關係はないが壯年者に在ては一日も早く改良せねばならぬ、兒童が學校に在て椅子を用ひる習慣を得、家庭に歸りては脚を二重に屈して疊の上に座はらねばならぬとは無理なことである、



日本家屋には暖室法の設備が皆無であると言ふても差支がない、零度以下の寒冷の時節に於ても火鉢一つ

てある、大人は寒ければ火鉢と對座して居て幾何か温かである、然るに彼の無邪氣な兒童は活動力が盛であるから大人の樣に火鉢の傍らに靜座して居ることが出來ないで寒さを知らずに冷氣中を駈け廻はつて居る、世の親達は子供の手足や耳の膨れ上りて居るの見て更に感動しないが、時としては皮膚に裂を生じて暗紫色の血液の流れ出るを見ることも少くない、「子供は風の子」と云へる諺は子供は大人よりも能く寒氣に堪へらるることを證明するのでなくして、子供は寒冷の度を正確に知覺しないから知らず識らずに寒氣を犯かすのである、實際子供が大人よりも寒温の變化に堪へられないものであることは、子供に凍創が多くあることや、子供に呼吸器病が多くあるを以ても明かに證明することが出來る、子供が洟を出して居るのは病的であることを忘れてはならぬ、又幼兒は寒期中朝夕殊更に機嫌が惡いことがある、愚かな親共は子供の機嫌直しに菓子でも呉れることを知て居る丈けである、然して寒さの爲に泣くのであると云ふことを更に考へ付かない、不親切な次第である、

中流以下の人々には到底望むべからざることであるが、それ以上の人々に在ては己れ等の道樂をのみ計らないで少しく家族のことを顧みるがよい、二三室に暖爐を据へ付けて室內を温め以て子供が愉快に遊ぶことが出來る樣にせよ、適度の温室にあるも決して身躰虛弱になるものでない、適當の衣服を着せしめて日々家外に出てゝ遊歩せしむれば更に感冒に罹る憂ひはない始終寒冷中に住居するものは身躰の抵抗力弱く、呼吸器病に罹り易く、且子供の身躰の發達は勿論精神的發育にも少からざる阻障を與へるものである、子供のみでなく大人に在ても寒氣甚しきときは十分に業務に從事することが出來ないことは吾人が經驗する所であるで資力の及ぶ人々は室內は華氏六七十度に保ちて活潑に業務に從事し得且兒童をして快活ならしめんとを期するを得策とする。在來の火燵は人々を不活潑にし且怠慢に流れ易からしめるのみならず衛生上からも感心しない方法であるから全廢したいものである。

暖室法は家族のためのみでなく、來訪者に取て最も有難き厚遇法である、寒冷なる客間に待される程不愉快なことはない、上茶の煎茶を立派な茶器に入れて出されても寒き室にありては有難くない。

臺所の改良に心懸けねばならぬ、日本の家屋では臺所が一番不完備である、臺所は吾人の口に入る食物を調理する場所であるから清潔にすることの出來る樣構造せねばならぬ。鐵製の料理用暖爐を置きて何時でも温湯が供給せらるゝ樣にしたい、さうすれば食器なぞも清潔にすることが出來る、又寒中は臺所が温かであるから下女共も働くに容易で凍傷なぞを患ふ樣なことがないから見ても心持がよい。

一重切圖




可成寢臺を用ゆることにするがよい、吾人の身躰の疲勞を回復するは睡眠中である、又毎日平均八時間位は横臥するものであるから寢床の如何は吾人の身躰に大なる關係がある、茲に述べることは何にも耳新しきことではないが只人々が金錢の使用法に少しく注意して家庭に力を加へられんとを望んで注意を喚起するまでである。

近來所々にて料理法の講習が開かれるが多くは何時代の料理だとか、何の祝の御馳走だとか、費用と時間の懸かる六ケ敷料理法を教へらるゝ樣であるが是れは吾人の望む所ではない、斯樣の料理は月々の常食に必要なものでないから、必要に應じて料理屋に命ずれば却て安直に出來上り且主婦が貴重な時間を自ら費やすに及ばないことである、斯樣の料理法の稽古は御慰みである、夫れよりも日常の食膳の調理法を衛生的立場から研究して貰いた

いのである、女學校に於ても料理法が設けてある、而して料理の先生は衛生的素養のない料理人てある、彼等は只躰裁よく味よく調理することをのみ知て居るが、之を食する人々の身躰に食物が如何なる結果を來たすやは更に考へない、斯様な料理法では學校の料理科としては甚だ不都合である、料理を學理的に研究するには生理衛生の智識がなければならぬ、實は料理は美術である學理の應用である、それで吾人の望む所は女學校に於て生理に今少しく力を入れて生理、家事及料理の三科を一人は先生が受持つことである然らば滿足な結果を得るてあらう、吾人の考では現今の女子敎育の欠點は茲にあるのである、英語や歷史や地理なぞは吾人の身躰には直接關係がない、然し生理、家事及料理は吾人の健康と幸福に大關係があるものであるから、是等を最も重要な科目としたいものてある裁縫が出來なければ他人に依賴すれば間に合ふ、茶の湯や生花法を知らなくても立派に世渡りは出來る、然し自身の健康を維持することを自ら知るは最も大切なことであ

る、日本人の體格の惡いのは日本人の多くが自身の飼養する方法を知らないからてある、婦人は自身の健康のみでなく、家族全體の健否は自分の肩上に懸れることを忘れてはならぬ、女學校が是れ等の方面に力を盡さないから天保時代の人々が女子敎育に反對するのである、吾人の意見によれば、素より女學校に於て實地料理法を敎へる必要はない、育兒法を科するの必要がない、育兒法を科するの必要かないと同じことてある、單に生理の原則を平易に說明して置けば其原則を隨時に應用して立流に育兒も出來る、料理もよく出來るのてある、今少し婦人が生理衛生に意を注いだならば日本人の體力と幸福に大なる變化を來すに相違ない、婦人が生理衛生の智識を應用する範圍は甚だ廣いもので、婦人の僅かの注意によりて疾病を未發に防くことが出來るのみでなく、時としては人命に關する樣なことがある子供が着色してある玩具をなめて生命を失した實例もある食器から傳染病が家族一同を犯したこともある實に家族の生命は婦人の手の內にあると言

ふもも差支はない、玆に其應用上の注意の一を述べん。
危急の場合に於ては主婦の注意の如何によりて一命を救ひ或は失ふ様な結果を來たすものである、急病人があるか或は病人の容體の急變した場合なぞには婦人は周章して平常の智識も何の御用に立たぬことがある、主婦は女中なり車夫なりを急ぎ立てゝ醫師の許へ遣はす、使の者は氣息を促迫して醫師の家へ馳け付ける、然るに醫師の方ではそんなに狼狽しないで落着いて居る、先づ誰れが如何な病氣だと尋ねる時として使の者が患者の年齢も男女の區別も或は病氣やら創傷やら何やら更に知らないで只來診を求むることがある、斯様な使では醫者が出診するに際して器械の準備や薬品の携帯に付て更に利益を與へないから醫師には甚だ不便である、斯様な不準備で出診した爲に折角診察しても器械か薬品の不足の爲めに再び使を走らして時間を費やす様なことがある、又醫師が病氣の種類年齢等を大概前以て承知して行けば準備も出來る、又患者の家に達する迄に此の場合には此の處置を施し彼の場合には彼の處置を施こすと一通り決定して行くことが出來るから患者の家に達して時間を浪費することもなく、直に處置を施すことが出來る。それで從來より知り合ひ醫師ならば何誰と名を告げ初めて診察を乞ふ醫師ならば患者の年齢、男女の別、職業、を第一に傳へ次に病氣ならば發病の月日發熱の有無胃痛、下痢、咳嗽とか著しき徴候の二三を以て其病氣の大略を知らしめ事變ならば創傷、卒倒窒息溺死等の區別を告ぐべし、主婦が是等の一の要點を使者に告るには二三分も費さないで濟むことである、而して如何ほど醫師に取りて便宜



てあるか知れない
其他生理、衞生思想が家庭に於て如何に大切であるかは一々說明するに及ばぬ、約言すれば主婦及ぶ主人が家族に對する責任の重きを悟らんことを望むのである。例へば酒の害を知りつゝ禁酒することが出來ないものがある、其人は邪嗜の爲に子も妻も忘れて居るのてある、妻子に對する責任を感ずれば吾人は禁酒は勿論其他身躰に不利益な行爲を勉めて排除して健康に注意して居らねばならぬ、妻子合せて五六人もある身分で日夜不衞生をして居るものが澤山ある、斯樣な人の妻子は實に憐れなものである。

## 世帶の心得

×××

宏壯なる家に住み、美しき衣裳を着、毎日樂みて旨き食物を食はんとは誰しも望む處なれども、通例の人にありて其の希望を悉く滿足させん事は到底叶ひ難き事なり。されば人は其の日其の時の境遇に滿足して其の身、其の分限に安んずるの覺悟なかるべからず。人若し勸工塲に入りて其の欲する所の物を求めんか。衣裳手廻品、頭髮の具、庖厨用、家具、小間物、其外種々の用具に就て一と品づゝ求めんとするも數十圓の金は立所に消え行くべし。若し入用の品を悉く求め備へんと欲せば數百千圓の金を用意して尙足らざるを覺ゆべし。それ使ふべき金は無盡無際にして猶購ひ得たる品はそれにて決して足れりとはせざるなり。譬へば一揃への庖厨用具、一揃への身の廻り、一揃への夜具、乃至一揃への文房具にせよ、これを一から十まて備へて完全無缺ならん事を望みたらば其の品數は夥しき數に及び爲めに其の取扱ひの繁雜にして手數を要する事一と通りにはあらざるべし、故に日用道具は及ぶべくたけ品數を省きて諸事簡便を主とし。物品の爲めに無用の手數を煩はさゞるやう心掛くるを家事經濟の主眼とするなり。諺にも戰塲で物食ふやうにせざれば世帶は持てずといふ事あり。世が文明に進むに隨ひて一般の衣食住は益々贅澤に進むは勢の然らしむる處ろなりとはいへ。さればとて食事の爲めに一日の大部分を費やす

事は今日未だ普通の家計に於て實行し難きものなり。成程料理割烹に魚菜に材料を撰び、烹煮の手間を掛け、器皿を整へ。食卓を飾り品數を並べ立てゝ體裁も立派にし味いも旨くして整然、秩然燦然麗然として樂んで食すべきは誰しもの願ふ處なれども、主人は元より職業上の用務に一日逐はれ、主婦は一家の萬般の用務に終日營々とし寒時には寒時の用務あり暑天には又暑天の用務あり一年四季一家内の雜務に執掌しつゝ日を暮らし行くはまづ不完全なる今日の社會一般の傾向たるべく縱しや下婢奉公人を使ふ家々とてもそれには又それ〳〵の用向多く、されば今日食物調理の爲めに一日の大部分を食事の爲めに費やすといふ事は用務のなき氣樂人の外にはまづ行ひ難き處ろにして女學校出の新婦が新たに一家を組織せる場合にても學校にて學び得たる料理法を樂んで實地に應用するは僅かに新婚後半年か一年位の間にして時日の經つに隨ひ家務の繁雜に赴くに及べば食物の献立や庖厨の事などは自然と簡便の主義を取らざるべからざるに至るは一般の習ひにしてまづ勢の然らしむる處といふべし。況んや小兒養育の重任ある家々に於てをや。



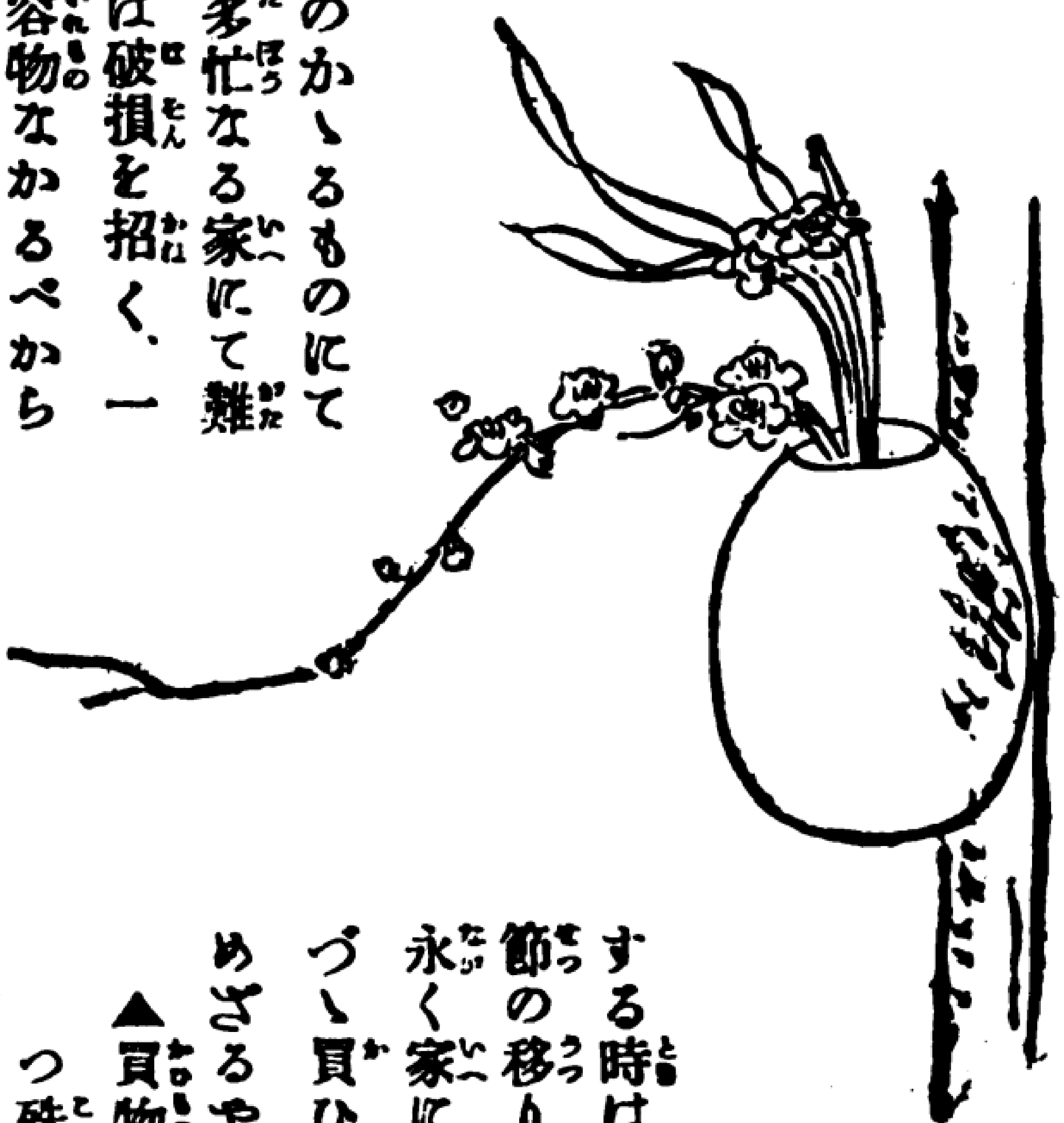
人生生活上に尤も肝要なる食事庖厨の事に於て既に然りとせば其他の家務に簡便主義を取るべきは勿論の事なり。衣服や髮飾りの品に新流行を逐ひ、身の廻りを飾り取てゝ萬人の眼にうらやまるやうにす

るか、又は髮を櫛卷にして黝んだやうなる衣服を着、世帶やつれして家の隅にくすぶりて居るがよきかといへば。誰れしも前者のやうに立派にありたく冀ふ處なれども世の流行を逐へば一領の衣裳にも主人が一ヶ月の給料を擧げて費さゞるべからず、今日流行の鑄型に悉く箝らんと欲へば朝から御化粧にかゝらざるべからず。費用は元より時間の經濟も又太したものなり。親がゝりのお孃さんならば兎も角一軒の家庭を整へて行く人のなる事にあらず。されはこれも又例の簡便主義を取り。萬事を質素にし、實用を旨とし。着物は世間へ出て見苦しからざるまでとし。なるべく派手なる風俗を避けて實際の德用向を考へざるべからず。大躰今日我國の風習として兎角新流行に逐はれ勝にして婦人が表てを通るにも人前に出づるにも動もすれば衣裳の共進會たるの趣きあるは嘆かはしき事なり。流行の衣裳も一二年にして時代後れとなれば可惜綺羅を廢物に歸せしめ、流行また流行と碌々着もせざる衣裳の廢物が簞笥の底に祭りこまれ、扨て賣らんとすれば買値に比しては二足三文其の度々に亡ふ費用は決して尠からず。誠に不經濟の極度にして、小にしては一家の失費、大にしては國家の損害、日本婦人(これは强ち婦人のみに限らねど)はやがて衣裳の爲めに着倒れの不幸を見るに至らん歟。

衣食に就ての經濟この如し家計萬般に注意を要すべき事擧げて數ふべからざるも、まづ要するに無用の物品は成べく購求せざるをよしとす。豈唯無用の物品のみならんや。一と通り有用の物品と考ふるものにても十分思案の上にて是れは是非とも無くてならぬ物と前後の勘辨つきたる上ならでは容易に手出しはならぬものと思ふべし。新世帶ならば知らぬ事。舊き家々にては大凡の物は持ち傳へて其家に備はり居る事なれば大抵はその品物にて我慢すべき筈なり。庖厨道具にせよ、座敷の用品にせよ、又は室内の修飾品、女房の具、手廻り品、何にても能く〳〵注意して家に在り來りの品物を見極はめ、それにて我慢のなる物ならばそれにて間に合せまづ忍んで買はぬがよし、よく〳〵時代後れの

物にて詮方なければ新調すべし併し一度興に任せて商店の物を買へば、其の費用は永久に亡ふ事と合點すべし。

總じて何品にても少しは家の内に不足と思ふ程にして置くを家事經濟の眼目とす有り餘るといふ事は不經濟の始めなり。世帶の要法は物の不自由を忍ぶ處ろに在り。人と容物は何程ありても十分といふ事には行かぬものなり。又一の物に不自由を忍べば其心萬事に行渡りて大なる得となる。第一家内に多くの物品を備ゆるは甚だしく手數のかゝるものにて一々之れを整理するといふ事は多忙なる家にて難き事なり。さればとて散亂すれば破損を招く、一個の器物を納むるには又一個の容物なかるべからず。其又容物には置所もなかるべからず。十疊の座敷も八疊に狹められるは之れが爲めなり、されば家財の物品を購求するには吟味の上にも吟味を加へ。よくよく注意して家の失費にならぬやう心掛くるは家事經濟の要領なり。世間世帶の活用として唱へ來れる買物の心得を左に摘記せん、



凡そ買物を爲すには可成く知れる處ろの商人より買取るべし、毎日消費し易き處ろの贅澤品及び酒類、菓物は成るべく其の時の必要の需めに應じて買ふべし、多く買置をする時は餘分の消費をなすものなり、又時節の移り變りによりて不用となる品、或は永く家に貯へて味ひの變ずるものは少々づゝ買ひ求むべし、又新たなる似物を買求めざるやう注意すべし。

▲買物は知りたる商人より買取るべし且つ殊に商賣繁昌の家に於てすべし。

▲買物は安價き直段の物を買ひて時に損ありと知るべし。

▲買物は自己の知りたる品物の外買ふべからず
▲買物はなるべく現金にてすべし
▲買物を知人よりする時は決して直切るべからず
▲買物の品を引換へんとする時は以前よりも惡しき品を得るものと覺悟せよ
▲惣菜を買ふには能く家内の人數によりて定め、且つ其量は少し内端に見積るべきものなり。

## 家庭小話

寒澤振作

（一）氏姓より育ち

とは、能くも眞理を云ひ現はしたる言葉なるかな。漢詩に、男兒須く書を讀むべし、王公將相寧ぞ種あらんや、と意味は、同一なるべきも、兩者を對比すれば、其精錬簡潔なることは、比すべくもあらず、我國にて、銘言とも稱すべきものは、何れも諺と稱することとなるが、是等の語を外國の如く、金言又は格言などゝ稱ふることゝせば、正に格言集中の上乘なるものなるべし、予は敎育萬能主義を信ずるものにあらざれども、この銘言に因れば、その出所氏姓の如何を問はず、生立ちの周圍境遇の如何に依りて、如何樣にも人を變化せしむる功能あるべきことを疑はざるなり、

今手近き例を取りて、之を證せんに、田舍者ちの子弟を携へ來りたる當時には、言葉遣ひは、如何にも粗野朴訥にして、明了を缺き、用を辨じ難く、主從共に不便を免れざるの有樣なるが、漸々と日を積み月を累ぬるに從ひ、田舍染みたる汚垢の拔けると共に、その容姿態度も活潑に言語應對も、敏捷となり、更に昔日の俤を留めざるに至り、今吾と故吾とを比較すれば、殆ど天地雲泥の差にて、直身の父母兄弟にても、一見して眞に一驚を喫するが如きは、世に多く有勝のことにて、これ即ち氏姓より育ちの證にあらずや、

又郊外を散歩の折、路程の方角遠近等を尋ぬるに、その返答次第に依りて、言語應答の明了なると、其否らずして、喃々殆ど飴を含みたるが如き、口上にて要領を得ざるに接することとなり、依て之を判斷すらく、甲は小學校

の教育を受けしもの、乙は全く無教育者なりと、斷ぜしむること屢々なりき、是を以て見れば、縱令名門豪族の家に生れたるものも、之を下谷の萬年町とか、四谷の鮫ヶ橋、小石川の掃除町などに投じ置かば、迚も他の群童と水際立ちて垢抜け居ることは、六つヶ敷かるべく、所謂王公將相寧ぞ有レ種やとの、實を現實に示して、彼の餓寒窟にて、唱ふる所の餓鬼、(幼童を指して餓鬼と稱ふ)と少しも擇ぶ所なからんなり、嗚呼教育なるかな

(二)　胎教

人の一生に付て、教育の前後を論ずれば、蓋し支那の胎教より先なるものはなかるべし、胎教とは、支那の古書に在る所にして、婦人の妊娠すると同時に、其起居動作食物言語、抔に制裁を加へ、即ち目に見耳に聞口にて言ひ味ふ等すべて行住座臥に意を用ひ、不行儀の躰なく、殊に忿怒の情を愼み、毎時も善行美事を聞て、常に心情を愉々快々にし決して規則外に出でざる樣に心掛くるなり、かくの如くするときは、體内の子も母親の善き行儀に感じて容姿端正にして、善良なる賢兒生るとの教へにして、其教へに體して斯く母親の其身に制裁を加へ其身を窮屈にするは、體内の子に、躾を施する端緒なりと謂ふべし、

この胎教の説は西洋諸國にては、未だ言はざる趣あり、支那古代の研究としては、餘程精細緻密なる説にして、甚だ貴重すべきものなりと思ふ、一躰子の母體に在るや、所謂同身一躰なるが故に、母の所作の善となく惡となく、一々に感受すべきことは、云ふ迄もなきことならん、この胎教の説は、歐洲の今日の心理學者、教育學者抔の口吻より出てし、精微なる議論なるが如し、かゝる貴重すべき議論が、歐洲人の口より出てしならば、之が演繹に、日も亦足らざる如き有樣にて、喋々喃々し、稱道に怠らざるものあらんなれども、惜いかな、支那人の口より出でしを以て、之を研究し、是を稱述する人もなく、殆どこれあることさへも知らざる如きは、いと殘念の次第と云ふべし、併し既往は咎めずとの訓言もあれば、今日迄のことは論ぜざるべし、何卒心理、生理、教育の諸學者等の、攻究の好資料と爲し、研究の勞を

みて、其結果と公にし、支那人の未だ知らざりし新設を發見することとありて、世間に示すこともあらば、世人の受くる所の利益は、尠少ならざるべし、然り而して、この度は、反對に學術研究の結果を、彼國學者に、研究の問題を紹介することゝせば、何時も受賣のみに慣れたる、我學術界を轉じて、其研究問題を彼に與ふることゝせば、如何に我學術界の名譽なるべきぞ、予は之を望む。

## (三)　愉快なる家庭

我國、古へは漢學の敎へに基き、家庭の敎への、嚴重なるを貴びしものなりと信ず、其俤とも云ふべきは、優しき父に向ても、嚴父と稱し、家嚴と稱することは今尙ほ存ぜり。世の中に恐ろしきものを數へて、地震、雷鳴、火事、親爺などの諺もありて、父は此上もなき强者にして、恐怖すべきものと爲しゝか如し、近來西洋の學術習慣入るに及び、愉快なる家庭樂しき家なゞとて、殆ど漢學流儀とは、氷炭の別あるが如し、之を醫ふるに、昔し流儀は、其嚴重なること、秋霜肅殺の氣、木枯らしの風は、身に心みて、落葉紛々として金天肅殺の氣候なるが如し、又新來の流儀は、春の日の麗らかに、風軟かに、花笑ひ蝶舞ふの長閑なる模樣にて、所謂春風駘蕩の好時節なるが如し、然るに今依估贔負なく、孰れを取り、孰れを捨るべきやと、問ふものあらば、家を以て、心身の安息所又は安樂鄕となす以上は、新來の流義に、至極の大賛成を表することと勿論のことゝす、然れども、昔し流儀にて養成せられたる風習は、尙ほ幾分の餘影を存して、家屬等の態度に、檢束する所なければ、取締なき家庭の如く感ぜられ、兒童の擧動に、幾分の制限を加へざれば、氣隨我儘にて、全く無躾の如く思はれて、何處やらんに嚴重の氣味を存して、時に或は愉快なる家庭を形作ること能はざるの情あり、右は只予の慚悔話に過ぎざることなるが、世間或は予と同感なる人もあらんか、この間に處する鹽梅と匙加減とは、如何なるものなるべきや考案もあらば伺ひたきことなり

# 下婢の使ひ方

貫菜女史

（老婦人の實驗談）

これは多年家事に經驗ある或老婦人が親しく語られし事の概畧を記るしたるものにて下婢の使ひ方につき日頃心を勞し給ふ婦人方の參考にもやと茲にしるす

妾一家の主婦となりて家政を執り始めてより或時は都に或時は地方に住居してはや二十二年となるも幸にして召使の者につきては困難を感ぜしこと少なく桂庵に依頼して雇人を探せしことは唯一度ありしのみなり妾が朋友妾に向ひて御身の家にては婢僕の交代少なく數年間續きて勤め居る者多し如何にせば斯くあらん何卒其秘訣を知らせ給へと云ひしこともありきされば妾が日頃實行なし居る二三の規則を擧げん。

勿論二十二年の長き月日には下婢の交代も數度ありたり然れど其中五六名は他家へ緣付かんとして又二名は其家族が遠方へ移轉せしため暇を取りしにて其性質惡くして使ふに堪へず、此方より暇を遣はせし者は二名のみなりき妾が此家へ來りし頃は下婢一名を使ひしのみなりしが今は二名の下婢と一名の下僕あり。

先づ給金の事より云はんに妾は常に先方より給金の催促をなすの必要なき樣定めし期に違はず、且つ快よく拂ひ以て其勞力に酬ゆるに吝ならざるの意を示す新らたに婢僕を雇ひ入る時は先づ其期限と給金を定めおきて先方より期限前に暇を取らば日割にて拂ふも若し此方の都合によりて不意に暇を出せば定めし期限迄の給金を拂ふ、次に給金は何度に拂ふべきかを定め月拂ならば毎月末に拂ふなり、又一の控帳を製し置きて、仕拂の都度其金高及月日を記るし置きて以て間違ひの起らぬ樣にす、家族一同避暑等に行くため一月或は二月家を空けて婢僕等を一時解雇するも歸宅の後引續き雇はんと思はゞ互に相談の上約束をなす、主婦の方にて至當となす處と雇人の方にて公平と思ふ所と動もすれば齟齬し易きものなれば最初に談判を精細になし後日に至りて誤解等の憂なからしむ、殊に金錢上の事に至

りては精密にして規則正しきを要す、かの被雇人が雇主に對して不平を起すは多くは雇主が期日來るも給金を拂はず、又其拂日の不規則なる等に原因するなり、されば此弊は主婦たる人の聊かの注意によりて容易に免かるゝを得べし。

妾は常に下婢等の仕事に目をくばり居て、其出來宜しければそを賞むるなり、妾は骨折りてなしたる事若し敬愛する兩親良人等の心に適ひて喜ばれし時ほど愉快なる時はなし、去れば下婢等の成功善行等を賞め是を奬勵する者は妾の外には誰もなき事を常に臆ひて料理の鹽梅の宜しき時、硝子障子を透明に磨きし時、板の間をきれいに拭ひ潔めし時、或は其身を清潔にして垢つかざる衣服を着たる時などは、可成賞言を與へ喜ばしき貌を見すれば、彼等は之を樂として益勉め勵むものなり凡そ他人より賛賞を受くるを喜ぶは世界一般の人情なり。

下婢等が汚れたる衣服を着け身体を不潔にし毛髮を亂し置くなどの事は決して捨て置き難き事なれど、去りとて彼此六ケ敷云ひ咎むるも其功少なければ寧ろ偶々清潔なる衣服を着けたる時を見て「御前の着物はさつぱりとしていゝこと」などゝ云ひ或は能く繕ひたる足袋を穿き居らば「御前は足袋に穴をあかして置かないから私は好きだよ」などゝ賞むる方必効多きものなり。又妾は下婢等を決して嚴しく叱責せず若し彼等に惡しき事あらば叱責せずして靜かに教へ諭し其仕事の不出來なる時は斯くする方優れりとやさしく教へ遣るなり。又彼等誤て瀬戸物器物等を破壞せし時荒々しき言もて叱れば彼等は己れの過失を他にして却て無理なる叱言を云われしと主人を恨みふくれ顔して用事を命ずるもろくゝ返事もせず、ふしようぶしようになすものなれば、何の益もなし且つ下婢たりとて、好んで故意に不注意なる者は稀にして瀬戸物の如きは、如何に注意して取扱ふも破損し易きものなれば妾は下婢物品を損せし時は隱し置かずして其旨を直ちに告げ詫をするを教へ置けど、あまりに其過失を咎めぬなり。又三名以下の下婢を使ふときは銘々に役を分ち、此は誰の

かゝり、彼は誰の受持ときちんと定め置く時は彼等は己れの役目の外は一事だに爲すを好まずして互に譲り合ひ色もすれば口論など引起すことあれば惡しかるべし。素よりお三と中働きの役は異なれど、妾は新たに下婢を雇ひし時は何事にもあれ妾が命ずることは皆爲すべしとの約束をさせ置くなり。妾が隣家は大家にして小間使、中働き、子守洗濯婦、飯炊婦等を召使ひけるが、彼等は何れも己が役目と思ふ事の外は些細の事にても勞を惜みて爲さず、或時中働きと小間使が二階の椽の掃除をなすは我役に非ず汝の務なりと互に口論を初め互に言ひはりて何れも手を下さゞりければ、主婦は止むを得ず毎朝自ら椽の掃除を爲せり、斯る不都合は規律正しき家庭にはあるべからざる事なれば、主婦たる者はあまりに下婢の仕事に範圍を置きすぎず又時に應じて何事にもあれ其命に快よく從ふ樣彼等を馴錬すべきなり。

家の用事は時によりて或は少なく或は多くありて一定の規則なきものなり、故に病人あるか又は多人數の來客ありて平常の雇人のみにては手廻り兼る時は臨時の補助者を要するは勿論のことなり、且又若し彼等の身躰に恙あるか若しくは非常に疲勞せし時は可成用事を減じ休息の時を與ふことは肝要なり

一週に半日とか一夕とか或は日曜日とか日を定めて暇を與へて各自の用事を爲すに便ならしめ或は行くべき場所あらば自由に外出せしむべし、されど特別の許可を與へし時の外は必らず十時迄に歸宅なす樣定め置くべし、又彼等の親戚朋友等の訪ね來らば妾は常に快よく彼等を迎へ臺所或は女中部屋に案内せしめて心置なく應接談話せしむれど夜は十時を限り辭し去らしむ、又食事時に來らば偕に食事をさせなどして聊かの厚意を示すを常とす、

妾は可成婢僕等の訪ね訪ねられて常に交際なし居る親戚朋友等の知人となる樣勉め、若し病者老人或は彼等の仕贈りをなすべき貧窮者ありと知らば時には食物の殘物を贈り或は古き衣類又事情によりては金錢をも施す樣心懸け居るなり、然れば婢僕等の多くは妾が厚意

を謝し恩に感じ我家の利益を計り、親切に働くなり、實に彼等の如き身分低き人々は他人より丁寧に使はれ柔和なる言をかけらるゝは至ッて稀れなことなれば主婦たる者は常に注意して彼等を憐みいたはり助け以て博愛てふ德を實行し神の前には貧富貴賤の差別なきことを示すべきなり。

彼等若し宗教信者ならば如何なる種類の信仰にもせよ妾は決して此を蔑視せず、禮拜式などには自由に出席なし得るの便宜を與ふる樣心懸け居れり。

小兒等にして若し下婢に特別の用事を命ずる時は「何々を持て來い」などゝ傲然と命ずることを許さず「何々を持て來て下さい」と丁寧に頼ましむされど小兒の命なりとて決して忽にすることなく直に從はしむ。

妾は常に簞笥戸棚等に錠をおろして彼等に盗心あるかを疑ふの心を見せず、却て彼等を信ずるの心を示す爲め錠などをおろさゞれども未だ些細の物にても紛失せし例なし。

女中部屋は他の座敷と同じく常に片付きて淸潔ならしめ、各々のため衣類を入れ置く簞笥若くは葛籠の如き物を供へ、又戸棚の一部分を定めおかしめ、夜具等も可成淸潔ならしめ、以て彼等主人の用を終りて己が部屋に退きし時も心地よからしむ。

下婢が若し下僕に頼むべき用事のある時は直接に乞はしめず、先づ妾が許に來りて其旨を告げしめ妾より下僕に命ずるを常とす是れ彼等の間に喧嘩口論など起らぬ樣防ぐためなり。

妾病に罹かるか或は旅行などして暫時家事を下婢等の手に任せ置く時あれど彼等は皆忠實に其義務を盡し妾が快復或は歸宅の時まで差支なからしむ樣親切に働き居るが故、妾再び家事に從事なし初むる時は常は愉快を感じ滿足に覺ゆるを得、又彼等の內止むを得ずして暇を取る時は大抵其知人にて代りに來らんと申込む者あるが故に桂庵を煩はすの必要なし、されば以上の規則は中々に功少からずと信ずるなり。

# 室内装飾

近藤嘉三

## (装飾上の奇正)

装飾術の上にも奇と正とがありて、銘々にそれ〴〵の趣味を持つて居る。一寸考ふると眞の装飾は正格で行草の飾りは奇の格に屬するかの樣に思はるゝが、必ずしも然樣とは限らぬ。眞の飾りにも奇の飾りがあれは、行草の飾りにも正格の飾りがあつて装飾の奇正は眞行草などの飾り方の格には伴ふものでは無ひ。

奇に失しては所謂異に陷つて嫌らしいものであるが、若し適當に配置好く飾つた時は、往々正よりも奇の方が風情も趣致も多いもので、装飾を爲るにも奇の飾りの方はどちかと云へば飾りはえがある、即ち装飾上の腕を見するのは奇の方である。この奇の飾り方に就て最も大切なる材料は見立物であつて調度でも器物でも若くはその飾るべき居室でも、この材料を適當に運用するのが秘事であろふ。

### 一 見立物

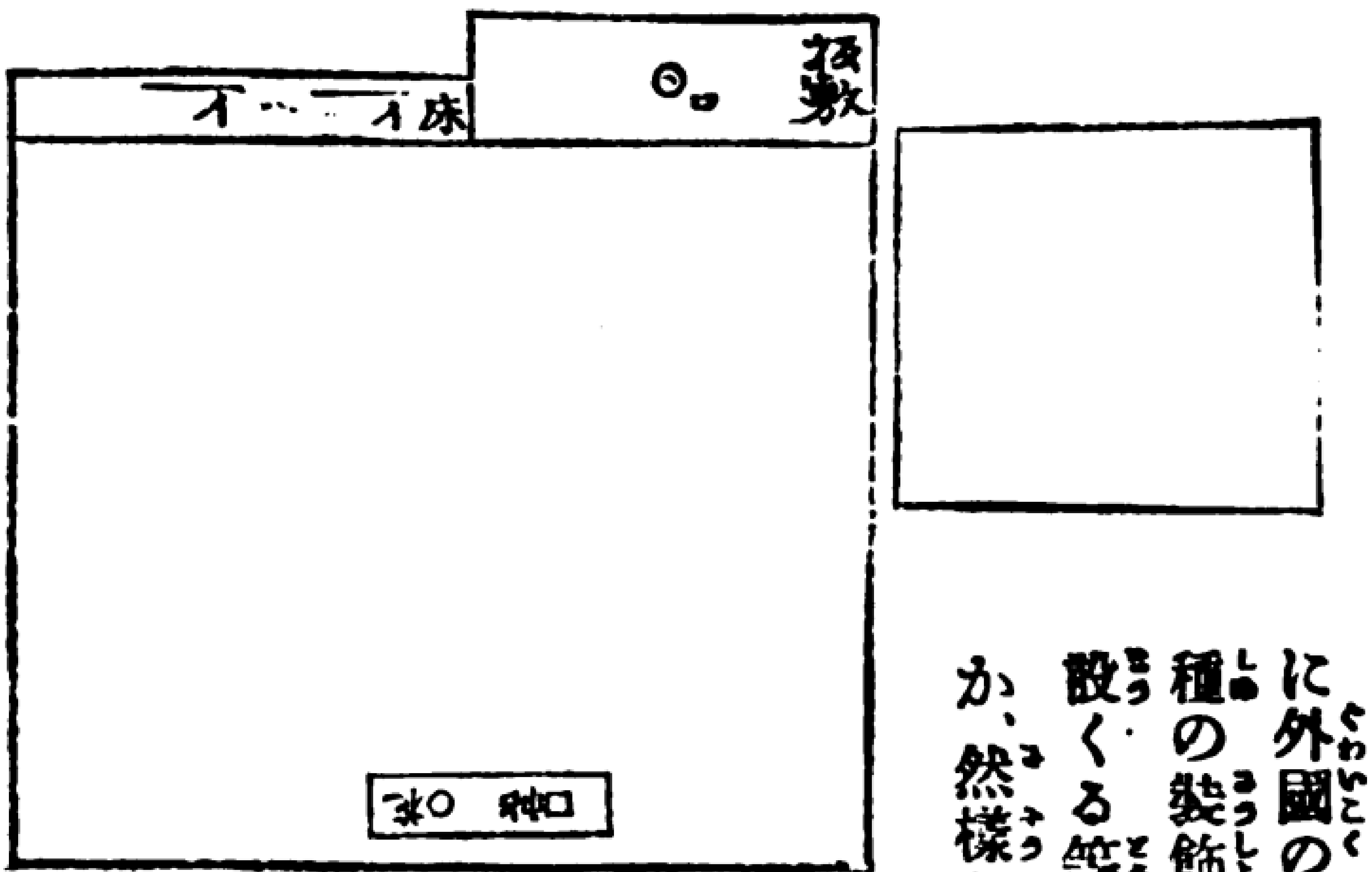
頃日佛國に在る某氏の許から日本の室内装飾上の事を種々と尋ねて參つた次手に彼方の装飾の事も三つ四つ書て寄越したが、私共の眼から見ると甚だ不感服の點もあれば至極參考に成て面白ひ事もある。その中には大そう日本の道具……古器物や日用品、例へは傘や、提灯などもあつて隨分目先の變つた装飾が爲てある樣だが、さればとて彼方の装飾か日本化せられたかと云ふに、私などはどうも然樣は思はぬ。一口に之を許したなれば我國の器物を以て矢張り歐洲風の装飾を致したと云ふまでゝある。然し見立物と云ふ點に至ては餘程面白ひ事もあつて中々飛ひ離れた爲方が多ひ。其安配に至ては恐くは日本人よりも數等上にあるだらうと思ふ。要するに日本人は兎角装飾の上にまで眞面目過るのであつて、例へて見れば水次は何所までも水次に用ひ煙草箱はどうしても煙草より外のもの入れぬと云流儀である、然しそれが決して惡ひと申すのでは無ひ惡ひと云ふのでは無ひが余の装飾を爲樣とするには、

然様計りではならぬ。水夾にも一枝の梅や椿を投入に挿したり蒔繪か何かの煙草箱は之を名刺入などに使ふ様にする位の働き作略が無くては無らぬ。巴里の流行社會では近頃我國のふり袖の立派なのをピヤノの掛に用ふる事が大層行はるゝ云ふ事が某氏の來狀中に書てあるが、これは中々面白ひ見立であるかの様に思ふ、私は能樂の裝束……殊に女物の金襴や純子の様な立派な織物の加之も模様の優美なのをピヤノの懸けなどにしたれば振袖よりも最そつと優美であろふと思ふ。業平菱や藤花などの摺箔の水干などがピヤノてなくとも高卓や飾り棚の上にふわりと懸つてその下から蒔繪や堆朱の器が少し計り透けて見ゆるなどは隨分面白かろふと思はるゝ。それからまだ斯様な事も來信中にあつた。我國の佛前に供する五具足や三つ具足をカーヘル上に飾るが、その品は眞鍮製のものが流行すると云ふ成程これも一寸面白い考へてある、カーヘル上の飾りは通常左右が花で中央が時計であるが、それを東洋流の香華燭をそのまゝに飾るなどは最も妙である、これなぞは一物一品に就ての見立てなくて、或る裝飾を他の裝飾に應用したのである、斯様に湊合するものをその儘に他に移して用ふると云ふことは斯道の老手てなくては、一寸六ケ敷いが兎も角もこれも、奇の飾に於ては中々大切な材料の一に數へねばならぬ。見立とは所謂應用で或る器物を……器物使用の目的之外に働かするのであつて昔の人は儘之を行ふて居る。その内でも茶人は最もこの應用が巧みて、茶器の多くは殆んどこれである所謂數寄屋道具で數寄なもの計りを集めたてあるから多ひのも無理は無い。例へば炭斗の事を菜籠と云ふ、素より炭斗は炭斗菜籠は菜て別種のものであるが菜籠を炭斗に見立て用ひたから菜籠と云へば炭斗の事に爲て終ふたのである、それから支那の盆栽臺や香爐卓を見立て棚物に用ひ、南洋て土人が使用する酒器を水指に用ふるなんど中々趣向が面白い、それて器物が一たび茶家の手に入つて見立物に成る時は大抵は本來の使用の目的は廢れて却て見立物として用ひらるゝが多ひ。昔の茶人は手に觸れ眼に映ずるもの悉

く用途を考へだす。伯樂が驥北の過れば駿馬が無くたると云ふが。然し駄馬は必ず殘つて居るに相違ない、が茶人の眼に映じたものは駄馬でゝ之を程克く見立て駿馬の用をさする。英雄が士を用ふる樣な有樣である。瓢箪は通常酒を盛る器に爲つて居るが、その口を切つて花を挿して花瓶に代用する、まあこれなんどは何でも無ひ事ではあるが非常に風情がある。然しこれらは到底今世の茶人に望まれぬ事で假令これを爲したりとても古人の跡を逐ふて、まねを爲る計りで別に斬新な意匠などは無ひ。兎も角もこの見立應用と云ふことは裝飾上に有要な材料であると云ふことは忘れては成らぬであろふ。

二　機變の手段

これも裝飾に就ては、殊に奇格の裝飾には大切なる事柄であるが、然し一寸考ふると見立物と變らぬ樣ではあるが、聊か區別があつて見立は見立、機變の手段は奇變の手段と區別をせねばならぬ。時機、場所、氣候などは多くこの機變の手段を促すもので、例へば來客の内に外國の人があるとか、高貴の御方の爲に特に一種の裝飾を要するとか、又舟中や野外などに席を設くる等の時、或は非常に氣候が暑ひとか寒ひとか、然樣なくも俄に雪や雨が降りだしたと云ふ時には、その雨や雪で困つて難澁しては拙ない、その雨や雪を面白く働かせて臨機の手段を取ることが肝要で、これは實に裝飾上の手腕を現はす所であり。例之ば園遊會などの前日降雨か何かで道や庭などの泥濘るんだ時などの




の庭一杯に撒砂をして、白砂庭とする、同じものが木鋸屑を敷ては如何にも雜風景である。又夜會にもせよ午餐晩餐の會にもせよ多數の來賓を招きたる時、急に降雨かして車寄、玄關の邊が混雜する時などは、誰ても天幕を張

る位が普通であるが、これも同じ事なれば朱蓋などを用ゐたれば大層主人夫婦が装飾に意を用ゐたと云ふことが分つて客の方でも歓待された、と云ふことを感するであろふ。

膨脹せる床飾。少し題目はその當を得ぬか知らぬ、然し兎も角も床の間の區域を擴張さするてある。日本風の居室の装飾は、多くは之を床の間と稱ふる一間に三尺か廣くとも方一間、普通は……殊に東京風の建築では奥行一尺五寸に長さ一間足らずの所に殆んど装飾を集合して居る、花も置物も、掛物も甚しいと七種も五種も、この床の間へ飾り立てるから、殆んど一種の戸棚の様に爲つて仕舞ふ、戸棚も好いとした所で、その外はどうてあるかと云ふと大抵は皆無てあつて誠にどうも淋しい、如何・・不釣合でならぬ、一方に澤山の調度が輻湊して居ると思へは一方には何も無い、某伯爵の申された様に日本の装飾は平板的である、それには種々の原因もあろふが大體は装飾が床の間と云ふ一小部分に限界さるゝからの事であろふ。

それて今この床の飾を一部局に集つて居る調度を廣く一室の中へ散在させたらば、とうであろふか、即ち床の間を三尺や一間の狹い塲所に限界せずして一室の中を床の間と見て、花や置物やその外の装飾器物を、彼方にも分けて置たらば、一寸目先の變つた飾りが出來るてあろうと思はるゝ。どうも狹くるしい床の間に種々の品物を陳列するから趣味も風情も無い丁度下等な割烹店や待合なぞへ參つた樣てある。花は床の間に置かねばならぬと云ふ規則も無ければ、置物も床の間で無ければ無らぬと云ふ式も無いのてあるから、思ひ切つて插花も置物も床の間から持ち出して外の塲所で飾つて見よう。

この室の大さ八疊敷、床の間は例の東京風の一尺の奥行に長さが一間と云ふ風情の無い建て方、床に接きて一間の壁で三尺に一間の板敷に爲つて居る、間に面せる一方は壁で二の間の接く所は九尺四本立の襖である即ち圖中イ、イ、は沈南蘋の花鳥の双幅て表装白茶綸子牙軸床の間は、この掛物計りで外には何も飾らぬ、それ

から例の三尺に一間の板敷の所には朱檀の方形式の小形の高卓 青玉の香爐を飾る圖中の「ロ」である。又一方の床に面せる壁の前には紫檀製長方形の文机を置てその一方に古銅の大花瓶に牡丹、海棠木蓮を無作意に投げ入に挿むでその傍に帙入の詩集か文集を二種飾るこれも多いのは好く無い。これは至てざつとした飾りであるが普通なれば床の間の中へ押し込んで爲舞ふのを方々に分けて飾つて見たのである。

## 季節總菜の栞

(三十日間毎日獻立の覺書)

春江女子

### ▲筍料理

追々と筍の季節となりましたが今年は其の生立ちも一體に善い方なれば、代價も廉なるべく、隨て膳に上ることも多かるべし、先づ誰も謂ふべきは筍飯にて、此は甘くして木の芽など撒りて食ふに風味のよきものなり、甘煮も又よし鯛などの汁にて煮たるも惡しからず、京都は筍の本場とも云ふ可き處なれば、隨つて其の料理にも種々あるべし、普通行はるゝ仕方は、筍と切昆布との清汁なり、此も淡泊したる處に風味多し、されど最も食い着のよきは筍の味噌料理なり、ひこずり、仲々によし、自然燒、是も面白し、ひこずりとは茄子などを和へると同樣にて、先づ山椒、砂糖味噌を能く摺り混ぜ置き筍の皮を去り、釜にて一沸き湯煮て、能く水を切り、右の擂鉢に入れて不同のなきやうに攪き混ぜるなり、晩餐の好き菜なり、又自然燒とは新鮮なる筍を取り根を切り最後の二三節を殘して中を通し倒にして前の如く拵へたる味噌を詰め、大根にて蓋をなし藁火に埋めて燒くなり、暫くして之を取り出し皮を去り小口より適宜に刻む、風味甚だ佳し但し燒く時には決して皮を剝くべからず。

### ▲筍と鱒の吸物

鱒を三枚に卸し、水にて能く洗ひ兩身に淡く鹽をふりて暫く置き、後水氣を去り、之を一重結びに結び、別に筍の湯煮たるものを取り(可成穗の所が可し)軟かな

る者を薄く刻みて右の鱚と共に鰹煮汁に入れて一寸と煮て椀に入れ出すなり、吸口には時候柄山椒を可しとす、風味佳なる吸物なり。

▲比目魚と筍との煮しめ

比目魚を宜き程に切りて、味淋酒と、醤油と、又は、酒、醤油、砂糖、鹽加減よくして煮るべし、さて、筍は、ゆでゝ、輪切りにし、大さは、半月形に切り、比目魚を煮たる汁に、湯をさし薄めて、其れにて、能く煮込み、皿に盛る前に、一寸、又、魚を暖めて、かけ合はすべし。又生姜を纎打ちにして、添ふるもよし、

▲比目魚款冬との煮しめ

比目魚を、前の如くして煮、款冬を、ゆでゝ、皮を剝ぎ、大凡、長さ二寸ほどつゝに切りて盛るべし、

▲白魚の雛卵とぢ餡かけ

白魚を、なまのまゝ、鷄卵の白肉とゝもに、かき交ぜ、葛粉を繋ぎに入れて一塊づゝにまろくし、釜にて蒸しあげ、これを椀に盛り、其上より、餡をかくべし、○餡のこしらへ方は、鰹節の出し汁の中へ、醤油、少しからめにさして、煮置き、其汁にて吉野葛を入れて溶き、文火にて煮かへすべし、濃さは、とろりと成る程なるがよし盛りたる上は、おろし山葵を載せて出す。

▲南蠻煮

鯛比目魚等を常の如く料理し其身を宜き程に切り、焦げ付かぬやうに鐵網に上せて燒きこれを豚の脂にて揚るなり、ソースを用ゐれば最も好れど醤油酢等を懸けて食ふも可し、山椒、胡椒等を香料に用ゆべし。

▲白魚の蕎麥切仕立

蕎麥の粉に水を加へて能く揑ね麵棒にて薄く敷べ庖丁を以て長さ一寸、巾二分位に切り、一沸き茹るなり是れ蕎麥切なり、蕎麥切と白魚とを鰹煮汁にて味を着ける香料には山椒或は紫蘇を細く切りて出す。

▲白魚の三杯酢

白魚に沸騰したる湯を懸け別に若布を水に浸して和かになりたるものを刻みて右の白魚に和し、之に酢醤油、白砂糖にて鹽梅し汁を懸けるなり。

▲大根の切漬

三月大根を根葉の嫌なく縦長に細かに刻み、鹽にて能く揉み其出でたる汁と共に桶に入れて押を懸け置くなり、恐らくは朝用意して晝飯の膳に上り得べし、此を東京にて大坂漬といふ。

### ▲菜飯田樂

菜飯田樂は時候ものにて一寸風味佳なるものなり、或る地方にては親近打集ひて花見の小宴を張る時などには缺く可らざるものなり先づ菜飯の焚きやうは蓮花草を採り叮嚀に洗ひ一葉づゝ摘み涵したる米に混じ、水加減して焚くなり、又た一法は右の菜に沸湯せし湯を懸け能く水を切り、食鹽を見計らいて混じ焚き立の飯を飯櫃に取るときに混じて能く攪きまぜるなり、田樂を拵らえんとするには豆腐屋に絞りたるものを頼みて(地方に依ては固き豆腐あれど)巾八分長さ二寸計に切り竹の串を注意して差し火の上に置き少し焦げたる時木の芽(山椒)砂糖等を加へたる擂り味噌を不同のなきやうに塗り少し火を加へて味噌の剝げぬやうにして置くなり。

### ▲玉川煮鯉

鯉を鱗を去らずして、筒切にブツ〳〵に切り醬油味淋にて煮而して後玉子の黄身のみを猪口に入れ、鯉汁にて薄め能く攪きまぜ、右の鯉の身に恰も餡懸の如く懸けて出すなり。

### ▲烏賊の黒煮

烏賊を常の如く洗ひ甲を去り皮を剝ぎ腹に包める墨袋を破らぬやうにソットと取り置き、さて烏賊の身足を細かに作り湯にてざつと煮上げ、然して後取り置きたる墨袋を破り、酒醬油等を加へて鹽梅し、右造りたる烏賊を投じて煮るなり。

### ▲氷蒟蒻の煮方

氷蒟蒻を一夜米の磨ぎ汁に浸し置き拭巾に包みて能く水を去り、砂糖醬油に酢を少し加へて炭火に懸けて暫く煮るなり、氷蒟蒻を細かく刻み黒豆と一緒に煮置かば旅行にも長く保ちて御茶つけなどには好き菜なり。

### ▲蓮根の酢煮

蓮根の薄皮を去り、細かく刻み水に浸して、アクを去り、酢、食鹽、砂糖にて煮るなり此は煮過ぎぬ方可し、シャキ〳〵と齒に當るを好むなり。

▲海老の葛叩

鎌倉海老の甲を剝ぎ爼の上に乘せ葛粉を十分に振り懸け心して徐かに擂木の先にて叩き次第に薄くなり、丸くなるやうに數々葛粉を懸けて叩くなり、木芽、獨活或は松露等をあしらいにして好吸物なり。

▲白魚と椎茸との紅梅煮

新の椎茸(生なるは、最も可なり)と、白魚とを、酒三分、醬油七分の割合にて、からめに煮るなり、紅梅煮とは色の赤くつく故に、名づけたるなり。

▲鯛のすつぽん煮

鯛を、すつぽん煮にするは、大鯛のきりみをよしとすなり、さて、味淋酒と醬油とを薄めて其中へ、生姜の絞り汁をおとして、煮込むべし。

▲鯛の卵と筍との旨煮

鯛の粒子、袋のまゝに碎けぬやうに、紙にて卷き、其兩端を、固くくゝり、薄鹽の湯にてゆでし後、味淋酒と醬油とにて煮、これを宜きほどに、小口切りにして、皿へ盛るべし、しら子は、ゆでず、其まゝにて煮てよし又筍は、ゆでゝほど宜く切り、鯛の卵を煮たる汁を薄めて、其れにて煮込み、つけ合はすべし、山椒の若芽を、其上に添ふれば、猶よし

▲鯛の孕み蒸

小鯛の鱗を去り、頭のつけ根より、庖丁にて背を裂き、腮、腸等を去り、よく洗ひて、鹽をふり、暫時置きて、水にて洗ひ落し、さてゆでたる豆腐を掛け、布に包み、能くもみこなし、これに、木耳、又は、椎茸、の纎打ちにしたるを、交ぜ、醬油をかけて、掻きまはし、これを、魚の腹中へ、充分に詰め、背を合はせて、蒸籠にて、蒸しあぐるなりて又一種豆腐滓に、麻の實、銀杏、(煎りたるもの)等を交ぜ、白味噌にてあえ、これを、鯛の腹につめて蒸も可なり。

▲土筆の鷄卵とぢ

土筆の袴を取り、さつとゆで、酒と醬油とにて煮、汁は

ひたく＼にして、おろす前に、かき立て、置きたる鷄卵をかけて、一と煮えさするなり、

▲切干、大根と、油揚との煮しめ、

切干大根を、宜きほどに切り、湯煮をなし、和らかに、なりたる時、酒と醤油とをさし、砂糖、を少しく加へて煮、さて、油揚を入れて煮込むべし、

▲椎茸と長芋との煮しめ、

椎茸を水につけ、能くほとびたる時に出だし、大きなるは、二つに切り、酒と醤油と砂糖、又は、味淋と、酒にて、煮、さて後芋をゆでゝ、皮を去り、宜きほどに切りたるを入れて、崩れぬやうに、煮あくべし、

▲莢豌豆と粒椎茸と胡桃との旨煮

莢豌豆を青煮にし、粒椎茸は、前に述べたる如くして煮るなり、さて、胡桃は、サッとゆで、細き竹串の先にて澁皮を去りこれに、食鹽と、三盆白砂糖とを加へて煮、三種を、四につけ合はす時は、青、黒、白、色どり麗しくして、味はひも亦佳なり、

▲筍と、昆布との煮しめ

筍をゆで、宜きほどに切り、菓子昆布を水に、浸して宜き程に切りたるを入れ、鰹節の出し汁にて、能く＼／水煮して、昆布の極めて、和らかになりたるを煮、酒と、醤油とを加へて、また能く煮込むべし、

▲根芹の油煮

胡麻の油を煮たゝせ、これに、芹の根を入れて炒り、さて後に砂糖少しと、醤油とを加へて炒り、あぐべし、猪口などに用ふるに佳なり、

▲蕨と油揚との煮しめ

蕨は、桶、又は、大きなる鉢に入れ、生灰をふりかけ、これに熱湯をそゝぎかけ、其上へ、板を置き、蕨の浮きあがらぬやうにして、一時間ばかり立ちたる時、蕨を出だして、水にて、洗ふべし、さてこれを揃へて宜き程に切り、油揚とゝもに、かつを節の出し汁と酒と醤油とにて煮込むべし、

▲蕨の酢煮

蕨のゆでたるを、鰹節の出し汁と、醤油とにて煮、おろす前に、酢をさすべし、淡泊にしてよきものなり、

▲蕗の煮しめ

蕗をゆで、皮を去り揃へて、宜き程に切り鰹節と、酒と、醤油とにて煮込むべし、

▲蕗のから煮

蕗を生のまゝにて、皮を去り、前への如く切り、粉唐辛を加へ、醤油は、鍋の中の蕗ひたく／＼になる程入れ、て、弱火にて能く／＼煮込むべし、斯くする時は、何時迄も有つものなり、◎なほ、これを長く有たしめんとするには、皮剝ぎたる蕗を、一日ほど、日に乾して後に煮、出來あがりたるを、壺の類に詰めて、目貼りし置くべし、さすれば、取り出だして、つかふ時、かびを生ずれば、更に一寸醤油を加へて煮直し／＼して、久しくつかふ事を得るなり、昆布も、亦、かくの如くして、煮るなり、

▲蓮根の煎豆腐

豆腐二個程鍋にてざつと茹で之を味噌漉杯に揚げ置き別に小鍋に鰹若くは推茸にて煮汁を作り置、蓮根の細き所を撰み薄く刻みて醤油、砂糖にて薄く味を着け、右の水を切つたる豆腐を入れ、杓子にて突き崩し掻き混ぜ更に二個程の鷄卵を加へて熔り着けるなり。

▲豌豆のスープ

普通のスープはやゝもすれば女、兒供等には好まれぬものなれど豌豆のスープは誰が口にも合ふものなり。さて青豌豆二斤程水に浸し置き、皮を除き二ツ割にして別に鍋を火に懸け、大匙二杯の牛酪を入れ、右の豆を加へ五分時許り焦付かぬやうにして能く攪きまぜ、水一升八合程を注ぎ沸騰したる時水面に浮ぶ滓を去り、球葱三ツ胡蘿蔔蕪一本宛を刻みて其中に投じ、又醤油或は食鹽、砂糖にて味を付、更に久しく煮立て後、漉して用ふ、是れスープなり、濃ければ湯にて薄めてよし。

▲たゝみ鰯の遣ひやう

此たゝみ鰯は醤油をふりかけて燒き食するを常とすれども之れを遣ふに酒鹽或はおはせ酢杯をかけて食する杯妙なり、又ほぐして豆腐汁に交ぜたるもよろし、又二日程水に浸しおけば生のごとくなるこれを獨活杯と薄醤油したぢにて吸物に仕立上に淺草苔をもみておくなども妙なり。

▲烏賊山椒芽拌の拵やう

烏賊をよく洗ひ骨を去り皮をむき臓の墨の袋取出しさつと湯煮して（煮過ぐればこはくして老人杯に合されば半煮へ位がよろし）程よく切り味噌をよき程丸め火にて炙り擂鉢に入、山椒の芽を加へてよく摺り、右の烏賊を拌へるなり、但し味噌堅きときは鰹節の煮汁或は味淋又は酒を少し加ふるもよし。

▲土筆のむき味あへ

土筆の袴と穂とを除き一と沸、湯煮て苦味を去り、一寸位に切り、又むき蜊を湯煮て之と和し、山椒と味噌とを能く摺り混ぜ酢にて薄め右の土筆とむき蜊とを投じ能く攪き混る

▲腕盛の仕立やう

鯇、竹輪蒲鉾、摘菜、吸口は柚子とす、偖此調理方は鯇は三断の卸し、背より四半に切り、鹽を少許散布て湯煮するなり、又竹輪蒲鉾は大く切り摘菜は湯煮して水に冷し、醬油と鰹節の煮汁をよき鹽梅に調和したる汁にて含め、煮にして右の品々を椀に盛るなり但含め煮といふは文火にかけて温め置く事なり。

▲梅くわゐ

慈姑を梅の形に切り水より湯でたるを、あくひきと鹽にて煮る、是れ梅花なり紅梅は湯でたるを食紅をときたる鍋にて色をつけ、よく洗ひて前の白梅のごときあくひき鹽にてかげんしたるものに二三十分間つけおくなり。

▲竹の子土佐煮

くわゐにて竹の子の形を作るべし、その仕方はまづ慈姑の芽の所を少し殘して剝き、恰も竹の子の先の如くなし、まわりよりかつらむきの如く薄く段々とむき、その切れざるやう注意して心までつゞけてむき、これをまた元の如く巻付ながら竹の子の形となし、終りの所をば小楊子にて止めおき蒸籠にてむす時は巻きたる部分離るゝとなし、この時止めたる楊子をぬきとり、梅花くわゐの如くあくひきに鹽の加味したるものゝ中へ五六時間つけおきて盛るなり。

▲水仙巻

上葛粉二三合を水にて小粒のなきやうに能く溶きトロ〳〵になし玉子燒やうの者に少許入れ沸騰せる釜の湯に初め玉子燒の底のみを浸し始終ゆり動かして葛の一面に平等なきやうにし稍や凝まりし時全く其の全部を湯の中に沒し、直に引き揚げ、水を盛りたる桶に差し入れ、水中にて葛を器より離し取り出せば薄き四角なるもの出來るなり、是を一端よりクル〳〵と巻き庖丁にて好き程に切り砂糖を懸けて出すなり。

▲蕎麥しんじよ

蕎麥しんじよは、まづ濃煮汁をつくり置く、蕎麥粉七合の時は煮汁一升位を鹽の輕く一つかみ　醤油二勺、味淋五勺を入れ煮立て、この汁の熱いのにて、まへの蕎麥粉を捏る、捏ね加減は丁度蕎麥がきのかたさ位にする、」別に鍋へ二番煮汁をつくり、鹽五匁、醤油一勺ばかり加へ煮立て、その傍には丼に水をはり置き、まへの捏ねた蕎麥は椀の蓋を水にぬらして、これへ杓子で半月形にとつてぬれ手にて、上を滑かにならし、丼の水へ蓋のまゝ入れゝば、自然に水中へ落ちる。これをまへの二番煮汁の煮立つたなかへ入れて浮きあがるまで煮る。もし客へ侑めるとき、時がたつてさめたならば、その儘あたゝめ、椀に海苔を布いた上へ半月をのせて、別につくつた汁をかけて侑める。吸口は晒葱、山葵などを用ふ

▲煎り菜

小松菜でも、鶯菜でも、葉ばかりつまみ洗つて、湯の煮立つたところへ入れ湯煮をする、尤もこれは澤山一度にゆでゝは色がわるい、幾度にもゆでるのがよろしい。湯煮をしたときは水へとり、今一度水をとりかへ、絞つて細かにきる、鍋へ胡麻の油を布き、その中で煎りつける、それへ煮汁五勺、味淋五勺、醤油五勺、砂糖十匁を加へ、汁のひた〳〵になるまで煮る、これには丼ものにも鳥ソボロをかけて用ゐてもよく、又煮肴、燒肴のつけ合せにしてもよろし。

▲胡麻豆腐

白胡麻を一夜水へつけ置き、米の樣にすり鉢にてとぐ、すると上皮はとれる、この上皮は水で二三度流して、盆へなり笊へなり入れて、半日ほど干す。この胡麻を煎り

擂鉢にて油の出るまで擂る。これへ水を加へる、(分量は胡麻五合につき水一升)、それを椀で量り、假に五椀あるときはその椀にとかぬ葛粉一杯砂糖三十目、鹽五匁、生酒五勺を加へ、ときて水飾で漉す、それを鍋へ入れ火にかけ凡そ三十分間ほど煉り、杓子ですくひ垂してつながる樣になつたら、他の器へ入れさまし、庖丁にて適宜にきる、坪の材料(薄葛汁)又は味噌汁の實にしてもよろし。

## 油煎豆腐の拵へ方

石井泰次郎

煎豆腐の拵へ方にも、いろ〳〵有るが、單にいり豆腐といへば、只でまの油にて、いりたる豆腐を、醬油などにて味をつくるをいふ、こゝに其拵へ方を示さん

(一) 酒と油とに煎りて、醬油にて味つくるもの

(二) 酒も油もつかはず、胡桃の殼をむぎて、實のみにしたる、所謂むきくるみを以ていりつけたもの、是は異製です

(三) 油にていりて、おちをつくる時、汁氣多く有るやうに拵ふるもの

(四) 油にていり、おちを附たる上に、やまの薯の漉粉をおくもの

(五) 豆腐に挽茶いれて、油にているもの

(六) 油にて煎り、味を附け、野菜をまぜたるもの

(七) 油をもちひずして、土器にていりていだすもの

(八) 同じく、にぎりかためたもの

●第一は○酒○胡麻油○醬油○砂糖(入用品)生豆腐をあさ布の袋に入て、重きおしを掛て汁をよく絞つて、袋より取だして、煎鳥鍋とて鐵の淺き鍋に取入れて、酒を豆腐十五に五勺のわりにいれ、又胡麻の油をも五勺入れしまて、少しこげめの付くほど、煎りつめて別の鍋へあけかへて、豆油一合二勺、砂糖四十五匁ほど入れて味をつける、

油の鍋をやきたる所へ入れて、次に豆腐をいれて、煎り初めてから、酒を入れてよし

◉第二は○むき胡桃實○醬油○砂糖(入用品)生豆腐を能くしぼつて、鍋にいるゝ時、剝くるみと、醬油、砂糖をともに入れまして、能く煎りつくるので、これは油ぎらひな人のためにする拵へ方なり

◉第三は○胡麻油○醬油○煮だし(入用品)まづ豆腐をしばりて、胡麻の油にて、こげめ附けぬやうに煑りて、醬油に、かつをにだし少し入れて味をつけて、煑つめないで、汁の有るほどにして、器のなかへ盛る、砂糖も入れて味をつけるのです

◉第四は○油○醬油○砂糖○薯蕷(入用品)豆腐をしぼりて、油にて煑り味をつける事は、他と同樣て、さて其出來たのを皿にもつて、其上へ、やまの芋を湯煑して皮を串のかでてむきまして、黑い所の無いやうにむいて二三分づゝに薄刄庖丁刀で輪切に切て、馬尾篩とて毛のふるひにて、篩のうらに薯蕷をのせて、木杓子をたて向から手前の方へこいて、馬尾篩の目を目なりにつかはないて、篩目を筋違につゝかつて、木杓子で、右の手で柄、左の手て杓子の上をおして。一度は向から手前へおしながら引くやうに、今一度は向から手前へ杓子ずつと立てこくやうにして、漉します、是を裏ごしと唱へます、さて又此こしましたのを、篩の内よりとりまして、とうふの上にばらばらとのせます

◉第五は○豆腐○挽茶○油○其他右同豆腐しぼつて、茶を一ぷく分ほど入れまして、擂盆で能くすりまぜ、黑ごまの油にて煎りつめて、それから油氣を去るために、熱湯を二三べんかけて洗ひながしまして、薄醬油にて煑るのです



# 史傳

## ローザ、ボンヒュール女史

文學士　中内蝶二

### 一

巍峨たる高樓軒をならべて、大路小路の條目も正しく、馬車馳せ、電車飛び、人の往來は織るが如くにて、巷の繁昌いはむかたなき佛蘭西の首府巴里、綾羅錦繡の裝ひ目もあやに、ひたすら流行の美を追うて、千金萬金の貴きをも厭はぬ衣服の好みに、豪華のほどもさてこそと知らるゝ、この世界第一の花の都も、裏面を探れば、さすがまた、京に田舍のたとへに洩れず、塲末に列なる貧乏街、見るもいぶせき棟割長屋の中にも、一しほ荒れ果てゝ、檐かたむき、柱ゆがみ、誰れ一人棲みけるものあらじと見ゆる破屋に、さりとは哀れや、四人の小兒を足手まとひの、わびしく暮らす夫婦のものありける。

主人の名は、レーモンド、ボンヒュールとて、丹青の道を究むること深く、畫筆とりては、當時に肩を比ぶるものも少き伎倆なれど、千里の駿馬も伯樂に遭はざれば、空しく槽櫪の間に朽つるならひ、草深く隱れ棲みて、世に知られむ大望もなく、悠々自適、三人四人の内弟子に、繪を畫く術を敎へては、辛くも其日〳〵の竈の煙をたてゝぞ行きける。

かゝるわびしき活計なれば、不圖せし病ひに臥しゝ時や、さては思はぬ出費のありたる折など、糧を求むべき代さへ盡きて、一家六人、饑に泣くとも珍らしからず。妻のソフイーは之れを嘆きて、かねてたしなみある風琴彈く業を、彼方こなたの知己の家に、敎へてあるく其隙にも、他より頼まれし衣の裁縫洗濯に夜を更かして、屢時だも身を樂々と息むることなければ、積もり〳〵し憂き苦勞に、軀も精神も弱り果てけむ、風邪に冒されしたゝ[illegible]の病苦も、日を經るまゝに重らなりて、枕もあがらず、頃は千八百三十三年の秋の夕、庭前の梧桐に

無情の風たちて、遂に歸らぬ人となりぬ。

後に遺りし四人の幼兒こそあはれなれ、永久に眼を瞑ぢし母の枕邊に、右より左より、母よ母よと取りすがりて、夜もすがら泣き明かし、果は聲さへ枯れ〳〵に、涙に咽ぶいぢらしさを、側に見る目の父親が、心の中は如何なりけむ。

この四人の幼兒の中に異彩を放ちて、婦女の身ながらに、將來大美術家の名を世に唄はれし大天才こそ、わがこれより語らむとするローザ、ボンヒユール女史その人なりけれ。

## 二

この時女史は芳紀はじめて十歳なりき。父は男の手一つに、幼きもの等を如何ともしがたければ、同じ都に住まひける、姻戚の媼がもとに、四人の小兒が養育のことを頼みやりぬ。

この媼、いと情厚き人なりしかば、幼くて母に別れし小兒等が身の上を憐れむこと深く、心をつくして慈しみ育てつゝ、やゝ生ひ育ちぬるまゝに、程遠からぬ街の學校へぞ通はせける。

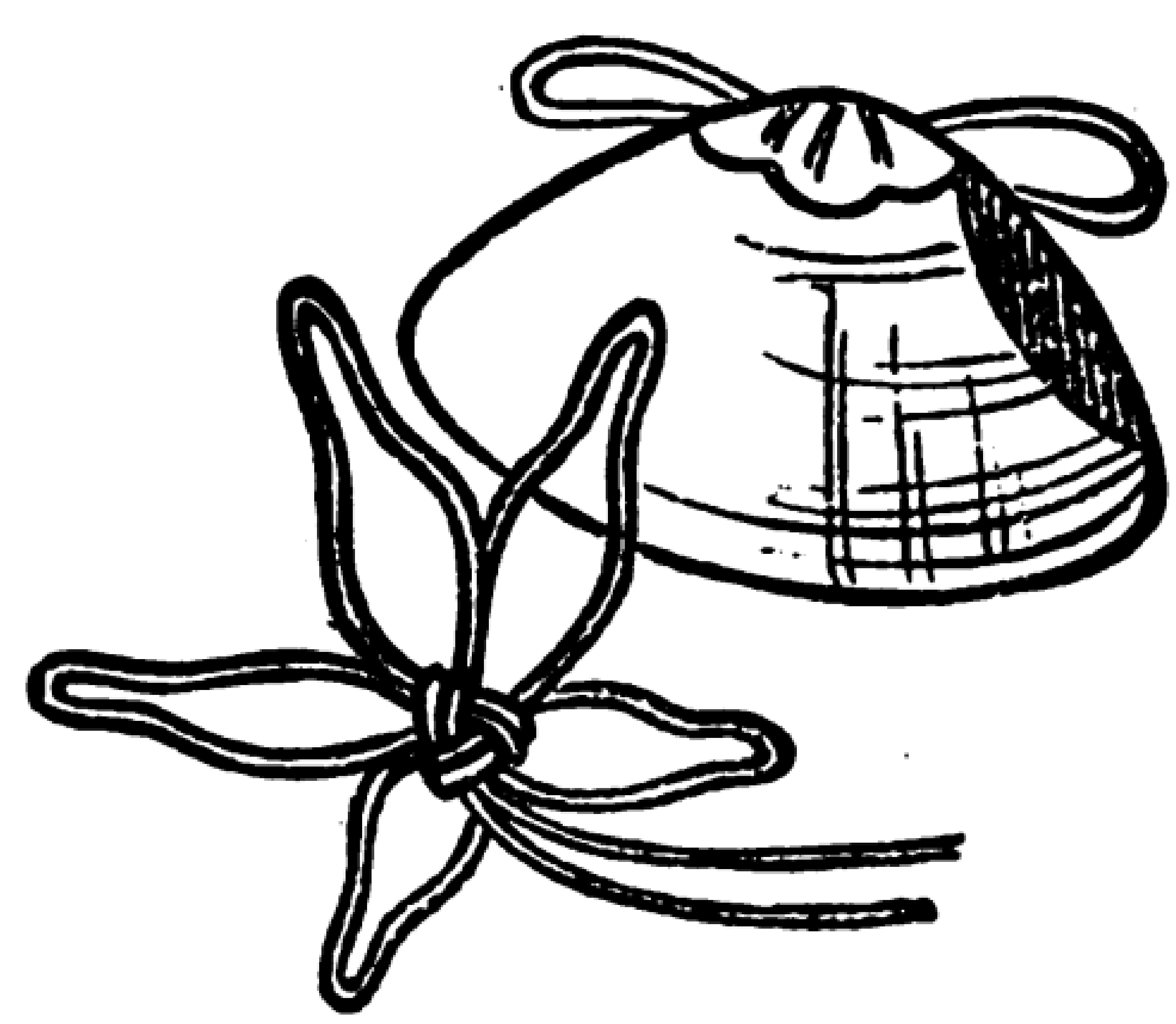
空晴わたりて風暖き春の日のことなりき、正午にもなりて三人の同胞は、打ち連れて學校より歸り來れるに、一人女史の姿見えず。媼は怪しみて小兒等に向ひ、ローザは如何にかせし、また喧嘩などして殘して來しにはあらずやと問へば、さることなし、けふは學校にてもローザの姿は見えざりしものをと答えぬ。媼はいよ〳〵打ち案じて、幼きものゝ只ひとり何處へ行きけむ、道に迷うて巷をさまよひあるけるにはあらずや。若し惡漢どもの餌にかゝりて、かどわかされなば何とせむ。可愛きものよ、はやく歸りて來よかしと、近きあたりの知己の方を探ね廻りつゝ、安き心もあらざりけり。

夕陽西に舂づきて、鳥も塒をもとむる頃、女史は飄然と歸り來りぬ。媼は胸撫でおろして神に感謝の祈禱をさゝげ、欣喜のあまりに抱き上げて頰ずりしつゝ、三人のもの等は晝過ぐる頃歸り來しを、御身は今まで何處のほとりをさまよひしぞやと尋ぬれば、女史はさも樂し

げなるさまにて、今日はとりわけ日影麗かに、こち吹く風も心地よかりしかば、學校は半ばにして出て、ボアツブロンの公園に草花摘みて嬉しく暮らしぬ。これ見たまへと誇りがに持ち出づるを見れば、菫、蒲英、雛菊なんど、今をさかりの花いろ〳〵、小さき腕にあまるばかり、美しう束ねてけり。嫗は呆れて、しばし言葉もなかりき。

## 三

女史が日常の性行は、幼き時より斯く普通の人と趣を異にして、規則正しき學問のために頭腦をなやますことを好まず、空晴れ風暖き朝な〳〵、常に野山を駈けめぐりては暮るゝまで、天然の風光をめづるを此上なき樂しみとしたりき。嫗嫗はこれを苦にやみて、如何にもして其癖を矯めなほさむと努めけれども、少しも效なく、女史が自然の美に親しむ情は益募りて、雨ふる日の外は、家の裡に在ること殆むど稀なりき。



花散り、花開きて、二年あまりは夢の如くに過ぎ去りぬ。父レーモンドは、良緣ありて後妻を迎へしかば、女史は三人の同胞と共に喚びかへされて、再び生れし家に起臥する身とはなりけり。父は豫ねて嫗が話に、女史の學を好まぬよしを聞き知りしかば、せめては後日の生計の爲めにもとて、さる裁縫敎師の家に弟子入りさせけるに、こもまた女史が天性にかなふべき業にあらねば、ひたすら自然の風光にあくがれて、魂常に戶外に飛び、針もつ手元も心もとなく、果は顏の色蒼白う、頰の肉落ちて、瘦れしさまの憐れなるに、父も止むなく家に引き取り、またもや學校に通はすこととなりぬ。

## 四

女史が通へる學校に、きはめて意地わるき一人の敎

師ありけり。塵ばかりの過失をさへ、こと〳〵しく叱り懲らして、生徒を苦しむること一方ならざりしかば、生徒等も蛇蝎のやうに懼れ嫌ひて、其の人の前に在る時は、目をそばめ首を縮めて、言葉さへ聲高うは發しえぬ程なりき。女史は物に感ずる情強き身の、別ても此教師を憎むと甚だしく、或日一枚の戯畫をものして、教場の壁の上に貼りつけつゝ、そ知らぬ振にて居たりしを、教師は入り來りて先づ生徒等を睨みまはしつ、さて黒板に向はむとして、何氣なく壁の上に暴されたる紙片を見れば、正しく己を諷せる戯畫なれば、顏の色忽ち火のやうに紅に、眼も張り裂けなむばかり憤りしが、見れば見るほど其畫の筆づかひ見事に、意匠の巧妙なるは少女の業とも思はれぬほどなれば、且つ怒り且つ感じ、日ごろの口喧しきに似もやらで、何とか思ひけむ、其罪人をたゞさむともせずして、そと畫を剝ぎ取りて持ち歸りつゝ、己が書齋の壁の上に更に貼りかへしとか聞こえしが、其次の日よりは生れ變りし人のやうに、生徒をもてあつかふこと、いと懇切になりしぞ怪しき。

これより女史が名聲は全校に響きわたりて、稱み歎はざるものはあらざりしといふ。

まことや、女史が天稟の才は、ゆくりなくも、こゝに初めて其鋒鋩をあらはしけるなり。日頃規則正しき學問を嫌ひ、裁縫の業をさへ身に染めて習ふことを好まざりし女史が天性は、かゝる美術の上に深き趣味をたもてるを知り得たりぬ。うべ野山を馳けめぐりては、草花摘みつゝ自然の美を樂しみしことや。

## 五

遑莫、女史がこの學校の生活も、また長きものにはあらざりき。最初のほどこそ、數多の生徒等にもてはやさるゝが嬉しさに、心にもあらで通ひけめ、もとより嚴格なる教師の趣味なき教訓には、耳を傾くることを好まねば、やがては不快の念をおこして堪へがたく、病氣のために遂に學校を退きけり。

父はあまた度の失敗に凝りて、漸く女史を嚴しき監督の下に置くことの非なるを知り、今は全く干渉の念

を断ちて、女史が心のまゝにまかせつゝ、しばらく其結果をぞうかゞひける。
　げにや子を視ることは親に如かず、幾度か嫩芽を伸ばさむとしては、厳しき霜雪におさえられて頭をもたぐるによしなかりし女史が天才も、こゝに嬉しくも自由の身となりて、暖かなる春の風に逢ひたる心地、眞實の伎倆をあらはすべき端緒は、いよ〳〵是より開かるゝに至りぬ。
　狭くるしき籠の裡に押しこめらるればこそ、鳥も高き青雲の空をこそ慕へ、長空萬里何處に翔るも自由なる身は、却つて低き梢を慕ひて、地の上に下りて遊ぶぞかし。女史が身の上もさながら此の如く、胸に燃えたつ天才の炎を、心にもあらぬ方に抑えつけむとしたればこそ、いとゞ戸外の遊びにこそはあくがれたれ。今や父の許諾をも得し自由の身となりては、さすがに從來の如く出てあるかむとはせで、大方は父が書室にのみ閉ぢ籠もりて、ひたぶるに丹靑の道に分け入り、書筆取りつゝ終日遊び暮らしては、樂しき光陰をぞ送りける。

（未完）




# 故中島湘煙女史の生涯（下）

報知新聞婦人記者　羽仁もと子

令孃時代に入る前に前號幼時のくだりに洩れて居た一つ二つを補つて置きませう。

◎女史のまだ三つ四つ頃その家に親しく出入する大津の商人がありました、誰にても口から出任せのお世辭を振蒔く餘程輕薄な人物でした、來る度に幼き女史を抱き上げては（女史は例の潔癖より矢鱈の人に抱かれる事を非常に嫌がつて居りましたのに）『孃ちやん、今度こそは大津

に連れて行きますよ』といつも〳〵申しました 女史は子供ながらに其人の輕薄を憤り、或時またも同じ事を云ひますと、常に似合はずピッタリ抱かれて何うしても離れませぬ、商人は歸るにも歸られず、かつは自分の出鱈目が子供の前にも耻かしくなつたと見えて、ヒタ謝りに過つてモー〳〵是から心にもない世辭は云ひませぬと大層恐れ入つた事があります、女史はこの樣な氣質でありましたゆゑ、決して愛嬌のある幼兒ではありませんでした。●

◎女史の家にはまた時々京都の武家の風流家が集まる事がありました、一日例の通りの顏振でお茶の品評を催しました、多分女史の六歳頃、華奢な〳〵お子でした、前にも云つた母君の御注意でいつも愛らしく裝つては居りますし、その外形の綺羅にも堪えぬ風情に引きかへ、子供に似合はぬ無口の上に時々思ひ切つた事を云はれる、此時も獨り唐紙を開けて集ひの中の父君の側に坐り『私にもお茶の御風味を』と何氣なく云ひました、一座が駭いて『是は面白い、孃にわかるかねえ・・・・・』と怪しみながら一番惡い茶を出だされました、女史の父君も幼き女史の子供に似合はずお茶を好かるゝ事は能く知つて居りましたけれど、まさかに其の善惡が解るのだとは思はれませんでした、けれども女史は此時五種のお茶を誤りなく味つて流石の雅客を驚かしたのです、女史は此樣な事からして幼時より學者や名僧、何ぞ一僻ある人に愛されまして、ソシテ子供の時から書畵に巧みであつた事は何方も御承知の次第です。

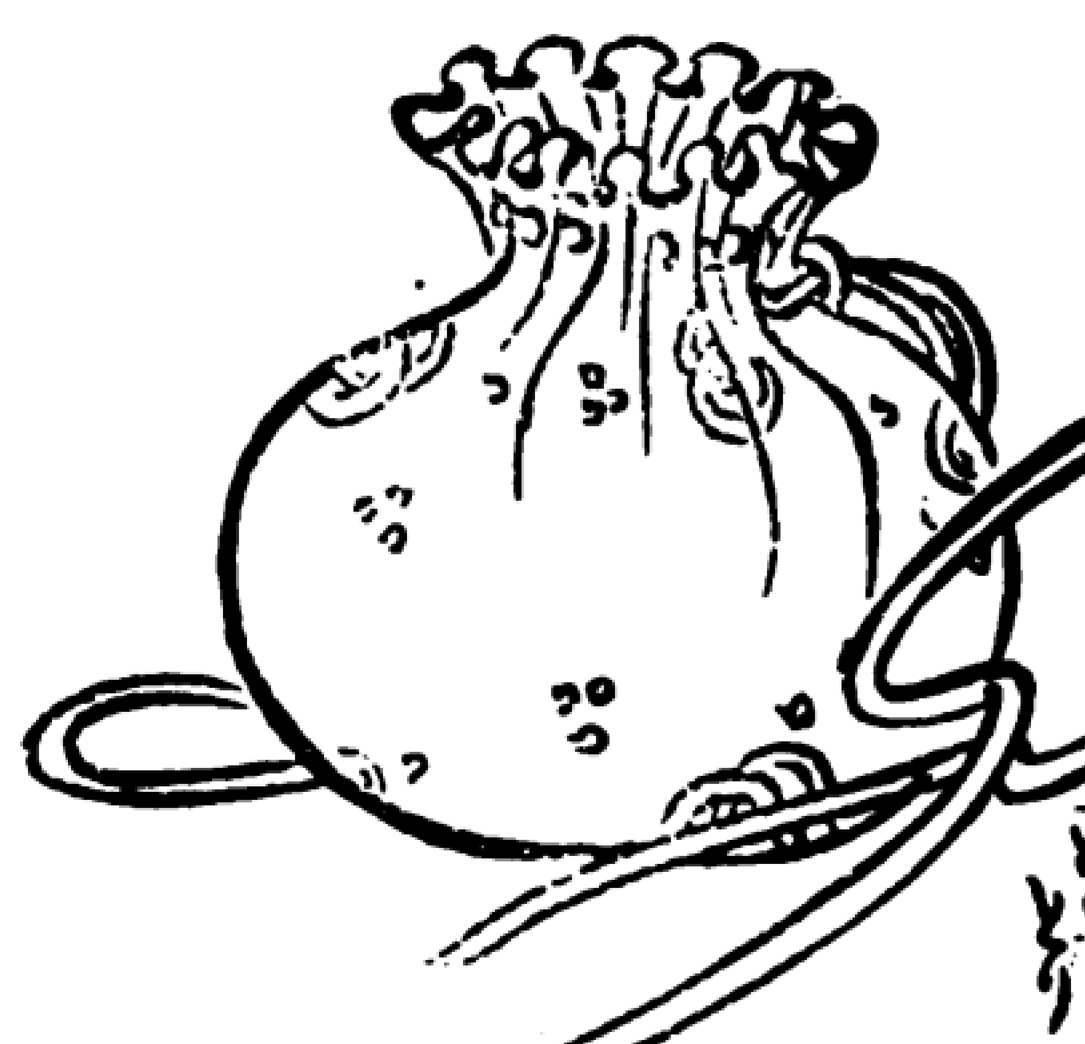
◎潔僻、世辭嫌ひ お茶好き、痩ぎす女史は身体にも行爲にもその神經質である事を明かに現はして居ります、現に餘り騷々しき遊びの中では氣絶たりする事が度々あつた位です、天才の人大抵は神經質で然もその神經の爲に生涯悶え苦しむ人が多いのです、幼時の性質より察するならば、湘煙女史も慥にその中の一人でありましたろう、けれども女史の此短所は晩年に於て女史の最大なる長所と變化したのです、天才はその名の如く天品でもありませう、去りながら性情陶冶は何人にも與へられたる賜です、私供は湘煙女史の生涯に

於て、此變化に注目する事が最も多く興味ある事柄と存じます。

## ●令孃時代

○その令孃時代は幼き時のそのまゝに成長し來つたのです、十二三才にして詩を賦し歌を詠じ、十四の時に、今も中島家に殘つて居る六枚折の屏風の爲に揮毫した文字などは當時の書家を驚嘆させる程でした、しかもその戀愛――むしろ他人に愛せられたる歴史を云へば、眞に意外の事柄に富んで居ります、夫は兎もあれ女史はその中の一人にも未だ曾て動かされざりし自重の態度は、世の常の乙女とは非常に違つて居りました。

○斯くして女史は宮中に奉仕する身となりましたが、幾ばくもなく女權擴張の演説者として岸田俊子の姓名が世に知らるゝ事になりました、俊子の名は此時元より敬愛さるゝと云ふよりは寧ろ世人の好奇心に持て囃された爲であります、女史自らも中島夫人となつてより此事を云はるゝ度に、冷汗が出る樣だと語られたといふ事です、去りながら女史の此行爲には種々の動機があつたので、女史の周圍の有樣が此頃女史の腦髓にいりかけて居る泰西思想と餘りの相違でありました故、熱情ある女史として殆ど默しきれぬのでありました、勿論自信ある年若き令孃、その間に多少の名譽心は免かれ難き事柄であつたかも知れませぬが……要するに女史此事の目的は眞に尊敬すべきものでした、唯その手段の餘りに突飛であつたと申す丈です。



○湘煙女史の名を聞き傳ふる人々は、或は女史を以て所謂お轉婆婦人と思つたかも知れませぬ、去れど親しく其人に接したる名流は何れも女史の人物とその才氣とに傾倒して、板垣伯の如きその「自由の燈」を發刊す

るに當つて記者の一人として岸田俊子を招聘すると先づその紙上に斷つて、否いや應なしに女史に上京を勸めたのです、流石の女史もその當時は驚きました、然も參らぬ譯に行きませぬので、兎にも角にもといふ積で來られて見ると、單に編輯局て自身の意見を書く丈と思ひの外、伯のおもわくは女史を以て當時の政客の間に來往せしむる事でありましたゆゑ、女史は再び驚いてとう／＼無斷て京都に逃げて歸つたのです、新聞は讀者の手前、岸田俊子と署名して慥今の小室氏かの論文を出されたと云ふ事て、湘煙女史は此論文にひどく不滿足であつたのですが、前に申した弱味からツイ何も云ひ得なかつたと云ふ事です、「日本て婦人新聞記者の名前は恐らく私が嚆矢てあらう、あなたは實際成巧なさい」といつか私に語られた事てした。

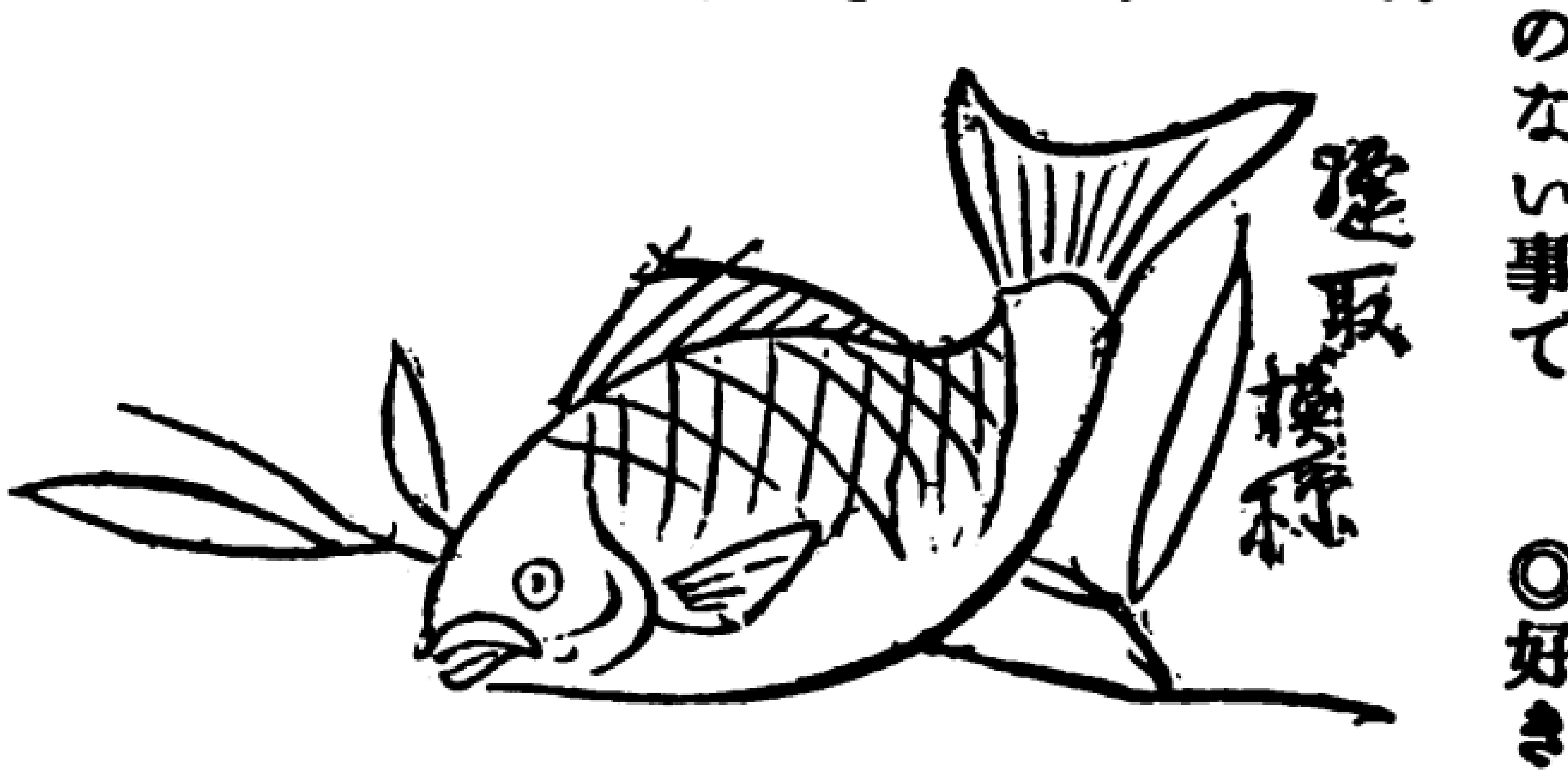
○中島信行氏と結婚前後の事は、先に報知新聞夫人の素顏にも詳しく掲げてありましたゆゑ、此所には申しませぬ、唯女史も中島氏も先に他人のその結婚を勸めた時は雙方より進まぬ口氣を示して置いて、後に相知り相親しみ遂に自ら生涯を約する迄になつたのは、勿論互の人物を敬重したる結果てはありますが、中にも女史と中島氏の互に相擇み相愛したる性情は恐らく中島氏にありては女史の熱血なる所、女史に於ては長城氏の寛仁なる所であつたかと思はれます。

## ◉夫人時代

○鹿鳴館時代と稱して今も折々思ひ出さるゝ交際會の盛であつたとき、某貴顯、貴夫人强姦沙汰が一時世間を騷がしました當時、有名の女學雜誌が日吉町に在ましたさうで、或早曉湘煙女史の中島夫人が、突然此社に巖本先生を訪はれました、何事かとお逢ひになると女史は「近頃の風說が事實てありますなら、是非々々貴顯に制裁を加へねばなりません、私は例の伯爵夫人にお目に懸つて事の眞相を尋ねて來ます、あなたはあなたの雜誌を以て必ず輿論を呼び起して下さい」と熱情を現はして切に先生を勵ましました、その早曉に來られた譯は、貴顯は良人中島氏とは緣故ある方であります

ゆゑ、打あけては引留めらるゝ計ちやと、偖こそ貝人の目覺めぬ中にぬけて來たのだと申されました、先生は斯くまで義俠の方であつたかとホト〳〵感に堪えなんだと或時お話になりました、本人には關係のない事ですが女史は其時伯爵夫人を訪ふて面會を得ず、家令某氏に面してツマリ要領を得なかつたので、去れど女學雜誌は他の方面より「日本上流の空氣は姦淫を以て充さるゝ」と云ふ痛切なる一文を掲げて發行停止になりました事は今なほ記憶せらるゝ向もありませう。

◎その後長城居士の溫和的態度、女史自らの病弱その他樣々の事柄は、社會の耳目の外に女史を導き去りました、女史は即ち胸中の誠をあげて讀書にそゝぎ、宗教を究め、良人に對しては遺憾なき慰藉者また助手でした、然も天成の器用に加へて母君の躾より、女藝何一つ落ちなかりしが爲にしんに立派なる家政家でした、使けるゝ



男女も夫人の上を母とも師とも愛慕して居たのです女史の大事より小事にわたり妻たる本分を盡くされたと、是また學ぶべき所です。

◎好きの道とは云ひながら殊に心を込められし、宗教讀書の二つの者は、女史をして初めに基督信者たらしめ、後に禪味の蘊奥にいり、然も風流の極致を味ひ、殆と圓滿無碍の境にまで到達せしめたのです。

## ●その晩年

◎長城居士の歿後、女史もまた前よりの肺患重り、全く病牀の人でした、ソシテ大成したる湘煙女史は此附に於て最後の光彩を放つたのです、幼きより早熟を以て稱せられたる丈ありて、四十路に及はぬ齡に於て、全く大悟徹底したる一個の智識てありました。

◎この病牀の湘煙女史を讀者の前に寫す事が出來ましたなら私自身もドンナにか滿足てす、去りながら拙な

き筵の到底及ぶ所ではありませぬ、けれども折々生前に女史を訪ふてその都度報知の紙上に記して置きました事柄が、わづかにこの間の消息を傳へて居ると思ひますゆゑ、重ねては申しませぬ、唯最後に女史を見舞ひました折からの今もなほ耳元に殘つて居ります言と云ふのは

「この頃の長夜に獨り目醒めて、思ふさま世界の閑寂を味ふと得も云はれぬ趣がある、世を辭するのも僅かであると思ふので、樣々の事柄に一段と名殘の趣味を感ずるのであらう……」

常さへ靜かな、女史が大磯の閑居、秋の長夜の有樣がそのまゝ私の目に映ずる樣に思はれました。

「世の中には隨分病人もあるのぢやが、私はその人たちに、何でもない事ではあるが、常から云ひたい事がある、兎角病人は他人の看護を不足に思つてその爲め氣を揉むものぢや、健康な人たちに病人の心持の十分に解らぬのは當然て、一躰ならば家人と共に樂しく助け合ふべき筈のものが病氣にかゝつて、自分の不愉快は仕方もないが側の人に非常な難義をかけて居る、病人は常に感謝の思ひを心に湛えて置きさへすれば殆と病苦をも忘れるものぢや……

「不治の病氣と云ふ事ならさうと思つて居るがよい、永びくものなら慥にさうと定めて置く、此が何より病人の仕合ぢや、少しても思ひ煩ふ丈病苦は重くなるものぢや」

女史自らが此事の模範でありました、數年病牀にありながら病苦の外に超然として、風月に吟腹を養つて居られたのです、そのため七十路の老母堂も早晩は先立ち逝くべきいとしの人の枕邊に、憂悶を覺ゆるの暇なく、訪ひ來る程の人々は皆その慈愛に包まれて、慰めらるべき病める人、却て幾多の人々に淸き慰を與へたのであります。

○病勢より云へは長城居士より先立つべき筈の女史、醫師は殆と生理的よりその生存の理由を疑問として居つほどです、世の病人は煩悶の爲に生命を短くするが常であるのに、露も生命を惜むことはなけれど、大悟の

覺念、些の障りに消えも果つべき燈火の生命を自然寂滅の際にまで至らしめたのです、その臨終の有樣は當時報知新聞に記しました所てす、嗚呼湘煙女史、嗚呼湘煙女史、しんに仰慕の念に堪えませぬ、

●病床に於ける湘煙女史の寫眞

これは女史が最後の日より一月ほと前の撮影、瘦せ細りたる手に大筆を握りて大字を揮灑し居られし所へ大磯の寫眞師ふと訪ね參り此の躰を見て驚き後日の爲にと女史の承諾を得て寫し取りたるものなり、この寫眞は大躰に於て女史が若き時よりの寫眞中最もよく女史を現はし居るものなりと女史自からも申されしが、女史の母刀自はとは餘りの姿なりと嫌はれし由、尤も女史にしては慈愛の面影を欠きたる丈が遺憾なるべし、さはれ瘦腕に大字を書せし爲其の疲勞の躰はよく現はれたらんをもて製版して揭げぬ。



# 本朝名媛佳話

熊田千屆

## (六) 衣縫守墓　妙冲負柩

衣縫金繼と云ふもの河内の志紀郡に住みけり、其の女幼き時より孝心極めて深く、忠實に兩親へ事へけるが、十二歲の時不幸にして父病みて失せければ、其悲み譬へんに物なく、食も喉に下らず、夜も瞼を交へず、唯ひた泣きに打嘆き、服終へて後は墓の側に至り、父在せかりし日の事ども思ひ出でゝ泣き叫びければ、之れを聞くもの誰れとて袂を絞らぬはなかりき、斯くての後ちは只管亡き父の冥福を祈りけるが、其母八十の齡を重ねて身まかりしに、此時も亦た同じ道にと嘆き悲

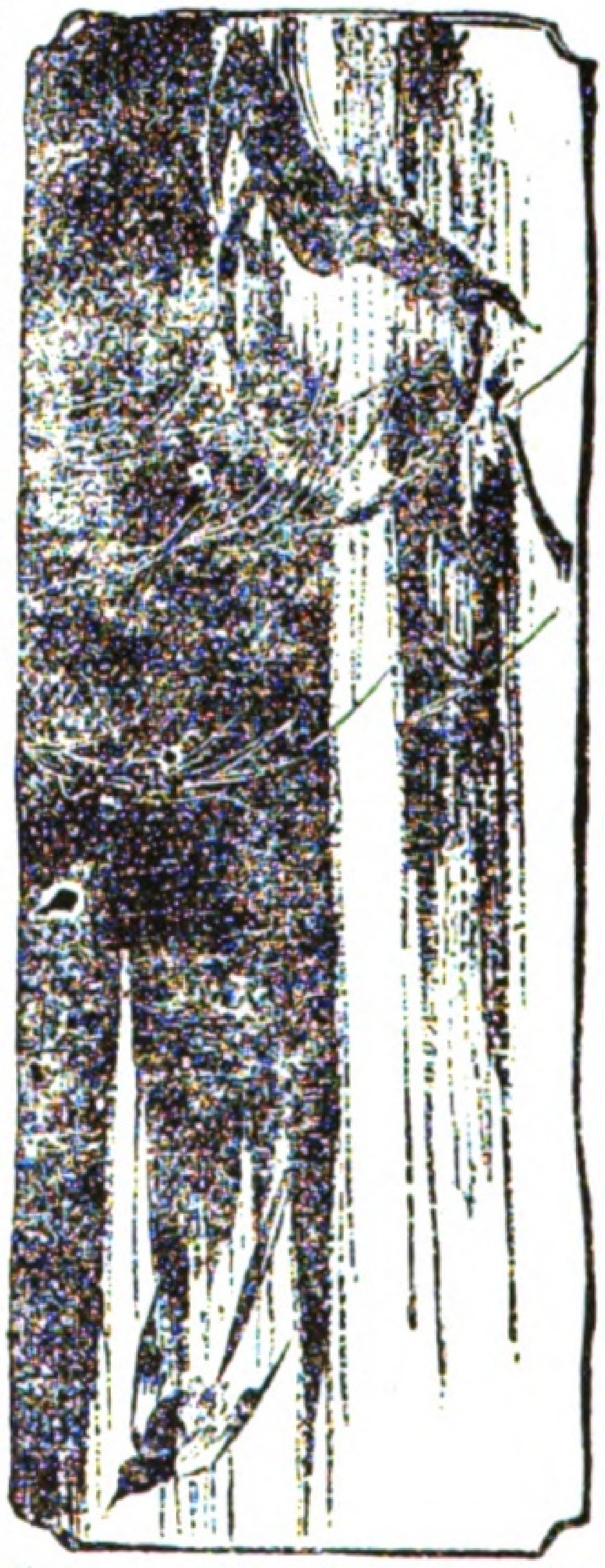
みけるを、漸う人に慰められて母の遺骸を葬ふり、其後は常に墓を守りて懇ろに祭祀を行ひける、此事朝廷に聞えければ大に其が孝心を嘉みさせ給ひ、特に位を賜はり、其里門に旌表し給ひぬ、是れぞ仁明天皇承和八年の事なりける、斯かる殊勝の女なりければ、世の為め人の為めを計るとも亦た深く、其が家の近傍に惠我川と云へる川ありて、此れに架せる橋なく、人々痛く不便を感しければ、年々に材木を買ひ集め、終に一つの假橋を作りけるにぞ、往來の人々大に便利を享けゝりとなん。

但馬權守橘逸勢は比類稀れなる能書家にして、嵯峨天皇、僧空海と並び稱せられて、本朝の三聖とぞ呼ばれける、仁明天皇の承和九年朝譴を蒙ふりて伊豆の國に流されけるに、逸勢の女之れを聞きて嘆き悲しむと大方ならず、折節父病に惱み居ければ與に配所に往きて看護せんとを願ひけれども、固より掟の許さぬ所なればとて採用せられざりける、左れど如何にしても徒に[illegible]ると能はざれば、密かに父の跡を慕ひ、晝潜み夜歩みて遠江の板築驛まで往きたりしに、父の病益々重りて遂に其處にて空しくなりぬ、女の悲嘆言ふばかりなく、切めては此地に葬ふらんと切に請ひたりしかば、終に其願ひを許されける、左れば泣く〳〵父の遺骸を葬ふり、自から黒髮を切りて尼となり、名をも妙冲と改め、墓の側に草の庵を結びて此に住まひ、朝夕花を捧げ經を讀み、生きたる人に事ふる如くに膳部を供へ、十年の久しき唯の一日たりとも怠るとなかりけりが、嘉祥三年に至り、逸勢の罪を赦して正五位下を贈られ、故郷に歸葬するとを許させ給ひしかば、妙冲の喜び譬へんに物なく、父の柩を負ひて京に歸り、厚く葬ふりて、佛事供養聊かも怠りなかりきとぞ。

### （七）　勇婦彈弦　貞女化石

上毛野形名と云ふは仁徳天皇の御宇に新羅を討ち、又蝦夷を征めて驍名を轟かしたる將軍田道の後裔なりける、舒明天皇の九年蝦夷叉叛きければ、天皇形名に詔し、兵を率ゐて之れを討たしめ給ひけるに、其妻は智略衆に超えたるものなりければ、女房數多率ひ夫の軍に

從ひける、然るに賊勢頗る猖獗にして官軍大に敗れ、衆皆先きを爭ひて逃げ失せければ、形名も今は力支ふると能はず、是非なく城を棄てゝ逃かれ去らんとなしける、妻最と苦々しきとに思ひ、夫を引留めて大に諫めけるやう、君の祖先は新羅蝦夷を撃ち、夷げて武勇を天下後世に輝かし玉ひぬ、今君大軍を率ゐて此地に來り征し玉ひ、斯ばかりの敵を怖れて逃げ歸り玉はゞ、如何ばかりか世の人の物笑ひとなり玉はん、若かじ飽くまでも賊と戰ひ、刀折れ矢盡きて屍を戰場に曝らし玉はんにはと、乃ち夫に酒を侑めて暫し休ませ置き、自から太刀を佩き、弓十張を押張り、女房共を呼び集めて弓弦を彈き鳴らさしめければ、賊之れを聞きて援軍大に到れるならんと疑ひ惑ひける、斯かる折柄形名も此音を聞きて目を覺まし、鉾を執りて猛然として起ち上り、殘兵を率ゐて城を開いて打つて出でけるに、賊は此勢に怖ぢ恐れてサッと引き退く、既にして味方の敗兵又集まりければ形名愈々力を得、北ぐるを追ふて進み討ち、終に蝦夷の酋長を生け捕りけるにぞ、餘賊益々怖れて悉く降伏しける。



松浦佐用姫と云ふは大伴狹手彥の妾なり、宣化天皇の二年新羅王兵を舉げて任那を侵しければ、任那王大に怖れ、使を發して來り訴へける、天皇大連大伴金村に詔し、其子磐及び狹手彥を遣はして任那を援けしめ給ふ、因りて磐は留まりて筑紫を鎭め、狹手彥は兵船を率ゐて肥前を發しけるに、佐用姫別を惜みて嘆き悲しむと大方ならず、山上に馳け登りて進み行く夫の船を望み見、領巾を脫して打振りつゝ麾きける、船は次第に遠ざかり、頓て見えずなりければ、佐用姫急ぎ山より馳せ下り、跡を逐ふて加部島に抵り、延び上り〳〵馳せ去る夫の船を望み見つゝ聲を限りに喚び立てけるか、終

に其場に泣き倒れ、其儘化して石となりぬ、後世此石を名つけて望夫石と云ひ、彼の山を稱して領巾麾嶺と呼ぶ、今尚ほ加部島なる國幣中社田島神社の末社として崇むるは即ち此石にして、其形其大さ宛がら女の倒れ伏せるが如し、源頼光の九州探題たりしとき特に之れを信仰しけりとなん。

## （八）忍后感琴　井后博奕

忍坂大中姫と申すは允恭天皇の皇后なり、七年十二月御遊の事ありて天皇躬づから琴を彈き給ひけるに、皇后聞きて深く感じ給ひ、あはれ姫御を參らせばやとぞ申し給ふ、天皇斯くと聞し召し姫御とは誰が事にかと問はせ給ひければ、皇后由なきことを言ひ出でけるよと御心の中に悔ひ玉ひつゝ、御琴のめでたさに我れにもあらで申し侍るにけん、去りながら一旦申し出でぬる上は今更隱し申さんやうも侍らず、實は我が妹に侍る弟媛となん申すもの、色かたち世にすぐれて並び類ふべきものも侍らず、衣の上に光り通り輝き侍れば世の人衣通姫とぞ申すと答へ給ひぬ、天皇左らばそれ奉り給へと責め申させ給ひければ、皇后あさましきことに思して兎角の御いらへだになし給はず、左れば天皇衣通姫の御許へ御使を遣はして七度までも召し給ひけれども、參り給はざりしかば、又も御使を替へて遣はし給ふ、其御使庭にひれ臥し、君の仰せに從ひ給はずばいつかな此處を去り候はずとて、七日までもつや〳〵物を食はざれば、姫も其使に死なんことを憫み、御心を翻へして內へ參り給ひける、天皇悦び給ふこと限りなく、深く寵愛し給ひければ、皇后最と安からぬことに思し給ひぬ、因りて天皇姫を河內の茅渟宮に置き給ひ、數々游獵に託して幸し給ひけりとなん、後世玉津島明神と崇めまつるは此姫の御事となん聞えつ。

井上內親王と申すは聖武天皇の皇女にして、光仁天皇の皇后に立たせ給ひける、寶龜三年天皇皇后と博奕し給ひ、戯ふれに朕負けなば若き男を參らせん、后負け給ひなば美しき女を得させ給へとぞ宣ひぬ、斯くて局に對ひて打ち給ひけるに、天皇終に負け給ひければ、皇后

いざ若き男を賜はれと責め給ひけるにぞ、天皇戯ふれにこそ申しつれと否み給ひけれども、天子に爭かて二言の侍るへきとて皇后つや〳〵聞き入れ給はず、天皇最とあさましく思し給ふものから、此事如何にせばやと思ひ煩ひ給ふほどに、參議藤原百川第一の皇子山部親王を奉つり給へと勸めまつりぬ、天皇已むとを得すして其言に從ひ給ひけるが、皇后深く之れを愛し給ひ、終に天皇を廢して其產み給へる東宮他戶親王を立てんと計り給ひければ、百川天皇の旨を矯め、皇后及ひ東宮を廢して庶人となしける(博奕の一項名媛佳語としては少しく不倫なれども强ひて對を求めしに依りて此の如く讀者其心して看玉ふべし)



## ○文苑



### 庵春雨

（宮中御歌會三月兼題）

青柳の糸うちたれしくさのいほに
　しつくもなかく春さめのふる　松浦詮

またくれぬ庵にほかけのほの見えて
　春さめくらきいほのうちかな　前田利鬯

世のちりを厭ひてすめる草の庵に
　のどけくそゝく春のあめかな　水野忠敬

つれ〳〵と雨のふる日はうめのはな
　匂ひもいほのうちにこもりぬ　植松有經

春雨にもとのをかやはくちはてゝ
　あをみそめたりのきのあら草　小出粲

霜よけの松葉をけさははらひたる
　いほりの庭にはるさめそふる　大口鯛二

打つれて菫つむ子は知らさらん
野守かいほにはるさめそふる　千葉胤明

池の面にふるとは見えてはるさめの
おともきこえぬくさのいほ哉　遠山英一

烏羽玉のゆめをしつかにむすへとや
くさのいほりに春さめのふる　加藤義清

## 海（竹柏園歌會兼題）

凋れるは土とわかれし神代より
かきりしられぬ和田の原かな　久我建通

見るにさへ果なくひろき海原は
空につゝけるこゝちこそすれ　津輕承昭

筏にのり海にしのはん厭をる
やまもおほかた主のある世は　小出粲

わかせこはけふあめりかに船出しぬ
おほうな原に波たつなゆめ　三浦千春

わか國は八島八十島八十千しま
めくりてまもるわたつみの神　相澤求

わたの原沖つ浪間のかくれいは
ふねのふ魚のすみかなるらむ　[illegible]

心はれてうれしきものは海原を
なかめてくらす旅路なりけり　矢田香[illegible]

はるはると目路の限に舟ひとつ
ほかにくまなし沖つうなはら　又原保行

かへりくる背子か釣舟うち守り
夕けとゝのへつまやまつらむ　小原[illegible]之

なたらかに山また山はひたりより
みきよりつきて遠のやま見ゆ　山崎房吉

海といふ海はおほけとみつ汐の
なるとにくらふ海やなからん　川島宗瑞

生死を風にまかすとおもひては
海のうへこそあやふかりけれ　大野泰

見渡せはゆたのたゆたの浦波に
月もたゝよふはるのうみつら　細川玄[illegible]

いつかたゆみちくる汐は何方に
ひきゆく汐そうみはわやしき　石榑千亦

空は海に海はみ空にうつりゆきて　横山 碩
目にふるゝものはたゝ沖の舟

年のなかは常夜なりてふ北の果の　井上公二
こほりの海にとちられしふね

見るまゝに帆檣きえて舟きえて　關屋祐之
霞たちこむるはるのうなはら

わたつみの神やいますらん龍の都　土田道一
わさなき清くなみしつかなり

君かためつくす心やうつりけむ　東鄕矢一
あけにそみたる黄海のたき

春のよの月の海はらなみはれて　田永芳次郎
しらへもたかし海士か舟うた

をこちにひゝく渚のときの聲　東條正一
笛のねたえし八島おきかな

春の日の霞める海をなかむれは　多喜槐三郎
かへるかりかね浪にうつれる

淡路しま浪にうかひて汀には　池田宗鴻
かもめねふれり住よしのはま

山のとそれちし荒波おともなく　澤 式
にはよくてれり大和田の原

見るか中に空かきくもり波あれぬ　金井宣章
おきにたゝよふ人はあらしか

わか船のゆく手に一つ星みえて　佐藤秀信
夕なみたかし鳴門あらうみ

白駒のいなゝきくるひかけりゆく　吉敷 要
あらひに似たりあらしほの海

人の世におきところなきむくろ一つ　粘乘坊乱郎
しつめて神のにへにさゝけむ

かりそめに子らか作れる小き海に　遠藤千波
舟もうかへりしまやまもあり

千五百人ひけと動かぬ大ふねの　高木敬二
木の葉のことく海にたゝよふ

幾千々の人をかのみし幾千々の　龜山新一
船かしつめしおほわたのはら

雲か山か浮へるわたり夕はえの　北條數馬
うみかゝやきて鯨しほふく

海幸はみちたらふらむこの朝け
かこか船うたこゑいさましき　辰馬鐵晶

朝夕にたゝひたすらに漕きゆけと
學のうみのきはみをしらす　落合嘉女

破寺のかねの音遠く波にきえて
まつはら三里つきおほろなり　相馬御風

若みの波にたゝよふうきみわれ
いつかたのしき海にいつらん　高石眞虞

かきりなく果なき海を舟ひとは
波をわけつゝやすくゆくなり　天野良靜

木や空たゝ一ついろのさかみ灘に
あかねさしつゝ日は落んとす　天野勇雄

わたつみの千ひろの底にかつき入りて
世のなりはひとあはひとる也　伊藤梅子

かきりなき青海原をとふとりの
つはさやすむる帆はしらの上　岬山つれ子

久方のあめのぬ鉾のしたゝりや
大うなはらのはしめなりけん　服部しげ子

島かくれまた島かくれゆく舟の
いつ着くらんか知らぬ湊に　桜井とも子

櫻しまとほくかすみて眞帆片ほ
かそへもあへぬ波のうへかな　佐藤朝惠子

智の鍵に探るとすれと極みなき
海のみかみのみさちをそ思ふ　宮木より江

望多き人のこゝろはうなはらの
はてなきよりも果なかりけり　大竹以勢子

あらへともうき世の塵によこれては
すゝりの海のかわきかちなる　堀孝子

わたつみの神いかりますかあな畏こ
七日七夜をたゝあれにある　淺井鐵子

越の海沖つしほかせふきあれて
そらよりおつるあら波のこゑ　中村文子

一人子の舟出なしつる其夜より
夜毎ゆめ見ぬあらうみのおも　關屋愛子

鷗あそひ波しつかなる春のうみ
我も小ふねをうかへあそはん　鈴木芳子

白かねの末玉となりて糸となりて
濱のまさごちなみよせかへる　有賀晴子

わたつみの底の心はしらねとも
長閑にみゆるはるのうみかな　久保はな子

龍神のいかりおそれし海はらも
ゆきゝまゝなる世と成にけり　金井紫子

別れにし舟は程なく見えわかす
かすみにこもる沖つしらなみ　西方てつ子

青たゝみしけるか如き海はらに
あそふかことく見ゆる舟かな　清水錦子

のそみある益良武夫をしつめけん
海とも見えすかすむはるかな　長谷部和子

いとせめて波に向ひて語らはむ
人にかたらむおもひならねば　佐々木信綱

## 深山の春

宮津すみれ

○春のゆき

花にまがへられし春のあわゆき、風さむみ梅が香うす

き如月の空に、霏々紛々舞ふて歌人の讃をうくるは我が軒端の雪が夢にだに知らざるところなるべし、これは京の雪しかも少納言の才と共に日本の歴史に殘れる幸運のあわ雪よ、時正に彌生三日、こゝろばかりのひいなは我が子の行末といのりて、段に飾れども、緋桃の婉なるはなく、白桃の優なるはなし、しかもけふ玉屑みだれて窓に飛び、ものいはぬ内裏雛のみかほもいと寒げなり。

果敢なきものにたとへられし淡雪、我が北信にては何の意味なきをいかんせん、つもりつもりて未だ三四尺の上なるを、花まつ人の羨まし、さても麥の緑は二三寸に至れりや　かしこにては嬉しき〳〵春雨とやこよひの空を眺むらん、こゝはゆき空、音なき雨のいろ寂し、淡ゆきとはたが名づけし文字なるらん。

○添乳

平和なる哉母のかひなにいだかれて眠る幼子よ　彼はつく生息輕う、折々笑顔うかべるは夢の玩具をおもふてる、濃き茶にうかされて眠りかぬる母、小掻巻幾度と

なく動かせば、彼は夢路はみだれて、愛らしき口に乳を求む、いよなかれ衛生學をとく人、論理は添乳の有害なるを證明すれども、このいたいけなるものを別のふしどに眠らする事を得んや、ひしといだきてうちふす、夜のふすまの中、またうきよのものおもひもなし、一茶が句に「蚤の跡、數へながらに添乳かな」と、こは短かき夏の朝ぼらけ、母がめさめてのわざなるらん、我泰西の詩文にくらし、かの國にてかゝる優なる文字ありや、到底三十一文字のゑがきいだし能はざるところ、俳句なれや俳句なれや、一字千金二千金三千世界に子を持つた母のこゝろは皆ひとつと、おもふは愚かゝ、一茶は信州柏原の詩人なり、彼に奇行多く警句多しときく、嘗て加賀公の召し給ひし時、「なんのその百萬石も笹の露」と大氣焔を吐きし人、優なる哉、我は夏のあけくれ未だ一日もこの句を忘れ能はざるなり、泰西の詩歌、かゝるやさしのものありや、うつくしき拾七文字の太平太西のかなたへも傳へまほしきかぎりにこそ。

○雪消

落花白う庭に落ちて、くれゆく春の夕ぐれは、きよき天もまたかゝるやと地上の影をみとめざるなり、けがれ多きは雪消なり、おもへばうたかたの夢なりしよ、滿天滿地白皚々たる銀世界を神の宮居にくらべしは。こゝに住む民皆このましろなる粧に眠くらみて土をも忘れぬ、草をもわすれぬ、徒らにうたひし事の愚なれや。まこと雪は天上界に屬する天女が、罪を得て下界に降り更らに大なる誘惑の姿を化せしを以て、地球にひそめる誠熱は「春」の情火を以てこの惡魔を追はんとするなり、彼聖きほのふの迫るにあたり、遂に地より去らざるべからず、さてもうつくしきは櫻の最後なり、風の誘へば即ちあだなるよそほひを捨てゝまた顧みず、されは散りたる花の上には猶天の如きおもひあり、雪や雪や、其消へなんとするに際し、何ぞ執着深き、路には泥土を深からしめて世人をなやましめんとす、雪と花この二者我は花を愛す、ことに落花のいさぎよきを愛す幾世幾歳日本が理想となし來れる、蓋ゆゑんなきにあらずやがて雪消の清からぬを惡くみて以て陽春の花

に及ぶとしかいふ。

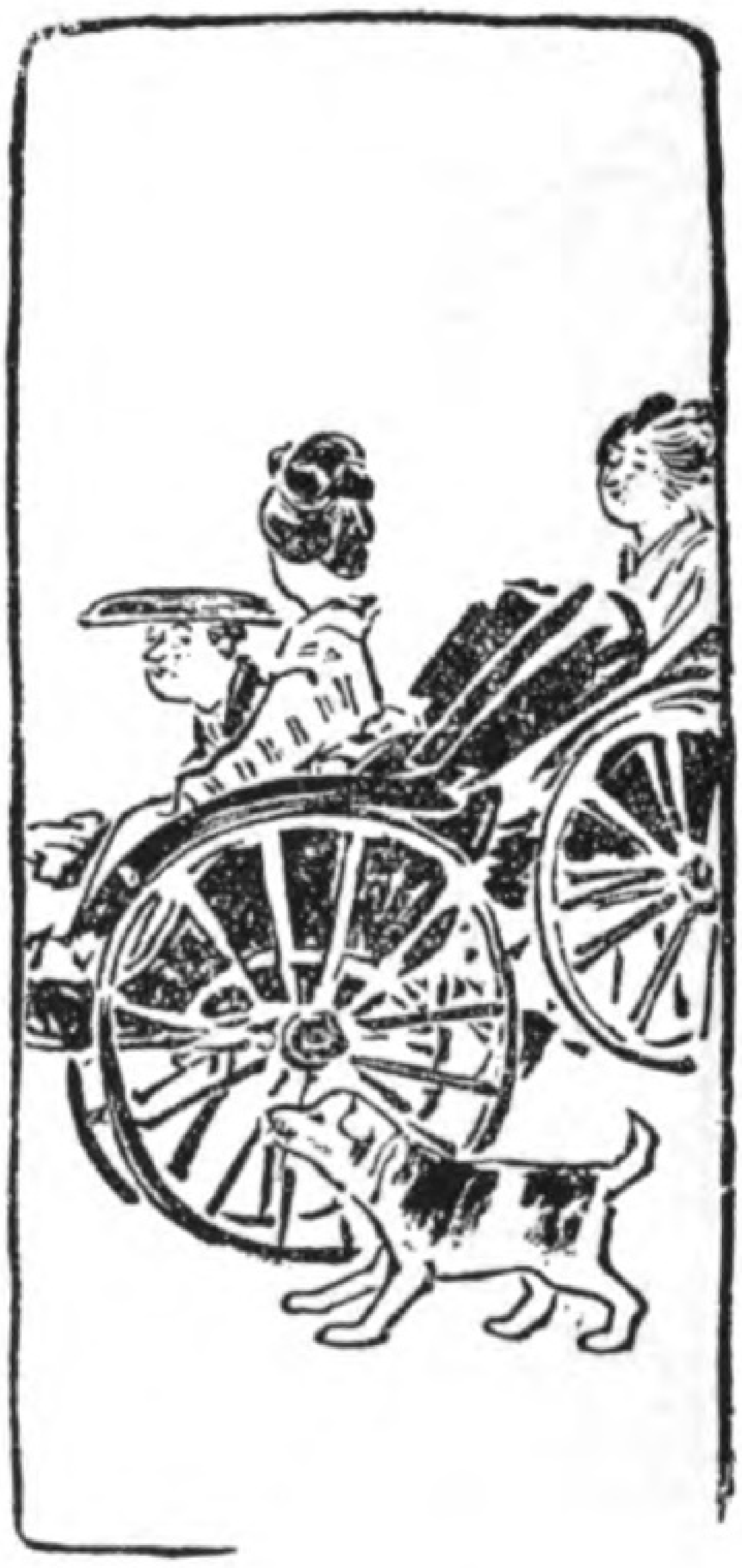
〇をんな

"Thy name is Woman" 美にほこり才にほこり富に誇らんとするあさましのもの、これが代名詞はをんなとや、弱し、もろし、汝が名は女なり、愛にほこり、情にほこり、操にほこらんとする汝が名は女性なり、をなもろしをな弱し汝が名はウーマンなりけり。

〇てまりうた

やさしさは里の少女等が手鞠歌なり、其一に曰く

「向はの小寺はだれ建た、八幡長者の乙娘、みめよし髪よし形よし、手には二つの玉を持ち、足には黄金の履をはき、だァれも通らぬ山路を草苅わい人つれだつて、もとの殿御にゆきあつた、帯をくだんせ殿御様、傘をくだんせ殿御様帯をくれるも安けれど、傘をくれるも安すけれど、わたしの女房になるならば、高いおんまにだきのせて、藤のついたる綿帽子を、ふうわりちやわりとうちかけて、はァや御座れや我が女房鐵砲刀は兄様へ硯と墨とはとゝ様へ、茶せんたばこはお竹どの、まづ〱七貫かしました昔むかし〱よりあるまりうたの由なり、今のあやしげなる新躰詩よりまさる事萬々、而して名ある歌人のいまだ調も文字もとゝなはぬ是等はやりうたを變化し能はざるはあやしむべし、世は爭うて地理の唱歌歴史の唱歌と賞かけて募集すれども、未だ品位ある鞠歌をつのらず、そも教育とは教科書のみにてはあらぬものを、ゆるがせになす當路者の心事何となうあさましきこゝちす。



〇初春の聲

鶯は谷の戸深う餓にも鳴くらん、雲雀はいづこに春のうたをやおもへる、おぼろ夜の月になく歸雁いまだ

なかく〳〵、初春の聲さらばいづくにか、天にやある地の底にか、然らず、草むす軒より滴々として傳はる雫なり、しかも雪の上に墜つる音、靜かにして、幾度か〳〵忘れては花さそふ春雨とおもひぬ、こは雪どけと雫なりけるを、さてもこの小さき音の幾條、天に媚びて春を迎ふる如し、一日も早う佐保姫下界にくだりましませや。

○蕗の薹

珍らしや、なつかしや、久しう草をみざりし眼に靑々として雪消のひまよりもるゝ蕗の薹、もし春の半ばなりせば、花に狂へる世人のいかで汝を顧みんや、忽ち少男少女の手に捕へられ、あるは年たけたるものゝ捕ふるところとなる、いたましきは汝が宿世なり、凡そ初戀なるものゝ風情は汝に似たらずや然れども我は寧ろ幸運として汝を祝せん、そはくらき〳〵山陰の花が一度も世の春、世の愛にふれざるに比して、まされること萬々なるを、されどやがて菫にほひ椿赤きころ、汝を顧りみるものはなけん、果敢なき蕗の薹こは初戀のはるなきとたくらべんかな。

○ちごの操

節操とは女子が男子に對する文字なるか、あらず〳〵ちごにも操あり幼子にも節あり、母の顏を記臆するやうに至りては、決して〳〵よその乳を呑まず、試みに他人ふところを啓いて示せば、鬼が棲むもの、蛇が棲むものとおもふてか顏をふりてまた顧みず、餓へてすらしかり、母と子の因緣ふかゝらずや、野干の身を以て保名と契りを結びし彼の葛の葉は眞の葛の葉の尋ね來りしに際し、信太の森へ歸りゆく心事讀み來りていと悲し「我は古巢へ歸る身を、嫁入〳〵と里の子の、あの愛氣を見るにつけ、跡にまします父母に、預け置いたる稚子の乳房尋ねてさこそ歎かん不便やと泪に道も見えわかず」……「猶この上にも保名樣恨をはれて、此子の行末葛の葉樣賴み入る、と童子を膝に抱かゝえ、乳房を含め、脊を撫で」……和泉なる信太の森あはれ愛着ふかきところ、我母としてこの卷を讀めば同情の淚禁ずる能はざるなり。

昨春病を得て乳乏しく、暫し他人の懐へと、餓に泣く幼子をなだめつすかしつおしやれど、死すともこれに觸れざる風情うつくしき操よ可愛の子よ、世の浮薄なる男も女も一たびはかゝる時代のありしなるを。

○忘るゝ勿れ

忘るゝ勿れ世人よ、樋口夏子の君を、忘るゝ勿れ故一葉女史を、可憐の卷「大つもごり」を、よめや再び三度、更らに讀みて味へよ「十三夜」「にごりえ」の諸篇を閨秀作家の乏しきけふこの頃、君をおもふて感深し、我が文庫の中、寶として秘めおくは、夏子の君が「十三夜」の原稿なり、筆の跡美るはしく、唯うらむらくはそが後の卷、こは神田淡路町にいまし〻某歌人の乞ひにまかせてわかち與へしまひしこゝにはなし帝都は火災多き所冀くはよく保存せられし事を。



湘煙女史が傳、人多くいふ、未だ夏子の君がライフを明らかにせず、然れども字々皆金玉鏘然として聲あるが如し、まして「十三夜」の筆に向ふ時は天才の俤うかびいでゝ、更らに其早世を痛むこと切なり。

○鉢の梅

小さき鉢の中ににほふ梅の花、優なれども品位なく、美なれども威嚴なし、何の苦痛なき乙女子にたくらべんか、鉢の梅はこれまことの梅にあらず、乙女子はこれまことの女にあらず、寒風に紅唇をまかす時、始めて花のオーソリチをみとめ得るなり、マドンナよマドンナよ、こゝにいたりてはじめて價値あるを知る、しかも寒風の裡には苦痛あり、處女にして人の妻、てもまた幾多の涙なからざるべからず、むづかしの世や、むづかしの世や。

# 湖畔の夕

山口すみ子

霞浦の湖邊日はいま正に傾きかけぬ、靜なる春の夕風はおだやかに海面を凪ぎ渡り、美しき夕陽の色は黄金と紅ゐとの影をさゝなみの上にうつしつ、雪より白き鷗は處々に群とび、蒼々たる海原に白帆三ッ四ッ風をはらみてはしれるなど實に畫中の趣あり。湖上遙に見ゆる鬱蒼たる一帶の森影は宛がら水面より連なれる如く、そが木立の間より一ッ二ッあるかなきか微に見ゆる燈火の光は手野わたりの里よりならむ、土橋を一ッ越したる後の方は廣き野邊にて、丘には梅香ひ櫻ほころび、野には野薔薇かほり菫さききそひ、左に見ゆる村々にはうす霞たなびき、さては遠山寺の鐘の聲賤の男の馬子歌、宛がら茫と夢のうちに見聞く如く、清く平和なるあたりの景色にほゝゑみて佇む妾は花さく野邊をそゞろありきて、聲に色ある諸鳥の歌ふ笑聲をきくにもまさる思ひあり。この日妾は用事ありて程遠からぬ叔父上がりおとづれしかへさなり、家にはさぞや母君の待ちわびる給ふらんと思へど、霞にくるゝ山の姿さま〱の彩色ある夕べの湖上を眺めては中〱に去りかねつ、小石にさゝやく浪の音、夕告鳥の勇しき夕の歌、葉摺に聲ある風の調べも、皆妾を引とむる種となり、日頃浮世の塵に汚れし身もにわかにすがすがしき心地しぬ。この夕よ、この景色よ、彼の詩人等の見ば何と歌はむ、畫だくみなる人々の眺めなばさぞやうるはしき筆書はうらせん、さわあれど思ひに惱む乙女、戀に望を失ひし若者等の眼にはいかに寫るらむ、見る人々の心によりうれしとも悲しともなるものをなど、はてしなき事ども思ひ出せし折柄から〱と鈴の音かろふ後に鳴りぬ、こは何ならむと顧り見れば、夕霞濃やかに田の面をこめつ、美しく西の空を彩どれる夕陽の影は山の端に傾き、後に見へし村々は薄き幕もて蔽はれたるが如き中にかすかに白き煙の立昇るのみなるに。いとゞいぶかしさに堪へず猶もあたりを眺めやれば、右手の方松杉あまた生ひ繁りし岡の上に立られありし觀世音の御前の鈴を打ならしぬ、年まだ若き少女の雙手をしかと合せて靜に何事か祈念しつゝ居るなりき。（未完）

と頭を上げし少女の面には深き〱愁の光を湛へつ、賴みなげなるその姿はさぞな辛き浮世の荒浪に漂よはされし故ならむ。「嗚呼哀れの少女よ」かく口走りしがにわかに眼くもり涙はら〱と袂の上に落ちぬ。

我家より程遠からぬ裏に近きころ移りすみし男ありしが何を營むともなく日々酒くさき息吹きては怒りのゝしりその妻子を泣せつゝあるありき、妻なる人は重き病の枕はなれ難き身ときゝぬ、そをみとりするは彼の少女なるよ、用事ありて朝夕その前をゆき通ふに、怒り罵る男の聲泣き悲しむごとき女の涙聲の洩れきこへざる日とては少なかりき、一日出入の老婆の話によれば彼の男は少女の爲には繼父なりとぞ、心よからぬ父は少女のみめうるはしきを幸、東の都に售らんと脅しつ罵りつ、日々その妻にせまる樣よその見る目も小面憎きばかりよと語りぬ。かくもつらき世の中にせめて神佛とたのむ少女の小さき胸中には、いかなる感想の流るらむ。妾は哀憐の情やみ難く曇りがちなる眼もと見詰めゐれば、今し漸く願のすじや終りけむ、靜に石段を下り來し少女はあたりの景色に眼もくれず、淸き星眸に涙さへうかめ物思しげなる樣のいぢらしさ、まだ咲き出ぬ蕾の花の思はぬ嵐に打惱むそれにも似て折しも一羽の烏いまはしき叫び聲を後に殘して森の方に飛び去りぬ　少女は安からぬ面もちにて遙にそを見送りしが、急にあゆみを早めぬ。




花やかなりし夕日の光は夢の如く消へ失せ、森も山も村も野も一帶に黒づみ渡り今日も寂に暮れむとす。沖の上の白帆も漸く小さくかすかに見え、岸邊をこぎゆく小船よりきこゆる船唄も今は何となう物悲しげに響けり。妾もいざとて家路をいそげば、折柄行手に砂を

蹴立てゝ走せくる車、車上なるは高貴の家の令孃ならむ、哀の少女を冷に一瞥しのみ走せさりぬ。大空にはいつか朧なる月雲間よりほのめき出て、夜は靜にたありをかこみ終たり。

## 垣一重

若菜女史

### 一

「お信さん、夫れは眞實かえ、眞實かえ、」お信を呼ばれしは十八か九か、背の低い、丸々とした女、大きな目をくる〳〵とさして、

「眞實とも〳〵、何んて僞言なんか云ふ者かね、去年の春東京から人が來て、此會社に御前が出る樣に、成つた時、何程とか、澤山の御金を送つて來たと、大變に伯父さんが喜んで居たよ、東京からの人の話に、初めは、十五錢位ゐても、腕次第て、直きに、一日五十錢も六十錢も、取れる樣に成る想だから、冗費さへ爲なければ、一月に、七圓や八圓殘すのは、何でも無いとね、だから、伯父さんも、左樣云ふし、村の人達も皆、お勝ちやんは、村長樣からも褒められた位の孝行者だから、乾度、自分の食べる者を食べ無いても、御金を送つて寄こすに違ひ無いと、噂して居たのに、初一度切り送ら無かつたと云ふじや無いか、

だから今ては落こちても出來て、其方にはかり注ぎ込むのだらうと、云つて居るよ、夫れに、暮から、伯父さんが、一寸した風邪て臥た處が、平常働きつけた身體が休んだのだから堪ら無い、一時に疲勞が出て、夫は〳〵側て見て居ても可哀想な樣に痩せてね、夫れからと云ふ者は、尙更御前の事ばかし心配して居るし、あゝ左樣だ、云ふのを忘れて居た、御前の處の權ちやんがね、無けなしのおつと御免、御金を持つて、五十日はかり前に逃げちやつたよ。

「えー權太がかい、まあ、何と云ふ親不孝だらう、

「お勝ちやん其んなにお云ひで無いよ、

「夫れではお信さん、父ちやんの世話をする人は、

「あゝ、だから村の者達が可哀想がつて、毎日お飯や何か運んで遣つて居ると、何日でもね、力にして居た、權

の野郎は逃げるし、お勝は彼樣なだし、己れは、最早浮世が厭やに成つた、一時も早く、嬶の傍に行き度いと、涙をこぼして云つて居るよ。だから村の者も、今ぢや、評判者のお勝ちやんさへ彼樣だ者、今時の娘つ子程頼みに成んねーものは無いと、寄ると觸ると其噂ばかり、お前さん其頃はよくくしやみが出ただらう」

「お信さん、」あゝ可驚した。

「其樣な事は如何でも、まあ好いが、父ちやんの病氣は眞實に甚いのかえ、

「あゝ藥袋先生も今度は、余程氣を付け無くつちや嫌け無いつて」

「お信さん、夫れから村の人達は、私を其樣者だと、思つて居るのかえ、自分許り好い事をして、家の事なんざ、あゝ情無い、私が僞されて」

「何をして居やがるんだい、怠惰けると掛長に云告けるぞ、來たばかりの者に、惡い智慧でも付けて見ろ、太い女だ」耳の鼓膜も破れんばかりの聲に驚きて、お勝は、自分の持場に、大急ぎ、お信は、唯だ目ばかり圓くして、驚き顔に見上ぐれば、閻魔が地像に早變り、「何、心配する事は無いよ、好く働きさへすれば、御掛りに申して、樂な處に廻して遣るよ、と云ひながらの秋波其心の奥分かりし後ならば、眞や身もすくむ可きを、



二

狹く長き廊下、薄暗き上、日當り風通しの惡き爲めか、塵垢腐きと、濕氣ばき臭と、歩行く度毎にぎしぎしと云ふ根太の音、馴れねば歩行くも薄氣味惡きばかり、兩側には一二三の番號書きたる室の、幾室とも無く、ありて、曲り角には、眠む氣な光りの、洋燈が只一つ、突き當りては曲り、突き當りては曲る事、幾度かして、山田信と書ける札、其他小札十ばかりかゝれる室の内に、今しも、入り來れるは、廿か廿一、此處と取りたてゝ云

ふ處も無ければ、繕はぬにしては捨て難き面ざし、蒼白き顔にそゝけ掛りしほつれ髮、五月蠅氣に掻き上げながら、靜かに座りて、微かに太息つきぬ。柱は傾きて、壁は落ち、見るさへ心地惡き室の内、疊十枚とは敷かるまじきに、寢たる女の數は十何人、魚河岸の泥餌も斯くやと思はるゝ計りなれど、晝の疲勞に入り來りし人の有りとは、知る者も無き樣なり。夜は更けて鼠の荒るゝ音、寢言、齒切り、鼾、折々は高く低くうなさるゝ聲の外は何の音もなし、今しも入り來りし女は、邊りを見廻はしながら

「最早仕方が無い、左樣すると極め樣」と、そと立ち上りて帶〆直し、

「あゝ自分乍ら恥かしい此身躰、外に出たら人は狂者と思ふだらうよ、えゝ、まゝよ、出さへすればまた如何にか成らう、夫れに丁度、昨日が勘定日、未だ食料も拂は無いから、七圓何程かは有る譯、着物一枚着たからとて、まさか國迄歸れぬ事も無からう、鬼の住家と思つても馴れて見ると、何だか、出るのが殘り惜しい樣だ、お信さんは、まだ來たばかりで、何も知ら無い樣子だが今に分つたら、矢張り私と同じ思ひをし無ければならないのだ、折角此處迄來たもんだから、よく眠つては居る樣だが一寸起して今一言」抜足差足夫れと思ふ床に近よりてそつとのぞきて、

「おやつ居ない　もしや〳〵、あゝ可哀想だ何も知らずに、樂てお金が澤山取れると思つて　居るのだらう、今に分つたら、まあ何と、嘸私を恨むだらう、だから先刻も工場で、夫れと無く氣を付けて遣つたら、家では食べた事も無い新しい肴で、御飯もお米ばかり、此樣な嬉しい事は無いつて、それが餌とは氣が付かず、釣られて居るのが可哀想だ、親類では無いけれども　幼少時から同じ處で育つたせいか、何だか他人の樣な氣はしない、夫れに、室には居ないし、先刻工場で見張りが、何か云つた樣だが、彼の人は、評判のなんだから、氣に入れは、それは樂も出來樣が、私の樣に强情だと、一寸した事に直ぐ打つやら蹴るやら、おまけに忙しい方に廻して、日給も何のかのと、上前ばかりはねる事をして、それて、氣

に入りの者に色々な者を、買つて遣るのだ想だが、それも長續きはせず、新奇の人が來ると、直ぐにまた、何の道此處に入つては、仕合は無い、成らう事なら一所に連れて逃げたいが、探して居る間に、夜廻りにでも見つけられたら夫れ迄甚い目に逢つて〳〵、病氣にでも成つたら最後、親の顔も見られや仕無い、夫れに、お信さんも僞まされて夢中だから、話しても、逃げるなんざあとても、左樣だ〳〵最早人の事なんか思ふまい、愚圖〳〵して居て、もし父ちんが、……如何な思ひしてゞも、早く國に歸つて、父ちやんに逢つて今までの事を話したら、まさか、其樣人非人とも思ふまい、そうして、一生懸命に看病して、あゝ最早仇の末にても、女工に成るのは止めて遣らう、それにつけても、ほんとにお信さんが、あゝ〳〵可哀想だ、

三



「あゝ何度廻つて見ても同じ事だ、平常は此樣に、高い塀とも思は無かつたが、少しも手掛りのない事、斯うと知つたら、前から氣を付けて居た者を、あゝ、如何したら好からう、愚圖〳〵しては居られない、もし夜廻りに、あれ鐘が、一！二！最早二時だ、早くしなければ、あゝ、此塀は、如何しても越せ無いのか、假令片手や片足は折れても關は無いが、如何しても〳〵駄目か、〳〵え丶、口惜しい、三方は塀一方は川、川は、駄目、塀は、越せず、川は、川は、見つかれば、死ぬよりも、もつと〳〵苦しい目に逢ふのは分つて居る、死ぬ〳〵、父ちやんに逢へないのは、殘念だが、生きて苦しんで居て、逢へないよりは、死んだ方が、あゝ、其方が余つ程ましだ、死ぬ積りで渡つて、萬一助かつたら仕合死ねば、それでも母やには逢へる、見付けられて生きて居ては、二人ともに逢はれない、川にしやうあゝ川、川、川、神樣佛樣何卒ぞ〳〵此

川を渡らせて下され、死にかゝつて居る親父の處に行くのでございます、何卒可哀想だと思召して、此川を無事に」死を恐れぬ身には、ばらの生垣も痛しと思はぬか、枝の斑らな處より强ひて躰をもぐらせつ、浮木を探すか邊りを見廻す内あはれや足すべらして、横樣に、水心なき身の殊に早瀨、水のまに〳〵一間二間三間四間、あはれ浮いてか沈んてか、

* * * * * *

電報〳〵けたゝましき聲に續きて「上田は何處へ行つた、お勝は如何した、居たか、居ないか、取締は誰れだ、何つ、逃げた、馬鹿何處から逃げられる、」

四人五人宿直は恐ろしき聲して、提灯と共に出で來り「此塀を女に越せるか、逃げる處は無い筈だ」三方の塀を調べて川岸に來りし時、

「やゝ草履が」

「やあ、垣根に片袖が」恐ろしき叫び聲の水にひゞきしあとは只流れの音ばかり。

# 「黑塗馬車」をよむ

菫花女史

あかつき二の卷は、中村春雨氏の作「くろぬり馬車」をかゝぐ、われ女の身のこれが評こゝろみん事はをこかましけれど、いはねば腹ふくるゝおもひあり、ゆるし給へ作者の君、ゆるしたまへ世の人々。

卷中の大畧は、つぼみの如き十か九の姬樣、おのが住む金殿玉樓の中、風波のたゞならぬをいとひて、田舍にある乳母のもとに遁げゆき、終生そこに住まゝくましき感念切にして、御母上即ち伯爵夫人京子の方の御側よりすら離るゝをといはぬ風情、甲谷といへる家令の迎に參りしをさん〳〵だゞこね給ふて、乳母お淺の一子六太郎と仲よく遊び仲よく食ひ仲よく眠り、はにふの小屋のいぶせきを忘れて「乳母のとこの子になりに來たんだ」をくりかへし又くりかへし給ふといふ筆のあとや先き、ことに奥方が愁歎も讀まれて、何となく淚ぐまるゝ一卷なり。

「小羊」は春雨氏の作なり、等しく田野の風光を說き、故郷のあたゝかなるをいへり「お德」の愛「お七」の狂共に「仙藏」を善に導き猶且つ「おせき」の如き女性をしておのが情を殺さしめぬ何等の悲ぞ、何等の壯ぞ、母の愛、望鄕の情、この二つあるありて薄倖の人、自滅の非業なく、つめたき世よりはなれて安全なる墓に入るを得るなり、嬉しからずや。然れどもけふわがよみし「くろぬり馬車」うらむらくは不自然なりとおもふをいかんせん。

夫れ遠景はすべてのものを美ならしむ、紫雲棚引く富士山上、登り近づけば詩人の賞讃も僞なるべく、洋々たる海恐らくは我等を呑まんとするものならん、「夜目遠目傘の內」これ女の美をいひたるのみにてはあらざるべし、男子然り女子然り富者然り貧者然らん、山亦然り水亦然り、花もかゝるや雲もかゝるや。さても美くし



き糸子姫御身は、黃金の高殿を捨てゝまことに〳〵賤しき乳母が子となり、終生土と親しみ貧とむつみ給ふや、御身の母君が馬車の窓より折々ながめ給ふ百姓の夫妻は眞にうらやむべきものなりや、而して萬一めしひの神の矢、御身と六太郎が上に射られなば、御身は實に天下の不幸兒なり不運兒なり、御身鍬もつ手に貴き男女の馬車に召しますを見て、悔ゆるも詮なし、必ずや悔の涙被風ならぬぬのこの上に數行下るを禁ずる能はざらん、御身は生長して華族女學校を卒業なし給ひ貴公子の配たるべきの人、よしや母御のうれひをくりかへし給ふとも、野にありて泣き給ふよりは幸なり、そは田舍にも悲ありうれひあり、罪あり惡心あり田園詩人の徒らなる空想は屢々貴からんとする運命の人を導きて淋しき〳〵山野に迷はしむるものなり、怖るべし田園の趣味をとく人よ、彼等

は唯遠目によりて是を知り、夜目によりて之を察したるのみにして親しく田園の生活を經、親しく田野の人に交はりたるものならず、何ぞ其內容を知らんや、嗚呼田園をとく人、來りてこゝに住め、卿等都のこひしうておもひにや死せん。

うつくしき糸子姫よ御身は未來の何位何爵夫人たらざるべからず、しばし御父君のつれなきをしのび、御姉君達のよからぬをしのび給へや、葛飾在の乳母を慕ひ給ふべからず、況んや一子六太郎をや、彼は彼に相應はしき妻のあるあらんは、淺は彼女に相應はしき嫁のあるあらん、こゝにも淚あり不平あり、嫁と姑の二字、いつまでも〳〵相和し得ざるの文字なるを美くしき糸子姫はかゝる伏屋に泣き給ふ御かたならず、同じ世の不運に泣き給ふべくんばむごとなき御館に、何位何爵夫人として泣き給へや、危いかな、田園をとく人、卿等は人の宿世を破るものなり。

常は都の塵に忙がしきを、偶々夏の避所にものして會得なしたる田園の趣味、何ぞ薄きをそしらん、英の詩人が說きし英の田園は、將してしかく美なるものなりや、我が小說家口を開けば、これが美をいひ聖をいひ、農夫を以て和樂の標本たらしめんとす、われこゝに住む事六年の久しきに及び、嘗て小說紙上にゆめみしと大なる差あるに驚きぬ、人情厚からず、義理明らかならず、金錢と戰ふにこれつとめ、同情の念に乏し、況んや公共の事業等をや、されば學窓に畫きたる山家の情致、小說紙上に得たる田園の趣味は殆んど兒戲に類するをさとりぬ、愚なりける事共なり、里人も人間に非らずや、都人も人間なり、都にあきて田舍に入る、何のたのしみかある、暫らくは田畑のもの珍らしきを愛すべし、臼のおどろ〳〵しきも興あるべし、弱き人間に何の相違やある、罪あり、惡あり、嫉妬あり、かくても猶田園のたのしさをゆめむる、我は同じう不運に泣くほどならば、都人となりて大泣きに泣かん。

（完）



學藝

# 春の自然（中）

藤堂梅軒

春の自然は、最早前の月に序幕が開いて、既に本誌の三月分に、其の上の巻が舒べられた。そういふ中にも自然は、段々、押し進んで來て、早や、春の半となつた。從つて、こゝに、其の中の巻を物しなければならぬ場合となつた。

さて、春の自然が、今や其の半に達したといへば、何人も百花爛熳の景を憶ふであらう。百花―實に櫻の花を始めとして、桃の花、海棠の花、山吹の花、紫木蘭の花晩咲の紅梅の花、梨、李、木瓜、樣々の薔薇の花より菜種の黄い花、大根の白い花、蒲公英の花、菫菜の花など、庭に園に、野に山に、千葉萬葩。實に杖を曳くに暇なしとは、此のことであらう。春の半とは、決して自然の發暢が、半分だけ進んだといふ意味ではなくて、其の光景が眞盛りに達し、萬物悉く時を得がほに、展び〱して、謂はゆる花笑ひ鳥歌ふといふ季節を指すのである。誰れか又、此の陽春駘蕩の好季節に、家にのみ籠つて、惱ぎ居るものがあらうぞ。

櫻の花を手折るもよいが、すみれ　たんぽゝを摘むも亦自然を樂しむのである。自然を樂しむ？　左樣、其の色を愛で香を喜ぶも亦、自然を樂しむのである。さりながら、其の美しい花の構造、其の芳しい香の由て來る所を究めるに於ては、自然の樂しみは更に深い。

そこですみれの花を摘み取りて御覽。すみれの花には、濃い紫の色もある、淡い紫の色もある、又小くて白いのもある、澤山に產するものには、黄色の種類がある。此のように、花のちがふだけに、種類も少しづゝは違ふが花の組立に於ては、何れも大した差別はない。しかし、これを全く他の植物の花に比べると餘程の相違がある先づ其の瓣を御覧。五枚ある瓣が、チヨツト梅鉢のよう

に圍んでは居るが、其の五枚の大さと形とが不揃である。そうして其の最も大きな一枚が、下向きに在りて、其の本が筒のような長い嚢になつて居る。何だか天狗の鼻を、後の方へ突き出して居るようである。それに花の柄が、一旦上向に曲がつて、それから下の方へ長く延びて居るから、天狗の假面を吊り下げたかの如く見えて、容子がチヨツト面白い。上圖の(イ)と(ロ)とを見比べれば、此の邊が悟られるであらう。

次に其の雄蕊(ニ)雌蕊(ホ)を調べて見ると、これも亦變な



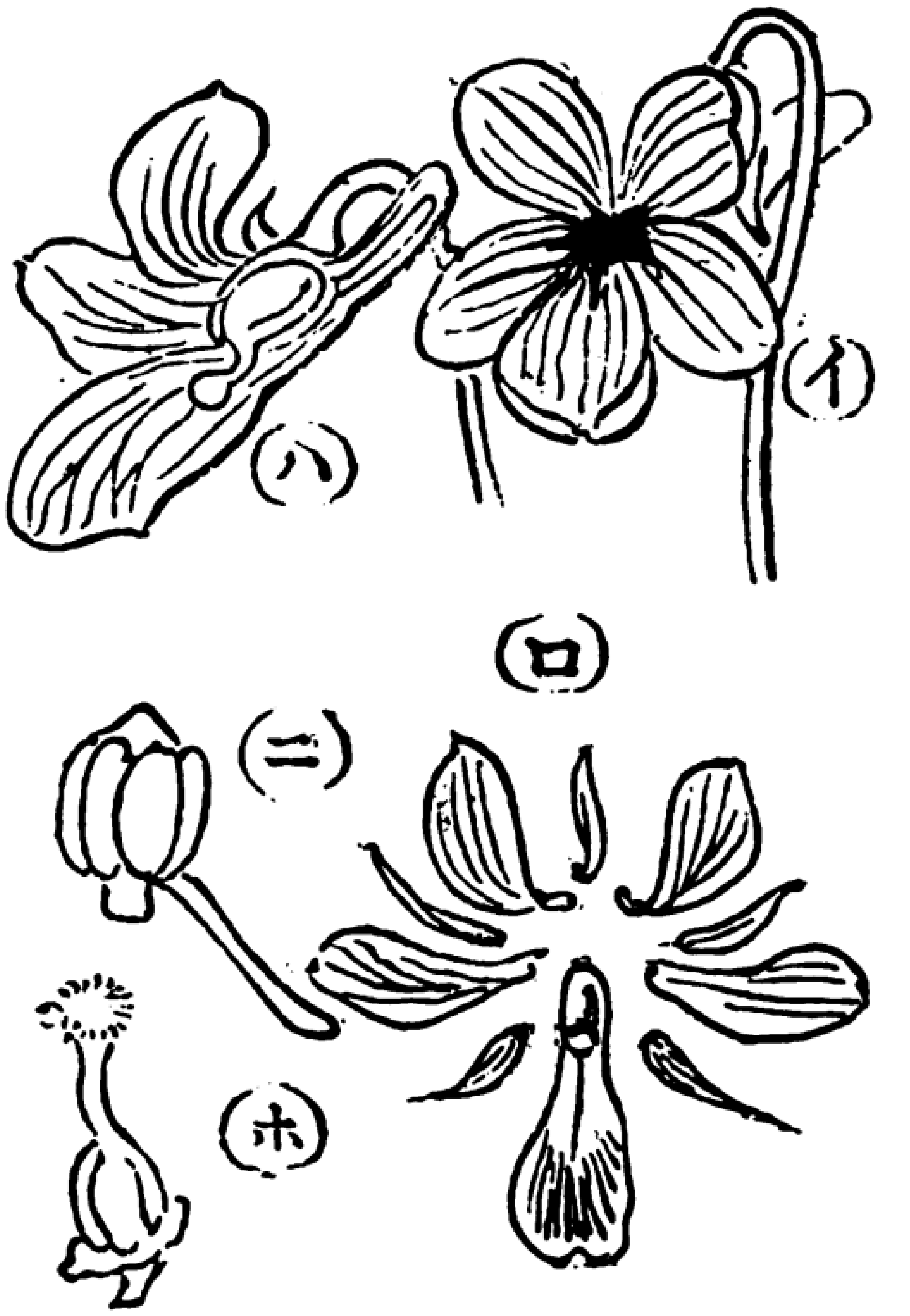
百花爛熳の景



形である。雄蕊は五つあるが、何れも短くて、それが亦短い一つの雌蕊を取り圍んで居る。そうして其の雄蕊の二つだけが、後の方へ、一本づゝの長い角のようなものを突き出して、それが丁度、瓣の長い嚢の中に入り込んで居る。前圖の(ハ)は花を半分に切り開いたものでこれを見ると分かる。花の着き方によりて、蕊などが、皆横倒しになつて居るであらう。そうして、雄蕊は、其の頭ばかりを、僅に突き出して居らう。

サア、此のような花の組立てあるが、どうも、梅櫻の花

などとは、餘程趣が變つて居るてはないか。これには抑も理由がある。全躰、花は虫の媒介によりて、花粉を此の花より他の花に移して、それて健全な種子が出來るといふことは、分かつて居るであらう。そこて、此のすみれも、亦蜂や虻のような虫を待ち受けんばかりに面白い具合に出來て居る。先づ、花の後へ突き出て居る長い嚢の中には、甘い蜜汁を貯へて居る。その蜜は、其の中へ差し込んて居る角のようなものが、これを製造するのてある。今、虫が此の蜜を舐めようとするには是非とも、花の最も奥深い此の嚢の中へ、入り込まねばならぬ。そうすると、雄蕊を掻き別けてなければならぬ。これが即ち、花粉を虫の躰へ、自然と粘り着けるに都合が善い。それて、虫が蜜を舐め了れば、花粉に被ら




れたまゝ、他のすみれの花に入り込む。そうすると、其先に突き出て居る雌蕊の頭に、それを塗り着けて、それから、又雄蕊を掻き別けて蜜の所へ竄り込むのてある。何ても、花粉を運ばせようとするには、このような裝置も甚だ面白い。それに其の花の形が、チヨツト風變りてあるは、虫の目に附き易くするためてある。又其の瓣の一枚だけが、特別に大きくて、前の方へ受けように、差し出て居るのは、尋ね來た虫の足場にならせんがためてある。

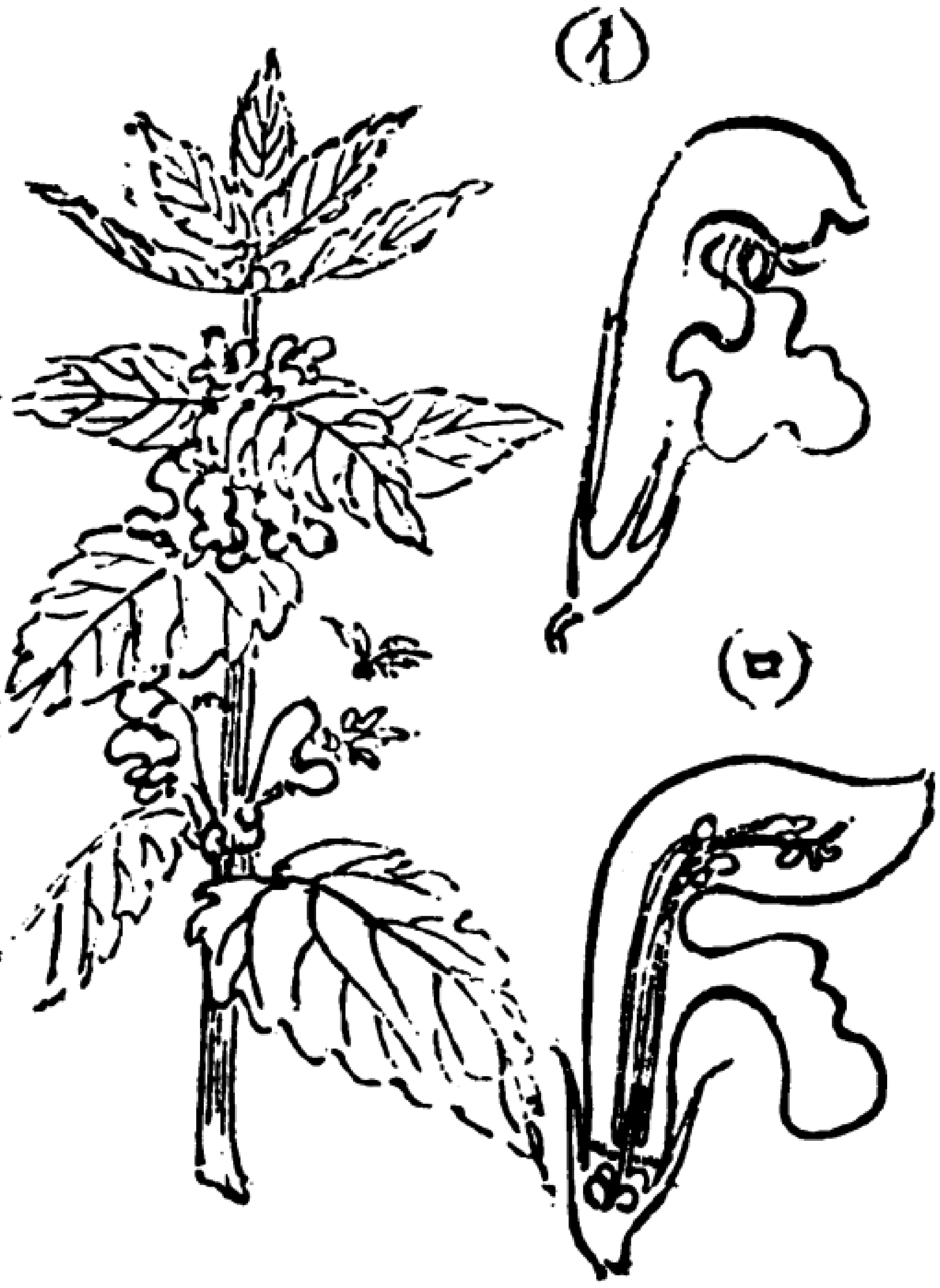
今月も中過となれば、所々の草原に、又面白い形をして居る花が、其處此處に咲いて、隨分五六月頃までも長く續いて居る。それはをどりこそうといふて、一二尺もある莖の頂から數段に、集まりて莖を取り圍んで居る。其の葉は、チヨツトしそのよ

うて續く、それが、角形の莖に二枚づゝ相對して生じ、其の柄の基に花が群つて居るのである。

さて、其の花が面白いので、其の色は淡紅の暈で、それに濃いと淡いとの區別がある。其の形が餘程不思議でザッと圓筒の狀で、其の緣が二つに裂けて、チヨツト人の口の上唇と下唇とを少し開いたやうである。それで丁度、笑を含んだ口のようで、これなどが、世に謂はゆる花が笑ふといふのであらう。左の圖(イ)を見給へ、見る人も亦、それに釣られて、笑を含むであらう。それて植物學では、此のような花を唇形花といふのである。此の唇形をなして居るも、亦これ風變りて、勿論虫の目に附き易いためではあるが、其の下唇が殊に大きくあるのが、即ち虫をして容易く其の上に止まらせる足場なのである。そうして其の上唇は雄蕊や雌蕊を適當に掩ふて、雨露を防ぐ用をする。花粉といふものは、無暗に雨露に暴らされるを厭ふて、若しも、そうせられると忽ち凋み枯れて、用をなさなくなつて了ふ。

そこで、虫が此の下唇に止まると、直ぐに內側を窃ふて蜜の所在を探す。處が、其の蜜は、チヨツトは近い所には見えない。奥深い圓筒の底に溜まつて居るから、どうしても、身を窟つて、入り込まねばならん。それて都合よく、花粉が上の方なる雄蕊の先から、虫の躰へ塗り着けられる。充分に蜜を舐めた上は、其處には最早用事がない、直ぐと飛ひ去つて、他のをどりこそうの花に止まつて、花粉を雌蕊の頭に附けることが出來る。よく〳〵花を摘んで、驗めて御覽。一本の雌蕊と四本の雄蕊とがあつて、其の雌蕊の先は二叉になつて居り、其の雄蕊には長いもの二本、短いもの二本づゝがある。何ぜ、それが二叉になつて居るてあらうか。何ぜ、それが長短の二種あるのであらうか。雌蕊の頭が、二叉になつて居ると其の成熟しない間は、閉ぢて、花粉を無駄に附着けないようにし、成熟すれば、充分に開いて、其の內叉に花粉を附着けさせるようになつて居るのです。それから、雄蕊の四本ともが、若し皆同じ長さであらうならば、下の二本だけは、其の花粉をよく虫の躰に塗り着けることが出來ようが、上の二本は、何も用はなさないことゝな

る。それて、其の長さを異へて置けば、こんな不都合なことがなくなるのであります。
今をどりこそうの花を、數々調べて御覽。或る花には、雌蕊が著しく、其の頭を上脣から露して居る。或る花には、雌蕊は一向露れないで、雄蕊が、よく目立つて居るのがある。何ぜ、そうであるか。
これにも亦理窟があるのです即ち此の花は、雄蕊が先づ成熟するので、そのときは、雌蕊は一向頭を露さない。それで虫が止まれば、只ゝ花粉が取り去られるだけである。既に雌蕊が、成熟するようになれば、雄蕊は凋びて縮まり上つて了ふので雌蕊の頭ばかりが、著しく伸び出るそのときには、他の花からの花粉を受取るばかりであります。
こゝに、一つの疑が、起つて來ませんか。成る程、蜜を花の底に溜めて、それて、花粉を都合よく運ばせることが分かつたとして、若しも其の虫が極めて小くて、其の躰が、雌蕊雄蕊に觸れないようであらうならば、其の蜜は徒らに小い虫に吸ひ取られて了ふだけて、肝腎の大きな虫のためには、ならないことになります。ソコが天然の妙理て、そんな小い虫に、徒らに蜜を取り去られないようになつて居る。それは花を縦に裂いて、其の内側の底に近い所を、熟々と見るがよろしい。短い毛の列が、其の内側を取り圍んで居るであらう。前圖(ロ)を見ても分かるてしよう。
それが、小い虫の這り込んで來る路を堰き止めるためである。小虫が強いても、入り込まうとすると、其の頭が毛に妨げられて、迚も思ひ斷るより外がないような具合になつて居ります。どうてす、自然の用意は實に行



き屆いたものです子。

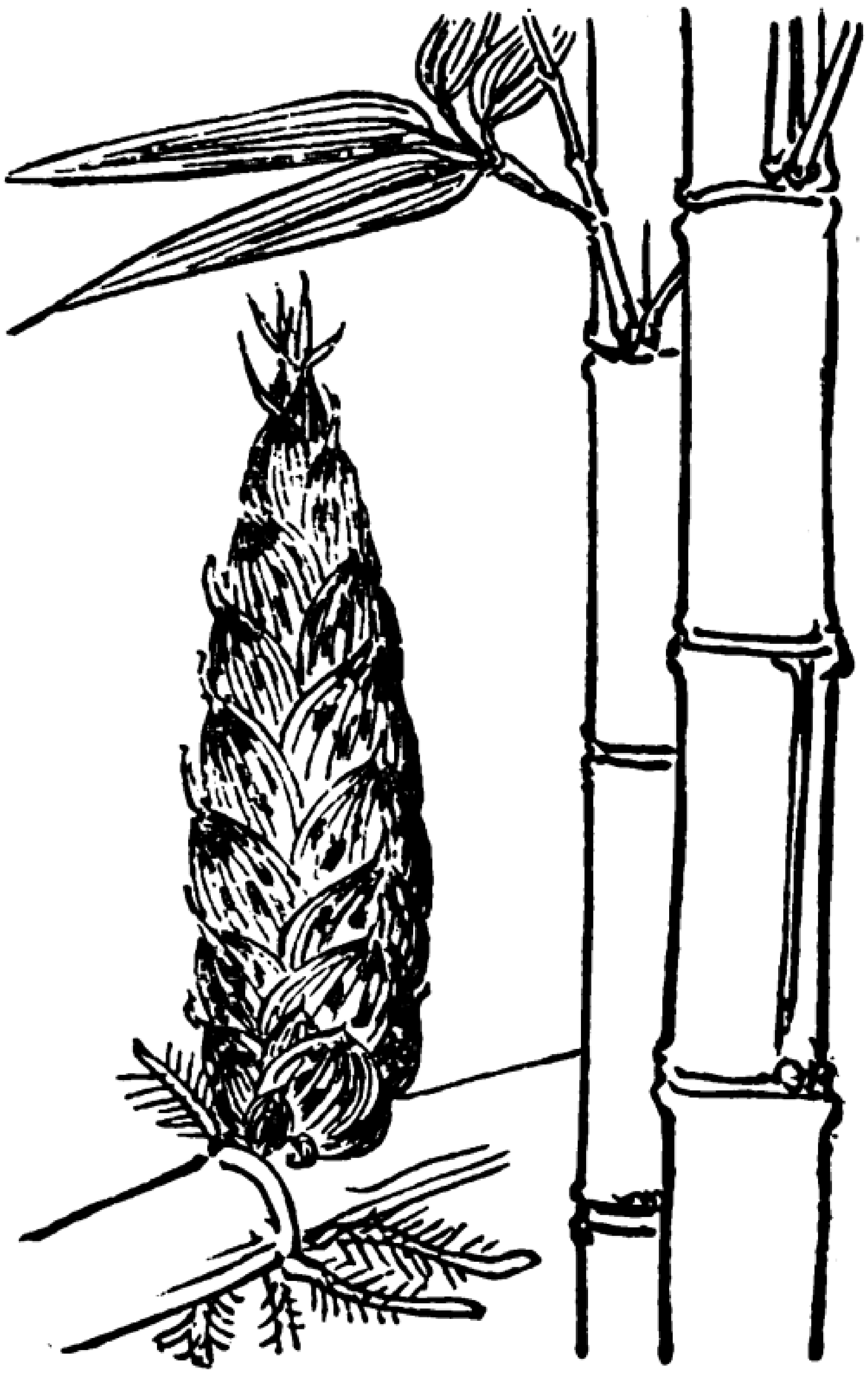
サテ、こういふことては、花の組立も、中に苟初のものではない、それ〳〵天然の妙を盡して、それ相應に種子を結ばせるように出來て居ることが了解されたであらう。花ばかりではない其の出來た種子や實までも、成るべく廣く蒔き散らせるようにエ夫されて居るのてすたんぽゝを御覽。此の頃すてに、チラホラたんぽゝの毛毬が見えるようである。試しにそれを吹いて見ると其の毛が縱橫無盡に飛び散ります。其の一の毛といふのが、即ち、一つの實に、一本の長い細い柄があつて、其の頭に車の輪のように毛か並らんで居る。此の毛がある以上は、恰も馬船に乘つたようなもので、遠方へ散じて、所々に繁殖することが出來る。どうかすると、たんぽゝなどの類が樹の高い上、屋根の上などに出來て居る處を見ることのあるは、即ち其の實が、此のようにするからである。




さて、たんぽゝの實の毛が、元とどうして、生じたのであらうか。先づ其の小花一つを摘み取りて御覽（前圖の(イ)）瓣は元來五枚あるべきが、合併して一枚の舌のような形となり、其の基が、子房の肩のところに終り、子房は全く萼で被はれて、其の萼の上の緣が毛となつて居る、これを瓣毛とも又冠毛ともいふのでありますす軈て、花が衰へて瓣散り雄蕊失せれば、萼の上の方の括れて居る部分が、雌蕊を中の軸として段々延び上り、全く頂にまで達すれば、其の毛が丁度傘を開いたようになるのである。

たんぽゝの莖を切り離せば、中から白い乳のような汁が出て來る。此の汁は餘り薬でもない、實は少々毒である。ところがたんぽゝの若葉は、これを浸物にして食べて、別段に毒に中ることがない。それは一旦これを湯煮るものだから、毒が拔けるのであります。此の頃たんぽゝに似て、花の瓣が少くて、葉に餘り缺刻がないものが、亦所々に咲いて居る、これはにがなといつて、矢張り白い汁を出し、嘗めれば苦くある。これも亦其の葉を浸物とします。

たんぽゝやにがなは菊の類である。菊の類には其の若葉の食べられるものが多くあります。ふきちしやなんかは隨分食膳に上される。此の頃は既に過ぎてしまつたが、彼のふきの塔といふものが、即ち其の花で矢張りたんぽゝのように菊形である。ちしやの花は我々は殆ど見ないが、それは畑で、花が咲くまでに拔き取つて食物にするからである。春の温かな日に、野邊の若菜摘をするとは、即ち菊類の若菜を摘むので、それはよめなやよもぎのことである。よめなの花が、淡紫で全く菊の形であることは、夏頃に至れば見られる所です。よもぎも夏の頃に小さな菊の花を群がり生じます。



百花爛熳として、咲き亂れる頃になると、右の通り花の研究に忙しくなつて、それに若菜摘などの面白い遊もある、食物も追々と、若葉などの、生々としたものが膳に上るが、こゝに、此の頃、大に膳の上を賑はすものがある。それは、先づ筍の新料理であらう。筍とは、誰れも竹の子と思ふが、サテ、竹の何處から生ずるであらうと問へば、竹の根からた

と答へるでしよう。それは、根のようで、實は地中に隱れて居る莖である。根は別に、其の節々から、鬚のように出て居る。筍の姿を見ると、澤山の葉で包まれて居るでしよう。其の葉を籜といつて、筍が未だ弱い間に、出來るだけ、衣服となつて、寒さを防ぐ用をなすのである。全躰、筍といふのは、矢張り竹の莖で、地中の莖から分かれた枝ともいふべきもので、其の籜は、即ち尋常の葉が少々形を變へたのである。尋常の葉では、其の葉柄が扁いけれど、全く莖を卷いて居るが、筍では、其の葉柄が甚だ扁く濶がつて居て、反つて葉身の方が餘りに小さくある。此の籜は筍が成長するまで、隨分永く留まつて、これを保護する。そうして其の成長は極めて速いもので、ヤツト、一二尺の筍が、ハヤ、一月も經ては、一二丈の高さに達します。シカシ、其の當座は甚だ脆くて、下から振り搖せば、其の頂を折ることが出來る。筍を盛に作らせようとするには、此の通りにして、其の心を止めるといふそうです。

筍として最良の品は、孟宗竹に生ずるもので、總躰に太くて肉が多く、味が甚よろしい。前圖にあるのは、苦竹の筍で、痩形で籜の上に紫の斑がある。其の味は少し苦くて、餘り賞味はしない。此の筍によく似て居るものは、淡竹ので、只々籜の上に斑がない、それに味は苦くもなく、先づサツパリとして居る。

竹に種々あつて、俗に四十八竹といつて居るが、實はモツト多くて六十種以上もある。シカシ大抵は種類といふよりも、變種といふ方で、少しづゝ變つて居るだけです。通常、竿、樋、柱などに用ふるのは、苦竹、淡竹であつて、淡竹は、其の幹に一條の凹溝があるから、直に區別がつきます。孟宗竹は幹が太くて、葉が遙に小くて茂るもので、竹材としては、淡竹苦竹のように多く用ひられない、これは脆いからでもある。其の他、庭前に栽える大明ちく、鳳凰ちく、琉球ちく、くまざさ又籬根にするかんちく、くれたけそれから煙管のらう團扇の骨に製するめたけ行李や提籠を編むすゞたけ矢の柄に造るやたけ旗竿、釣竿にするしのちくなどいろ／＼あります

是の次には春の自然の（下）を出します。

# 花の吉野山（上）（歴史地理）

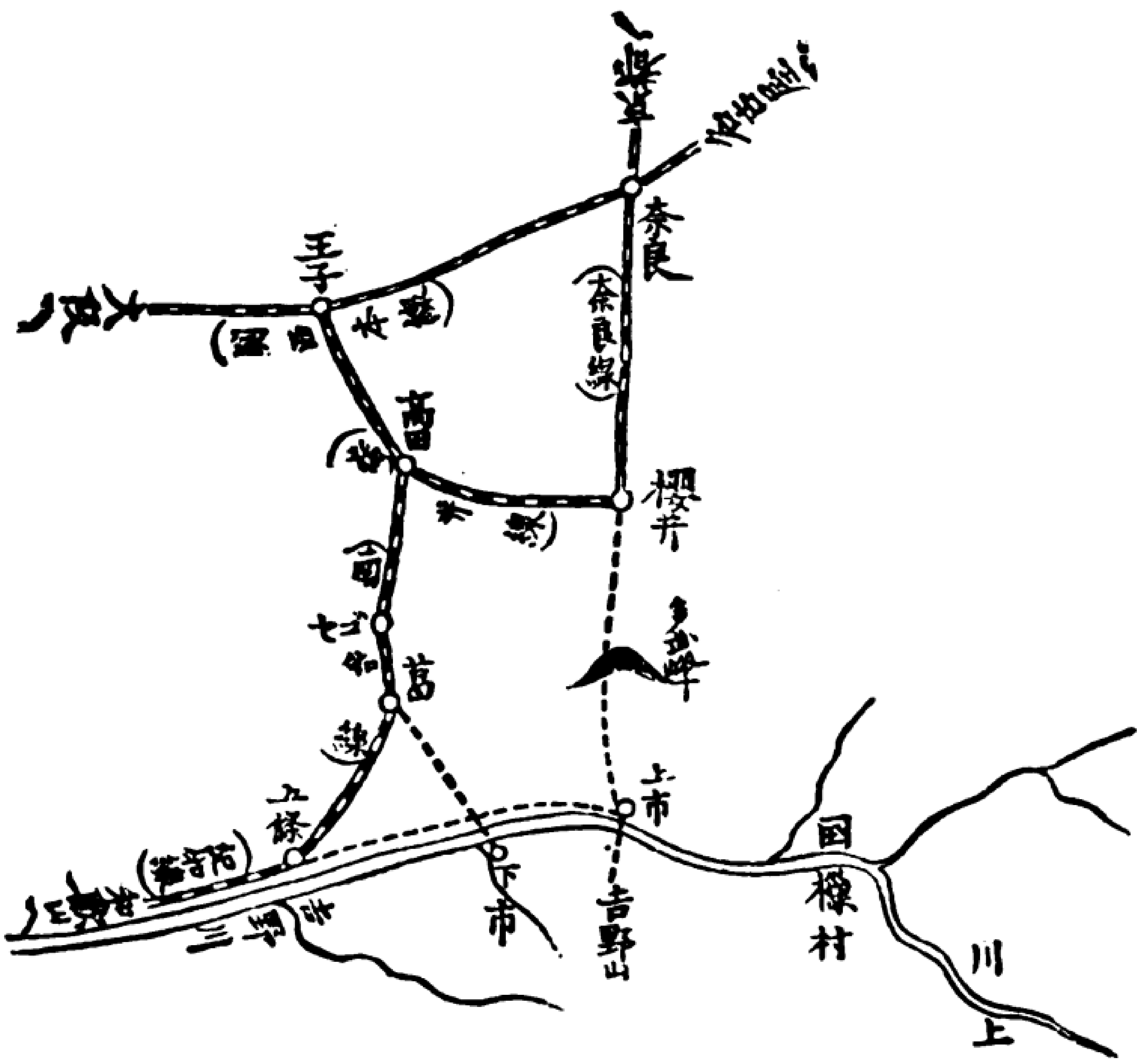
文學士　喜田貞吉

これはこれは
　とばかり花の吉野山

これは、貞室が吉野山の花の立派なのに魂消て、開いた口の塞からなかつた光景の俳句で、

よき人の、よしとよく見て、
よしと云ひし
　吉野よく見よ、
　よき人よ君、

といふ歌は、天武天皇が吉野の山水の好景を、めでさせられての御製である。吉野の山の美は、むかしも今も變らない。




吉野の地は、大和のうちでも南方に僻在して　おのづから別の區域を成して居るから、こゝには特別の人民が住んで居た事も古書に見え、また歴史上にも、特別の事柄が往々にしてあつた様である。殊に、其地の景色がよいので、古くから離宮の設があつて、代々の天皇の、ここに行幸せられた事も、古書に見えて居る。尤もこの吉野の離宮は、何時のころから置かれたか、よくはわからぬが、すでに、應神天皇がこの宮に行幸したまひたる事も見えて居り、又、萬葉集の歌にも、「神代より、吉野の宮のあり通ひ、高く知れるは山川を……」など詠んである事を見れば、餘程古くから、殆ど語り傳へもな

い程のむかしから、すでに設けられてあつたに相違ない。

而しこれ等の離宮の地は、今日の吉野山とは、多少場所を異にして居て、今の所謂吉野よりは、稍吉野川を上流へ進んだ方てあつたのてある。其場所も、必しも一ト所てはなく、今の國樔村の宮瀧、川上村の大瀧などの邊にあつた樣てあるが、何しろそれが廢せられてからでも、千年以上に成るものだから、詳しく書いたものも、考へたものもなく、其地點も明にはし難い。

これ等の事に就いては、詳しい研究も必要てあるが、それは一と先、預りとして、目今吉野の花盛りの季節も、間もない事であるから、花見の道筋の案内樣のものを述べて、ところどころに、興味ある故事來歷を附記しようと思ふ。

之を歷史上から云ふと、同じく吉野といふうちにも、上世の吉野と、近古以降の吉野との別がある。近古以降の吉野は、即ち今日の所謂吉野で、山一面に櫻があつて、貞室が「これは〳〵」と驚いた吉野てある。古代の吉野は、即ち右に述べた如き、離宮などのあつた方の吉野で今日は遊覽の人も多くは無いが、實に山水の景色は、此方に却て勝れた所があるのてある。今日の所謂吉野とて、勿論山水自然の美に富んて居ないのでは無いが、それよりも一層櫻が見事なので、山水の美は却てそれに押されて居る。即ち今日の所謂吉野は花の吉野で、むかしの所謂吉野は山水の吉野とでも云ふべきものである。

花の吉野へ行くには、そこまでは鐵道が通じて居ないから、多少は車にも乘つたり、又、徒歩もせねばならぬ。先づ出來るだけ鐵道を利用しようには、左の二樣の順路がある。

一、關西鐵道櫻井線の高田驛から、南和鐵道へ乘り換へて、其の葛驛で下車し、それから下市へ出て、六田から吉野山へ上る事。これは最も多く鐵道を利用する方法て、鐵道を離れてからの道が一番近く、よい道が出來て居て、最も容易の道てある。

二、關西鐵道（大阪の方より來るものは）、又は奈良

鐵道（東京、京都などより奈良を經て來るものは）、にて櫻井驛まで來て、それから下車して、南の方多武峯を越え、上市へ出て、吉野山へ上るのである。此方は前のから見ると、鐵道を離れてからが稍遠く、道も前のよりは六かしいが、而し其道筋には、鎌足を祀つた多武峯の談山神社へ參詣する事が出來るので、遊覽の性質には却てかなつて居る。

此の外、泉州、紀州などから來る人は、五條から川傳ひに、吉野川に沿つて、東へ上るもよろしからう。

この吉野川に沿うて上る道は、紀伊の和歌山から、南部伊勢へ通ずる要路であるが、むかし神武天皇が、大和御打ち入りの節も、一部分はこの道に據られた樣である。この時に鵜飼等の先祖、國栖等の先祖など云ふ者どもが、天皇に拜謁した事が、古史に見えて居る。以てこのころ、すでに吉野川には、鵜をつかつて魚を取るもの丶居た事も知られるが、國栖と云ふ、一種變つた住民のあつた事も、これてわかる。國栖とは、吉野川の河上に古くから住んで居た、一種の種族の名て、毎年朝廷へお辭儀に出て、土産物として、吉野川の年魚や、山間に出來る菌類を献上し、國栖獨特の身振をして、歌をうたつたものだとの事である。古書にこの國栖の事を記るしてあるのを見るに、其性質極めて淳朴て、常に山の菓物を取つて喰ひ、又蝦蟇を煮て之を上食として居た樣である。其居所は、峯が險しく谷が深く、道路が困難であるから、容易に出ては來なかつたが、應神天皇が、吉野宮に行幸せられた時に、始めて出て來て、手づくりの酒を献上してより以來、屢々入朝する事と成つた。今日吉野より上に、國樔村といふがあるのは、即ちこの國栖人の名殘を村名に留めたのでやがて離宮のあつたのも此邊と思はれる。

さて、話説もとへ戻つて、これより第一の順路を取つて南和鐵道葛驛から、花の吉野山へ上らう。

葛驛で下車して、東南の方へ山を越えると、二里あまりて下淵へ出る。これはすでに吉野川の北岸て、之から橋を渡ると、すぐに下市である。こゝから十津川郷へはいる道が分れて居て、山間ながらも、賑かな町を成して居

る。町に鮓屋といふ宿屋があつて、それは淨瑠璃の「千本櫻」に、平の維盛卿が平家滅亡の後に、此吉野へ忍んで、鮓屋の彌助と身を扮して居る事を作つてあるが、其の淨瑠璃の鮓屋が、即ちこの宿屋の鮓屋であると云ふ事て、遺物などまで、傳へて居るのは妙てある。但、鮓屋の庭園は見事なものて、それは一見の價値がある。

下市から川に沿うて上る事一里半あまり、六田へ出る。之は即ち吉野山の麓で、吉野川の水が、一旦こゝて淀んて、居るので、六田の淀などゝ云つて、むかしから名所と成つて居る。古歌に、

今よりは、散りも惜しまじ、吉野なる
　むつだの淀の、花のしらなみ

などよんてあるのは、吉野山の櫻が、散つて、流れて、この淀みへ集つて居るのが、見事てあつた有樣を見ての歌と見える。

六田からだん／＼と吉野山へのぼる。此坂は一の坂と云ふので、道の兩側ずつと櫻の樹ばかりてある、八田知紀の歌に

吉野山、霞の奥に知らねども、
　見ゆる限りは櫻なりけり

とあるのは、實によく、この景色を述べ盡した歌である

この櫻の間をたん／＼上つて行くと、八町ばかり上つて右側に、官幣大社吉野宮の社殿がある。近年の創建で白木づくりの御殿まだ新しく、極めて莊嚴である。此宮は、此山で崩御まし／＼たる、後醍醐天皇の靈を奉祀いたした所、天皇は英邁にまし／＼て、一旦北條氏を倒して建武の中興を成されながら、遂に足利尊氏の爲に京都を去つて、この山中に御身を終られたのは、誠に畏多い次第である。

## 鑛毒の話（科學）

松琴女史

此樣な表題を掲げますと新聞紙の論説じみて居りますが別に六ヶ敷い議論ては御座いません御案内の通り當今世間で困難な問題となつて居ります足尾銅山の鑛毒

問題でありますが何も鑛毒と云ふのは足尾には限りませんせん何れの鑛山にもあります事で唯夫れが甚しくなければ人の口には上りません

さて鑛毒とは如何なるものか又如何にして出來るものか如何にして防がれるものかと申ますと詳かな事は專門家でなくては分かりませぬが唯概略を述べようと思ひます

是等の問題は吾々婦人には關係の薄い事の樣で御座いますが其實決して左樣でありません例を取りますと日清戰爭で日本軍隊の名譽が世界に廣まりまして以來頑是ない五六才の子供迄が僕は軍人になると申します樣な次第で又前年海軍の軍備が擴張せられる氣運に向ひましてより造船學生の志望者が頓に增加して參りましたのでも又其他の例もありませうが何れにしても世間に顯はれます時々の問題は小供から靑年迄の頭腦を刺擊して後來の日本國民として立つ其職務も大抵之から定まります、左樣ですから殊に少年の腦は決して間違のない樣に刺擊せしめねばなりません、是等の事は吾等の務めであらふと考へます足尾の鑛毒事件が小供の頭に何程影響しますかは只今では分かりませんが此問題につき小供の親なる吾々は多少の知識を具へて置く事が必要かと信じます

先づ所謂鑛毒の原因と申しますものを分けますすと

一、鑛毒
二、煙害
三、山林の濫伐

順々に一つ〳〵に述べますと

一、鑛毒、金屬の化合物を產出します鑛山の內で黃鐵鑛の多い銅山を採掘しますと鑛水と云ふものが流れ出ますつまり金氣の多い水で御座います、是は岩石中にある白鐵鑛や又は黃鐵鑛の自然に空氣と水の爲めに分解されて硫酸が出來ます此硫酸が銅鑛に作用して硫酸銅即ち丹礬が出來ますので之が水に溶解せられて坑道の斜傾に從つて流れ出るのです、別子銅山の鑛水の成分を擧げますと

鑛水一立中に

| | |
|---|---|
| 遊離硫酸 | 一、六五 |
| 結合せる硫酸 | 三、八八五 |
| 銅 | 〇、五一五 |
| マンガン | 〇、四九四 |
| 第二酸化鐵 | 〇、〇五四五 |
| 礬土 | 〇、〇八三 |
| 酸化カルシユム | 〇、六七三 |
| 苦土 | 〇、九八五八 |
| ホタシユム、ソヂユム鹽類 | 〇、三六六一 |
| 計 | 八、〇六三八 |

何れの鑛山の鑛水にしても之と大同小異であります此中で動植物に直接間接に害を與えるのは遊離硫酸硫酸鹽類殊に硫酸銅と硫酸鐵であります

此鑛水が地表を流れますと遊離硫酸は地中の鐵鹽と化合して第一硫酸鐵となり此硫酸鐵は水と空氣の爲めに分解せられて再び遊離硫酸を作るのであります

$$4FeSO_4+2O+2H_2O=Fe_2(SO_4)_3+Fe_2O_3+H_2SO_4$$

第一硫酸鐵　空氣中の酸素　水　鹽基性鐵鹽　遊離硫酸

こゝで出來た鹽基性鐵鹽は水に溶解せざる黄褐色の沈澱を作りますから流水の黄色になつて水がさも〳〵毒々しく見えます

之に對する除害の方法は如何と申ますと鑛水を長い溝へ導きまして此溝の底に鐵屑を入れます、溝の終りはコークスの入れてある塔であります此中を鑛水が通過します

溝中で如何なる變化の起るかと申ますと溝水中の硫酸銅は鐵に作用せられて銅が分出せられて一面に鐵の面上に附着します此銅は取り集めて製煉所へ送ります

コークス塔から出た水には鐵鹽と硫酸がありますから之を其儘に放流する譯には參りません此中へ石灰乳を混して酸性を中和せしめ更に沈澱池に送り固形體を沈

降せしめ上澄みし液を放流します
次に述べますのは撰鑛所より來る水の始末であります坑夫が坑内から採掘する鑛石は鑛石と脈石と相混合して居りまして製煉にかける迄には撰り分けねばなりません初めには人の手で一々撰り分けて上鑛とカタハ（鑛石と脈石と相混せるもの）と捨石とを區別します次にカタハは更に器械で碎いてはより分けかくしてもはや人手では撰分けにくゝなりますと今度はユルのであります之は各鑛物の比重の差あるを利用して分けますので勿論器械を用ゐて仕事致します此手數を致す處を撰鑛所と申します
此撰鑛所から流れ出る水の中には銅鑛の粉末と脈石の粉末とが浮遊して居りますので之れ又沈澱池に送られます
二煙毒　之は鑛山の製煉所のみてはありません苟も大火を用ふる工場では必ずあります事で唯其損害の高に大小があります
今日各工場で動力の根原として居りますのは十中八九は石炭でありませう、此石炭を焚くと煙が出る、石炭の消費額が多い程それ丈け煙害が目に見えて來るのであります
石炭を焚くには何れも高い煙突を設けて焚くのでありますが從て多少の壓力ある空氣中で石炭が燃える事となりますので石炭の粉末は煙に伴はれて出て去ります又石炭の中には常に少量の硫黄が含まれて居ます爲めに焚きて亞硫酸瓦斯が出來ます
此亞硫酸瓦斯も石炭の消費量の多いに隨て多量になりますので倫敦附近の空氣は其容積一千立方米突中に一、六七瓦の硫酸を含みますマンチエスターでは更に多く同容の空氣中に二、五一八瓦あります英國で一ケ年間の石炭の消費量を一億噸と致しまして石炭の中に一パーセントの硫黄があると致しますと煙の中の硫黄の量は實に一百萬噸となります驚くべき額では御座いませんか
製造所の瓦斯のみてはありません汽車の汽關車から出る煙も又沿道へ影響致しますので御座います獨逸の或

る森林學校の附近て一日に六十臺の汽關車の通行します所で煙の屆きます地面では一立の水中に・〇〇一八四瓦の硫黄を含みます煙のきません地面では同容の水中に・〇〇〇八五を含みます遠い國の例を引くに及びません上野の山下の通りを注意して歩かれた方は崖にある樹木の葉か萎縮し或は立ち枯れになつて居るのを見られたでせう

銅山の製煉所より出る瓦斯は石炭を焚いた時に出る煙と比べますと亞硫酸瓦斯の含量は遙かに多くあります從つて害も亦甚しくあります何れの場合にしても空氣中の容積にして・〇〇三パーセント以上の亞硫酸瓦斯がありますと有害の空氣となります

製錬所から出た煙の中の亞硫酸瓦斯は空氣中て酸化して硫酸となり雨露と共に地上に降ち來ります之が爲めに植物は直接に害を被りますが間接には硫酸は砂や岩の嫌ひなく分解して土質を一變せしめます此方からも草木の生長を許しませぬ銅山の近邊は大抵山が兀げて居ますのは之が一の原因であります

之に對する除害の方法は如何に致しますかと申ますと諸所から出る煙を一の管に集めまして之を高い煙突へ導くのでありますかくすると煙は空中に瀰漫して廣く四方に散ぜられるのでつまり之は狹い土地へ甚しい害を與へる代りに廣い土地へ害を分つのであります併し此方法は山間谿谷では行ふ事か出來ません

以上の方法は完全なものてはありません他の方法は煙の中の有毒な成分を除くのであります其綱目丈けを述へますと

甲、煙を水にて洗ひ亞硫酸瓦斯を水に吸收せしむる事之は亞硫酸瓦斯の濃厚なる程都合よし

乙、石灰石にて亞硫酸瓦斯を吸收せしむる事にして之は炭酸瓦斯が遊離せらるべし

丙、石灰乳にて吸收せしむる法にして是は一の高き塔を造り中途に石灰乳の滴下する天井を作り此下に煙を通ぜしめて酸性を中和し然る後に空氣に飛散せしむるのでありますロスドタンの亞鉛鑛製錬所では此方法を採用し爲めに含有量の九十三パーセントの亞硫酸瓦

斯が除去せられます足尾で用ひて居ります方法も之と同一ですが除害の力は稍少ない様であります

かく脱硫塔で瓦斯を洗つた石灰乳は之を他に導いて更に石灰を加え攪拌して沈澱池に送ります

以上は單に除害之目的を達するに止まれども尚進みて此瓦斯を利用する方法を講しつゝあります其方法は

甲、硫酸製造にして之は亞硫酸瓦斯の含量が多き時に用ひらる

乙、無水硫酸の製造

丙、硫化曹達より亞酸曹達を作るに供す

丁、硫化水素と作用せしめて硫黄を還元する事

戊、硫液硫酸瓦斯を作る事

己、瓦斯と水蒸氣とを混じて熱せられたるコークスを充てたる高爐中を通過せしめて硫化水素を作る事

庚、不純之銅を溶かして之より金銀を分採する事及び瓦斯を鐵に作用せしめて綠礬を作る事

以上が主として實地に行はれて居る方法でありますが何にしても亞硫酸瓦斯が濃厚で又不純物の含量が少なくなくては何れも經濟上引合ひませんよし瓦斯が濃厚でした處で副産物を賣出す市場がなければ製造しても致方がありませぬ

我國當今の工業の進歩の程度から考へますとまた此等の副産物を供給するにも需要がありません例令へありましたにした所で極めて僅かで御座います硫酸の如きは石油精製、アルカリ工業、染料製造等に用ひられますが我國では硫黄の産出が多いので歐州の或る國の樣に硫化物から亞硫酸瓦斯を取らすとも硫黄を焚いて直ちに作る事が出來る只今では其方が經濟上都合のよい爲めに黄鐵鑛の如きものを利用しようと企てませぬ

歐羅巴で昔石炭を乾餾して瓦斯を造りました時に副産物のコールターの處分に困まりました實に捨場がないのであります地面へ捨てると不毛の地となるのであります今日は反對で御座います困まる處ではありません腐敗を防ぐ爲めの塗料としてのみならす石炭酸及アニリン色素製造の原料であります黑い臭いコールターから種々の美麗な色素が得られると云ふ事は誠に不思議

の様で御座います獨乙ではアニソンの如き誘導化合物製造を目的として盛に褐炭を採掘して居ります

此様な次第で各種の工業が盛になれば廢物利用の道もつき又必要に迫られて研究も進むので必要のない間は貴重な天産物でも厄介視せられ多くの費用をかけて始末せねばなりません

三、山林の濫伐此事を鑛毒の一原因として擧けますのは不穩當であります又一般に此事がある譯でもありませぬが我國には例の多い事でもありますし又足尾地方でも之が鑛毒の遠地に運搬せらるゝ原因となつて居りますから擧げたのであります

交通の便利な土地は例外ですが元來鑛山と云ふものは運搬の便は欠けて居るもので殊に金屬鑛山が左様であります

運搬が不便でありますと自然供給を四近に仰ぎますので鑛山で必要であります燃料、支柱、建築材として有用なる木材は若し此附近に森林があれば之から伐り出します之は自然の勢でありませう

鑛山での材木の需要は他の工業と比べて勝るとも劣る事はないので企事の規摸の大なる程益々需要の度を高めます夫故に良き森林があつても立處に伐り盡しますので御座います夫ならば跡から植付けたらはよかろうと申しますと樹木は僅々數年の間に生長して大なる樹木とはなりません加之土質は煙毒の爲めに腐爛して參りますから樹木の生活を許しません足尾では近年頻りに竹を植付けて山骨の削落を防いで居りますが成績は其後如何で御座いますか存しません

何に致しましても硫化物の出る鑛山の附近は赤兀けになり勝ちであります

玆に改めて申す迄もありませぬが樹木は水を貯蓄する効用をなすもので御座います草木で掩はれた山谷は降雨かありましても其水の多分を根に吸收して徐々に放出し間斷なく谿流を養ふもので旱天に際しましても水の全く涸れる事はありません之に反して草木のない兀山は降雨の際に土壤の含み得る丈けの水を吸ひ取りました上は餘剩は悉く谿流に放流しますが從て一時に氾濫

する次第で降雨の量が多ければ下流は忽ち洪水となります

然るに撰鑛所や製錬所は便宜上谿流の近邊に設けられて居ります隨て撰鑛所の餘水や捨石やカラミは谿流の近所に捨てられます之が爲に一旦洪水となりますと是等の鑛滓が遠く下流に押流されます、是等の鑛滓の中には多少の酸類及び金屬鹽を含量して居りますので之が水に溶けて所謂鑛毒となるのでありまゞ日本では河水を灌漑に供しますので害の及ぶ處は更に廣くなります

之が爲めに現今足尾ではカラミや捨石は山頂の高所に捨て鑛水等は前述の通り毒分を去りますが除害工事が施こされた以前に捨てられた鑛屑が河床にありますので鑛毒は依然として廣まります

我國には銅山の既發のもの未發のものが隨分至る處にある事で御座いますから將來には數々の鑛毒事件が續出する事でありませう誠に困まつた次第で御座います

（完）

# 雲雀の話（動物談）

農科大學　K　M　生

一年中の好季節、野邊は一面の若草で天然の靑毛氈を敷きつめたごとく、樹々の梢は若芽を吹き出して柳の枝も煙れるやうに、山々の雪も鹿子斑になつて見ゆれば遠山には春霞たなびきそめ、菫や蒲公英、其他名も知れぬ春の草花が路傍に日傘の行列を作れば、心地よい風が一種得ならぬ香りを吹き送つて自然と人の心を浮き立たすといふ春景色折柄裾野に初雲雀の鳴き聲、あゝなつかしかつたと老も若きもとも〳〵にこの長閑なる春の日和の麗らかさを喜び迎へるであらう、實にや雲雀は春の女神、この君ありてこそ春の天地も長閑なれ、この君鳴きてこそ春の日和もいと麗なれ、長閑かなる春の天地と麗かなる春の日和になくてならぬものは雲雀なり。

古人歌ふて曰く

霞つる空こそあらめ草の原

落ちて見へぬ夕ひばり哉
夕ひばりわかるゝ山の風はやみ
ふかれて聲の空にのみして

又

草の名の母子まじりに聲さく
野をなつかしみ雲雀なくらむ
暮るゝまていきかひ繁き道のべは
空に雲雀や落ちかねて鳴く

雲雀の羽毛は通常背部は茶褐色にして數多の黑き斑點あり、されど夏季に至れば茶色の部は多く摩れ耗りて黑色の部分の顯はるゝものなり又腹部は白色にして後趾の爪五六分の長に達す、此の鳥多く原野及び耕地(多くは麥畑)に在り春四月頃より巢を營みそめ一年四季に亘りて本邦に留まる、通常の雲雀の外に又濱雲雀といふあり、形少しく小形にして額頰及び上胸部の黑色なるによりて識別せらる、此の鳥は歐洲亞細亞及び北亞米利加の北部に普く產するものにて本邦には極めて稀なりと云ふ



扨て雲雀は春の初めより鳴きて天高く舞ひ揚るをもて人のよく知る處なるが其遠く響きて止むことなく甚だ喧かしきものなり、四五月頃麥畑に巢を營みて雛子を育つ、初夏の頃麥を刈る時は儘々其雛を捕へ得る事あり、其鳴くや春より夏へかけて盛にして秋に至りて止む、又飼ひ鳥として馴らす時はそれよりも永く鳴きて聲もまた高きものなり。

我邦にては古來言ひ傳へる雀雲の名所はまづ武藏野、吉野山(大和)美豆野(上野)比叡の山(近江)飛火野(大和)等なり、されどこの鳥はいづれの田野にも產するものにて春の野に雲雀はつき物として知られぬ。

扨て雲雀の巢を營むは毎年四月頃にして草中の地を茶碗の大さ程の穴を深く穿ち周圍に草藁を入れ其の內に細き長き草の根を幾株となく集めて之れに馬の毛髮の類を重ねて總て三重に作り其中にて卵をうむこと通例四個其大さ蓬萊豆ほどの物にて可愛らしく且つうるはしきものなり。

此頃は雲雀は保護鳥の一として制限せられ居るゆゑ八

月中旬以後ならでは捕獲する事を得ざるの制なるが一躰この鳥の性質至つて疑心深く且つ機敏なれば冲天より飛下する時も直ちに己が栖に下らずしてまづ數十歩の外に下り而して後疾走して常栖に入るものなりといふ、又他の鳥類の如く多く群集することなきを以て網にかゝる事甚だ稀なるが如し、されば昔時は犬を使役して之れを逐出し鷹を放ちて捉へしめ又雲雀打と唱へ草叢の間を割竹等にて無暗に打ち廻り驚いて飛び出づる所を網にて覆せたりともいふ。雲雀の肉は甘脆にして幕府時代には諸大名の家々にても之れを賞味すること雁鴨とひとしくそのかみ江戸にて御鷹飼などは幕命にて捕獲し幕府はまづ京都禁裡に献上して其餘りを諸侯に分賜するを例としたるよし。料理には吸物、鱠、燒鳥等いろ〳〵ありて高貴方にて深く賞翫したるものゝよし、なり

扨又この雲雀を飼ひ立てゝ馴らするにはいろ〳〵の方法のあるによりてまづ春は八十八夜の頃田野に至り鳴聲の若々しき好き鳥を捕へ來りこれを籠中に入れて飼ひならし置き翌年三月の末頃より仕込みに取りかゝるなり、其の籠は尋常のものよりも遙かに大きく戸口を廣くして光線のよく透るやうにして明るき座舖に置き扨て毎日蜘蛛を取りて手先にて之れを喰はすなり、少くして後籠の戸口を少しつゝ開き其戸口より鳥の首を出して虫類を喰ふやうに仕つくるなり。斯くすれば次第に馴れて籠の戸を開き置くも後には外へ飛び出しても歸るやうになるものなり。（完）

## 食物のはなし（家政）

若溪女史

◉植物性食品

植物性食品に屬するものは穀類、菜蔬、及果實類等なり。

▲穀類は澱粉を主成分として蛋白質鹽類の少量を含有せる貴重なる食品なり。

◎糯米は我國古來一般無上の常食とする所のものな

り、なるべく硬く煮炊したるものを良とす、之れを粥となしたるものは齒牙脱落せる老人及び消化力弱き者に最も適當なり、穀物中蛋白質の多きは小麥を最とすれども其消化の速かなる米に及ぶものなし故に本邦の如き暖地の住民に至極適當にして習慣に由るも亦産出の多きに由るも之れ常食とするは最も適當なり又之れを以て酒類飴等を製す、餅米は粳米に比すれば消化し難きものとす。

◎麥は米より多量の蛋白質を含むを以て滋養の効著しけれども其調理法の如何によりて消化に良否の別あり、小麥の製品なる麪麭、饂飩、麩等に何れも消化し易しと雖も滋養は少なく黒麪麭は粗製品にして消化し悪しきものなりと雖も却つて滋養の効多し、大麥は米と適度に混じ、煮炊したるものは消化善良にして殊に脚氣患者に賞用す但し其混和の分量は米七分に麥三分を適當とす又麥は寒國にて常食とするに最も適當なり。

◎豆類は一般に不消化物なれども其成分中には乾酪素と名くる窒素分の多量を含み又澱粉及び脂肪即ち炭素分を存じ鑛屬成分も亦少なからず其滋養質に富む事大に他の食品に超ゆるものなり、此れの製品たる豆腐は消化し易く滋養の効亦著明なれども夏季は腐敗し易きを以てよく注意すべきなり、又其調理法に注意を要するは豆類は蛋白質に富みて澱粉少く穀類は澱粉に富みて蛋白の量少なきを以て之れを併せ用ゆれば大に滋養に利あるものと知るべし。

▲野菜　菜類は一般に滋養分には貧しけれども缺くべからざる食品なり、少量の蛋白質、澱粉、糖、酸類及多量の水分を含むの外不消化の植物繊維あるものなれば素より之れを以て營養を完ふすること能はずと雖も其水分多きが故に鑛物質に富めるものにしてこれが爲によく血液中鑛屬成分の不足を生せざらしむるものなり、所謂壞血病は即ち血液に必要なる鑛物質を欠ぐによりて發するの病なれば宜しく此類の食物を交へ用ゆるときは該病を防ぐを得べし、且つ其野菜の淡白なる味は之れを濃厚なる肉類に添加して大に人の嗜好に適するものなり、又其鹽漬、酢漬等は乳酸といへる酸を含有せ

ス故消化を助くるものなり、故によく食物の配分に注意すべし但し野菜類中馬鈴薯は比較的消化し易くして滋養品なり。

▲果實類は糖分鹽類及び酸類に富み清爽なる美味を有するものなり、但し未熟の果實は不消化物なるを以て避けざるべからず、果實を過食するときは消化障害を起し、往々中毒することあれば注意すべし殊に消化力衰へたるものは成るべく果實の汁のみ用ゆべし。

▲茸類は不消化物にして滋養分少なきものなればなるべく多く食すべからず、若し之れを用ゐんと欲せば能く煮熟して後に用ゆべし未熟なるを食へば大に害あり茸には數種ありと雖も、松茸、椎茸、玉茸、木耳、麥茸、初茸、等その名著しきもの丶外、見馴れざる茸類は食ふべからず、すべて茸類は香氣ありて美味を有す其中最も蛋白質を多く含めるは乾し椎茸にして其他は皆水分を含むこと甚だ多けれども亦少しの養分はなきにあらず、然れども茸類には往々有毒性のものありて其の爲死に至るもの尠きにあらず、若し其有害無害を知らんと欲せば銀片を入れて煮るべしそれに黑色の附着するものは有害なりといふ注意せざるべからず。

●加味料食品

食物の味を助くる爲めに用ゆるものは種々ありと雖も其中重なるものは食鹽、醬油、味噌、砂糖、酢等の類なり食鹽は海水を煎じて製し消化器を助け又身體の實質を組織する成分となるものなれば甚だ要用のものなりされど多量に用ゆるは宜しからず又胃弱の人の如きもあまり甘味のものは用ひざるをよしとす。

▲醬油は大豆麥鹽等にて製し食物の味を調ふるに最も適當なれば其使用甚だ廣く且つ其成分一種の含窒素物なるか故に大に滋養の効ありされば適度に用ひざれば害あり、味噌も亦大豆麹及び鹽にて製し消化器を刺戟し且つ滋養の効あり、されど多量に用ゆるときは胃中に停滯するものあり、

▲酢も米或は果實より製し一種清凉の味ありて精神を爽快ならしむるものなればよく食品の味を添へ消化を進め渇を防ぐの効ありされど屢々之れを用ゆる時は貧

血症を發する處ありといふ

▲砂糖は甘蔗の莖より製したるものにて最も食器に美味を添ふを以て調理上之れを用ふること極めて多く又菓子類の製造は大抵之れを用ゆ且つ砂糖は即ち含炭素物なれば彼の血中に於て酸化せられ體力及び體温を生ずる滋養質の一にして營養上缺ぐべからざるものなりされど多く用ゆるときは胃を害す殊に小兒には害あり

●嗜好品

嗜好品は茶珈琲酒類にして身體の實質を構成するものにあらざれば滋養の効少なしと雖も又是れによりて神經系を衝動するの効あるを以て要用なるものなり。

▲茶珈琲は之れを用ゆれば精神を快活にし運動を活潑ならしめよく業務の勞に堪へしむるの効用あれども量を過す時は却て不快を覺へ不眠等を來すの害あり

▲酒類は其効は主成分なる「アルコール」の力によるものにして適度に用ゆれば滋養强壯興奮等の効用あり、又食時に其少量を用ゆれば消化力を助け血液の循環を進むるものなり、然れども多量に用ふるときは消化を害し麻醉に陷り種々の障害を醸すことあり

酒は只に身體の營養を害し精神を衰弱せしむるのみならず、之れが爲め卒中、中風等腦脊髓の大患に罹りて生命を失ひ或は害毒を子孫に及ぼして酒癖又は白痴の子孫を生ぜしむる等恐るべき影響を蒙るものなれば過度の飲酒は必ず、之れを節制せざるべからず、殊に少年と小女とは堅く禁ずるをよしとす、又小兒の如き神經の鋭敏なるものには葡萄酒麥酒と雖も酒類はすべて一滴だも之れを呑ましむべからず

○日本酒は百分中凡そ十五分の「アルコール」を含有し適當なる興奮飲料なり、又其種類により良否あれば品質を撰んで用ゆべし

○葡萄酒は百分中十分乃至廿分の「アルコール」を含有し、植物酸糖等を混有せるを以て其味佳良にして婦人等に適當なる滋養飲料なり。

○麥酒は百分中三分乃至五分の「アルコール」を含み、多量の炭酸瓦斯及び一種の苦味物を混在し、淸凉飲料として最も佳なり粗製品は消化器を害するを以て注意

すべし

◎ブランデーは百分中四十分の「アルコール」を含有し其作用甚だ強劇なり、適度の水を和して稀釋し或は卵黄を混じて其少量を用ふれば滋養興奮強壯等の効あり

◉香料品

香味品とは胡椒、芥子、山葵、生姜、山椒、等の香料にして滋養の効無けれども食物に美味を與へ食欲を促し、消化器を助くるの効あり、されど多く用ゆる時は逆上して却つて害あり、

以上の食品は適度に之れを相混和せざるべからざるは勿論なり、單一なる食品のみ用ゆる時は永久の滋養に堪へざるもの丶みならず却つて偏食害あるものなり、

◉食量の標準

身體の大小性質職業によりて其量に差異ありて一定ならず、小兒期には比較的大量を要し、老年期には食量減ずるものなり、平均大人一日の食量は大約蛋白質廿五匁、含水炭素百廿匁、脂肪五匁及適宜の水と鹽類とを要すと雖も、普通の食物は所含成分の量一定ならず、隨て無用不消化の物質を混ずるを以て其食品の量を定むると難し、

第一例

牛乳　壹合

味噌　五匁

一、葱、胡羅蔔、蓮根、土當歸、蘿蔔、筍の類廿匁

野菜二、甘藷、里芋、慈姑、長芋、佛手薯の類　廿匁

三、胡瓜、白瓜の類　一五匁

牛肉又は雞、羊、豚、の類　六〇匁

白米　四合

右合計營養原質　蛋白質　脂肪　含水炭素

二十五匁四分、七匁四分、百二十匁餘、

第二例

卵　二個

味噌　五匁

野菜一、ホウレン草、芹、三ツ葉、鶯菜、小松菜の類

二〇匁

二、土當歸、胡羅蔔、蕪菁、蓮根、筍の類一〇匁

三、百合、慈姑、長芋の類　二〇匁
魚　一、鰹、鮪、鰤、鯰、馬鮫魚　三〇匁
　　二、竹麥魚、鱸、ムツ、鯛、鯖、鰯　三五匁
白米　四合
右合計營養原質　蛋白質　脂肪　含水炭素
二十六匁八分、五匁一分、百十八匁八分
（完）

# 改良女服の仕立法

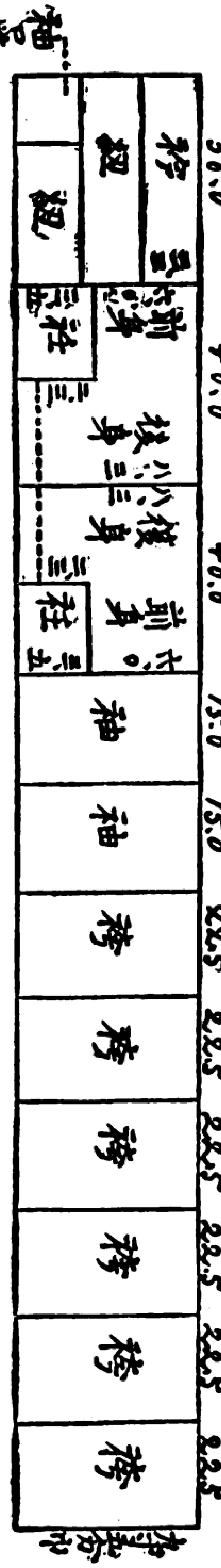
野中千代子

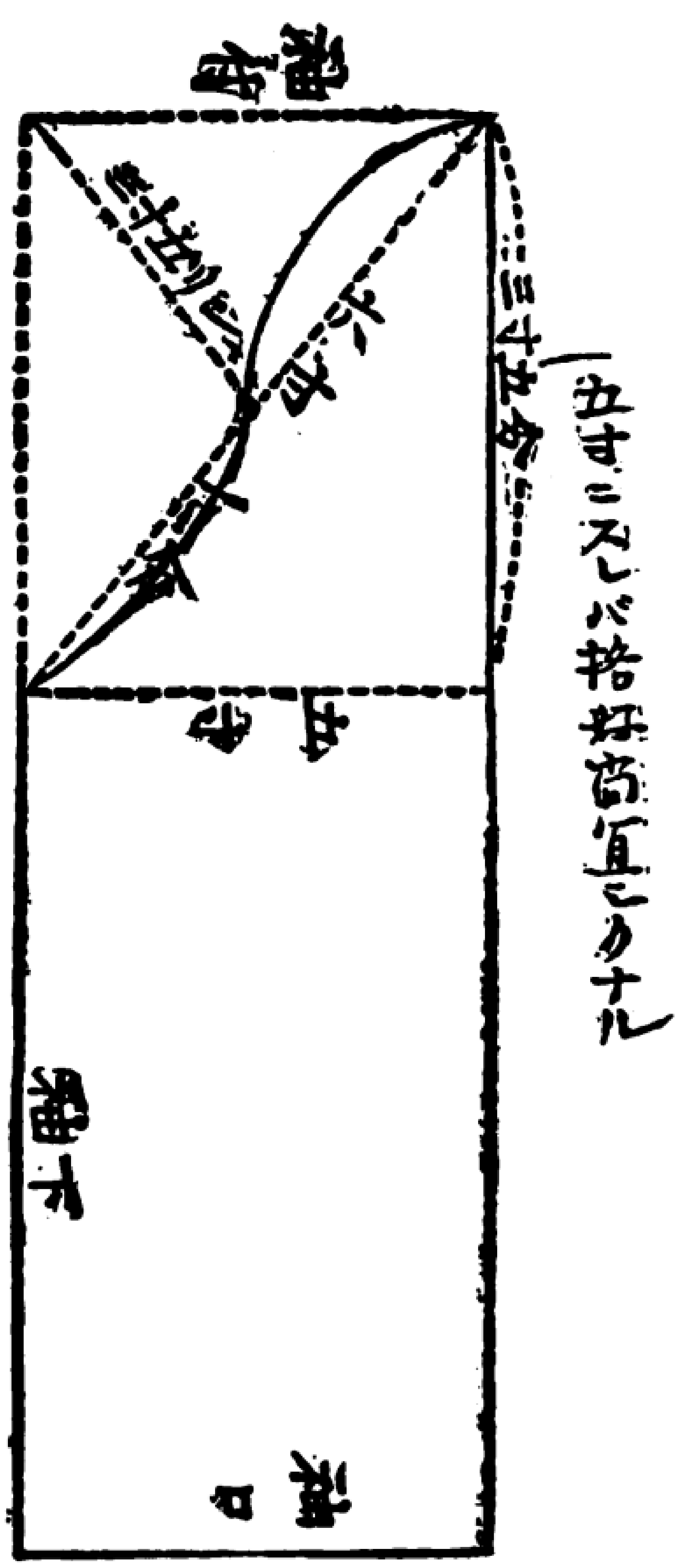
女學世界第二號に掲げました改良服十ケ條に、成べくあてはまるやうに、私が試みに仕立てみましたのは、先づ次のやうなもので、裁ち方縫方はザットかうです、切地によりて勿論並幅物と大幅物と御在ますから、先づ並幅物から御話いたしませふ、又是はどちらも大人を標準にして裁つのですから、其積りて御覧ください、大人のに十分に裁つことさへ出來れば、少女のには餘ることも足らぬことは無論御在いませぬ、

並幅（二丈八尺）物ならば、一圖のやうに裁ては、都合よくたゝれます、先づ袴を二尺二寸五分の丈にして、六幅ほど取り、身頃を二尺の丈にして、八尺ほど取り、衿肩を四身仕立のやうにわけ、前身にて衽を取ります、是は袴の紐を巾廣く取る爲で御在ます、それから片袖を一尺五寸にして、兩袖で三尺ほど取りまして、殘りにて衿と紐を取ります、又袖は袖下の巾（大人ならば一尺一寸位、少女ならば一尺位）をあたりて、其寸法に肩の方が三寸五分ほど（切の長さがあれば、三寸五分は五寸にすれば格好尚宜し）延し二圖の如く裁ちます、又袖口の帯や、リボンの如き飾り切は、餘りの切から十分に取れます、

大幅（二尺）物にては袴の丈二尺二寸五分にして、三幅ほど取り、身頃を二尺の丈にして、四尺ほど取り、其殘りにて三寸五分巾に衿を取り、其殘りを身頃にいたします、又袖は一尺五寸ほど取りて、夫を半分に切りて兩袖にいたし、殘りの一尺八寸にて衽二つと紐が取れま

す又袖口の帯やリボンの如き飾り切は、餘りの切から十分に取れます、かやうに裁てば、一丈四尺五分にて仕上りますから、並幅物に直せば、丁度二丈八尺の割に當ります、大幅物の裁方は左圖の通りで御座まして、袖の裁方は並幅物と同じですから圖は畧します、




それから縫方の説明を少し致しませう

●身頃

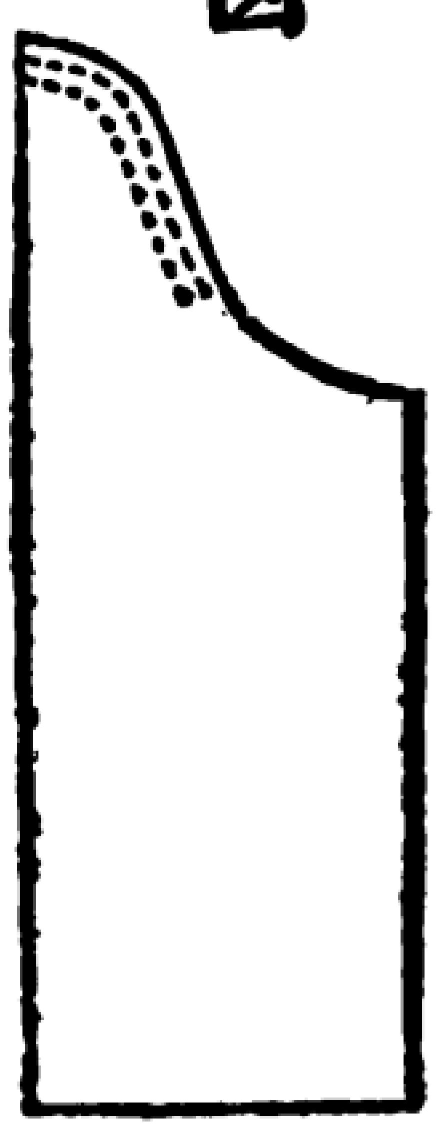
身頃の丈が從前のとちがひ、僅か二尺になりたる外、普通の着物の縫方と、少しも違ふところはありませぬ、只少女の肩あげは餘り長くわけるよりは、肩の上のところ三針ばかりにとめた方が工合が宜しいやうです、

## 袖

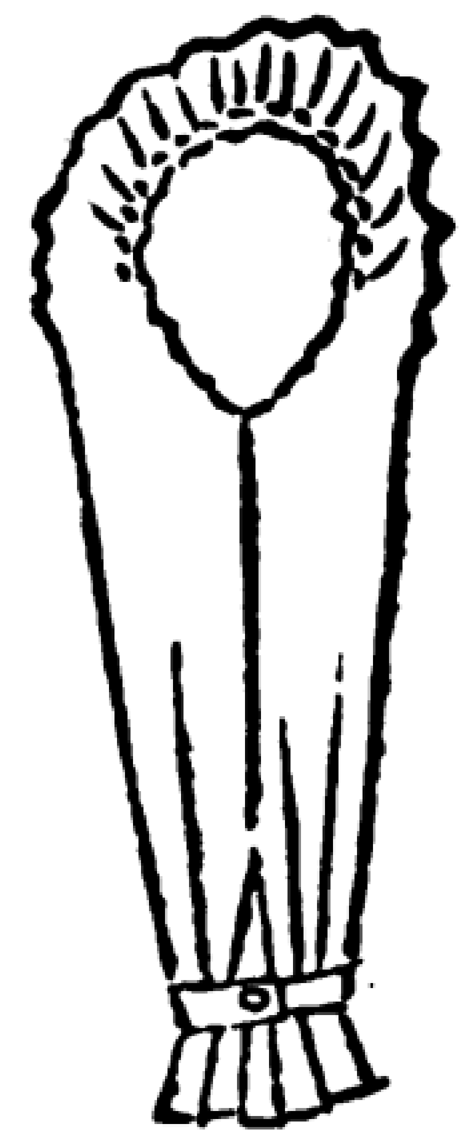
甲圖の針目の付たる如くに、袖付の半分位の處より細かく二度縫ひて、大人ならば六寸五分、少女ならば五寸位になるまで乙圖の如く引絞り、其絲をゆるまぬやう結びとめ、身頃の袖付に縫付け、三針ばかり裏よりとぢつくれば、獨り手に袖付が持上りて、其格好乙圖の通りになります、若し少女など躰操のとき、手を上て腋の下の袖付か引張るやうならば腋の下を一寸五分位明けをけば引張ることなく又いくらか空氣流通して衛生上にも宜し

又袖口はうつりよき袖へりをかけ、手首の大さにならひて、丙圖の如く襞積をとり、袖口より一寸三分位のところに、幅五分位の帯を縫付け、其中央にリボン形の飾をつくれば大層にぎやかになります、

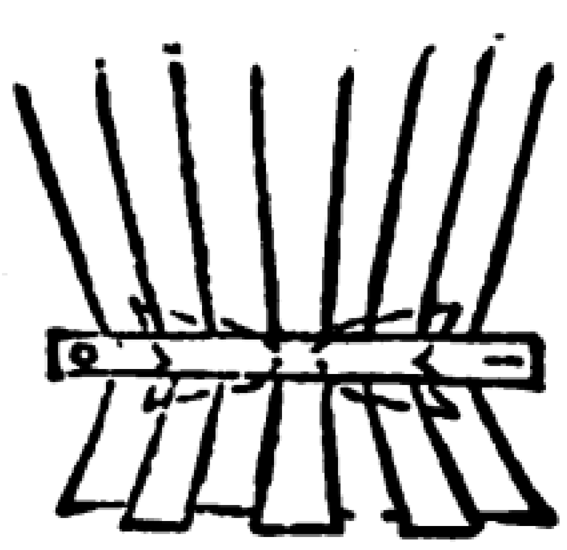
甲図



乙図



丙図



袖口ヲ平ラニシテ擴ゲタル図

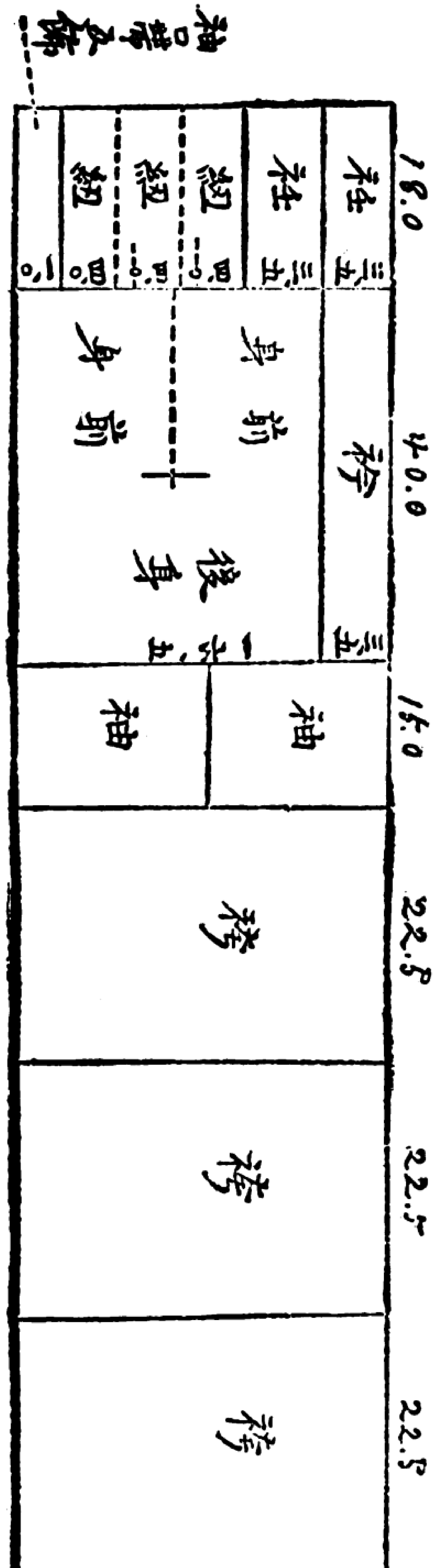
## ◎袴

六幅とも縫合せて、腰の明きは私の考では、男物のやうに廣くあけておく必要はない、女物は寧ろ明て置ない方が、腰がかくれて勝手が好くはないかと思ひますから、左側の方などは裏に隠袋でもつけない限りは、縫ふさいでおいても好しいと思ひます、襞積は左圖の如く、前半は内より外に襞積を折出し、後半は外より内へ襞積を折込むと、格好が宜しいやうです、又紐は前の分と後の分と分けず、一筋にして左の腰で結ぶやうに致すと、簡便で宜しいやうで御在ます、襞積の數と折方は好次第で宜と存升

此仕立方て如何な物が出來ましたか着せて見ませふ

此改良服を衛生上から申せば、第一筒袖てすから、大人か勝手仕事をするにも、少女か學校で躰操するにも、袴

なしに活潑に出來ます、又袖口が釦かけてすから、水仕事するときに、肩までまくり上ることが出來、又腰以下は身頃の丈を短くして、そうして袴を着けてをりますから、着物の裾が脚に捲つく心配もなく、肌も少しも露はれずして、活潑に歩けます、(身頃の丈を從前のものゝやうに、裾長く仕立ては、活潑に歩けませんから、改良の効はありませぬ)、又袴の紐を前後二つに分ずして一本にして結ぶやうにしたのも、衛生上から割出したのです、夫から私の考では此改良服は、袷や綿入は作らぬ積りです、總て單衣にしてをきますと、第一仕立や




すく、又洗濯が容易く出來ますから、衛生上爲になると思ひます、そうして袷や綿入の時節は、下に袷なり綿入なりの襦袢や胴衣を着込み、腰以下は猿又や綿入の股引を穿くことにした方が、便利で經財だと思ひます、こんなものは賣物もあり、又人々の工風で勝手に容易く仕立得らるゝものでありますから、別に雛形など記載する必要はないから省きます、

又經財上から申せば、第一切地が更紗形付、モスリン、上等でカシユメル位で、普段着としては可也立派に見ゆるのみならず、改良服は年齡の割合に派手な柄を用

ひても、見ともないことはないのは一德だと思ひます、又單衣ですから容易く洗濯が出來、又胴と袴と二つに分れて居ますから、どちらにしみがついても、全躰洗はずとも濟みます、又袖裏や裾はぎの必要はなし、活潑に歩いても袴だから、從前のやうに裾はぎの切るゝ心配もなく、又仕立方は一ヶ所もミシンを用ゆるところなく、肩を除くの外、裁ち方縫方等從前のものと、たんと違ひませんから、仕立屋にやる必要は少しも御座ません、又三枚襲などのやうに、事繁くなりゆく世の中に、人手假らねば着られぬやうな不都合なことは少しもありません、又少女のは肩も袴も縫上がありますから、成長するに從ひ忽ち不用になるやうなことはありませぬ、延ばせば隨分長く用ひられやうと思ひます、又袴の紐を前後二つに分ずに、一本にしたのも經財上から割出したので御座ます、又此改良服は肩に飾ある筒袖でありながら、身頃の方を丸くくりもせず、少しも偽つけずに從前の着物の通りに仕立得らるゝのが特長とも申しませふか身頃を丸くくりなどして偽をつけては、後の用に困るからと思つたのです、又袖口の帯や飾切等も別段買求めずとも、とも切て出ますから是又經財て御座ます、扨又美術上から申せば、嘸色々と批難があらふと思ひます、併し優美だとか何とかいふことも、一は習慣であ



少女扮装ノ図

つて、兎角目慣たゝの丶方が良く見ゆるのは普通てありまして、従前の婦女子の長袖が優美に見ゆるといふのも、矢張習慣の爲ではないかと思ひます、故に改良服も一般の服装となつて見慣たならば、或は此方が優美だと思ふやうにならないとも限りますまい、元來優美だとか何とかいつても、其標準といふものはないので兎角見慣ぬものは悪いやうに見ゆるものです、それて此改良服は肩に飾を付て格好を取り、又肴屋の筒袖みたやうなものでは、如何にもまづいに極つて居ますから、襞積や帶やリボンを付て見たのですが、袖口が釦けですから、禮服となれは金釦なりダイヤモンドなり、又袖口の帶やリボンにしても、上等の品を用ひ、又袴なども精巧に梅の立枝か、櫻の花の刺繡などいたしまして、又身頃の切も之に應じて、緞子か綸子を用ひ、肩から脊へ刺繡など致したならば、随分立派な禮服となら・ふと思ひます、斯樣な鹽梅に形式を極めて置て、貴賤により貧富に應じて、相當の切地を用ひ、立派に裝飾を施したならば、随分我國の國服としても宜しからふかし、

自分では思ひますが何卒皆樣て倘御改良を願ひます又穿物は無論靴が良いと思ひますけれども、之は漸次改むることにして、當分は下駄ても差支ないと思ひます、又頭髪は成べく束髪に改めたい、日に増人事益繁多に成行く世の中に、鳥渡客に呼ばれても、必ず髪結即ち人手を假るにあらざれば、髪の結えぬやうなことでは、迚も世に伴ふてゆくことは出來まいと思ひます。

(了)

# 裁縫實習

女子職業學校教師　金子銅子述

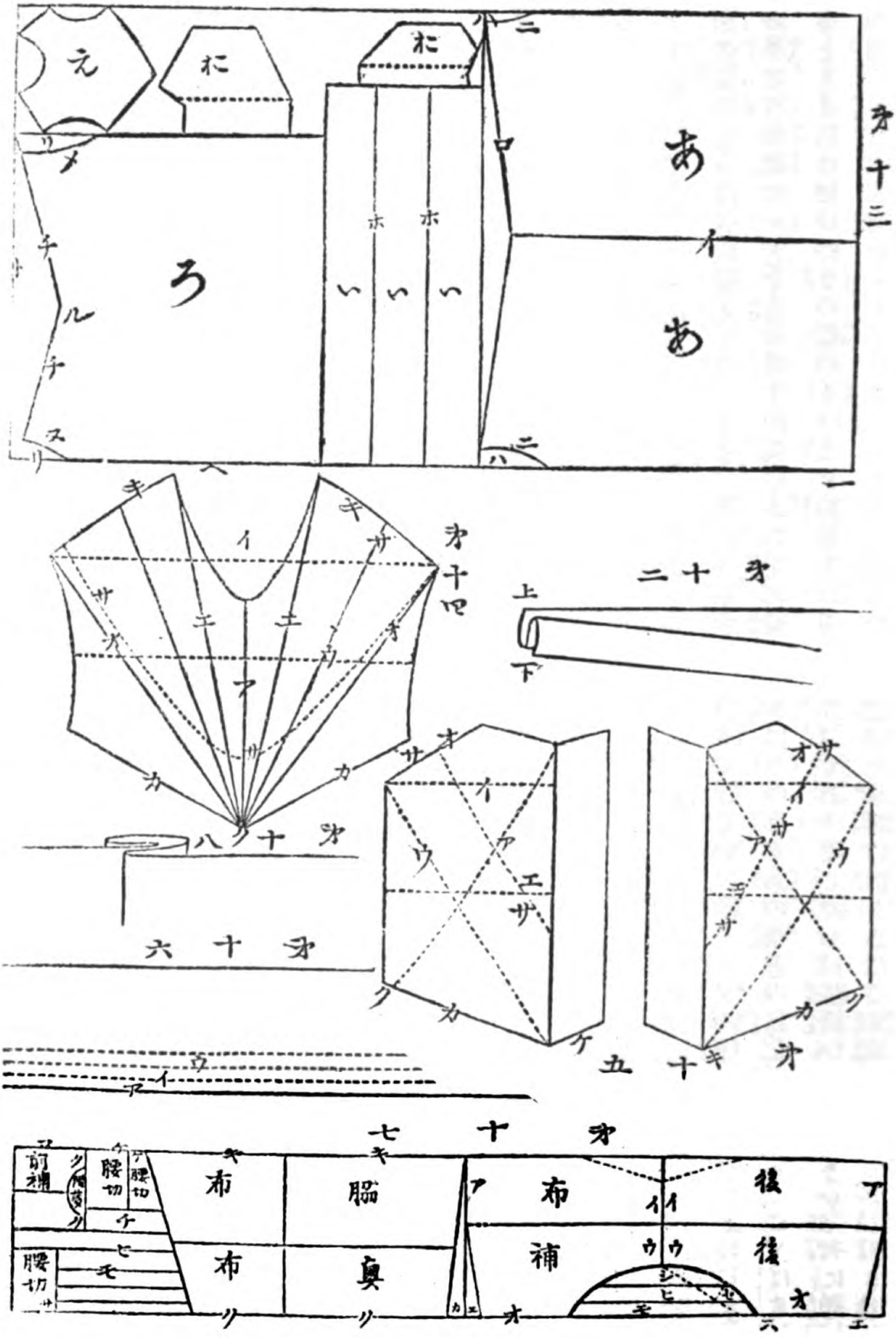
▲小兒用西洋前かけ(前號のつゝき)

(前號圖解參照)此(せ)の切のかき目の方を縫ひ込みだけ中に折り、先を劍の先きの樣な形にして飾りミシンの通りに表より通し縫ひを致します。次に(あ)の切に三通り小針に縫てありました其所を一尺位に縮めて(き)の切[illegible]枚にてこの(あ)の縮める所をはさみて縫ひます、こゝ

は通し縫ひにいたします、次に胸の切の下の中央と、今(あ)の切に縫ひつけました(き)の切の上の方の中央とを合せましてこゝを縫ひます、次にはこの(き)の切の兩端に(い)の切の一端を(先に劍の様に縫てない方)を第十二圖の様に折りまして(き)の切の巾と同寸法に致し之をぬひつけましてそれより(き)の切の裏をくけます、次には(せ)の切の劍先きり所に穴をあけ穴かゝりを致します、ボタンは大概前の帶の終りかもしくば五分位離た所につけます。次には今一つを申しませう、

▲小兒用西洋前掛

これは用布が三尺二寸ばかりてやはり五六才位の小兒用のでございます、其裁ち方は第十三圖の通りでございます、初めに(あ)の切二枚をとりますこれは丈が一尺三寸で裁ち切りましたらは(イ)を折目にして二枚に折りまして、(イ)の丈を一尺二寸として(ロ)の通りに斜にきります、次には(ハ)八分(ニ)二寸位にして弓なりにきりとります、終に(イ)の所を裁ち切ります、次には(イ)の切(ホ)の丈け一尺六寸巾二寸のもの三本をとります、上は申さずともおわかりてありませうが横きれになるのでございます、次には(ラ)の切の長さを一尺三寸巾即ち(ト)を一尺四寸にきりまして、これも(あ)の切の様に二つに折りその輪になつてをる方即ち此切の中央を一寸短くいたして、(チ)の様に斜にわり次に(リ)の所は(わ)と同様に切りとります、次には(え)の切これは寸法が少々のみ入りてをりますから第十四圖に就て御覽下さい其寸法は(ア)胸の中央の丈三寸、(イ)横の最も長き所六寸(ウ)胸の中央の巾五寸五分、(エ)頸の角より胸の中央の下まで五寸五分、(オ)肩より胸の中央の下まで五寸三分、(カ)左右の端より下の中央まて各三寸(キ)肩巾二寸と致します、次は(お)の切右及左のもの各一枚をとります、これも第十五圖の就て寸法を申上ませう(ア)頸より脇の下部まで四寸、(イ)上部の巾三寸、(ウ)肩より(キ)まで四寸六分、(エ)中央の巾二寸八分、(オ)肩巾二寸、(カ)下の巾三寸と致します、それて(え)と(お)の切は裏の切として白キヤリコを同し形に裁ちて置きます、さてこれより縫ひ方を申上ませう先つ初めに(い)の切をとりまして、三本の切を縫


第十三
あ
あ
ろ
い
い
い
第十二
上
下
第十四
第十八
第十六
第十五
第十七
布
脇
布
奥
布
補
後
後
前補
腰切
腰切
腰切

き合せ（丈をはぎます、）縫ひ込みを兩ひらきにしてはしをふせてマツリます、次に此切の周圍をなるべく細く三ッ折にしてマツリます、次に此一方を三通り小針に縫ひます、この三本は第十六圖の（イ）（ウ）の間は一分位つゝ離しアの間は一分五厘をはなします、次には（あ）の切の（ニ）の所を（う）の切の（ヌ）の塲所の裏に見返しをつけます、次に（あ）の切の（イ）の所を三つ折に致します、この巾六分位、こゝをマツります、左右ともできましたらはこの縫ひ込みとこの切の（ニ）の所より一寸五分はなれた所とを殘して三通り小針にぬひます、これも左右とも致してしまひましたら次には（う）の切の兩端一寸五分位はなして（チ）の側に三通り小針にて縫ひをきます、次に（え）及（お）の切をとりまして第十四圖の（キ）と第十五圖の（オ）とを合せます、裏の切もこゝと同樣の所を合せて縫ひます、この所の縫ひ込みは各兩開きに致します、次には第十四圖の（ク）と（う）の切の（ル）とを合せ第十四圖の（カ）の端に縫込みをとりましただけに（う）の切の（チ）の巾を縮めまして第十四圖の裏になる切をとりまして（う）のきれを其なかにはさみ三枚共に縫ひつけます、つまり第十三圖の（え）の切を（う）の切の裏表にてはさみて縫ひますのでございます　次に（あ）の切をとりまして第十五圖の後の切にぬひつけるのでございます、しかし此縫ひ合せますには此第十五圖の後になる切の上までは同圖の（キ）より（ク）の間（（ク）の方は縫ひ込みをとります）だけに（あ）の切の（に）巾を縮めまして此後の切の裏表にてはさみてつけます、下までへは同圖の（ク）より（ク）の兩端少々つゝ縫ひ込みをとりまして其丈だけに（あ）の（ロ）の所をちゞめてこれも後の切の表にてはさみて縫ひつけます、（後の切の上までへと下までへとは男女によりてちがひがありますがこれは前號に申上ました前掛のときに委しく記して置きましたからそれにつき御覧下さいまし、）次には裾の周圍より背、脇（普通の着物で申せば、袖付の所）の縫込みを中に折りて躾をかけ飾ミシンの樣に返し縫ひを致します、次に（う）の切と（あ）の切との脇を縫ひます、こゝはもしかき目でありましたらは袋縫ひに致します、次に裾かけ之は七分程に折りまして又其はしを一分位中に折てマ

ツリます、もし此前掛の丈が之を用ゆる小兒の丈より長くありましたらば（あ）の切の下より一寸五分上りました所に二分位ヲ、つまみまして二三の上げを致します、之が飾になるのでございます、この上げは手縫ひで極く小針に縫ひますのでたとへミシン縫で仕上げました前掛でもこの上げばかりは手縫ひに致します次に（い）の切（前に三本をつぼ合せましたもの）を縮めて第十四圖及第十五圖の（サ）の様に飾をつけます、此飾は假り縫ひてつけをきまして其上を返し縫ひにてつけますのでございます、この前掛も亦リボン、縫ひ取テップ、エンブロイダ等を用ゐて飾をつけましてもよろしくございます、以上申上ました前掛は大概ミシンで縫ひますが手縫ひに致しますときは縫ひ合せ目は半かへし、飾縫ひは本かへし其他は縫目の所をマツります。次には前の第一巻に申殘しました袴につきて御話しを致しませう。

▲男袴

これは幅二尺のもので先づ唐棧なぞを用ゐる仕立て矢張十番馬乘袴で御座います即ち十圖の通りて積方は前襠（コ）に腰切（チ）（ク）を加へて總尺より減して其殘りを四除いたしますと後丈が出ます、さて之を裁ちますには、後布と後襠とに當る所を二枚分とりまして、丈を二つに折り（ア）を八寸三分と致して標をつけ次に相引の標をもつけます、（相引は第一巻に袴の御話しを致しましたからこゝに申上る必要もありませんが前巻を御覧にならぬ方のために一寸記して置きませう、相引の丈は其袴の丈の三分の二に五分を加へたものでございます）次に（イ）を三寸二分五厘としてナゲを折ります、次に後襠一寸六分の形をつけます、この形は後布の（ア）八寸三分の幅をとりましたあとの所より圖の通りに（エ）を一寸六分として斜に切り取るのでございます、次に（オ）一尺四寸に標をつけ（ウ）七寸と致し圖の點線の如く（シ）より（ス）まで尺度を當て其中央（セ）を一寸五分にして格好をよく弓なりに裁ちます、次に脇布奥布をとります、之も丈を二つに折て脇布の（キ）を後丈と同様に奥布（ク）をこれより一寸六分短く（切ち（カ）が一寸六分とれるのでございます。）

きります、それより殘の切(この裁方ての用布を一丈二尺四寸位といたしてあります。)の巾を二つに切り(即ち巾が一尺づゝになります。)(コ)の丈を一尺六寸に切り之を二つに折り(巾をとるのでございます。)やす、(ソ)を一尺四寸(タ)を三四分位にして五分よく弓なりに切りとり(ソ)の所をも切るのでございます、次に紐(チ)を一本(この巾は大抵二寸位)をとり腰切(ク)を三寸づゝに切ります、又片方の一尺巾の切をとりまして一本紐をとり其殘りより腰切(サ)を三寸とりまして其殘りを圖の如く四つに折りて紐をきります、さて縫ひかたは第一巻に委しく申上ましたから御話しいたす必要もありませぬが一とほり申上て置きませう、先づ初めにナヂをくけます、次に前襠をとりて長き方を奥布と合せ裾口より縫て縫ひ込みは前襠の方にかへし隱躾をかけます、次に前襠の短き方と後襠とを合せてやはり裾口の方より縫ひまして縫ひ込みを前襠の方にかへしましてかくし躾をかけます、次て相引を縫ひ前の方に縫ひ込みをかへしカンヌキトメをいたします、か樣に左右ともに縫ひ上りましたらば、裾がけを致します、(裾かけは前の第一巻の袴の御話しをいたしました折に申上ました通り紙を入れてくけます。)次に股を袋縫ひにいたし、ヒダをとります、ヒダのとり方も亦第一巻に申上てありますからこゝでは御話しいたしませぬともよろしいのでございますが前巻をくりかへす手數をはぶく爲め大略を申上ませう、ヒダは相引より八寸の所に折をつけて第十八圖の樣にいたします(これは後のヒダてあります)前は脇ヒダ(即ち一のヒダ)四寸八分フトコロ二寸八分殘りの中央に折をつけて前のヒダをとります、これ丈出來上りましたらばヒダをよく躾にてをさへてよく疊みをきます、次に腰切をとりまして紙にはりつけをきて腰板を厚紙て切り、此紙にはりました腰切をとりて腰板にはり附菱(これも腰切同樣紙に張りをきます。)をつけます、(第一巻に此腰板のつくり方は委しく申てあります。)次に紐をとりまして付け、腰板に後紐をつけ(これも前巻に委し)前紐をつけます、(皆前巻に記してあります、腰板をつけ腰板の裏をつけまして縫ひ上

りといたします、それよりよく疊みつけ紐を格好よく折りまして仕上げをいたします、紐の折り方其他委しくは第一卷に申してありますからこゝには略しました。

# 編物實習

女子職業學校教師　豐原繁尾述

（編物圖解第六第七第八圖は前號誌上に在り參照すべし）

▲たれ帽子（つゞき）

以上申上ましたので第六圖の(イ)の樣な形ができます、次に又表を手前にむけまして糸を切て十段あみました其終り即ち圖中(イ)の終の所(ウ)より糸をきらずに(エ)まで矢の向にて平に細編にて編み、まして糸をきります、次に(ウ)の所の三ツ鎖編みのしてあります所に、帽子編みを一つあみまして、次に二つ鎖編みをいたし細編みの小さ目に長編みを五つ入れ又鎖を二つ編みまして細編みを一つとばして帽子編みにてとめてまゐります、この樣にして(エ)まで編みまして、こゝで五つ鎖を編みまして、(エ)の所に帽子編みにてとめてありますからその所に五つ長編みを入れ又二つ鎖を編みましては前の編みました段の長編みの五つ出來てをる中央に帽子編みにてとめ又二つ鎖編みを致しましては前段の帽子編みの所に長編み五つを編み入れます、次に又鎖二つを編みましては前の長編み五つ出來てをります其中央の所に帽子編みを致します、か樣にしてまゐり終りの所に帽子編みが致してありますから此處に長編み五つを致します、次には次の側に移りますのに又鎖五つを編みまして其そばにある長編み五つの中央に帽子編みを致しまして鎖編み二つを編み帽子編みの上に長編み五つをつくります、次に又鎖二つを編みましては前の長編み五つ出來てをる上の中央に帽子編みをするといふ工合にして編みまゐります、次の側に移りますには鎖五つを編みまして直くそばの帽子編みに長編み五つを入れます、つまりこの樣にいたしますと兩端にて目を増

しますのでございます此通り兩端にて目を增して編むこと五度致します、次に目を增しませぬから鎖を編みまして次の帽子編みの所に長編み五つを編みまして其他は前の通りに編てまゐりますと二十四側位にてとめます、しかし肩にかゝる所の長きを好む人は、幾側編み增しを致しましても差支はありません、即ち第七圖の通りになります、扨又表を手前にむけ持ちまして、此二十四側編みました其次を更に第七圖の(ウ)に帽子編みをいたし次に鎖編みをして初めにこの(ウ)の所に鎖編みが三つ出來て居りますからこゝへ長編みを入れ又一つ鎖編みを致しては長編みを又其目に入れ都合五つ表編みを一つ所に入れます、次は又一つ鎖編みをいたしましては帽子編みにてとめます、又次は間に鎖編みを入れては五個の長編みを一つ所につくります、この編み付けますときはよく注意して伸縮のない樣にして第七圖の失の通り編でまゐります、角にまゐりましたら少しづゝ注意して、長編み五つと帽子編みとの間を近くしてツレぬ樣に致します、(オ)より矢張前の樣に一つ鎖を編みましては長編みを編み一つ鎖を編みましては長編みをして前の側の帽子編みの上に此長編み五つを入れ前の長編み五つの中央の上に帽子編み一つを入れます、この樣にして(カ)までまゐります、(カ)より(エ)までは(ウ)より(オ)までの樣に編みまして、それより直に(キ)の方向にむかひまして前の側に出來てをる長編みの目をとりまして、長編みを一つ編み次に鎖を一つ編み前に出來てをる長編みの目を一つとばして次の目をとりて長編をあみ又鎖を一つ編みましては下の出來てをる目を一つとばして長編みを編みます、か樣にして失の向きにまたがひまして、(ウ)の所までまゐりまして糸をきります、次の側は又表を手前にむけ持ちまして、矢張(エ)の所から編みますので此度は前の側で長編みの間に鎖編みを致しましたその鎖編みの所より長編みをつけて次は鎖編み一つを致して前の側の鎖編みの所に長編みをつけてまゐります、略圖を書て見れば第八圖の樣になります、(ア)が長編み(イ)長編みの間の鎖編みでござります、次には第八圖の(ウ)の所即ち黑點のある場所長編みの横

の所にヘーケルを入れて糸を二本すくひまして五ッ長編みを編み一つ鎖を編みまして、又次の長編みの横の所に(前の通りに)ヘーケルを入れて、長編みを一つ入れ鎖を一つ編みます、又次は長編みの横の所をすくひまして、五つ長編みを入れ一つ鎖を編むといふ工合して第七圖の(ウ)までまゐりまして糸をきります、又次の側はこゝと同樣に第七圖の(エ)の所にもどりまして第八圖の(エ)の黑點の所より前に同圖の(ウ)より編みました通りに第七圖の(ウ)まで編でまゐります、次は又第七圖の(エ)の所より初めて此度は第八圖の(オ)の所(即ち長編みの間の鎖編みが一つ出來てをる所)の黑點の所に帽子編み一つを致し次はヘーケルに糸をかけて直に上まで引拔きます編方一つ次に長編み二つを編み都合四つの編方を一つ所に入れて一目もとばさすに第七圖の(ウ)までまゐりまして糸をきります、これにて大體かでき上りましたから次は飾に致します、これは今までつかひました糸とちかひました色の極細の毛糸をとりまして第七圖の(ウ)より帽子の表を手前にして持ちまして、矢の向にしたがひ飾をつけてまゐります、こゝは帽子編み鎖り編長編みと出來てをりますから、先つ帽子編みをつけて三つ鎖をあみ、長編の間の鎖編みの所へ帽子編みにてとめ、又次は三つ鎖をあみましては長編みの間の鎖編みの所に帽子編みにてとめます、その所を編み終りましたら、次は前の側に帽子編みになりてをります其上を一つ帽子編みを致し又三つ鎖編みをいたしましては長編みの間の鎖編みの上を帽子編でとめゆくのであります、即ち第九圖の樣な工合になります、(ア)長編み(イ)鎖編み(ウ)帽子編みで(エ)帽子編み(オ)三つの鎖編みの所でござります、次は第七圖の(エ)より出來上つて居ります其飾の上に(飾りと申してもこゝては第八圖の(ウ)(エ)(オ)の所より編みつけましたものをさすのでござります、)つけるので長編みの上を一本向ふの目をとりまして帽子編みを編み三つ鎖を編みまして又次の目を前の通りにとりまして帽子編みにいたし又鎖編み三つをつくりましては次の目に帽子編みてまゐります、それて長編みの上が終りましたらは又三つ鎖を編みまして

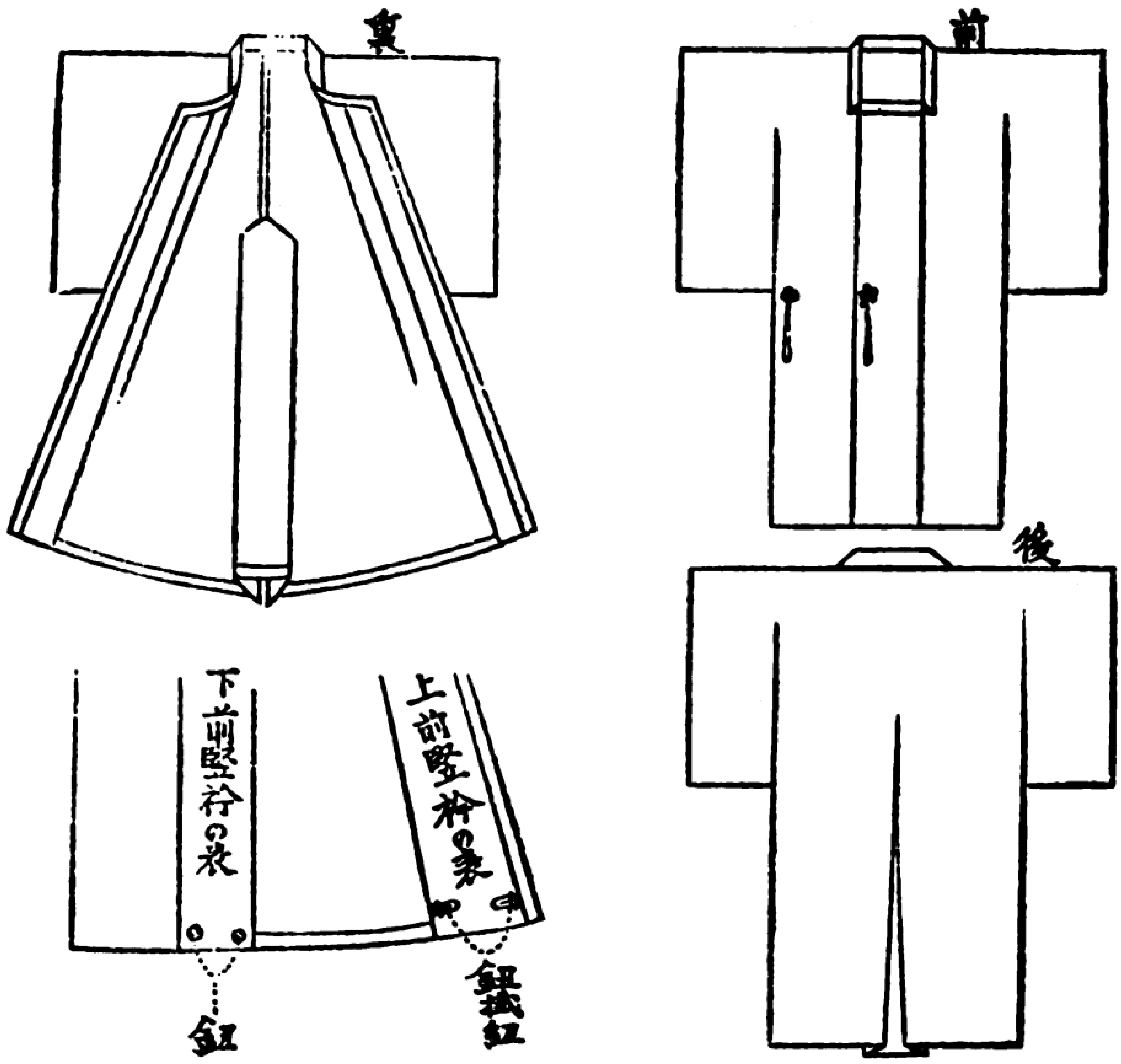
一つ下の鎖りの目（即ちもしや出來上りてある目を）とばして一つ長編みが前の側のときに出來てとりますから其上に帽子編みを致します、以下この樣にいたしまして第七圖の（ウ）までまゐります　次は猶もう一つ出來てをる飾（帽子全體と同色の糸にて編てあります所やはり第八圖の（ウ）（エ）（オ）より編みつけましたもの）の上にも同樣に第七圖の（エ）の一方より（ウ）まで致しますまづこれて編み上りましたから編み始めと終りとの糸のはしを毛糸針に通してよくとめます　次はひもでござります、紐は第七圖の（ウ）（ク）（エ）の點線の長さのもの二本をつくります、其編み方は鎖り編を致して其上を帽子編みをつけてまゐります、この糸は帽子全躰に用ゐたと同樣の色の毛糸でござ　います、次には第七圖の（ウ）より（タ）までと（エ）より（ク）までとの間ゝ從編みの所に一つ置に內外と紐を通して（丁度運針の針目の樣に）後の中央に兩方の紐の端を出します、次に二本の紐の兩端に房をつけます、房は矢張誕かけの房と同樣に長をきめてきり紐のさきを結びてつけるのでござります。

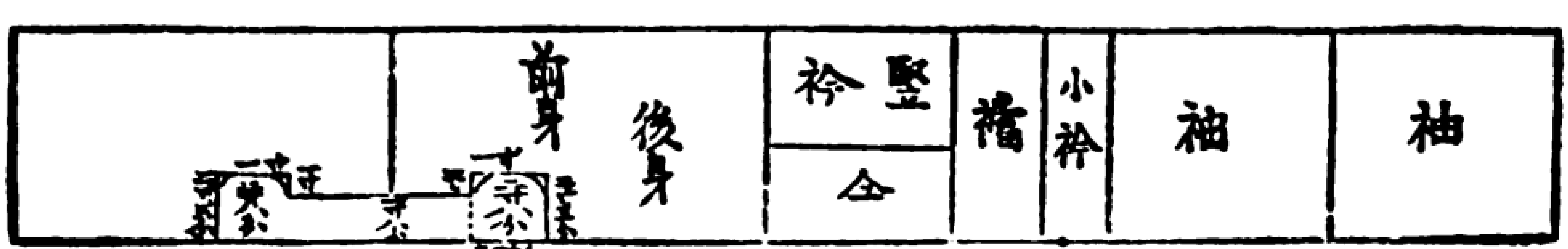
## 改良の婦人合羽

新潟縣女子師範學校敎諭　深田とよほ

近來婦人服裝の改良を說く者頗る多く先進の士其改良の考案を公にしたる者あり又之を實際に採用したる學校あれども未だ善美を盡したりと思考すべきものなく且其改良の考案なるものも單に婦人の普通服に止る余が見る所を以てすれば婦人從來の服裝中最も不完全なるは雨具とし防寒具としての合羽なりとすされど合羽に附ては世間未だ改良の考案を立てたる者なし余に合羽改良の考案三樣ありこゝに最も實行し易かるべきもの一種を撰び之を讀者諸君に示さんと欲す

從來の合羽は膝の邊りを紐にてくゝりたるのみにて膝より下に締りなきを以て步行の際裾口自ら開きて衣服又は袴を露出し其樣甚だ見惡く且膝以下は雨に濡れて殆と雨具たるの用を爲さず然れども强て之を綴づるときは步行自由ならざるに至る（現在の儘にても足の運び思はしからず）余の考案は之等の弊を救ふ爲め圖




(イ) 衿は被布仕立なれば此處にて一尺五寸とる

(ロ) 襠丈は着丈により帯を結びたる中程より附く

(ハ) 堅衿は着丈へ縫布を加へ三寸引しもの

(ニ) 道行仕立の衿及袖口に用ゆ

但し堅衿の裏は他の布を用ゆ

の如く後に褶を附けて寛みを作り紐にて裾口を綴ぢたり而して其材料は全じく一反の布を要するに過ぎず同しく一反の布を以て右の合羽を作るを得るは裁方に聊か意を用ひたる所なり

●縫方順序

第一袖縫　袖は袖口附き單衣物の袖と同じ

第二褶附　後布一枚を取り裾より褶の丈を比べ後布と褶の一方の端とを並の縫布に縫合せ又一枚の後布と褶とを縫合せ折は後布の方へ返し單衣物の縫目綴の樣に布と布との間を通し綴附く

第三脊縫　褶を附けし殘りの後布二枚を合せ普通の脊縫の如く縫ひ折を附け後巾肩巾の筐を附く

第四肩當附　合羽の肩當は滑りと稱し甲斐絹類の滑り宜き品を撰み衿肩を右手に爲し肩當を向にして縫合せ前の方だけ表へ合せ附置き袖附の方は袖を附てより絎附く

第五竪衿附　前の身を取り裾絎を定めの寸法に三ツ折に爲し躾糸にて押へ置き竪衿にて前身頃を包み裾より後縫にして附上げ上の衿先にて引返す被布仕立の時は小衿を裏の方へ附け表にて絎け道行仕立の時は竪衿の先は絎ず小衿を表の方へ附け裏にて絎置く

第六脇縫　後巾の筐に折を附け前布と合せ脇縫を爲す

第七裾絎　裾を先に折し前布の折に並べ折を附け表の方へ出づる針目は成丈小針に裾絎を爲す

第八袖附　肩巾の筐より身八ツ口止め迄斜に折を附け袖巾にも寸法の筐を附け其處に折を附け身は折縫にして袖を附け折は袖の方へ返し袖八ツ口絎を爲す

第九縫目綴　脇の縫込を宜き程に割り縫目綴を爲し脊縫も肩當より綴附く

第十紐附　左右の竪衿を合せ下前竪衿の裾口より一寸程上りたる衿附と衿山とへ一ツ宛紐を附け上前衿裏の方へ紐に相應したる細き打紐を綴附け歩行して裾口の開かざる樣留め附く

右の如くに爲し胸及腰へは矢張結び紐を附け留める樣に爲す

# 畫學の心得

武村耕靄女史

## 結心

筆墨につきて肝要なる事を前にも申ましたが、尚又結心と申ことを申添へます、結心とは筆を正しく用ひて、燥裂浮薄の弊にならぬ樣にし、漸々と純・熟 沈着の習慣を得て、自然に畫き出す筆墨の中に何か物か充實して居る樣にかく事を結心と申ます、扨其方法は始には運筆を遲鈍に致して、だん〳〵習熟するに隨ひ、後には迅速となります、そう致して次第に純 熟 致しました結果か、何をかくにも思慮することとなく、自然にすらすらと筆に浮き、憚みなく容易くかける樣になるので御在ります。

何にしても筆を用ふるの方法は、重からず、輕からず、疾過さず、徐過きずといふ其中間を能く習得致さねばなりませぬ、是も皆心を凝して純 熟の末には得らるゝものと謂れて居ります、

尚筆の味ひと申ものは、一朝にしてなか〳〵申盡せぬもので御在りますれば、先つ此位にして骨法用筆の事を止めませう。

## 應物寫形

是は物の形ちを好く相應する樣に畫き表す事に御在ります、繪畫と申ものは、元より萬象を寫して其物を能く明かに畫き表すか目的て御在ますれは、氣韵はもとよりの事、筆意墨色も整ひ其上に形象も其物に相應して畫かれたるものが、完全なる繪畫と申のて御在ます、玆に手近きたとへを申ますから、同し梅樹を畫きても老幹は、自ら臥龍の樣に屈曲し、又若木は幹に屈折もすくなく、嫩梗伸々たる樣、此物に相應するといふ注意より畫かされはなりませぬ、猶又草花器具等の樣なるものても、其梗柔厚薄等は其物の性質に隨ひ、又季節をも考へて、相當に畫くべきことは勿論のことで御在ますが、

まして山水人物鳥獸魚類等に至りますと、一層細密なる區別を致して、夫々其樣に叶ふ樣書くことか肝要て御座ます。

繪畫は墨筆さへ自在になれば、自然に此應物寫形といふ事も、容易に出來得るもので御在ますが、しかし此注意に缺くれば、やはり完全の繪畫といふものには成りませぬ、茲に一つの例がわります、夫は私が嘗て或畫家の筆なる西王母の圖を見ました事が御在ましたが、其畫は健筆て書きてあり、衣紋其他もなか／＼能く出來て居りましたが、おしきことには其面貌がいかにも醜くかきてありまして、仙女たる品格もなく、若し其手に桃を持たずは、何人だか分りませぬ、むしろ楚の無鹽君でも畫たのてはないかと思はれましたか、此畫は筆墨共にたしかて氣韻も可なりありましたが、唯健筆にまかせて、品格とか優美とかいふ點に缺け、仙女といふ其物の形上に相應致さゞりし故に、美事の繪畫と申事か出來ざりしは、誠に遺憾と思ひました、此樣に筆はたしかでも、其物に不相應の畫に此例ばかりてなく世上に、澤山あります、老顔の唐兒少壯の壽老人も隨分ある樣に見受ます、先例は此位を致して置ますが、何せよ氣韻とか、筆意とか申外に此注意を致す事が必要て御在ます、故に物に依りては、可成眞物を參考として、能く其物の性質や種類を考へ、其趣味に叶ふ樣に致しますれば、自然に完全なるものが出來るので御在ます。

### 隨類傅彩

是は物象の類に隨ひ彩色を傅くといふ事にて花卉は花卉鳥獸は鳥獸とそれ／＼其類に隨ひ適當なる色を施すといふ事ては在ます、

繪畫は筆意墨色よろしきを得、神韻氣格も具備すれば是を最上のものと致しかゝる繪畫は五彩の美をかりずして却て高尚なるものとして貴重致されますが是は神品又は妙品ともいはるべき上手にして出來得る事で普通一般には望み難きことでまつは設色によりて眞物い細密なる處も寫されます故彩色の道又大ひに學ばねばなりませぬ扨此研究によりて色の配合など覺えまするると自然美術思想の發達をも助け其裨益は尠なからぬこ

とて御在ますしかし書を學ぶ順序は墨畫を以て手腕の熟達を専らにつとめ稍々進歩の後にて彩色に進むを正道と致して居りますが初心のうちはとかく彩色の美に拘泥して骨法の練習を忽がせになす習慣に陷り易きものでありますれば之れは注意致さなくてはなりませぬ勿論水墨の趣味を得るは難く着色の興味を得るは易きもので御在ますから自然此傾きに成たので御在ませう

天の雲霞地の花木は天地の設色にて其燦爛たる自然の設色は千態萬狀ともいふべきで御在ますが是も唯五彩の正色と其他の間色より成れるに外なりませぬ故に繪畫にては此正色と間色とを以て萬物各々の特色を表はし觀る者をして其殊趣の美を感ぜしむる樣摸寫致さねばなりませぬから着色の法はなかなか容易の業で御在ませぬされば其手本幷に參考物は唯に古今の繪畫に止りませぬ空行雲野邊の花等目に觸るゝ物が悉く是れ手本又は參考物で御在ます斯くして常に胸中に蓄き習ふ事を肝要と致します彼曙の空の色は青色に紅の霞を帶びて薄紫に見ゆる樣や夕日に映ずる紅の空に黄金の色の雲に樺色の調和を呈するなどは最も能手本で御在ます巳に雲の色は變化きわまりなく面白き配所を表しますから色の參考には至極よろしきもので御在ます園の紅梅堤の櫻同じ紅ひにも別ちわり又門の柳岸の松など同じ綠に深淺のわかちある處や其他海山の風景や四時の木の葉の變化をよく注目致しますと特り配色の道を自得致すばかりでなく亦自然に目を娛ましめて繪畫の研究は寧ろ樂しき業で御在ませう隨類傅彩の最初の注意と申ことは實に此風物に能く心を留むることとて御在ます。

## 生花速成

自然古流家元　梶野智水

### ●南天の生方

南天は梢頭に複葉有りて大に廣がツて居りますから、初心の時は如何いふ工合に七卅に配當するものかチヨ

武村耕靄女史新案

圖案　刺繡用

櫻燕



武村耕靄女史新案



フト解り憎いものである、これは南天斗りに非ず、梢頭に繁茂したる枝葉が廣く張て居るものは皆同じことでございます。此類のものは身木即ち實のある所を以て花躰の骨子として姿を調へるものであります、

實の時の南天は其物全躰が既に陰に屬して居ります、生花に於て陰斗りの物を挿けることを嫌ふに依て何か花の物を添へて陰陽とするがよろしい、又南天一色にて智信の枝まで生け成す時は、第一出生に取ても餘り低くなり過ぎて甚だ面白くない而已ならず詠めの點より觀ても風致に乏しい故に智信の二枝は他の花をあしらふがよろしい、例へば寒菊水仙の如きが最も適當して居ります、

左に示すは南天五本に寒菊をあしらふたる所である




●椿の生方

椿は花一輪にても初盛殘を分つことが出來る「これは椿に限らず何にても總て枝有て身木に大葉中葉のあるものは皆同樣てある」即ち智信に中開を附る時は初花て、禮義に中開を附ける時は盛花て、忠孝仁に中開を着ける時は殘花となります。

又花數を多く使ふ時は、右の外に滿開、中開、蕾を以て初盛殘の差別をなす、滿開を多く遣ふ時は殘花で、中開を多く遣ふ時は盛花て、蕾を多く使ふ時は初花の生け方となります、




# 國文學講義

## 鳥　（枕艸紙）

文學士　尾上柴舟

鶯は、ふみなどにも、めでたき物につくり、聲よりはじめて、樣かたちも、さばかり、あてに、うつくしきほどよりは、九重の中に啼かぬぞいとわろき。人の、さなむある、といひしを、さしもあらじ、と思ひしに、十年ばかり侍らひて聞きしに、まことに、さらに、音もせざりき。

○ふみなどにもめでたきものにつくり。ふみは詩をいふなり。鶯を、詩にもつくりて、愛すべく、賞すべきもの、といふなり。○あてには、上品なるなり。○九重の中、九重は内裏、帝の門は九重なり、といふ故事よりかくいふ。○さしもあらじ、は、人の、鶯の内裏にては啼かず、といひしを、左樣の事はあるまじ、と清少の思ふなり。さしもの、しも、は語勢を强めんが爲めの助辭なり。○こゝより以下、鶯の事をいふなり。鶯は、詩などにもつくりて、めでたきものといひ、其聲はいふも更なり。其有樣、容貌も、さほどに、上品に、美しきものなり。されど、それに不相應にも、九重の中に啼かぬは、いと惡しきことなり。ある人、會て、おのれに、かくある、とて、この事を語りしも、おのれは、左樣の事はあるまじ、と思ひたり。さるに、十年ばかり、禁中に侍らひて、鶯の啼くや、とて、耳傾けしに、げに、ある人のいひしが如く、さらに、その物音もせざりき。○此節、猶次につゞけて見るべし。

さるは、竹もいと近く、紅梅もいとよく、通ひぬべきたよりなりかし。まかでゝ聞けば、あやしき家の、見どころもなき梅など

には、はなやかにぞなく。

○さるは。しかるはなり。禁中の鶯の來べき譯はない。○竹もいとちかく。禁中、淸涼殿の東庭に、竹臺あり、といへば、近く、とはいふなり。いとの字、普通の本にはなきを、一本によりて補へり。○紅梅もいとよく、禁中には、淸涼殿、仁壽殿、梅壺などに、紅梅あり、といへば、そを、さしたるなり。○たよりなりかし。便りは、よりどころなり。かし、は、咏嘆の助辭。○まかでゝ。禁中より、里に退出してなり。○あやしき。は賤しきなり。善からぬなり。奇怪の意にあらず。

○禁中は、鶯の宿る、といふ竹もいと近くあり。また、鶯の塒とす、といふ紅梅も、いと善ければ、自づから、鶯の通ひ來べき便りなり。されど、來啼かぬは、いかなる故にかあらむ。禁中を退りて、里に出でゝ聞けば、賤しき、汚なき家の、何の見處もなき梅の樹などには、はなやかに鳴く。いとあやしき事なり。

○禁中に鶯の啼かぬを叙したるはよし。されど、さるは竹も、の一句、連關の狀頗る惡し。爲めに、意味の明瞭ならざる嫌あり。此の如きの處、文中尠なしとせず。注意せずはあるべからず。

夜なかぬも、いぎたなきこゝちすれども、今は、いかゞせむ。夏秋の末まで、おいごゑになきて、むしくひなど、ようもあらぬ者は、名をつけかへていふぞ、くち惜しく、すごきこゝちする。それも、雀などやうに、常にある鳥ならば、さも覺ゆまじ。

○いぎたなき。寢汚きにて眠りを貪るをいふ○おいごゑ、は、老聲なり。老いかすれて、若やかに、花やかならぬ聲なり。○むしくひ。鶯の虫を喰ふよりいふつけたる名。○ようもあらぬ者。よくもなきもの、賤しきもの。

○鶯は、夜も鳴かば、猶、いとめでたかるべけれど、啼かねば、それも、眠りを貪るものゝやう思はるれど、天性、夜啼かぬものなれば、いかゞすべき。せん方なきことなり。此鳥、夏秋の末までも、老いはてたる聲

にて啼けば、はや、先きのめでたさも失せはて、賤しき者は、虫食いなどいひかへて、鶯とは云はぬは、口惜しく、且、物すさましく思はるゝなり。それも、雀などの如く、平常、いつにてもある鳥ならば、さばかり、口惜しく、すさましくも思ふまじ。○此節、猶、次につづけて見るべし

○鶯の夜啼かぬを、飽かず思ひたるは、いとをかし。此人、今にありて、西洋の、ナイチンゲールの事、聞きたらば、何とかいふらむ。鶯の老いはてゝ、人に侮らるゝ。壽なれば、すなはち、恥多きもの、啻に、人間のみにはあらざるなり。

春なく故こそはあらめ。年たちかへるなどをかしきことに、歌にも、ふみにも、つくるなるは。なほ、春の中ならましかば、いかに、をかしからまし。

○春啼く故こそはあらめ、は、鶯は、夏秋までも啼くを、春の鳥と定めたるは、春啼くべき故あるならむ、といふなり。此句、次の「年たちかへる……ふみにもつくるなるは」。の、下に置きて見れば、よく解せらるべし。○年たちかへるなど。拾遺集春部に、素性法師、「あら玉の年たちかへる朝より待たるゝものは鶯の聲」、などによりて書けるならむ。

○鶯は、歌人、文人などの、年たちかへる朝より、其聲の待たるゝものなりなど、趣味あることゝして、歌にも、詩にも、作くるは、此鳥の春なくがよき故あればならむ。されば、夏秋までもなかで、たゞ、春の中ばかり啼くものならば、いかばかり、趣あるものならむ。

○此觀察、いとおもしろし。六日の菖蒲、十日の菊、其香も、その色も、さばかり、劣れるにはあらねど、其折を過ぐればこそ懷しからぬなれ。鶯も、春のみ啼くものならば、實に、いかばかりゆかしからむ。

人をも人げなう、世のおぼえあなづらはしうなりそめにたるをば、そしりやはする。鳶烏などのうへは、見入れ、聞き入れなどする人、世になしかし。されば、いみじか

るべきものとなりたれば、と思ふに、心ゆかぬこゝちするなり。

○人げなう、は、人氣無うなり。人がましくなきなり。威望も、權力も、無くなりたるなり。○世の覺え、世人の尊重なり。○あなづらはしう、は、侮らるゝやうなり。○見入れ、聞き入れ、は、心を入れて、見たり、聞きたりする、をいふ。○いみじかるべきもの、となりたれば、と思ふに、は、鶯の、世人に愛せられて、甚だ、重かるべきものとなりたれば、かく、種々に批難もせらるゝならむ、と思ふになり。なりたれば、は、例の書きさしなれば其心して解すべし。○心ゆかぬ、は、心の、その方に行かぬこと、乃ち、此處にては、滿足せぬことなり。

○鶯の、かく、批難せらるゝを思ふに。これも、人の、鶯を愛し、重んずるより、起るものなり。人にても、威望あり、名聲ある時には、彼れ、是れ、批許せらるゝこともあらむ。されど、人望もなく、世人の尊敬もなく、人に侮らるゝやうなり初めたる時、其人を、何人か、今更に、思ひ出して、謗るものあらむや。鶯の身の上も、また、これに同じ。鳶烏などの如く、常に、目に觸れ、耳に聞くものは、今更、心を込めて見、氣を留めて聞きなどする人は、世の中には無きなり。されば、鶯は、甚だ世に重んぜらるゝものとなりたれば、種々批難せらるゝならむ、と思ひたれど。猶、少しく、滿足せぬやう、不審の處あるやう思はるゝなり。

祭のかへさ見るとて、雲林院、知足院などの前に、車を立てたれば、郭公も、しのばぬにやあらむ啼くに、いとようまねびにせて、こだかき木どもの中に、もろこゑになきたるこそ、さすかに、をかしけれ。

○祭のかへさ。祭は、賀茂の祭、夏の初めに行ふ。かへさ、は、歸るさ、なり。雲林院。紫野にありし名高き寺なり。今、うぢゐといふが其跡なりといふ。○知足院千葉介建立、と拾芥抄にいへり。知足院關白の、知足院とは異なれり。後者は、奈良にありしなり。○しの

ばぬにやあらむ。堪へかねたるならむ、なり。夏の初めの、若葉のかげの、ゆかしさに堪へかねたるあらむ音に立てゝ、啼く、といふなり。この句、「啼く聲をえやは忍ばぬ郭公、初うの花　かげにかくれて」の古歌の詞を用ひしなり。○もろごゑは、聲々に鳴くなり。諸聲は、もろ〳〵の聲、多くの聲の意。

○賀茂の祭のかへるさを見む、とて、雲林院、知足院などの前に、自分等の乘れる車を留め置きたれば、若葉の蔭のこゝろよきに、郭公も、こらへのねたるならむ、啼き出でたるに、その聲にいとよく眞似ひ似せて丈高き樹々の中に、聲々に啼きたるは、品よからぬことなれど、しかはがに、趣あることとなり。

○此節、すこしく霧を揚げたり。初め、夜なかぬ云々より貶しそめて、春のみ啼くものならば、いかによからむ、といひて、不地に陷れ、此處にて、また、生地に復さしめたり。擒縱活殺の自在なるところ、此記者の獨特なり。

郭公は、猶、更に、いふべきかたなし。いつしか、したり顏にもきこえ、歌に、卯花、花たちばななどに、やどりをして、はた、かくれたるもねだけなる心ばへなり。

○いつしかしたり顏にも聞え。いつしか、はいつか、いつの間にやら。の意と、何れの時にか、いつになつたらの意とあり。此處にては、前のいつの間にやら、と解すべし。したり顏は、得意らしきなり、郭公は、五月になれば、得意らしく啼く、と、昔より、いひならはしたれば、かく、聞ゆとはいふなり。○歌に、卯花、はな橘、などに、やどりをして。卯花に宿る、といふ歌は、前に、一つ擧げたり。此の如きもの、他に多し。花橘のは、「今朝きよき未だ旅なる杜宇花橘にやどはからなむ」「宿りせし花橘も枯れなくになど杜宇聲たえぬらむ」。など、これらも多し。○はた、かくれたる。はた、はまたに近し。かくれたる、は卯花などに隱れたるなり。○ねたげなる心ばへ。嫉ましくおもはるる心意氣なり。杜宇の、愛らしきより、かく、其心意氣

の嫉まし、とはいふなり。
○郭公は、鶯よりも、猶更に、いはんかたなくめでたき鳥なり。五月になれば、何時の間にやら、得意らしく啼く樣にも聞ゆ。歌に、卯花、あるは花橘などに棲みて、また、其木間に少し隱くれたるも、嫉ましき心意氣なり。

五月雨の短夜にねざめをして、いかで、人よりさきに聞かむ、と待たれて、夜深く、うちいでたる聲の、らう〳〵しう、愛敬づきたる、いみじう、心あくがれ、せんかたなし。六月になりぬれば、音もせずなりぬる。すべて、いふもおろかなり。夜なくもの、すべて、いづれも〳〵めでたし。稚兒とものみぞさしもなき。

○五月雨は、梅雨なり。○うちいでたる聲。なき出でたる杜鵑の聲なり。○らう〳〵しう。良々しうなり。美聲なるをいふ。○愛敬づきたる。愛敬は今いふ愛嬌におなじ。づきたる、は愛嬌めきたるなり。○音もせずなりぬる。聲も、絕えて、聞えぞなりたるなり。
○梅雨の淋しくそゝぐ短夜に、寢覺して、何卒、他の人よりも先に、杜鵑の聲、聞きつけむ、と待たるゝに、夜深うなりて、啼き出でたる聲の、うるはしく、愛嬌ある、聞くまゝに、甚しく、心も浮れいでゝ、止めむかたなし。六月になれば、聲も聞えずなりたるは、鶯の老聲に、秋までも啼くとは異なりて、めでたきことはすべて、口に云ふも愚なるほどなり。夜啼くものは、どれも、趣あるものなれど、たゞ、子供等の夜泣きするは、左程、よくもあらぬものなり。
○先きの、鶯を貶したるに反して、爰に甚しく、杜鵑をあげたる全く、他人と異なりたる一種の觀察なり。夜啼くもの、皆可しといひたる次ぎに直ちに、たゞ、稚兒どものみ不可なり、といへる、揶揄の筆法、尤も妙なり。たゞ、此一句あり、全篇皆活動す。（完）

# 漢文評釋

文學士　久保天隨

## 下岐蘇川記（中）（齋藤拙堂）

山皆石身皺十。松爲之髮。百紅杜鵑粧點於其間。腥血如滴。又處處有水簾懸焉。絞絞纚纚。墜於潭石上。石皆奇狀。羅列兩岸。或特立若柱。或析裂若門。或若渴驥飲澗。或若臥牛横道。五色陸離相間。皴率作大小斧劈。間有作荷葉披麻者。濯波浪以出。交替去來。不暇應接。蓋譎詭變幻中帶淸秀深穩三態。非荆關之筆倪黄之手不能狀也。雖僕隷輩不解山水之趣者。皆連呼奇不絶聲。

（字解）石身、全體石なること、○紅杜鵑、躑躅花を杜鵑花といふ、紅杜鵑は赤色の躑躅花、○腥血は、躑躅花の赤きを形容したもので、杜鵑血に啼くといふことから轉じて來たものゝであろう、○水簾、瀑の小なるもの、○絞絞纚纚、絲のほつれて垂たる如き樣、○潭石上、深淵の石の上、○特立、ひとり離れて立つ、○若は如、○析裂、二字ともに裂ける、○渴驥飲澗、喉の乾きたる馬が谷に飲む、○陸離は色鮮にして目も眩むばかりなること、○相間は相交る、○皴は、石面に亂れ布きたる線、○大小斧劈、荷葉披麻、いづれも畫家が巖や山を畫くとき用ふる運筆法の名、大斧劈は大きな分れ目が巖面にあるもの、小斧劈は大斧劈の更に細なるもの、狩野派の山水には、この二者が多いやうだ。荷葉といふのは、石面の線が蓮の葉脈のやうに成つたもので、披麻といふのは、或る一點から射出し、入れ亂れて居る者を指す、○交替去來、入り替り立ち替り、忽ち去り忽ち來る、○譎詭、喩え樣もなく、且つ尋常ならざること、○荆關、倪黄、いづれも畫師の人名、荆は荆浩、關は關同、倪は倪瓚、黄は黄公望、宋元間の畫を以て世に知られた人達である○僕隷輩、下部伴人ども。

（文義）さて兩崖の巒嶮を能く〳〵見ると、山とはいふもの丶、質は石であつた、上に少しばかり土を戴きそこに松の木が髮の如くに生えて居る。巖の凹處などには、赤色の躑躅花が根をつけて居るが、其花の色

の鮮なことは、腥い血が滴れるやうである。また崖上處々に、瀑、懸つて居て、絲を亂したやうに、だら〳〵と落ち、深淵の石の上に注いでゐる。その深淵の石——これが又とり〳〵に珍らしい形をして、兩岸にずら〳〵と並んで居る。中には、獨り離れ立ちて柱の如き者もあり、裂けて三本柱の門の形をした者もあり、喉の乾いた馬が谷に飲むやうな様をしたのもあれば、疲た牛が道に横つたやうな姿をしたのもある。これ等の石の色は、いづれも違つて居て、五色相映じ目もあやになる位である。この河中の石は、いづれも皴が判然と顯はれて居て、大斧劈もあれば、小斧劈もあり、荷葉もあれば、披麻もある。これ等が波に洗はれながら、水の上に出て居て、入り代り立ち替り、忽ち去り忽ち來り、一々應接に暇ない位である。全體の景色を評すると、譎詭にして尋常ならず、變幻して平板ではないが、何處となしに清秀深隱の趣があつて、幽冥險怪といふ風は見えない。喩ていへば、丁度、荊關倪黄の畫いたやうなもので、外の人には決して寫し出すことが出來ない。かくの如き好風景であるから、下部作人の如き、平常は山水の趣など少しも解らない無風流な者どもでさへも、頻に感に堪へ兼ねて、面白い〳〵と續けざまに叫んで居て、しばしも聲も休めない。

●（評論）この一段は、最も精彩に富んで居る處で、初めに山、そこに懸て居る瀑から、潭中の石に移り、隨分こまかに立ち廻はつて、之を形容し、殆んど憾なきまでに寫し、最後に之を評し、僕隷輩を引き來りて、その風致の異常なることを裏面から暗寫して居る、これで十分といはねばならぬ。

忽過一大巖屹立水中。舟殆觸之。少誤則齏粉矣。衆懼而默。舟人笑。捩柁避之。輒掠巖角過。如此者數處。未嘗差絲毫。但經巖際。波激舟舞。飛沫撲人。衣袂盡濕。回視僕從。各握兩把汗。殆無人色。舟人甚閒暇。從容吹烟百坐。視上流船併力挽上者。難易懸絶。

●（字解）齏粉、俗に云ふ粉微塵。〇捩柁、かぢを曲げていゝ、ひねる。〇輒掠巖角過、そこで巖かどを掠つて過ぎ

る、○未容差絲毫、差は違ふ、一分一厘も誤たない、○經巖際、巖の側を通る、○握兩把汗、兩手に冷汗を握る、○間暇、優然として、打澄ましたる氣色、○從容身の仕こなしの靜かなること、○吹烟、煙草を吸ふこと、○併力挽上、舟に綱を付け、數人の力を合せて流を引き上ぐること、○難易懸絶、下るは易く、上は難く、とても御話にならぬ程、違つて居る。

(文義)さうこうして、舟の進む中に、一つの大きな巖がひつこりと水の中に突立つて居て、舟は、あはや、之に觸れむとした。この時、少し誤つたならば、粉微塵に碎けて、自分達も水中の鬼となるかも知れぬといふところから、舟中の人は皆懼れて、不意にだまりかへつて仕舞つた。しかし、此處が船頭の熟練で、笑ひながら、ひよいと梶をひねくつて、之を避けるといふと、船は巖角を擦りながら、通りぬけて仕舞つて、先々無事であつた。こんな風な處が、凡そ五六個處もあつたけれども、その度ごとに、一厘一毫も誤たず、すべて切りぬけた。だが、巖の側を通ることであるから、波は激し、舟は舞ひ、水の沫が飛んで人にふりかゝり、着物まで、づぶ濡れになつたのには、聊か閉口の氣味であつた。そこで、下部ともは、どうかと、ふりかへつて見ると、いづれも兩手に冷汗を握り、靑菜に鹽ともいふべきばかりで、人間らしい色をして居るものもない。そこへ行くと、船頭ばかりは平氣の平左衛門で、乙う打澄まし、しづ／＼と脂さがりに煙管をくわへて、すぱ／＼と烟草を吹かして居る。この時、歸りの船の、河を上つて來るのを見ると、綱をつけて五六人で引き上げるといふ始末で、その勞力の違ふことは、夥しいものである。

(評論)この一段、專ら水勢を寫し、前の「不覺舟移」といへる一句に映帶し、舟行の大體は此に盡くして居る。それも單に水勢のみを寫さないで、一大巖を出して來たところは、前段と相接し、遂の柄は折れても綱のみは切れないといふ樣な趣がある。しかし、專ら舟中の人の動作を借りて、側面的に述べたものだから、決して前と重複することなく、最も明白に顯はれ居

る。最後の二句、流を上る船を擧げたのも、同一の事情であるが、この二句は全體に於て非常の重量を加へた者である、何は兎もあれ、筆力縱橫、その觀察範圍の十分に行き亘つて居ることは、誰でも爭ふことは出來まいと思はれる、これが名家の名家たる所以であろう。

## 歷代和歌評釋（四）（古今集の部）

文學士　鹽井雨江

つひに行く道とはかねてききしかど
　昨日今日とは思はざりしを

○これも同し所にあり。作者は在原業平朝臣なり。朝臣ふと病氣にかゝりて、いよ〳〵衰弱したる病床、我が命も最早限りなりと知りてよまれたる歌なり。朝臣の病死したるは、元慶四年五月の十八日にして、年は五十六なりき。

○つひに行く道。死んで行くことを言へるなり。生きて居る人は、終には死んで行くことなればなり。○かねて。以前よりといふ意なり。○昨日今日とは。今日か明日急に死んで行かんとは、思はざりけりといふ事なり。思はざりけりのけりは、例の感動詞なり。

○一首の意は、人間に死は逃れぬ事なり。死んで行くといふ事は、誰れでも終には必ずある事なりといふ事は、かねてより聞き居りて、よく我れも承知し居りたれど、されど、今日か明日急にかく死んで行かんとは思はざりしを、今や其の時は來たりて、我れは死んで行く事かや、サテモ〳〵と嘆息したるなり。

○思ふ心を、ありのまゝに言ひ出でゝ、毫も作らず、飾らず、道理がましき理屈をいはず、悟りめきたる文句もいはず、よく眞實の誠を言ひ盡くし得て、いと面白し人の不起の病床の吟などは、「露よりもはかなき命」とか「あるかなきかの世」とか、「夢の世」とか「たのまれぬ世」とか、「うつせみの命」とか、さる理屈めきたる詞が、普通なり。貫之が辭世に「手にむすぶ水にやどれる月かげのあるか無きかの世にこそありけれ」大江の千

里が「紅葉を風にまかせて見るよりもはかなき物は命なりけり」藤原のこれもとが「露をなどあだなるものと思ひけむ我が身も草に置かぬばかりを」などいふが、普通なり。さるに、此の朝臣のは、毫もさる詞に出でずして、いと面白し。

○此の朝臣は、彼の思ひを凝らし細工を凝らして、僅に歌を工み得る如き歌よみにはあらず。天倫の詩人なり。故に、其のいふ所や、何んとなくありのまゝを言ふのみにても、よく平凡ならず。殊更に作らず飾らずして、自から限りなき詩趣あり。其の思想や、よく自然の性情をつくし、其の言や自から深く、自から大やかなるところを得たり。そは、この一首にても知らる。辭世の吟。我れは、この歌を以て、千古の名吟とす。

**紫の一本故に、武藏野の**
**草はみながらあはれとぞ見る。**

○此の歌は、古今集雜歌の部にあり。題も讀人も知らずの歌なり。

○紫。草の名なり。「紫の一本故に」とは、一本の紫草を、可愛く思ふ故にといふ意なり。○みながら。みながらのなを一字略したるにて、皆ながら即ちすべて皆といふ意なり。○あはれとぞ見る。可愛く思はるゝよといふ意なり。

○一首の意は、一本の紫を、可愛く思ふ故に、其の縁にて、仝じ武藏野の草は、皆すべて可愛く思はるゝよといふ事にて、これは、我が愛する人を、武藏野の紫にたとへ、其の所縁の人々を、同じ武藏野の草になして、よめる歌にて、一人の人の可愛き故に、其の人に縁ある人は皆可愛く思はるゝといひたるなり。一人の妻の誠に可愛き故に、其の妻の兄弟姉妹なども皆可愛く思はるるといふやうな事なり。彼の「坊主憎くければ、袈裟まで憎し」といふ諺の全く反對の情なり。

○愛情誠に面白し。譬喩もまた穩當にして面白し。紫の一本のげにゆかしき歌とやいはむ。紫の一本、紫のゆかりなど、多く後世の歌文の上に引きいでられて、ゆかしき一つの詞藻の種となりたる歌なり。伊勢物語なる「紫のいろ濃き時はめもはるに野なる草木ぞ別れざ

りける」とあるも、此の歌にならひたるものなり。

今こそあれ、我れも昔は男山、
　盛ゆく時もありこしものを。

○これも、同じ所にあり。題も作者も同じく知られず。

○今こそあれ。今こそ、斯く年も老い、零落してあれどゝいふ意なり。○我れも昔は男山。我れも昔は一かどの男にてといふ事なり。○男山といへるは、「我れも昔は男」とのみいふべきを、詞のたらぬより、男山といふ山の名にかけていひつゞけ、自から次の「盛ゆく」といふ詞に縁あらしめたるなり。○盛ゆく時。榮えたる時節なり。○ありこしものを。榮えたる時もありて來たれるものなるに。といふ事にて、「さてもくちをしき事かな」といふ情を、餘韻にこめたるなり。

○一首の意は、今はかく年も老い世に零落もしたれど、我れとても、昔は一かどの男一疋にて、世に榮えて暮らしたる時節もあつて來たれるものなるに、さても今の身の殘念やといふ意なり。

○老後、零落の境遇にありての嘆息、げにとあはれにきかれ、切齒扼腕の狀さへ、自から見らるゝ心地す。言ひまはしも面白く、調も強く深くひゞきたり。男山といひつゞけたる細工、少しのいやみなく、反て何んとなう一段のけしきをあげたる心地す。

世の中に、さらぬ別れの無くもがな、
　千代もとなげく人の子の爲め。

○これも同卷にあり。在原業平朝臣の歌なり。○朝臣、宮仕へして京に住みたる頃、長岡といふ所に住みたまへる老母の許より「老いぬれば、さらぬ別れのありといへば、いよ〳〵見まくほしき君かも」とよみて、朝臣のなつかしく、あひたきよしを言ひこされければ、朝臣は取る物も取りあへず老母の許へ參りたまへる途上にてよみたまへるものなり。

○さらぬ別れ。逃れ難き別れにて、即ち、死別の事なり。○なくもがな。無ければよいといふ意なり。○千代もとなげく。千代もあれかしと切に思ひ願ふ意なり。即ち、親の壽命の千代に長かれと願ふなり。○人の子の

爲め。子のためにといふ事なり。
○一首の意は、親の御命を、千代も長かれと願ふ子どもの爲めに、あはれ、此の世の中に、逃れがたき死別といふ事の無ければよいと云ふ事にて、四五 一二三句とおきかへて見るべし。
○唯だ思ふがまゝをうちいでてたるなれど、朝臣が親を思ふ肺腑の熱血溢れいでたるものにて、親を愛する子供が至誠の情、げに眞實に斯くこそあれと覺ゆる歌なりや。彼の藤原の兼輔が、子供の限りなく可愛く、子供を思ふ親の愛情のやみがたしとて、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな」といひたると並べて、親子の間の至情、好對の名歌とすべし。

世の中は、何にか常なる。飛鳥川、
　昨日の淵ぞ、今日は瀬になる。

○これは、十八の卷の雜歌の中にあり。作者は知らず
○世の中は。「世の中にては」といふ意なり。○何にか常なる。常とは常住の意にて、變はらぬをいふ。いかなる者が、いつまでも變はらずに居るか、やといふ事なり。○飛鳥川。大和にあり。○昨日の淵。昨日は淵にてありし所の意なり。淵とは、水の淀みて深くなりたる所をいふ。瀬とは水の淺くして流るゝ所をいふ。
○一首の意は、此の世の中にては、いかなる物が、いつまでも變はらずに居るかや。飛鳥川を見るに、昨日は淵でありし所が、今日は變はりて、瀬になる事よ。世の中の事物、さても、常住なるはなし、變はらざるはなし、皆早く變はり變はり行くといふ意なり。
○世の中の無常をうたへるまでにて、別にめづらしき思想にはあらねど、面白く言ひまはして、調切に感深くひゞきたり。飛鳥川を取り出でたるも、大に面白し。飛鳥の中に、明日（あす）の音ありて、昨日 今日といへる詞にひゞきあひて、面白し。「昨日の淵が今日の瀬になる」といへるも、思ひきりたる言ひかたにて、誠に面白し。

小説

# 萌黄絲縅

田村松魚

その一

「……巴は七騎の内にあり、生年二十八、身の盛なる女なり、さる剛の者なりければ、北國度々の合戰にも手を負はず　百騎が中にも七騎になるまで付きたりけり、四宮河原、神無社、關の清水、關の明神打過ぎて、關寺の前を粟津へ向けてぞ進みける。……」

盛衰記の、巴關東下向の條を、若やかな美しい聲で、南向きの丸窓の中に讀んでゐる。朝日が濡椽から障子の隙間へ射し込んで、一室は目覺るやう花やかに明るい、丁度小春日和の暖かな日曜の九時頃である。

聲は稍々調子高くなつた。

「巴は都を出でける時は、紺村紅に千鳥の鎧直垂を着たりけるが、關寺の合戰には紫陽子を繡付けたる直垂に、菊閉滋くして萌黄絲縅の腹巻に袖付けて五枚甲の緒をしめ、三尺五寸の太刀に二十四插たる眞羽の矢の射殘したるを負ひ、重藤の弓にせき弦かけ、連錢葦毛の馬に金覆輪の鞍置きてぞ乘りたりける。……」

語調は次第に高く冴えた。

「七騎が先陣に進みて打ちけるが、何とか思ひけん、甲を脱ぎ長に餘る黒髪を後に、さと打越して、額に天冠を當て、白打出の笠を着て眉目も形も優なりけり。……」

と讀み行く聲はいよ〳〵冴えに冴えて淀まず滯らず美しふさら〳〵と、やがて一節を讀み終つた。そして再びその條を繰へして、今度は默讀をしてゐるのが、少し身體を前に、文机に倚掛ると頰杖を突いた。するとハラリと友禪の襦袢の袖口が辷つて二の腕が眞ッ白、能く引合に出される白魚を其儘の紅粉指に寶石入りの黄金の指輪が輝いた。

如何にも熱心に其條ばかりを幾度となく繰り返し〳〵讀んだ後、何か知らず深く思考に沈んでゐる容子、傍の

繪筆を取つて、今汲んで來た計りの、筆洗の新しい水にそれを入れたが、筆を洗ふでもなく、洗はぬでもなく、小兒のするやう惡戯らしくチャブ〳〵と音をさせて、小さな漣の立つのを、長い睫の二重瞼の、パッチリとした愛くるしい眼で、如何にも眞面目腐つて凝視めた。稍々暫時手は同じ事をしながら猶考へ込んで居たが、急に筆洗の中をぐる〳〵と掻き廻すやうにして筆を洗つて、その滴を切つて了ふと泌と其穗先を視た。花のやうな紅の唇でチョイと其穗先を吸ふて文机の一端に置れた繪具皿に向つて筆を染めた。

その色は萠黄色。

思ひ切つて含ませた萠黄色の筆を、泌とまた視つめて居たが、其儘手を延してそれを又筆洗の中で洗つた。

水は萠黄色。筆の動くにつれて立つ萠黄色の波紋。白磁の筆洗もその色に染められて了つた。

「萠黄絲縅の腹巻に袖附けて……」。

同じことを口の中で幾度も繰り返しては、筆を洗つてその色を染め、染めては洗ふて、水の色のいよ〳〵濃くなり行くを面白さうに眺めながら、若い〳〵聲で猶も例の、

「萠黄絲縅の腹巻に袖附けて！。」

その二

山村瀧子は女繪師。今年は漸と十七歳。桂花女史といふ畫號はまだ多くの人の耳には入らぬが、某大家の門に秀才の名高く、行末女流畫家として望多き靈腕を以て生れてゐた。

來春の繪畫展覽會に出すべき瀧子の畫題は瀧子自ら選んだもの。

それは巴御前。

瀧子が曾て盛衰記を讀んだ時、生を同じく女性に稟けた爲の同情でもあらう、巴御前の名は深く其小さな胸に刻まれた。

春風といふ信濃第一の强馬に一鞭あてゝ、日本一の剛の者、畠山の庄司次郎重忠に取らせたる鎧の袖を、ふつりとばかり引切つた女將軍の俤を瀧子は如何に勇ましく感じたか。遠江の國の住人、内田の三郎家吉と名乘つ

て進む荒武者と引組んで、やをれ家吉よ、日本一と聞えたる木曾の山里に住みたる者なり、我を軍の師と憑めど、弓手の肘を指出し、甲の眞顔取結めて鞍の前輪に攻め付けつゝ、內甲に手を入れて七寸五分の腰刀を拔き出し、引わほのけて家吉が素首掻き落した其雄々しき戰振を瀧子は如何に感じたか。野の末山の奧までも一つ道にと思ひ切つて木曾が後を慕へども、女たる身の悲しさには最後の伴の叶はず追歸されて、粟津が原の露より繁き涙に離別を惜んだ時の巴御前、それを、瀧子は如何に感じたか。兎に角瀧子は此のやさしくもあはれなる女武者の武者振りに凡ての若き熱情を捧げたのであつた。

瀧子は巴御前を來春の畵題に撰んだことを、其師なる人に語つた。師はそが好畵題であることを告げた後、武者繪を描くべき人の心すべき點を詳はしく注意した。師が語つた談話の總てを小さな腦に貯へての歸途、瀧子は大路を馳る馬の足音に耳を澄ました、古物屋の店頭に飾れる甲冑の製作にも目を注いだ。今若き女繪師は其昔の中三權頭が娘旭將軍の寵妾であつたその當時を追想ふて、關寺、粟津ヶ原、松の木立、畷道、それも眼前に見ゆるやう、名もなき草の葉のそよぐさへも只ならず見もし聞きもしたのである。

家に歸るを直ぐ瀧子は母に向つて畵題を語つた。そして師が甲冑に就いて語つて故實の彼是の、猶其腑に落ちぬあたりを其母に質したのである。瀧子は巴御前が其時の扮裝が紫隔子を織付けた直垂に、菊閉滋くして、萠黃絲縅の腹巻に袖付けて五枚甲の緒をしめ、連錢葦毛の馬にゆらりと騎つてゐたといふことをも語つた、そしてそれに就いて樣々の質問をしたてある。すると母は或る昔物語を始めた。

わが山村家の代々の重寶は一具の鎧であつた。それは亡くなつたお父上樣より七八代前の山村主水と申した方が殿樣より拜領の賜物で、誠に世に名高い重寶であつたので代々山村家の家と共に傳はつてゐたのであつたが、お父上樣の世となつて、がらりと變つた時、代の變に、我家より放つべきものではないと父上樣も我も

思はぬてはなかつたが、遂に已むを得ぬ事情の爲に、其重寶を殘念ながら人手に渡したのである。

其後父上樣はお亡なり、そなたの兄樣が山村を御繼ぎなされた其時のこと、世が世であつたならば、あの重寶の鎧も八代目の山村の姓を名乘るべき人の手にあるべき筈であるのにと母親たる身のそれが心掛りであつたが、其時は早や誰の手に渡つてゐるといふことさへも知れなかつた。

そなたの兄樣が人幷優れての御出世で、此母も其方も世を安々と送ることの出來得る今日となつた、折々思ひ出さるゝは其鎧の事、それが不圖したことから今は彼の男爵の大原家の秘藏になつて居ると、さる確な人から聞込んだ時は猶更昔が忍ばれたが、併し今となつては致方のないことゝ斷念るより外はない。けれども今其方が鎧の話をするにつけてもまた思ひ出す其鎧の事、丁度其鎧も其方の話の巴御前の着たといふ鎧のやうに、萠黄絲縅の鎧で、確か五枚甲といふたものであつた。それは一目見てさへ尋常の作ではないと思ふ程立派なものであつたが、若しそれが今も此の家に長く傳つてゐたことであつたならば、其方が巴御前の扮裝を描くにつけて、調ぶべき便の一つとなつたことであらうにと老人の愚痴とは云ふものゝ昔戀しい思ひがすると長々しい昔語りをしたのである。

瀧子は母の物語を極めて熱心に聞ひてゐた。そして母の談話が終つた時に、如何に瀧子は深く感じたか、ハラハラと涙を流した。

母は不審しげに瀧子を見たが、老の愚痴より何事をも知らぬ若き我子に涙を見せたことを自ら悔いて、忽ち其話頭を轉じたのである。

けれども瀧子は却つて母の言葉を打消した。

「お母上樣、その重寶の鎧と申すのも、矢張り菊閉滋くして萠黄絲縅の腹巻に袖付けて五枚甲のと申すのでございましたか。」

「オヽ、そんな六ケ敷ことは知らぬけれど……、菊閉滋くとやら其邊は如何であつたかわたしも今は能くは覺えて居ないがね、萠黄絲縅といふことはそれは

確だよ、それは〳〵は花々しい色の立派な鎧、……。」
「マア、そうでございましたかねえ、惜しいことを、何んだつてまアお父上樣やお母上樣はそういふ家重代の寶を人手にお渡しなすつたんてせうねえ、ほんとにわたくしは口惜しふ思ひますわ……」
「だつて、それはお前、時節が時節であつたから致方がないのだわね、それにね、種々とまた事情もあつたのだね、……」
母は宥めるやうに云つたのを、瀧子はさも心得ぬといつたやうな風で涼しい眼を覩張つた。
「何程時節が時節だつてお母上樣、その鎧は萠黃絲縅だつたと仰るではありませんか、え、お母上樣……。」
「アラ、萠黃絲縅だつたのが、如何したのかねえ。」
「アラ、マア、萠黃絲縅だつたのに、お母上樣……」
「オヤ、それが如何したといふんだらう、瀧子は。……」
「だつて、その鎧が萠黃絲縅で五枚甲、……、巴御前の着てゐたのかも知れないではございませんか。」
「オホヽヽ、、、、眞逆お前、そんなことはないはね、オか、、、、。」
母は餘り瀧子の言葉の突然で、意外で、そして餘り無邪氣で小供らしかつたので、思はず笑を禁じ得られなかつた。て、思はずも聲高く打ち笑つて。
瀧子は母が自分の言葉を頭から打消して、さも可笑と云つたやうに高笑したので、心の中には私かに母を怨んだ。そして稍ゝ顏を赤らめて俯目になつたが、母の笑つたのに少しく激したかの如くてあつた。瀧子は心の中に我家の重寶の鎧といふのは或は昔巴御前の着したるものであつたかも知れぬといふことを他愛もなく私かに自ら信じた。けれども再び其事は口には出さなかつたが、急に思ひ出したやうに、
「お母樣さん、その鎧は今でも男爵の大原家にあるのでございませうか。」
極めて嚴格に、男らしい程の語調である。
「ア、、確な所から聞ひたのだから、よもや虛言ではあるまいと思ふがねえ。」
「虛言ではございませんと、マア、嬉しいこと、萠黃絲縅

の腹巻に袖付けて、……。」
斯く云ひ捨てゝ瀧子は自己が部屋にと立つた。それから明けても暮れても盛衰記を繙いて、例の巴 關東下向の一節のみを、殆んど一句一字も誤らぬやう諳誦するまでに讀んだ。そして瀧子が其中でも最も心に叶ふた所と云へば……。

その三

上野博物館に今日より臨時展覽會が開かれるといふことである。その出品物は諸家の珍寶名器の類で、古今の絶品奇什を此の一堂に蒐集て廣く衆人の觀に供するといふ。

諸新聞に其主なる品目の掲載せられた時、瀧子は如何に胸轟いたか。視ると神の惠か。其中に

大原男爵家重寶の鎧一具！

瀧子は夢かとばかり、嬉しさに魂も身に添はなかつた。何んと思つて我家を驅け出したか、本郷西片町を後に池の端までは如何道を取つたのか、何時の間に此處まで來たのか、ホツと一氣息吐いて、上野の森の、松葉交りの紅葉の色を、白雲深き大空の下に眺めた時、瀧子は嬉しさが胸一杯に込み上げて來た。

池の端より近道を木立の中へ、落葉を踏む足音も小刻ながら早くも博物館近くになつた時、不圖今迄の嬉しさに引代へて一つの杞憂を惹起した。

それは大原家の重寶の鎧が、確に舊の我家の重寶であつた彼の萠黄絲縅であるか、といふことの疑である。大原家の重寶の鎧といふのが、若しや猶他のであつたならば、萠黄絲縅でなかつたならば如何せう。萠黄絲縅は元と我家の重寶――それが今大原家の秘藏であるにせよ、それを大原家の重寶とは、――別にそれは大原家の所謂代々の重寶なるものがあるのではないか。若し左樣であつたならば、今の喜びは、今の嬉しさは、忽ち此所百歩の中に失望に終るのだ。

併し舊は我家の重寶も、今は正しく大原家の秘藏の品である。それを大原家の重寶として出品してあるのならば、我望は叶ふのだ。そしてそれが果して萠黄絲縅であつたなれば、――無論――元は我家の重寶。そして昔

或は巴御前の着たる鎧であつたかも知ぬ。今其眞僞は十歩、七歩、五歩、唯今右眄左顧の間にあるのだ。瀧子は群衆の間を抜けて甲冑武具を備へ附けた一室にツと這入つた。

パツと双眸に映じた一堂の光景、眼に餘る威毛の色々、花やかなは緋絨、小櫻絨、卯花絨。美しきは啄木絨、山吹絨、藤絨、黒絲絨、紺絲絨の嚴めしき、其他白絲、薄紅、鵯のやさしげなる、勝色、唐錦、段々、節縄目、肩取絨、肩白絨、澤瀉絨、間色絨、格子皮、白皮、黒皮、洗皮、唐皮、毛織皮と綺羅を盡した此方彼方を視る目に、何れも古今の逸品と思はぬはないが、只瀧子が目差すその色は他でもない萌黄絲絨あらぬ、家の名ではない、大原家出品と記したこれの見當らぬかと、血眼になつて次へ〱と探し行く中、唐皮絨の大鎧の其次に紅裾紺、紫裾紺の二領の鎧に并んで其所に見出したそれは即ち萌黄絲絨。そもや何家の出品と視た目にそれと讀まれたは大原家！

アツと瀧子は思はず聲を發して、其手を鎧の袖に觸れしめて、泌と視つめたその眼には生々とした色が滿ちきつて、嬉しさの涙か、睫に露が一ト雫。

ためつ眇めつ、前より横より後より、視上げ視下ろしや、暫時恍惚と視惚て其所を動きもやらぬ。

我を忘れて瀧子は殆んど一日を其所に眺め暮らした。其他の珍器といふものには他目も觸れず、魂は其身を抜け出で、鎧の胸板に宿つたかのやう、凡て我を忘れて飽かず眺め入つた。そして漸くにして思を殘しつゝ其所を立出たが、顔のいづれも精々と如何にも滿足の色が溢れてゐた。

## その四

臨時展覧會が開會てから、第三日目の事であつた。大原男爵家の世継に信忠の君といふのは、お氣に入りの一人の書生を携へて、飛鳥山の紅葉見にと番町の邸を出たのであつたが、上野近くに來た時は空合が次第に惡く、吹く風さへ膚寒く、どうやら雨にもならうかといふ恠しげな日和を危ぶんで、遂に飛鳥山行は其儘お流となつて了つた。しかし折角此所まで來たものを引返す

の興のないこと、丁度博物館に臨時展覧會が開かれて、我家からも四五品の出品もしてゐることだから、其所を見物して見やうといふことになつた。

同族の中でも品行正しき才學優れた信忠、別けて文學美術の嗜好に富み、古今東西の大躰にも通じて一家の識論も見識もあるといふ。で、日頃は常に此等の學術技藝に遊んでゐるのである。

諸家の逸品を備へつけた大廣間、兆殿司の佛畫の、雪舟の山水の、利休の茶碗の光悦の蒔繪の硯箱のといふ天下の名品珍器も一通り見終つて、とある一室に飾り附けた武具の室へと足を運んだ。

「島村、家から出した鎧が見えぬやうだが此の室には無いのかな。」

信忠は稍々疲勞氣味にインバネスの袖を挑て書生の島村を顧みた。

「ハイ、確か此の室でございませうと思ひますが、此所に澤様の白絲縅が出て居りますから、矢張り此室に御座いませうと思ひますが。」

「では彼方の方にあるかも知れん、家のは萌黄絲縅の大鎧ぢや、一目見ても直に分る、サア、も少し彼方へ行つて見やう。」

と信忠は先に立つて其室の奥へ〳〵と歩を運ぶと、一所に觀者が群がつて何をか物珍らしげに見てゐる樣子何事と其方へ進み寄ると、それと知らるゝ萌黄絲縅の大鎧、四方を拂つて由々しく見えた。

「オヽ、あれぢや、家のは……。」

書生に配目して群衆の肩越しに其方を視ると、鎧の前に跪いて、何をか爲せる一人の婦人、紋織お召に菊づくし、薄葡萄色の上衣の袖長々と、海老茶袴の裾を地に引はへながら、膝の上に白紙を舒べて、細筆に墨の色も覺束なく、鎧の形を視上け視下しては頻りとそれを寫生してゐるのであつた。

夜會に結はせた髮の形、鴇色のリボンの色、襟脚極めて白う、俯き勝の横顔も、折々見上げた時の顔立も、譬へやうもなく美しい。

白紙には鎧の形の大躰が寫されて、今は五枚胄の鍬形

の前立、眉庇、眞向から八幡座へかけて出來上り、饅頭の毛曳を描いてゐる。

群衆はそれを取卷いて物珍らしさうに、小聲で取々の噂を立てゝ居るのもあるが、それも耳には入らぬかのやう、唯專心一意を籠めて寫生の筆の運に心を傾けて居た。

信忠は我を忘れて婦人の姿に視とれた。年は十七八、若やかに艶なる美人の色好き姿と、萠黄絲縅の鎧の形と彼是相對しての配合が如何にも優に高尙く、詩題にも畫題にもなりさうな一塲の光景に思はず其所に足をとゞめて眺め入つた。

その五

昨日の空に引かへて今日は晴れやかな天氣、いづれ一室に閉ぢ籠つて讀書三昧に費すべき日ではない。書生の島村は昨日の飛鳥山行がお流になつたのが如何にも口惜しく、今日は一層のこと、鴻の臺眞間の紅葉に若殿を誘はんものと、勢切つて若殿の書齋の襖を開いた。

「若樣、昨日のかはりでござりまするから今日は是非御伴を致しませう、飛鳥山よりは鴻の臺が面白いかと存じまするが、如何でございますか。」

兩手を衝いて頭を下げた。信忠は机に倚つたまゝ振り返つた。年は二十五六、當世風の貴公子とは異つて、何處となく肩巾のある、華車ではないが立派な顏立、濃い眉を少しく顰めた。

「ウム、鴻の臺へ行うといふのも好からうが、今日は少し差閊へる、また此次の事にてもせう。……。」

と云つた儘彼方へ向き直つて何か書見の躰。

書生は手持無沙汰に二の句も續かず、其室を辷り出た。後に信忠は思はず太息。

「飛鳥山も鴻の臺も面白くはない、紅葉狩は何時でも出來ることを、……。」

獨語のやう斯う云つてツイと起つた。そして四方の人を恐るゝかのやう、私かに玄關の方へ、帽掛より帽を取るより早く、伴をもつれず唯一人、辻車に飛乘つて上野の方に馳けさせた。

人車が博物舘の前に着くと、信忠は急しふ下りて、彼の

武具の一室に急いだ。

今日は昨日よりも多くの觀者、其中を擦り抜けて目差け萠黄絲縅の鎧のあたり、それは云ふまでもなく我が家の所有で、日頃より見馴れた品であるのだが、今日は見たい〳〵其鎧。

鎧、其物を見たいのではない、昨日家に歸つてから、何となく忘れ兼ねた或人の俤、袖の移香のあるでもないが、目先にチラツク横顔の美しさ、何處れの人、如何なる婦人とも知らぬけれど、姿形の優しき所より、筆の運の凡ならぬ樣、一目見てもそれとは知らるゝので、戀しさは猶いやが上にも増したのである。

信忠は忘れかねた心の惱を慰せんやうもなく、今日再び博物館に行つた處で、又其人の俤に接することが出來るか、それも覺束ないことであるが、或は我に縁あつてもし逢見ることを得るかも知れぬ、よしや其姿を見ることが出來ぬとしても、其人の高き色香の名殘の、彼の鎧の袖のあたりに移つて居やう、我はそれなりと其人の俤と思つて此心の惱みを慰んものと、唯一人此所を訪ふたのであつた、意外！其人は今日も猶昨日の如く同じ鎧の其前に、同じ昨日の扮裝して、他目もふらず寫生に心を籠めてゐた。

信忠は思はず其方に擦り寄つた。

寫生は今や鎧の袖を終へて前面の身甲に掛つてゐた、惣を萠黄絲にして、脇を啄木の絲で縅し、小札の頭を金銀の磨にした精巧緻密の縅毛を一つ〳〵仔細に視やる眼の色、筆の穗先、熱情は只此の一個の鎧に打込んで四方に人の立見るをも心附かぬ樣である。

信忠も我を忘れてそれに視入つた。昨日見たその姿は、今日茲に猶一段の美を添へたかのやう、近く進めば進む程近勝りのして美しう艶なる顔容、心無き人さへ思はず茲に足を引止められた。

人の見る目も恥しいが、信忠は茲に數時間を立ち盡して此の美女の俤を倦かず眺めた後、漸く其室を立ち出た。胸は種々の思に亂れながら悄然としてとある梯子段を下らうとした時、後より輕く肩を叩いたものがある。愕いて振返ると、莞爾として笑を含んで迎へたの

は、信忠の知人で、此の博物館の取締役、折々信忠の家にも出入する岡山といふ男であつた。

「好く御越になりました、御一人でございますか。」

「ハイ、一寸と散歩に出た序で……。」

と信忠は狼狽ながら答へた。

「左様でございますか、マア彼方へ入つしやつて御休憩なすつて下さい、イヤ、休憩室が設けてございます。」

信忠の辭むを強ひて休憩室へと誘ふた。

岡山は信忠に珈琲を進めながら、

「如何でございます、大分名品が出揃ふたやうですが、御目に留つた品は御座いますか、御宅様からの御出品は何れも結構でございますな、就中にも彼の御秘藏の甲冑は實に天下の名作でございますな。」

「名作といふ程でもありますまいが、作は惡くないといふことですが、……」

「惡くない所ではございません、恐らく今回出品中の甲冑では御宅様のに幷ぶものはないといふ我々の鑑定です、所がをかしいことには彼の鎧を毎日寫生に參る婦人があります、今日も參つて居りますが、貴郎も御覽になりましたらう、十七八の女學生風の婦人ですが、中々な美人でございます、ハハヽヽヽヽ、イヤ斯う云ふと可笑しいが餘り其婦人が熱心に毎日其鎧を寫生をしてゐるので、我々の方では評判になつて居るといふ位、ハハヽヽヽヽ、貴郎御覽にならなかつたかしら、まだ居ませうが一寸御覽なさい、御宅の出品丈に一見の價値はあります、彼の通り澤山ある鎧の中で、一寸見てはさまでに見立たぬ萌黃絲縅のあの鎧丈を那樣に熱心に寫生をするといふのは妙です、マア行つて御覽なさい、極めて好い配色です。」

岡山が熱心に解くのを、信忠は熱心に聞いた。併し其所へ行つて見やうとはしなかつたが、胸は俄に波を打つた。

「今お話の婦人であつたか、女學生が寫生をして居たやうでした。」

と信忠の調子はづれな受答。

「ちやア其れでございます、其婦人です、中々美人でご

ざいませう。」
「美人、美人てしたかな。……。」
「ハヽヽヽヽヽ、ぢやア貴郎は能く其婦人に注目なさらなかつたのだ、中々な美人です。」
「成程、何處の婦人てす、令孃てすか。」
「勿論令孃です、併し何處の令孃かは分りません。」
「さうてすか。」
と云つて信忠は珈琲を仰いだ。そしてやがて其室を去つて、歸路に就いた。
その翌日も信忠は此所を見舞ふた。例の如く其美人を視た。その又翌日信忠が來た時は漸く甲冑の前面背後凡てを寫生し終つた時て、今や筆を納め、紙面を卷いてホツと一ト氣息、起上つた其姿はすらりとして、細腰優やかに袴の波をうたせて、靜かに二三歩引退いた。そして沁と鎧を視めたが、片頰の笑は隱すべくもあらず面に見れた。
婦人は鎧に向つて目禮をして其儘其室を立ち去つた。
信忠は私かに其後を追ふた。

婦人は博物館を出ると直ぐ一臺の人車を傭ふてそれを本郷の方へと走らせた。
信忠も人車て遙か距離は隔りながらも其後を附けた。
婦人の人車は本郷西片町のとある門邊に着いた。遠く此方よりそを見た信忠も其所て車を下りたのであつた。
婦人の這入つた家の前を信忠は横ぎりさま門標を見た曰く。
山村！、

## その六

樹々の紅葉も散り果てヽ、木枯しの風吹く霜月下旬の薄寒い日を、身のまわりを輕々と裝ふて、八疊の一間に閉ぢ籠つた山村瀧子、二尺巾の畫絹の枠張りにしたのを、そつと室の中央に仰けに、上に掛けてあつた掩を取りはづした。
半ば出來たる女武者は云ふまでもない巴御前、關寺の丹塗りの山門を此方に近く、彼方は粟津ケ原の松原青く、畷道、田の面を遠く淡霧の中に打かすませた配景

の中に、萠黃絲縅の鎧着て、眞羽の矢の射殘したるを負ひ、重籐の弓にせき弦かけ、連錢葦毛の駒を躍らせながら、甲は脫いで長に餘る黑髮を後にさと打越させ、額に天冠を當てゝ、白打出の笠を着れ、眉目も形も優なる女武者の武者振りを、思ひ切つて大きく描き出した圖取りの美事さ、色彩の鮮明さ、勇健な筆力と奇拔な構想とは、巾幗者流の胸に浮ぶとも思へぬ程な勢力が、滿幅に迸つて凜然としてゐる。

瀧子は沁と双眸をこれに打ち込んで暫時凝視てゐたが笑は思はず片頰に溢れた。

美しい小さな聲で、

「萠黃絲縅の腹卷に袖つけて……。」

と冴えた調子で恰も謠ふやうに、二三度繰り返したが、輕々と身を飜へして、繪筆を取つた。

筆に染めたは萠黃色。

鎧の縅を塗らうと筆を絹に落さんとした時、間の襖がスツと開いた。

「瀧子や……。」

物靜かな母の聲、

「ハイ。」とばかり筆を持ちながら母の方を振り返つた。

「一寸と來てお呉でないか、少しお前に話しをしたいことがあるから、何なら後程でも好いけれど……。」

「ハイ、只今參ります。」

## その七

母の話といふのは瀧子に取つては一生の一大事であつた。

その一大事とは瀧子を大原男爵家より貰ひに來たのである。

瀧子の夫となるべき人は、男爵家の長男で、名は信忠、此年は二十五歲の男盛り、同族の中でも一流の男子であつた。

信忠が瀧子を見初めたその最初は、博物館に臨時展覽會のあつた時、瀧子が大原家の鎧を寫生をしてゐた其時の事であつたといふ。

瀧子は大原家よりの緣談と聽いて胸騷いた。世には不思議の事もあるもの、大原家といふ名は我が此の胸に

深く銘まれて、日毎夜毎、精神を籠めて揮ふ鏨の命毛の戀でもなく、愛でもなく唯なんでもない事ではあるが、元は我家の重寶であつた萠黄絲縅の鎧の主、今此の巴鎧の其主より、此我を妻にと望むといふことは、誠に奇緣もあるものと心窃かに驚いた。

母は頻りと此の良緣を望んでゐる。瀧子の兄も信忠といふ人の世評を聽いて、此人ならばと大の同意である。瀧子はまだ如何なる人か見たことはないが、若しやと思つた節のないではなかつた。

兎に角今歳も早や暮れるべき師走の事、婚儀は來春の梅咲く頃となるであらう。

瀧子の巴御前も出來上つた。同時に瀧子は大原家に嫁いだ。

丁度上野に繪畫展覧會の開かれた其日、瀧子は其良人の忠信と共に車を連ねて會場に入つたといふことである。そして瀧子の巴御前は大した好評であつた。(完)

# むすび柳

水橋康子

門並の仕舞た屋、つい表通には露店の燈まぼしけれど、門松の風靜なる、瓢簞新道のと在格子作り主は近き大店の通番頭、まだ若けれど大主人の目鏡にかなひて、副支配人とのかた書、奥への羽ふり善もことわり、家內は年のわりに世の鹽なめた苦勞人、今日は御店の新築祝を兼ての新年宴會、主人は口ぐせの江戸つ子の通様なり、若主人もおとらぬ粹とかにて、出入の者も皆隱藝のひとつ二つ、心得無はなく、今ぞ日頃御自慢の通様を、驚かす時節當來と、腕によりを掛此間より、より〳〵の相談乘が來て、若旦那様は太十の初菊が出物、初菊が出るに十種香でも在舞と、謐く習をお茶掛て仕升とは、町內の頭が朝湯でのふいてう成とかや、副支配人夫婦は福引のたん當、取引の客の案内とて今朝からの御手傳、留守には妹のあぐりとて、廿一二のうれい顏、兄夫婦が中の一つぶ種、五つばかりの腕白者、松太郎といふのと

二人、松の內は早仕舞と張板したる白湯の、門をなじみの內儀の聲に送られて出る時、金獅子の一連、此處にて囃子立つるに、のぼせたるほうを、ぬれ手ぬぐひにひやしつゝ、ふと薄くらがりの向を見れば、似たとはおろか其橫顔後姿、彼人其儘なるに行過て、又ふり返り見れば、どうしても其らしけれど男の足の早さよ、浮かぬ顔してふり返り／＼家迄は來者の、何とやら心殘り角迄いつたらばと、出窓にシャボン箱ぬか袋乘て、何やら早口に下女に言付て、さ松ちやんお出と手を引ば、姐ちやん水天宮樣にかへと嬉想に差のぞくに、あゝと返事も上の空、引ずるように表通に出てみれば、外套の色帽子の形、あれもこれも恒程似のは多けれど、其人と思ふは見えず、チヨッと舌打して殘惜げに眺つめて立とまれば、姉ちやん／＼にぎやかだね早く行う樣とせがむに心附きあゝと氣の無返事、あの松ちやん向新道て、小僧さん達が追羽子して、墨だのお白粉だのぬつて、面白想だから彼處から大門通をとをつて、歸に水天宮樣へゆかう、さあんぶして上る柄歸りにあるくのだよと、何時にも無そわそわと、大門通も橫にいつか橋を越ての行先は、今は他人ながら二年ごし連そうて、苦勞もした中の先の夫が友達、心をわつての相談合手、同水稼業のいづれか落目の時は、助やうすくひ合との御酒の上の坐興ては無眞の約束、あれがほぐで無は彼人の足跡、かならす彼家の門にこそはど、心もあゆみもそれ一筋、內ゝ御目に掛り其後彼人の樣子聞て見たなら、隨分あの時も心配して下されたる事故、そうすげ無も有まいと思て見たも幾度、があのかたい兄さんが聞かれたら、腹立も恐しと今日迄がまんして、近所をも通らぬ樣して堪た者の、嫌てわかれた仲ではなし、見込ちがひの失策に、むしやくしや腹の折もをり兄さんの意見、地道の商業なら知らず、盛返した處が又何時、下るも知れぬ株三昧、可愛や妹の苦勞が拔ぬと親身の愛で言て下さつたのを、道理と知りつゝまけぬ氣の、其樣に大切な妹子我等ふぜいにそうてをられたら、仰せの通一生の不幸、女は若內が花、毛虫がついて居たと知ても美敷花は人も好まする、もし不幸で我等が時を得迄、緣がなかつたな

ら一生貴殿が家のお針女には致して置ませぬ、と私が泣ても姉さんがなだめても、いつかな聞かぬ片意地どし、とう〳〵此樣な羽目になりて、廿越ての出もどん、彼人も未に時がこぬか花ばな敷家をもたれたとも聞ず其にしても先刻のはもしや空似か、そうで無ば私が常に心配する程でも無、好方に向たかしら、そう言ばあの帽子外套、ほてりもつかぬ色ぐ合、たしかた想だ、ねえ松ちやん本當に想だと嬉しいね、と脊中の子にとうと一人極、此處はもう内山樣の所と心附ば胸おどり、惡い事ではなけれど、知人の見たら何と言ふか、顏を知た女中にても知られて、主人に言れたら何としようと、とつおひつ、どうやら氣のせいか咄聲も似て居と、軒のらんぷに氣を兼て、勢のいゝ切竹にそへた門松の陰になりて、格子をのぞけば二坪ばかりの敷石に打水して、大きな鉢植の紅梅かざられ、意氣な男下駄新ら敷のばかり二三足揃て居る、あついプラシ天の前掛はそつた、抱らしき車夫の酒くさきおくびしつゝ勝手より廻り來て毛がわ敷たる車の箱より何か出しながら、ぢろ〳〵と見つむるにはつとして、足早に半町ばかり、又もどりて勝手の方を、向片の軒下よりゆきつもどりつ其と無のぞけば、許よりせまき横町の、常盤と書たてうちんに出前の岡持、がらりと雨障子明れば、ぱつとさすあかりあわてゝ顏をそむくれば、姐ちやん何時迄此處にいるの、私いやだ歸りたいよと鼻聲、いま、今ゆくのよ好子ねと是をしほにあゆみ出せど心とがめて、ふと振かへり見れば二人三人何かこそ〳〵語るらしく、其後から顏を出せしは、たしかにお内儀さん、をや、何じや無かへと問聲を後に

紋三郎樣への願言、なんぼお稻荷樣でも面と向ては、あの樣な勝手な事もねかはれ舞、松ちやんがも少し物がわかつたならさぞ可笑と思たであろう、ほゝはづか敷ねと松太郎にほゝずりして、來かゝつた明治座の前、三日初日の景氣好、しめ繩張わたせし茶屋の二階には、紋ちらしのてうちん掛幕、見世前には下足の箱幾重、花形への引幕緋の毛せんにかざられ、はねのむかいか車にて大入の程も知れぬ、去年の初狂言には暮からの大當

に、ふところも福々の景氣好、松ちやんのお母さんと三人、座敷で見物して歸には岡田で御膳をたべたつけ、今年はなんぼ兄さんの家でも居候だわ、あゝこんなにも替者かしらと又しても愚痴、松太郎の噫二つ三するにあゝ大變、風邪でも引たら言わけが無、湯上のまゝ頭巾もかぶらせないで、堪忍をしもう人形町はすぐだよ、ほんに自分の勝手ばかりして風邪なんぞ引してはと心引立て、行ば程もなく大通の今日五日は始ての縁日、松の内とて其にぎわひはすさまじく、例の通豐年屋の店前には、島田丸まげいてう返し、粧こらした春着に矢張今年も小紋織がはやると見へると おなじみの柿色上下福助豆を買つてやれば、松太郎は大よろこび元氣も出て、勸工塲の客を引樂隊に合せて、まはらぬ舌に軍歌唄ふもかはゆし、無心の子は嬉氣にあれてうちんが、姉ちやん旗か坊の頭の上に迄澤山ある、星さまよりてうちんが澤山あるねとよろこべど、人波にゆられ〱漸く、とある角に出てほつと一息、常夜燈の夜目にあざやかなれば、亦大名のお召に黑しゆす掛て牡丹鼠の半襟にくつきりした襟元、其よこ顔見つめながら、あぐちやんじや在ませんかと聲を掛る男、をや誰樣とふりむけば、や店の助ちやんだと背中でとびはねる、まあ今晩はお忙敷のにどこへお出なさるのと問せもせず、得意氣に何もう役はすみましたので、浪花町の師匠に頼まれて一寸用達に出たのさ、見世たかつたね君の笑うとは失敬な、僕のだつてそんなにすてた者じや有ませんぜ、ほんとにどうして今夜來なかつたの、ほめてもらをうと思たのがすつかり當はづれさ、何なら其儘で善から今から來ませんか、何支配人も大分廻て居るよ、ねえ松公來たかろふお前も姉さんを進ておくれ、今夜は大主人も大へい口さ、叔母さんがまじ目で助ちやんどこで覺たえと聞のだ者大笑さ、何今晩は嫌だつて、じや僕もくたびれたから送ながらいつて、お茶をひとつ入てもらつて、仲やすみとしよう、それともよる所でも在ならお邪魔だからよそう、てなければとうぞお嫌でも是非お伴がいたしたら御座り升だと、どこ迄も主人の縁をかさのしつこさ、嫌なと思へど去氣無、それもよけれ

ど折角の貴公がぬけては穴のあく事で御座りませう、其内御咄に御出下さる事として、今晩は御客樣方をおよろこばせなさる方が善じや御座いませんかと油を掛られて、是も想さては又遊には出なをして、あした行事と、しやあその門まで一所にゆきませうと、たのみもせぬに松太郎の手を取て、をしならぶに人込て苦しう御座んすから、手をはなしてと無理に跡から行ば、すれちがう人の皆、可笑男とふり返り見るも何と思つてやら、油ぎつた顔のわざと白粉をおとさず、眉を細くすり上て流目のいやらしさ　ふり返ては用在氣に咄かくるに、見人のおもわくもつらしと漸く、其門にわかれて重荷おろせし心地しぬ。

郵便と一聲、おや何處からだろうと、おぐりが請取て見れば、あて名は我名、裏に記はなけれどどうやら書ぶりの見違可も無、善事か惡事かあけて口惜敷事もなかろうかと、とつおひつ堪兼て封を切ば、何てからなのど兄よめの聲、はいあのと返事もそゝくさ、一息にかみ掛て嬉敷か涙もこぼさず、悲敷か笑もせて、いきなりふす間あけて、嫂の前に差出しさめ〴〵と泣ぬ、まあ此人はとたしなめつゝ、手に取てよめは

前略昨夜は一度ならず兩三度、廻り合候得共貴兄への言に對し言葉もかわさず過申候が然御心差の程は淺からず感謝仕候、春に掛て益々好運に候へ共、こゝに斷然と見限御望をみたす可と明夜出帆の船にて上海に向申候、一兩年の後心ざしを得て歸朝の上其節御謝仕可候、株劵幾枚お前樣小遣として買置候故近日御手許に可參、御取置なされ度余は。

お前まあこれは、お姉さんやつ張あすこに居のだわ、私一寸、一寸あつて來ますと次間の、簞笥あけてちり緬の頭巾、黒のぶらしてん抱へて、かみも其まゝかけ出すにま御待ゆくとしても兄さんに、一寸咄をした上て、もうおつゝけ御歸だろうからと、あらもういつてしまつた、お待つたちおぐちやんと、ありあう下駄つき掛て門に出し居は、最早右か左か、たそがれ時の姿も見えず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

雪の朝風の夕へ、おぐりの淋しさは前とまさりおとり

はなけれど、嫂にからかわれ、助さんに嫌みを言れては包得ぬ嬉さに、紋三郎様への日参おこたりなしとかや（完）

春の野に菫つみにと行く乙女
野をなつかしみ一夜經へらず　西川照子

春雨は庭をあらして晴れにけり
匂へる桃も今日や散るらん　同人

春雨のそぼふりくらす夕まぐれ
こゑ淋しげに蛙なくなり　小林きよ子

よもすがらふる屋の軒の春雨に
幾度となく夢ぞやぶるゝ　岩田春子

少女子か心つくしなつみはやし
きのふもけふも野邊に出てつゝ　同人

## 名家談叢

# 女子非獨立談

棚橋絢子刀自談
日東筆録

去る日、朝より雪降りつゞけて、眺望いと佳きに促かされ、雪見がてらに、腕車を馳りて社用を辨じたる末、女史を本郷丸山の邸に訪ふた、こは別に用事もありしなれど、また豫てより其意見を聞かむと思ひ居つたからである、時に女史は、麻布なる愛敬女學校へ赴かむとする折りであつたが、ヤー此處へと引かれて一室に入り、用談を終へたる上、後庭の雪景をながめ乍ら、いろ〳〵婦女問題に關する談話を聞いたが、其中には有益の事柄もあると思ふから、之れを摘録して讀者に示すことにした、

○女學世界は一体如何なる主義目的のものですか、と劈頭第一に問を起されたから記者は之れに對して、左

様、四角張つて主義とか、目的とかと申せば、却て偏狹に流るゝ弊もありますが、何にせよ一般の女子敎育に必要な各材料を網羅して、智識藝能の普及をはかるを目的として居りますと言つたれば、女史はうなづきて曰く、それは至極結構の事で、女子社界のために最も喜ぶべき事であると共に、私ども敎育當事者に在りても歡迎すべき雜誌と思ひます、

◎女子敎育の意見ですか、それは世間に多くの說も出てありまするし、私とても別段申すほどの意見もありませんが、いま此には平生感んじて居る事を、一つ二つお話し申す事にいたしませう、私の信ずる所では、一躰女子に最も大切なるは精神であります、精神さへ確つかりして居れば、良く育つて行きまするし、成長して後も立派な婦人となる事が出來るものであります、だから女子敎育に最も重んずべきは、此の精神の方面に在るので、即ち道德的品性を修養するといふのは第一であらうと思ひます、學問とか、技藝とかは勿論必要でありますそから、出來得るだけは仕込んで置くのはよろしいが、サレばとて、いかに能く物が出來る婦女でも、精神が不確かなものならば、折角學び得た所の學問技藝も、本當に役に立つものでありません、よし學藝其者が用を爲すにした所で、婦人としての本務を全うする事が出來ない、之れに反して、精神の確ッかりとしたものは、左程學問や技藝を修めずとも、婦人としての本務をば盡くし得るものである、自分を例に引くのはチト變ですが、私しも少い時から、別に更めて學問などをした事もありませむ、それは其筈です、良人は眼が見へないのに、家政は困難つたから、十分敎育を受くる事が出來なかつたのも無理のないのである、たゞ暇を見て書を讀み、少ッとばかり人に敎つた位のものです、それでも左まで敎育の不足を感んじた事もありません、コレは婦女に限らん話だが、古語にもある通り、精神一到何事が成らざらんで、立派ナ精神さへ有つて居れば、學問も自然に發達しまするし、又た變難の場合にも、自ら智慧や藝は出來て來るものですよ、そうして見ると、何んでも婦女は精神が肝腎です、これは、決して空論であ

りません、世間によく實例のある話で、彼の高等教育を受けて居りながら、修身齊家の方法の出來ぬものもあり、大した教育の無きものにても、立派に婦人の本務を果たし居るやうナもので、つまり精神一つに在るのです、若し學藝がいか程優れても、精神的修養の乏しきものは、一種の片輪者であつて、頼もしき婦人と言ふことは出來ない、コーなると其深遠なる學識も藝術も、たゞ外面を衒ふ所の裝飾に過ぎないことになる、だから私の所見では、何うしても女子には、精神教育が最も必要であると思ひます、そう言へばとて、強ち現今の女子教育の缺點を非難するでもなし、又た學藝を蔑視する極端ナ精神教育を主張するでもないが、唯私の信んずるのでは、要するに、女子教育には精神が本にして學藝は末であるにも拘らず、世上往々其本末を顚倒するのは甚だ宜しくないと言ふのであります、

○世間には、女子の獨立とかを素張らしく言ふ人もあるやうに見えますが、あれは間違つた考てあるまいかと思ひます、成程女子も人間であれば、男子の厄介にのみはなられまい、又た實際上に於ても、場合によりて獨立せねばならない事もありませう、しかし、それは何にも強ち絶對的の獨立を意味するものではない、一は獨立せぬながらも獨立の力あり、一は已むを得ぬ場合に獨立するものに過ぎない、然るに若し女子は、絶對的に獨立すべきものであるとすれば、それは甚だしい間違いであると言はねばなるまい、元來女子は、其性質上より見るも、決して絶對獨立の資格あるものでない、抑も造物主が男女の二性を分生したのは、この異れる二性の配合に由りて、子女を生育し、家庭の團欒をつくり、以つて人生の圓滿なる幸福を求むる爲めのものであるから、女子は何うしても他家に嫁ぎて、即ち男子と連れ添うて、男性の足らざる所を補ふと共に、女性の足らざる所をば男子に助けられ、また子女を設けなば立派に之れを養育すべく、家政をば能く整理して、富裕ならぬまでも不足なき生活を成すべく勉め、以つて幸福なる人生を送らねばならない、之れは即ち女性本來の責務であらうと思ひます、ソーして見れは、女子は嫁ぐの當

態であつて、嫁がぬのは變態である、これは何人も異議はありますまい、之れを實例に照らして見ても、嫁ぐもの即ち常態のものは多數で、嫁がぬもの即ち變態のものは少數である、否そうなければならぬ道理であります、抑も女子が學藝を修むるのは、何んが爲であるかと云ふに、之れを以つて生活の獨立を計るべきものでない、尤も差支なき限り、又た巳むを得ぬ場合には、女子が身を職業に就けるのもよろしいだらうが、其の主意は、即ち良妻賢母たるべき準備とするに外ならないものである、そうして女子が職業に就けばとて、どれだけの効益がありますか、早い話しは、外に出てゝよし二三十圓位を取るも、それは衣服や、交際其他の費用となりて一文も遺らず、よし幾分か遺るも家業の助けとなるほどのものでない、それよりは、内に居りて無駄な金を使はずに、家族の着物でも自ら拵へてやれば、却て少し許りの月給取りに勝ると言ふやうなもので、又た主婦の就職は家業に妨げになることもあるから、女子は別に男子の如く職業に就くやうのことをせても、家政さへ確ッかり治めて行くことが出來たならば、それで澤山だのです、然るに世間の年少き女子共が、學校の先生にでもなり、其の他文筆なり何なりの職に就くことを以つて、非常に名譽の如く思ひ居るのは、それは大いなる間違であります、斯かる間違ひよりして、女子の獨立などを唱ふるに至つたのでありませう、繰り言ながら、女子は變難の場合の用意として、何か職業を知り置くのは必要でありませうが、しかしそれを以つて、獨立生活を遂つて見ようなど思ふは間違です、一躰女子の獨立生活に何んの快樂みがありませうか、何んの利益がありませうか、或は呑氣でよからうとか、或は女性の發達を十分ならしむことが出來やうとか思ものあらば、之れも間違つた見解である、此の如き空想に由りて女子獨立を夢むものとせば、それは女子の本分を忘れたるものと見做さなければならない、之れを實例に照らしても分る、古來配偶の女子に幸福を得たものが多いけれども、然らざるものには誠に少ない、否獨立の婦人は、多く薄幸の人であります、畢竟するに、女子は

獨立生活を爲す資力は必要であるが、それは特別の人、特別の場合に用ゆべき準備に過ぎないので、之れを以つて好んで獨立生活を營まむとするのは宜しくない、女性本來の資性上、女子の絶對的獨立は承認すべきものでないと云ふのであります、

# 家庭教育に就て

下田歌子女史

左は先日帝國教育會にて述べられたる演說の大要なり

昔の武士風の家庭は子供の育て方など隨分嚴重なもので、私なども六つ計の頃に客の前で行儀が少し惡るかつたと申して松の樹に縛られた事を覺えて居ります、夫が今日ては御承知の通大層緩かになつて居る、其譯はと云ひますと昔と違つて今の世は人權を重ずる、ソシテまた子供たりともその自由を妨げぬと云ふ樣な思想から來て居るので大層立派でありますが、偖その結果を見ますなら意外にも德育など非常に今日よりは立優つて居るのであります、私は家庭教育取調べのため海外に參ります迄此が疑問になつて居りました行つて見ますと英國の家庭教育は意外にも日本昔日の武士的家庭に酷似して居ます英國の家庭を簡短なる言葉で評しますなら先づ日本の武士的家庭に多少の和氣を含んだものでソシテ非常に躰育に氣をつけると申すのが適當であらうと存じます

英國では噓といふ事を何よりも忌むべきものとして子供に敎へてあります 私の泊つて居りました或る貴族の家に六歲の男の子がありました或時母御が一つの玩具をお與へになりて「妹はまだ幼さいから仕方もないが汝はモーそれ丈になつて居るのだから怒つて無駄におもちやを破してはいけません」と言はれました然にその翌日になりますと昨日の美事な玩具が破て居ましたから母御は御子息に向つて「何此玩具は破れましたか」「女中が落ましたから」返事が曖昧でありましたゆゑ「ホントウですか」と念を押ました所默て居るのですモー一度お聞になると淚をこぼして下を向た母御は

「前の返事が正しくありませんでしたならお詫をなさいソシテ神樣に決して虛言を申しませぬと誓ふ事が出來ますか」お子さんは猶も誤まる勇氣がありませなんだ夫は一つには西洋の人は神樣と云ふ事が非常に心に染み込んで居ります故その前に誓ひますかと云はるゝと輕卒に無責任な事返は出來ぬと子供ながらにも感じた爲かと思ひます母御は女中を呼んでお質しになりますと果して「若樣が癇癪をお起しになつて玩具をお投げ遊ばした樣でした」と申すのです母御は術なさゝうに「汝は惡い心を起しました」と嚴かに宣告してそのまゝ暗室の內に幼兒を閉ぢこめました勿論蔭ながら注意を與へて居られる樣ではありましたが、晝すぎから夜一夜食物も與へずに翌日になりました此間お子は暗室の中で少しも泣き騷ぎを致しません多分泣いたとて何うしたとて後悔せぬ中は許して下さらぬと云ふ事を平生から知つて居りますからでせう私は一層氣の毒に思ひました翌日になりますと始めて母御が暗室においでになりました「汝の間違つて居た事がよく解りましたか神樣に二度致しませぬと誓ふ事が出來ますなら出してやりませう」と申しました疲れ果てたる幼兒は如何にも後悔に堪えぬ樣に「惡う御座いました必ず／＼誓ひます」と出て來られた其有樣を見ましたらその疲勞と云ふものは一通ではありません食物を俄に取る事が出來ぬ位でやう／＼その日の夕方スープを食つた程でした私は「あなたのお仕打には感じいりました併しお子さんは餘り健康方ではないと思はれますのに若しもその爲病氣にでもおなりてしたら夫人は後悔なされませぬか」と云ひますと夫人は襟を正して「曲つた心のものならばいつそ居ぬ方が增で御座います」

私はつら／＼此家庭教育を見ますのに昔の武士的家庭がそゞろ慕しく思ひます今の家庭が餘り子供に我儘をゆるして居ぬかと思ひます

　私の取調べました所ろに於ては英國の家庭教育は前に申した通り嘘を云ふとか動物を虐待するとかその他卑劣殘酷と云ふ樣な行爲に對しては容赦なく嚴罰を加へますこれは昔の我國の武士の家庭ゞ略ぼ類似して居

ります今日の多くの母親は「今と昔は大分時勢が違つて居るから子供だとて親の勝手には出來ぬもの第一私達よりは餘計に教育されて居るからウッカリ咎めだては出來ぬ」と申して一には自分の短を顧みて子供の我儘を許して居るかと思はれますが教育を受けたとて受けぬとて至誠に二つはありませぬ子供の爲にならぬと思ふ事は一歩も假さず誡しめるのは母たる者の責任でありませう私は爰に於て御注意までに昔日の嚴格なる家庭教育の欠點を申さねばなりませぬは外ではありませぬが「嚴しさが餘り枝葉に渡り過ぎて居つた事です」一例を申しますなら子供に大人の様な挨拶や容儀などを強ひまして客の前にその通り出來なかつたと云ふて懲しめを與へるなどは間違つて居ります子供は何所までも子供らしく育てるが宜しいので唯卑劣とか殘酷とか其様な行爲を看過して置きますなら子供は一度よりも二度三度と惡しき習慣を増長さして我儘に生ひ立つて仕舞います殊に向ふの家庭に就て羨ましく思ひますのは子供の時から神と云ふ觀念を心の中に染み込ませて置く事で夫は〱純潔な子供達が比較的澤山に御座います私は家庭教育の基礎は敬神にあると思ひますソシテ凡ての高尚なる道念の源も矢張此所に存せねばなりませぬ。

## 呉服談（羽織の來歴）

（三井呉服店意匠部　籾山東洲氏）

人の此世に生れ來ては無形上の理論はさて置き有形上にて無くてならぬは衣食住昔し唐の管仲と云ふ人は衣食足つて禮節を知ると云はれましたが實に味ひのある言であります今其衣食住第一に位する衣服の話をと編者の奬めにより呉服物の概畧を令孃様方にお話をいたしましよう……、さて呉服物の中で一番の上皮に着用するものは羽織でありますから羽織の事から申し上ましよう、

▲羽織の種類　は數多くあります、先ッ三齊羽織あり、陣羽織あり、蝙蝠羽織あり、「ブッサキ」羽織あり、革羽織あり、火事羽織あり、書生羽織あり、チンベイ即チ手

なし羽織あり、引掛の袢天あり、印袢天あり、又性質は違ひますが昔は藝者に羽織の名あり、今はゴロツキに羽織の名あり、箇樣に數多くありますから一寸御分りになる樣に其性質を申上げましよう、

▲羽織の性質　三齋羽織と云ば細川三齋公の創作せられしお茶人用の衿の折れてない一寸半天の樣なもの、陣羽織は袖なしの一種で豊臣時代より德川時代まで武家の着用したものは、革或は羅紗金襴などで作りて多くは陣中とか火事場とかで使用したものであります、夫れから蝙蝠羽織と云は寛永正保の頃のもので袖が長く丈けが短くて蝙蝠の樣な形をした羽織であります、「ブツサキ」羽織は、武家士の着用したもので背の中央を裾の處まで丈けの半分以下を割き馬に乗るために作



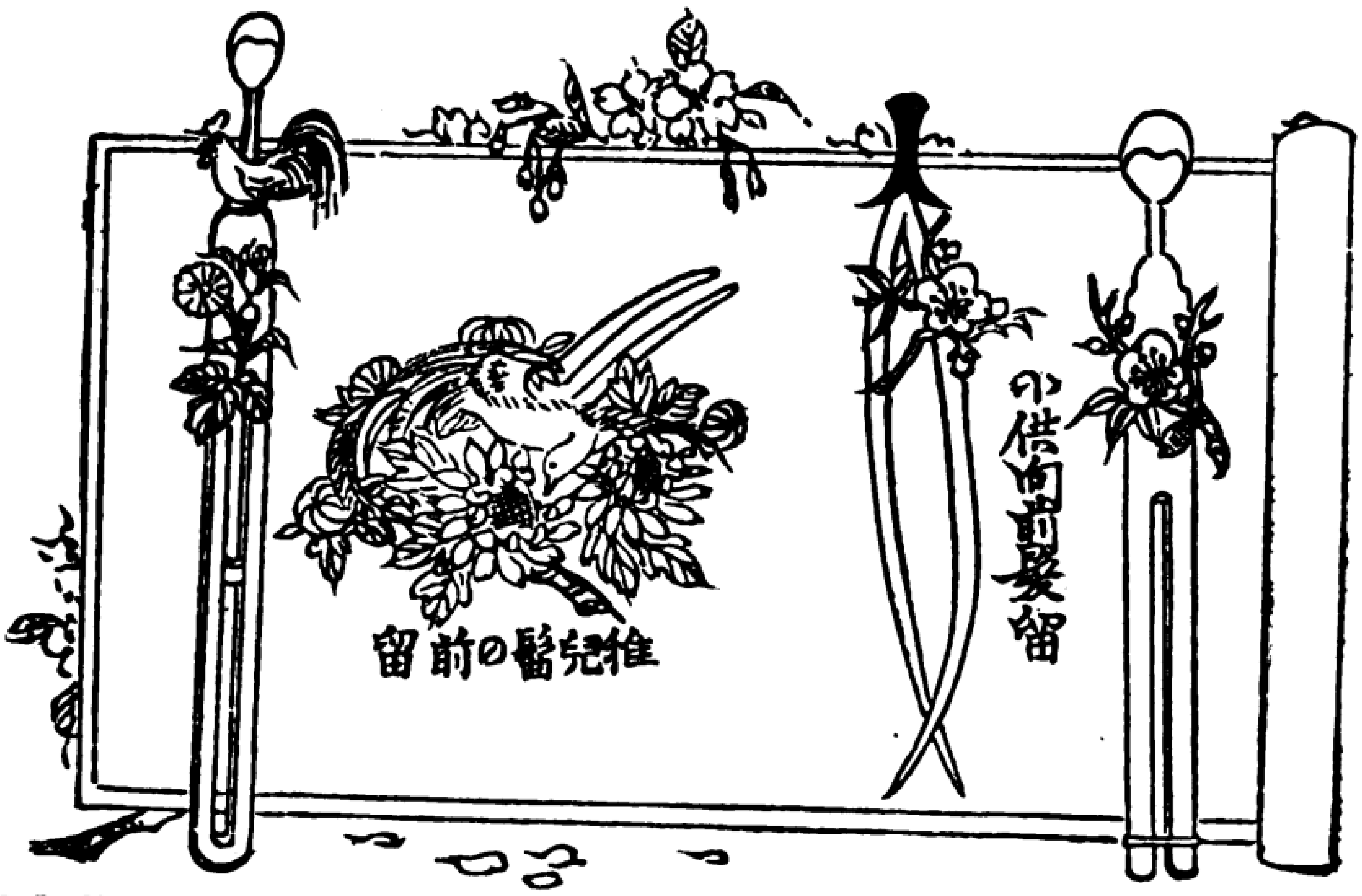

りたるもの、革羽織は飛人足とかカヲ役とかと云ふ所謂仕事師の上級に位するもの丶着用するものにて全体を革にて作り大概は色を茶にして白く横線とか或は紋所を染め出したものであります、火事羽織も前と同じ樣なもので消防人足の其組の印を付て火事場用に製作したもの、ヂンベイは爺ゝ婆ゝの着用もの、袢天は衿を折返へさずして其衿に黒繻子とか黒八丈とかを懸けて一寸横櫛と云樣な人か、但しは其種類の男子が三尺帶の上へ着用するものであります、印袢天はお邸の檀那から出入の男衆へ仕着せとして盆とか暮とかに與ふるものにて其家の印を後の背の處へ大きく染め前の衿には多くは其屋號或は會社なれば其社號を染め出すものにて、其檀那の勢力奈何により

て幅のきくと、幅のきかぬが其社會にあるそうです、昔

藝者を羽織と云たのは深川で娘の子を男に仕立、羽織を着せて出したゆへ、羽織藝者と云たそうです、羽織「ゴロツキ」と云ふのは、そんじよそこちに事あれがしとて紋附羽織を肩にかけ平地に波を揚げ濡手で泡の掴み取りをしやうと云ふ有害な、くせものであります、

▲羽織の由來　羽織と云ふは如何なる譯でありますかと調べて見ますと古めかしう御座りますが、貞丈雜記に箇う書てあります

小袖着たる上にはふりかける故の名なるべし、はふりと云ば放の字也、はなつとも讀む字也、上より帶せずはなち着にきる也、はふりと書てはおりと云事はあふひと書てあをひと云に同じ例也、其詞に付て羽織と字を付けたるなるべし、羽織は近代の詞なり古は胴服と云し也




と書てあります又安齋隨筆に

此服をもと道服と名く法衣を道服と云とは異にして、行旅に用て塵土を避る故に名付け、また胴服といふは胴ばかりおほうとなれば今いふ袖なしばをりなるべし

と云ふてありまして古は之を着して御座敷に出るとか儀式ばつた處に出たものではなくして今の外套或は東コートと同樣なもので、ほんの塵除けで、或る書物にも書てあります、大閤秀吉大御所たりし時、茶人常に木綿の單衣を羽折りて、小袖の上に着て塵埃を除けることに使用した、客人來れば脱ぎて應接したのが何時の頃よりか非禮が却て禮服となつて、今日では男子の禮服には(日本服として)無くてならぬものとなりまし

だ、それだから今の樣に定紋を着物と同じ樣に羽織にも付けると云ふ樣なことは無かつたのです、其羽織に定紋を付けた始りは元祿の頃豪奢で有名なる紀の國屋文左衛門即ち紀文が始めて拵へたものであります、萍草漫筆に箇云ふことが書てあります、讀て御覽なさい

紀文が思ひ附にて紋を附たる羽織をこしらへ、自らも着し大鼓持にも着せ、遊びに來たり、是は貴人のはをりに紋の附たるがなきゆへ伊達にかくはいたしたるなり、大盡舞の物語に小平の坊さまの長ばをりと諷ひしもそのれがつれたる小平と云ふ者ちゝれ毛ゆへに見苦しとて寄合て髮をそりたるなり(中畧)羽をりの長きがはやりて中にも坊主小平は着物のたけと同じはをりを着たること俳書に出たり、是をさる貴人の見たまひし紀文は如才なき者なれども、さすがは町人にて物に辨へなき者なり、羽織は着附の紋所を隱す爲の紋かくしなり、その羽織に紋を附ぬるは着せずともの事なるべしと笑はれしとぞ、されども紀文が風流華奢にして羽をりの紋所は今に一統附る事とはなりたるなり



去れば紋付羽織は紀文が華奢風流を好むの餘りそが思ひ付にて創作せられたるものであらうと思ひます、左すれば紋の數は幾何が始めだか知りませぬが五箇所から三箇所それから一箇所と云ふ樣な順に發達して來たのであります貞文雜記の中に

一家の定紋と云ものは旗幕などに付る印也、素袍、直垂、小袖などには家の紋付ることもあり外の紋付ることもあり

と書てある素袍、直垂は紋が前に二箇所、後に三箇所あるから、紀文も此素袍、直垂から思ひ付て羽織に附たのだろう然らば初めは五箇所であつたに相違ないで御座りましよう、彼の徳川の末の頃金銀座役人或は札差などが豪奢を極めたころ五徳紋と稱へて背に一ツ、前に二ツを染めたものが一時流行した

ことがあつたそうでした。

○流行の花見衣　三井意匠部の報ずる處に依りて色合模樣等の大略を記さんに色合は先づ妙齡の令孃には菫花色、薄紫根色、薄牡丹、熨斗目色、藤色、櫻鼠等なるべく年増向きには藍鼠、鐵色、檜皮、茶色、栗皮色、紫鼠等なるべし模樣の染方には種々あるも之を大別せば暈染、地落染、薄色染として何れを撰ぶも其の隨意なれども總じて暈染めは派手向なれば妙齡の令孃方にはふさはしからん其他は地味向きと知るべし模樣には高麗模樣御模樣江戸裙模樣江戸裙吹模樣又は吹模樣等にて何れも各々好みによるべけれども妙齡の令孃向きには高麗模樣か御模樣なり其模樣には種々ありて數限りはなけれども山水とか動物とかよりも四季折々の花卉草木に限るが如く都ぞ春の錦といひけん柳に櫻唐紅に水くゞるとよみたる吉野立田の花紅葉扨ては紫垣匂ふ卯の花、菫花に蓮華草蝶に桀の花裙の上部に杜鵑一羽を飛ばせ燕子花チヨロ〳〵水是等は若向きの模樣なれども年増向きとしては春草の白上げ模樣水打ちには老杉とか光琳水に飛千鳥等なるべしと

# 娯樂

## 汐干狩

待ちに待つたる櫻も早や咲き盛りて、これからあいあいと汐干狩の時節に向ひました。むかしからいふ通り汐干は舊曆の三月三日雛の節句前後とあれば即ち本月九日頃でせう。まづ東京で申さば羽田浦の地先から大森、品川の沖合、芝深川、扨ては海に沿ふた南葛飾郡の各町村の沖合、（陸より四五町乃至二三十町の間）は一面の干潟となりて海上は忽ち傘影、衣香の巷となるのであります。

### ●汐干の場所

汐干の場所に就て申せば、まづ北の方は本芝、金杉の海面地先に、大門の洲といふのがあります、御濱離宮近傍の洲は蜆貝の名產地で、石川島、佃島の地尻、深川越中島の方へかけて、いろ〳〵の洲がありましてさま〳〵の貝類も採れば藻草も取れます、それから南の方へ參

るゝと品川、高輪の地先、七番臺場の附近。大森鈴ヶ森、羽田の地先へかけて、又いろいろの洲があります。けれども貝類の名産地として府下第一と稱せられてゐるのは羽田浦て、其の長さ一里餘の洲には一面大蛤を産するので名高い場所となつて居ります。

◉汐干の獲物

東京灣内の場所で素人にも採り得らるゝ貝類はまづ文蛤、淺蜊、蛤蜊(しほふき)などで、稀に、香螺、蓼螺、馬鹿貝、鳥貝、猿頰貝なども手に入ります、文蛤の大きなのは、圓さが三寸位もありませう小い所で五六分なのが多い 最も澤山に採れる場所は羽田の洲で、其形は文の字のやうで色は灰白色、それに



紫の斑が多い、扨昔時からの言ひ傳ひに、人皇十一代の帝景行天皇が、上總から安房の港に行幸あらせられた時、適々覺賀鳥の啼聲を聞かせられて其形を見まほしくおぼしたまふて海邊に出ました時、始めて白蛤を發見なされたといふ。蛤蜊は文蛤よりも脆柔で不味い。其の大さは二寸ばかり、色は灰白で、常に潮を吹き出してゐるのでその名があります。海から掘り立てを熱灰の中へ投げ入れて燒いて食べまするト、恰ど牡蠣のやうな味がします、一躰蛤蜊を採るにはまづ竹籠を腰につけて把手のやうなもので土砂を掻いて拾ふのであります、扨又淺蜊は荏原郡、橘樹郡の洲通に尤も多く發育する

といふ事て大森邊の魚商人はそれを漁つて毎朝東京市内に賣り歩くのでおります。香螺といふのは、青色をした拳のやうな貝で肉は白くて軟らかく、味の至つて甘美ものです、發育の場所は大井村、海岸で海苔の麁朶や石に附着て居るのが多い。又蓼螺といふのは榮螺に似たもので、重に藥に用ゐます鳥貝といふのは其形蛤蜊に似て大さは三寸許もありませうか、東京灣一帶至る所で採れますが、これは肉を敲いて魚餅になす。尤も炙りて食べてもよろしい又おふの貝といふのは蛤に似て大さ三四寸もあッて、殼に細い溝の紋がある、これは醋に漬して食へば頗る上品です。汐干に出て女小供の最も喜び樂しむのは寄居蟲である、寄居蟲は俗におべけと唱へまして頭は蝦に似て足に爪あり、腹は長くして草蜘蛛のやうて細長い殼を負ふて汐の引けた時は水溜りや又は石の間などを走つてゐる、小供等がこれを見つけて捉へやうとする時は敏く其の殼の中へ這入つて仕舞ひます。から小供等はいよ〳〵面白がつて長の日の遊びを夢のやうに暮します。それが如何ばかりて愉快でありませう若長箒などで掃き寄せる時は笊桶に一杯位造作もなく取れます。

◉發育の多寡

以上の貝類は如何なる年に最も多く繁殖するかと申すに重に其の前年の降雨の量の多寡に關するとの事であります即ち降雨の多い時は諸川の濁水か多分に海中に流れ込むので淡水を好む貝類はいづれも泥を冠りて爲めに發育を妨げるといふ事てあります。

◉汐干狩の秘傳

貝類は總じて砂のある處に生するものであるから泥のある處に終日狩り廻るもつまりは疲勞もうけて僅かに猿頰貝鳥貝位なものを得るに過ぎませんけれども此の砂地は漁師の占領する所であるから素人が其所へ行つても無駄であります、それ故先つは海苔麁朶のある附近てせう、此所は流石の漁夫も器具を携へて行かれぬから自然と貝類の繁殖する譯であります、されば汐干狩に獲物の多からん事を望むものは麁朶の周圍凡そ一尺許りの所ろに手を下すのが一番の得策であります。

# つみ草

あたゝかき夢路を、花鳥にやぶられて、やをら板戸を押し開け見れば、宵の春雨、いつしかに晴れ渡りて、空は一片の雲なく、練絹のうらゝかさ、まして遠山の裾の、むらさき色なるも嬉し。いてや待たれし摘草に、親しき友どち誘はれ、夜あがりの空なれども、今日一日は雨風も吹き凄むまじ。

七草は芹、なづな、五行、はこべら、佛の座、鈴菜すゞしろをいふ、正月七日、この草を採りて粥に交へ、延喜の帝に奉りしより、我國の習俗とはなりしなり。

芹は清き小川の、砂地に自生するもあり、堤などにつばな交りに若芽を抜き出すもあり、風味ことに愛でたく莖葉共に春の包厨に適せり、すゞなとは、今の蕪菁またすゞしろは、大根のことなり、なづなは寒中早くより、小さき白花を開き、順次に上方に開き上る樣、菜の花の如くなり、五行又は母子草と云ふ、莖葉共に白毛多く、中春可愛らしき黄花を付く、佛の座は葉丸く、莖より出づる樣蓮花の如き故、名付くと云ふ、やゝ靑白き花を開く、田平子、土器菜などの異稱あり、蘩蔞略しては、ゝこべとも云ふ、中春小さき白花を附く、何れもあてやかにして上品なるものなり。

# 新案 花見料理

（提重詰并に御籠詰）　春江

◎極上等飛切の趣向

初重　詰合九種

▲かすてら玉子▲わたかまぼこ▲わか鮎（色付焼）▲春鯉の子▲はや筍（うま煮）▲うち銀杏▲長ひじき▲春がすみ（寄せ物）

二重　引肴

▲蒸がれい（薄く切りてはいろに懸ける）▲溜鯛（骨抜はや鮨）▲干大根（五ぶづけ結びて帯赤唐がらし）

三重

▲甘露梅（白砂糖かけ）

▲比目魚さし身▲針魚(細づくり)▲白髪うど▲若布(赤すみそ敷き)

四重　煮物

▲小倉野▲きんとん▲紅梅餅▲椿餅▲薄皮餅▲かるかん

割籠

▲よめな▲土筆▲かや(小口きし物)▲焼飯

瓶子

▲澤の鶴(或はずつと當世に出て恵比壽ビール香竄葡萄酒などもよし)又菓物には林檎、夏蜜柑等の用意あるべし

◎上等別趣向

初重　詰合七種

▲蒲鉾(墨ながし)▲車えび(鬼から焼)▲鯣(かしら落して照り焼)▲長芋(丸く切り皮付)▲わらび▲つまみ麩かた煮(けしを撒りて)▲剝き胡桃(山吹をかけて)

二重　引肴

▲むつ(差身)▲三月大根(たんざく)▲貝割菜(酢みそとうがらし)▲詰合(干大根、はり〳〵獨活、嫁菜)

三重　煮物

▲とうの芋の子(よく剝きて)▲烏賊▲蕗(煮付)木の芽を上に置くをよしとす、三 春遲日なれば猶此の外數多く詰めて持つ心得あるべし

四重　蒸菓子

▲おぼろ饅頭▲山椒餅▲蓬のしん粉▲花ぼろ▲煎餅

割籠

▲焼飯(或は團飯)▲香の物(奈良漬、味噌漬よし)

瓶子

▲葡萄酒▲正宗(用意は随意たるべし)

◎同　並の趣向

初重　七種

▲針魚の蒲やき(或はわりえび竹輪かまぼこもよし)▲鮹の櫻煮▲とうの芋▲胡羅蔔▲わらび▲玉づさ牛蒡▲木耳の甘煮(或はうで玉子の花形切等もよし)

二重　引肴

▲蒸がれいの色付焼▲田螺の木の芽あえ

三重　蒸菓子

▲鶯餅▲きぬた巻▲鹿の子或は今坂餅の類

四重　飯

▲結び飯（或は豆の粉つけてよし）

別に干菓子、棹等を用意し、凡て春色駘蕩たる長の日にもようす物見遊山の重詰は品數を多くして終日遊びくらすの助けとする事最も肝要と知るべし、又これは花見に限らず潮干、摘草その外いろ〳〵春の日の行樂に用意すべき提重の趣向を考へたるものなり唯その時と場合とに應じて中味の趣向遣くりすべきもまづ大凡の取合せは右の通りと知るべし、

## ◎同並の別趣向

初重　五種

▲厚焼玉子（或は絲切玉子やき豆腐よし）▲巻烏賊▲雀の焼鳥（或は餅の雀焼代用）▲むすび干瓢▲長芋（焼きて煮る）

二重　引肴

▲王餘魚のてり焼▲めんどり牛蒡▲せん生姜

三重　刺身

▲比目魚或はかつを、ぶり、鯛、右の類いづれにてもよし▲しら藻▲ほんだはら▲酢味噌

四重　飯

▲焼飯（入籠にして）▲香の物（菜づけ奈良漬）

（完）

## 春の小鳥飼

小鳥を愛翫する手引即ち小鳥の飼ひやうには凡そ三種の別あり即ち囀る聲を愛するものと、毛色の美しきを喜ぶものと籠の内にて巣引を為すものとの區別あり、先づ聲を樂む鳥は鶯に優るものなきも、この鳥は稍高價なると飼養法に甚だ熟諫を要するものなり、また羽色を愛するものにはキンカ鳥、文鳥、カナリヤ、ヘキ鳥、ランドク等にて、これ等の多くは舶來鳥なれど現今日

本にて巣引せしもの多し、

小鳥の巣に入るは多く春秋の彼岸にて昨今恰も巣引鳥を飼養するに適當なる時期なればこゝには重に飼引鳥に就いて言はん先づ巣引をなさんと欲せば彼岸に入らぬ前に雌雄の小鳥を鳥屋より買ひ來り籠に入れ置くべし、巣引鳥の餌は水と粟との外にボレーを與ふるものにて、こは卵及び糞のつまる事を防ぐ爲めなるが、小鳥はまた好でこれを食するものなり、また其の巣は豫め藁にて作りたる丸きものを籠の中へ入れ置けば小鳥は其の内へ程よく巣を造り、それへ卵を産みて、これを温めつゝ孵化せしむるなり、但し小鳥の卵を産みたる後はなるべく靜かにして置くをよしとす、又猫、鼠の害に遭はざるやう注意すべし、

キンカ鳥は極て小なる美しき鳥にて籠の内にての運動も頗る活潑なるが、躰の小なるにも關らず割合に健なり、但しこの鳥は雄鳥が籠の中にて激しく運動する爲め雌鳥を巣の外へ逐ひ出して遂に孵化すること能はざらしむる恐れあれば注意すべし、

---

カナリヤは菜種を好むが故に常にこれを與ふ可しまたジヤガタラといへるは十四雀の一種にて胸部に蛇腹の如き點あり、ヘキ鳥は年を經るに從ひて頭部純白となり嘴は碧色を帶ぶ、

鸚哥は小鳥中先づ大なる方にて美麗の點より云へばこれに過ぐるものなく、種類は殆んど數へ盡されざる程多くあり、就中赤青の鸚哥は美中の美とも稱すべく、黄草鸚哥等は啻に羽色を愛するのみにあらずして巣引せしむることを得べし、

以上は多くの小鳥中にも素人の飼養し得るものなり、また飼養上一般に注意すべきは毎朝水と粟とを取換へて籠を清潔にするは勿論、小鳥は總べて暖氣を喜ぶものなれば軒下に籠を懸け置き常に六七十度の温度を保たしむべし。

# 才媛詞藻

## 和歌

文學士 大町桂月先生選評

（天） 春雨　岐阜市下竹町太田てつ方　天野粂子

そりく\/は落る椿の音もして
更けゆく窓に春雨の降る

評 物しづかなる春夜の情景、自から躍動す。

（地） 仝　東京府北多摩郡田無町　保谷いね子

野も山も霞に消えて青柳の
糸にのみ降る春の雨かな

評 ありふれたる光景なれとも、趣味としては多少の趣なきにあらず

（人） 仝　盛岡市馬場小路十番戸　渡邊しき

かきくもりふる春雨に袖ぬれて
猶たちまどふ花の下蔭

評 黄昏の一霎の雨に花と別る、情懐無量。

## 秀逸

春雨　横濱　長谷川さゝ子

なき母に似たる女の通りけり
はるさめ霞むたそがれのかど

◉仝　河内　大矢多れ子

いもうとゝ母とみたりか茶話に
けふもくれゆくはるさめの空

●仝　和歌山　前山澄子

奥殿のほかげかすかに打もれて
御苑の花に春雨のふる

●仝　千葉　今井つれ子

朧夜の月は櫻の花の上に
ほの見えなから春雨のふる

●仝　越後　坪井和歌子

菫つむ乙女か脊に眠る子の
夢は胡蝶のあとや追ふらん

◉仝　信州　小林よし子

朝空のかすむとのみも思ふ間に
　柳の糸をつたふ春雨

●野　遊　　東京　須田かつ

わか草をつみてしわそぶ子のむれに
　まだうらわかきつまもこもれり

●春　雨　　伊勢　細野鈴子

うらわかきひじりの一人ぬかづける
　奥津城どころ春の雨降る

●仝　　東京　外河花子

たをやめか手飼の猫にほゝをあてゝ
　何思ふらむ春雨のころ

●野　遊　　伊豫　菅　つゆ

なつかしき野べの菫よたんぽゝよ
　笑みてつみたる春もありしを

●仝　　河内　河崎ひさへ

母上をたすけまつりておもしろく
　すみれつみたる春もありしを

●仝　　越後　山井京子

すみれつくしこぼれんばかり折とりて
　野をなつかしむ頃もありしを

●春　雨　　仝　竹林かほ子

こぎ出づる舟はかすみにきえうせて
　岸の柳に春雨のふる

●仝　　大阪　吉田まさゑ

宵のまはさわぐ子供にまぎれけり
　よふけてしりぬ軒の春雨

●仝　　埼玉　林　青[illegible]子

焼けのころ酒屋の門の朽柳
　片枝芽ふきて春雨のふる

●仝　　若松　小泉時子

あめの夜も野山の花のしな定め
　つれ／＼ならぬ御代の春哉

●仝　　埼玉　林　常子

うすら／＼浪よりあくるなにはがた
　芦の若葉に雨静なり

●野遊　　岩代　遠藤[illegible]子

さく花の野邊より野邊とわくかれて
かへさい月の夜となりにけり

●春雨　仝　仝

ほろ〳〵と椿こぼれて花くもり
くもりし空の雨となり行く

●野遊　東京　庄田紅子

菫摘みつばな抜きつゝゆきくれて
かへる袂にをぼろ夜の月

●春雨　岐阜　島本武子

我かいほの軒端の椿ほろ〳〵と
落つるゆふべを春雨のふる

◉仝　伊勢　加藤しげ子

病みふせる少女が閨の窓の外に
つばき花ちり春の雨ふる

●仝　仝　岡野すゞ子

うら若きつま折笠の女連
つれ行く袖に春の雨ふる

●仝　信州　小岩井ちどり

渡呼ぶ人影見えず柳けぶる
六田の堤春雨の降る

●仝　武藏　保谷てい子

みの着たる農夫の歸る影見えて
菜の花畑春雨のふる

◉野遊　高知　三浦花子

日もすがらうからやからと菜つみして
かへさは月になりにける哉

◉春雨　函館　丹内ひな子

春雨のそぼふる中を棹さして
柳わけゆく舟しづかなり

●仝　越後　靜月辰子

花嫁が裾はし折りて傘さして
歩みなづさふ野路のはるさめ

●仝　愛媛　石川君子

とぶ蝶の羽袖おもげに見ゆる哉
椿かつ散る庭の春雨

●仝　松江　高木生子

いつのまにかすみは雨となりにけむ
　軒端にきこゆ玉水の音

●仝　見附　宮崎よし子

やみませる母をみとりて更くる夜に
　梅が香たえて春雨の降る

●仝　新潟　吉田梅子

そほぬれて畑よりかへる賤の男の
　家ち霞みて雨しつかなり

●仝　横濱　宮木たか子

隅田川はや瀬を渡る舟人の
　袖もかすみて春雨そふる

●野遊　備前　重松竹子

見つゝきつゝ春は野邊こそたのしけれ
　花はわらひて鳥はうたひて

●春雨　高崎　花岡まさ

手折り來し花のしづくに知られけり
　ふるとしもなきけさの春雨

●仝　甲州　銘山つれ子

春雨のふる日を脊子は草鞋造り
　われはこどもの袷を縫へり

●仝　東京　白井すみ子

はなれ屋に碁の音たかき春の夜半
　庭の櫻に雨しづかなり

●仝　赤間關　梶岡まさ子

妹と母とみたりが茶ばなしに
　くるゝもわかぬ春雨の空

●野遊　姫路　高井歌津子

いさやいさ雲雀の歌も野に落ちぬ
　手籠も滿ちぬ母待ちまさむ

●春雨　伊勢　遠瀬とし子

帆を卷きて歸る舟路に日は落ちて
　入江靜に春雨の降る

●仝　信濃　伊達夏子

しめやかにかたる聲さへもるゝまで
　雨しづかなる春の夜半かな

●仝　伊勢　船越英子

病む母のねいきかすかに夜はふけてこぼるゝ雨の音静なり

## 佳調

●春雨、野遊　美濃　洞向恭子

音もなくなびく柳のふたり枝に玉ちる見れは春雨のふる

◎　仝　ゆかり子

つはくらめぬれてとひかふみやこ路のやなきかくれな蛇の目傘行く

◎　岡山　加藤芳子

牛ねむり童子れむれり春の野の霞のとこやゆめに入りやすき

◎　京都　渡邊益子

さとの子がわら打やめてなふなはのなが〱しくも春雨そふる

◎　若狹　鹽田欧子

きゝすなく聲もしめりて片山の杉の村立雨ふすむなり

◎　伊豫　河崎菊子

春雨の降るかと見れは晴れゆきて松のふたかけ月そこほるゝ

◎　盛岡　金田一菊子

なき町のおくつきところ苔むして春雨けふり白き梅ちる

◎　河内　平尾まさの

蝙蝠傘はやしとて出てし背の君かぬれぬますらむ野路の春雨

◎　浦和　淺野清子

水ぬるむ小田の細手の枯芝にみとりなそへて春雨そふる

◎　倉賀野　矢島菊子

明日も亦とちきりかはして少女子のわかれしあとに霞ひともと

◎　赤岡町　梶岡ひさ子

電線をつとふしづくをかそへつゝやみてなかむるはるさめの空

◎　宇都宮　安東采子

すみれさく野は紫にかすみけり遠ちこちに遊ふ緋はかまの雲

◎　赤岡町　藤谷征舟

古池の椿の落つる音のしてとふ人もなき庵の春雨

◎　常陸　渡邊富子

大空にあかりてなけやあさひはり今日の一日は我れに床かせ

◎　埼玉　林育齡子

苔青き延元陵に櫻散りて春雨寒く日は暮れんとす

◎　越中　澤藤靜子

よし今日もくれなは霞束れたる枕を野邊に一夜明かさむ

◎　浦和　田中まさ子

夕汽車の過きにし後は白けむりうすらぐ見えて春雨そ降る

◎　上州　新井まさ子

父やいかに母やいかにと旅衣しめりかちなる春の雨かな

◎　若松　小泉時子

なき人を忍ふ夕の袖の上にかゝるもかなし春のむら雨

◎　東京　是恒文子

春の野のあそひやあかぬきのふ見し人もまた來て菫つみけり

◎　下野　すみれ女史

友をまつ子守の唄は遠のきて桃ちる縁にあめしづかなり

◎　浦和　内野富子

すみれつむ少女がせなに眠る兒の何ゆめむらむ笑もらしつ

◎　兵庫　福永りつ子

つく〴〵と母をそ忍ふこの夕とふ人もなし旅の春雨

◎　東京　鈴鹿紫女史

董つみつはなぬく野の糸いうにいとゝ心もひかれてそゆく

◎　神戸　杉田鶴子

思ふとち董摘む野に日は暮れていそく家路の遠くもあるかな

◎　伊勢　齋藤貞子

兄君の愛てし芭蕉の枯れはてゝ夕暮近く春雨のふる

◎　横濱　吉川ちか

櫻咲く堤淋しき昨日けふ春雨ふりて訪ふ人もなし

◎　東京　横山初子

春の雨ほとけのかほをたゝくなりおひわけ道の人け無き道

◎　栃木　田波なほ子

なき友に今朝手向けきし櫻花この春雨に色やあせまし

◎　信濃　清水作子

たゝ霞む空とや見なん春雨の柳の糸に玉しぬかずは

◎　東京　保谷かれ子

旅人のすけの小笠にちりかゝる花もしめりて春雨ぞふる

◎　仝　村田綾子

櫻狩あすとちきりていれし夜のあかつき近く春雨のふる

◎　紀州　みれ子

梅の花ちりける宿の春雨はさながらゆきのしつくなりけり

◎　備後　藤井たか子

鶯の聲もしめりて山里の雨しつかなるはるの夕くれ

◎　武州　須崎せん子

慰ひつゝ花の小蔭に旅人の互に仰く春雨の空

◎　鳥取　尾崎なみ子

なつかしき淺茅が原に今日も來ぬ共に遊ひし君忍ばれて

◎　新潟　上田まき子

さほ姫のかすみの袖やしほるらんすゝなさく野の夕くれの雨

◎　東京　北條敷子

若きあるし小き客人ひなの前にかたりあふ日を春雨のふる

◎　加藤竹葉

蝶追ひし里のわらへのかけ消てなの花はたけ春雨のふる

◎　秋田　梅田くに子

春日野にすみれ摘みける小女子が袖もしをれて春雨の降る

◎　河内　河崎ひさへ

雨かすむおほしま近く琴おきてきみまちふるゆふまくれかな

◎　但馬　尾知山はる子

双六のあひ手は去りてつれ〴〵にくるむころを春雨のふる

◎　伊豆　河邊かほる

つはなぬくうなゐのこゑもたえはてゝ嵯野の原にふれる春雨

◎　相摸　吉村すゞ

さよふけて降る雨さひし春の夜に軒のしつくのをとはかりして

◎　河内　櫻井喜子

契りおきし法師きせり琵琶さけて春雨かすむ黄昏の宿

◎　仝　仝人

雨かすむ柳かくれの廊もれて琴の音優し春雨の曲

◎　大阪　久保井花子

青やきに舟はつなきてわたし守かへらむとすれは小雨そほふる

◎　近江　中西美智子

姫君が遺愛の牡丹芽をふきて雨しつかなりあれし大庭

◎　岩代　春日部　紋

春雨のふる此頃のつれ〲に徒然草もよみつくしけり

◎　仝　春日部　みさご

竽をやうまん歌をやよまん今日もまた軒端淋しく春雨そふる

◎　岡山　加藤經子

我宿の萩の若葉の夕しめりはるもさびしくそゝく雨かな

◎　上州　關根はる子

野邊に咲く花より花とあくかれて小蝶に似たる我心かな

◎　信州　小林春子

手まりの音しづまりて庭の面のやなき長閑に春雨のふる

◎　土浦　山口すみ子

一むれの大師詣ての蝶ふきてれり行く旅に春雨のふる

◎　横濱　吉川ちか

長閑さに今日もひれもす遊ひけりてふ〱追ひつゝ土筆ぬきつゝ

◎　鹿兒島　平田てる子

おもしろき春の遊に立ましりすみれ咲野にけふもくらしつ

◎　前橋　清流

思はすもはなにこゝろのさそはれてちきらぬ友にあふそうれしき

◎　大阪　辰巳すみれ

琴の音もいとゝしめりて茅ふきの軒端しづかに春雨のふる

◎　東京　宮内千代子

摘みためれつはな蕨はすておきて胡蝶追ひつゝおそふ野邊かな

◎　埼玉　林常子

---

うかれゆく心の駒のはてもなし若菜をあさる武藏野の原

◎　和歌山　宮井よし子

人訪はぬ深山かくれの一つ屋に小雨ふり出て櫻花散る

◎　東京　立花はる子

野遊につかれし妹のいつしかと菫の床に蝶とれむれる

◎　仝　武内はま子

若菜洗ふ里の小女の影きえて小川靜かに春雨の降る

◎　東京　樋口きく

摘みふせる少女が園の窓の外に櫻ばなちり春の雨ふる

◎　伊勢　吉田英子

はる雨に腐れそめたる藁東にちりて積れり白梨の花

◎　横濱　飯田みつ子

菫つむ乙女が聲も霞みつゝ春の野邊にそたのしかりけれ

◎　上州　明田川密子

鶴も椿林に啼き絶えてゆふぐれ暗き村の春雨

◎　近江　眞島義枝

かすれゆく柳のかけに乙女子が父まつ門に春雨のふる

◎　信州　常井五十鈴

ほろ〱と椿こぼれて賤が家ののきばしづかに春雨のふる

◎　東京　長谷場せい

天の川氷も今やとけぬらん霞む空よりふれる春雨

◎　赤間關　熊谷ふさ子

すみれ摘む小女も見えず蝶飛ばず只しづかなり野邊の春雨

◎　仝　仝

わがせこのいたつきとみに重りゆきて夜半さびしくも春雨のふる

◎　伊勢　加藤しけ子

窓越に見えし野寺のあらゝきも霞に消えて春雨ぞふる

◎　下野　田波なほ子

さわがしき手まりの歌は打たえてせどの柳に春のあめふる

◎　下之關　熊谷きん子

ほのくらき燈火のもと只一人物思ふ夜半に春雨ぞふる

◎　埼玉　實相寺浜子

霜がれし木の目も春の雨降りて心靜けき朝ぼらけかな

◎　東京　近藤穎子

いつのまに雨になりけむうぐひすのはふきに花のつゆぞこほるゝ

◎　伊勢　白井きの子

春雨にぬれて匂きぬ山吹の一枝そへし君の玉章

◎　仝　西井啓子

堤ゆく人影絶えて夕暮て川面淋しく春雨のふる

◎　豊前　加藤さわ

うら／＼と霞たるな引春の野にすみれつみつゝけふもひれもす

◎　伊藤こよ

春雨の音も晴けし我庭は椿かつ散る音はかりして

◎　仙臺　渡邊峽子

行年とて籠りてまよふ野瓦の眞中一入独のぬるゝ春雨

◎　石川登美子

池の面の綾をみだする春雨にみ山の鳥の尾らも染むらん

# 懸賞文

## (課題) 學びの窓

(甲賞)

北信　ふじ子

今は昔過去となりにし學びの窓、そを辭してより數ふれば七歳八歳の月日をぞ經にける、さればこゝ現在の愛といつくしみかはりゆきて、胸に殘るは春夜朧月の如く又秋曉さぎりのごとし、あれどもさだかならず、追憶淡々、あはれ寄宿樓上に文學を論ぜし昔の林はとほき／＼山家にこもりて幼なきが揺りかごのほとりに守歌うたふをかしさよ、かくてはナポレオンの言の葉も空しきやうにぞありける。

我が學窓の過去は何等の苦痛なく何等の障害もなかりき、幸にして中途學資の絶ゆるなく双親の健康おとろふるなく病みしうせにしふれなどの悲しき消息手にせざりしはそもまたたれの恵ぞや。

さても嬉しかりしは夏の休暇なりき、折にふれホームシックといへ百病に犯されて望郷の念禁じがたき事もあり、優しき／＼母上のみふみ、うけて啓いてよみて涙にくれし事もあり、夏の歸省、こは學生にとりて復活のリパイバルとやいはん。悲しかりしは姉上ともおもひし友の俄かなる死出の旅に赴き給ひし折なり、假初めの風邪よりおこりて急性肺結核ときくさへも怖しやあの苦痛のさまいま眼に見るごとし、この人高等文科二年にて文才のほまれ高くかれては故一葉の君が作を愛讀して、わけても／＼「闇夜」に同情をよせたりけり、我は下の級にて何のわきまへもなかりしが、いひがたき煩悶にかたれ給ひし由いふ人ありき、うつくしき館の主、またものいはず、とこしへかけて其秘密を知るものなけ

ん。

苦しかりしは數學の試驗、代數幾何いつも點數低うしてわが頭を幾度なやましたるよ、校を出づる時好まぬ書籍を悉く火中に投ずるといふ米国女學生の風習くりかへさまほしうおもひしが、誰もさなさざりしはやさしき日本の娘よと某西洋女教師はものがたりぬ。

われは花々しき官立の校に養はれしものならず、花にていはば谷間の白百合を以て自任せし某校、其所もいはじ名もいはじ校長の君、舍監の君音樂の師、畫の師、うたの師、今こゝには洩らさじな、いさゝかの英文學を教へ給ひし君は、ことしも猶同じ信州に住み給ふときく、栞の君また同じ校に相知りし人なり。

あたらずはゆるし給へ、やむごとなき姫君が通ひ給ふ華族女學校、これをばやよひの櫻とや見ん、高き梅の花、高き人の御宿世、あはれ春久しかれな。若狹のほとりなる高等師範校よ、いはてよしろきこは梅の花、されど紅梅にはあらじ、威厳ありて清楽なる白梅、東風にあくられて六十余州ににほひあまれき哉、そこにつづく高等女學校、あてたる牡丹とはかゝるをや、一橋のはおなじう姉妹ともいふへけれど、これは芍藥の花にたとへまほし。職業學校よ、婉なる緋桃のほころびたらんやう、こもまたあたらずはゆるし給へ、虎の名おそろしけれど女學館に何のかゝわりやある、くれなる深きローズの花、艶なれや麗なれや。いつれもいづれも明治の學窓、まことに陽春のおもゝちあり。

雅致ある藤の花、これは青山あたりにくらへんか、ヴアイオレットの香たろきか番町の學院、我に納言の才筆あらばおもふまゝ列記せんを、唯口惜しとおもふのみ。

近頃新らたに設けられし女子大學、いまだ見聞せればこゝへは省きつ、庚申塚のまなびやよ、近頃くわしくたよりを得れば記せんやうなし巣鴨の名は狂人を聯想す、願ふはくるひのをなごを作る勿れ。

さても白百合、いはじかたらじ、今の我は母こぐさ、世人がかしこきに伴ふ能はざれども第二の學窓にて絶間なくまなびつゝあり、師とはたれ、曰く青山白水。この君や聊かの不幸平もなし、往々富者によくし美人によくし、才女によくする先きの學窓の師とは異りて、この君や至誠あり、熱情あり、病めるものをよくし、疲れたるものを慰め、愚かなるものを教へてうます、まことに良師、自然てふ第二の學窓は、けふの課題、まなびのまどの意に叶ふや否や知られども、先きのを過去となし我りし昧、一言とに現在のおもひを述べぬ。

花くらべ、もしあやまちあらんか、ゆるさせ給へ、ゆめうつゝのやうむれにうかびしを、筆にこもれる覽女は紙上に告白せしめたり、罪は小香にとひ給へや

（乙　賞）　　姫路　高井歌津子

青柳のなよやかなる糸たるゝ門の流れに漱ぎしつ、籠の小鳥の餌など摺りて、休らう頃親しき男子の君は學び舍にとて來給ふなり。われらは樂しき鶏の聲におくられて草の戸を出て、門の柳の端を結びて學び舍に向ふなり。

村のはづれの土橋を越ゆれば前は見わたすかぎりの畑にて、人の往き來う道は其中に通れど、我等はこと更に畔の露ふみ通ふなり、梅の宮より吹き來る春風は、そよ〳〵と髪の毛をはらひてうらゝかなる空の色えもいはれず、見はるかす麥畑にはやゝ伸びたる麥の穂に白き胡蝶のかず〳〵群れ集へり、われは男子の君と手をつなぎて胡蝶の行方を追ひ行きつ、はや學び舍近うなりぬるをも知らぬがつれなり、わが學び舍は八近塡山の麓におりて、竪の幕を打ちめぐらし楓の中に建てるなり、その畫

の息に吹き和らけられ、その花の蕾りに育てらるゝ我友垣はあまたあれど、月に花に互の心の底を打ちあけて、共によろこび共に慰め合ふ友垣は男子の君の外にはあらざるなり、げに男子の君はわが心ゆるしたる友どちにて、男子の君もわれには心ゆるし給ふなり、されば學び舍の出入にも、學びの窓のつとめにも手を分ちたる事はあらざりき、朝夙く來ては學び舍の庭なる芍薬園にゆき、手づから水汲み來て之にそゝぎ、日毎に増さりゆく花の蕾を數へ合ひ、あるは師の君が奏でたまふ樂器のしらべに合はして共に春の歌を歌ひつ、その歌のひゞきの靜けき朝の空に消えゆくを聞きて、こよなき樂とはなすなり。

朝のわざの始まりて未だ師の君の出でまさぬ時、學びの窓より眺むれば目もはるかなる學びの庭は、一面に萌え出でし若草もて飾られつ、何處よりか迷ひ來にむ愛らしき小犬の二匹戲れ居るもいと興あり、はるかなるかなたには私等が村の花曇りに曇りてかすかに見ゆ、この云ひ得ぬ眺めは我學びの窓のたからにて雨に風に一入の趣あれば解けがたき蟠りの胸の中にある時も此眺に向ては心自ら安らかなり、ましていと優しき我師の君の御聲をきゝては胸も和らげられ邪なる思は露いでず、實に優しく神々しき師の君にて我等を愛したまふこと稚子のようなれば、其御言葉の一ふしもたゞ尊く懷かしく覺えて我胸には暖かき春風とこしえに通ふなり、その春風によりて心の華も開き、學びの實も結ぶなり、實にたのしき學の窓よ、われは我庵を出てゝは他にかゝるたのしきところを見ざるなり實に我師の君と、我男子の君とは我學び舍に色をつけ光りを添ふるなり、あはれ此美はしき學びの窓の眺めあはれ梅の花のごと氣高き師の君、あはれ菫の花のごと優しき男子の君なかりせば、われはた如何に生ひ立ちけむ思へば〱懷かしき學びの窓、來む歳月をも共に過さむに、まさきくあれや、又も螢の出づるまで又も櫻の開かむまで、實に〱

こしえに。

（丙　賞）

山城宇治　紫花女

こしかたをかへり見れば今は早五年のむかし錦を着ずばかへらじと歌ひてこひしき故郷にいつくしきかぞいろの君をのこして親しき友と袂を別ちて都に出て學びの校に入りしは我が十五の春なりき。

朝に夕に天つ御神の榮光を仰ぎ皇國振の高く尊きをおしへ海の内外の歴史を知らせ、將た物理化學の面白き代數幾何のむつかしき地理圖畫唱歌さては數島の道文かくさま女の知らでかなはぬ裁縫割烹、人として行ふべき道などをうとく業拙き我にもいとねむごろに教へ諭して世に人たるものゝつとむべき業を知らしめは偏に學びの窓のめぐみとこそいはめ。

觀花紅葉の折々は山に野にうちむれてあくがれありきて心身の健かならんことをつとめ夏のあした冬の夜うち集ひて學びのうさをはらすなどみな學窓のめぐみならでやは。あはれ學の窓よ汝の恩やいかに大いなる、雲をつく山にくらべんか、そこひなき海にたぐへんか、我は汝を番てセコンドスヰーホームを呼びき、いふいつ〱までも永劫にかくよばなん數の親たちいまし學びの友あれば。

花さき花散りて日月の小車は五たび廻りぬ、この春は業を卒へて錦にあらぬ木綿の衣まとひて歸るべかりしを螢雪の功未だならずして故郷なる片山里に病を養ふことゝなりぬ、朝な夕なかぞいろのあつき愛と幼なき弟妹のやさしき情とに守られて望月のかけたることしなけれど五年あまり住なれし學の窓の忍ばれて師の君やいかにいますなどともどちやいかにとこひしきこと限りなし。あはれ學の窓よ、あはれセコンドスヰーホームよ。

# 賞外佳作

近江長濱　藤田れむ子

開けゆく大御世の賜ものとして。よろづ善美を盡せる事のみ多かる中に女子の學問の進みしこそ。餘にもまさりて著しう覺ゆれ。昔しは寺小屋といふもの有りし程の事にて。大方は手書くわざをのみ教へ。其他は二三の讀物をさづくるに止まり。最も飽かぬふしのみ多かりしを。今は小學校にても一通りの學藝は習ひ得べく。女學校なども至る處盛なるに。近頃女子大學をさへ設けられて。行くすゑ天晴の才媛ともなるべき人を養成せらる。されば昔しは笈を負ふとし云へば。總て男子の事に限られしに今は父母の許をはなれて都に遊學する者も夥しく。多少のけぢめこそ有れ。殆んど女子一般に。學びの窓の趣味を覺ゆるに至りぬ。凡そ男女を問はず。その學校に在る間は。げに一生の花とも稱すべし。其頃は何事も無邪氣にて。未だ浮世の惡風にも染まで。專ら學びの道にいそしむ事故。新奇の學藝など習ふに付け。その趣味もなか〳〵に深かるべく。この樂みさへ有るに。あまたの友垣とその契りも淺からで。君汲川流我拾薪と。なにがし先生の詩にも云ひけむやうに。憂きにつけ喜ばしきにつけ。互に心を合せて行きなむには。其樂しさや譬ふるに物なく。實に生涯忘れやらぬ思ひあるべし。ある女學校の優等生が。その卒業も近うなりて。「哀れ一とせ落第するとても。今暫し學校に在るこそ願はしけれ」と云へるは。能く學生の眞情をうがつものになむ。されど女子は男子よりも早く家事につながるゝ者ゆへ。其修學の間もなべて短きが常なりかし。果して然らむには。一旦許されたる四とせ五とせの月日こそ。山なす黄金にもまして最とたふとく覺ゆれ。されば此の好き折をあだに過ぐさで。かの優等生の如くに男事いそしむとも。月日は夢の間にうつりて尙も名殘の惜まるゝを。若し此等の由を露思はず。優々として己がわざを怠り。學ばで止みし事のみ多からむに。は頓て來む日に臍をかむとも。絕えて其甲斐や無かるべし。實に世の女學生たる者。最と〳〵心すべき事にこそ。

信州下高井郡　小林はるえ

鍼針の餘暇學窓の下に、白樂天詩集を繙くに曰く、「人生婦人の身となる勿れ、百年の苦樂他人に依る」と然れども、妾は是に向に同意を表する能はず、何となれば是れ單に女子の男子に對する關係のみを觀て更に男子の女子に對する關係を遺却したる言葉なればなり夫れ已に男子の人となりが、女子百年の苦樂に關係する以上は、獨り女子の人と爲りが、男子百年の苦樂に關係せざるの理あらむや妾は男子の人と爲りが、女子の苦樂に關係するの度よりも寧ろ女子の人と爲りが、男子の苦樂に關係するの度の大なるを見る、蓋し男子の人と爲りが女子の苦樂に關係する範圍は、單に其女子一身に止まれども、女子の人と爲りが男子の苦樂に關係する範圍は獨り、其男子一身に止まらざるものあればなり、試に東西古今の史乘を繙きて、女子の爲に名をあげ家を興し、又身命を殖し國家を亡滅せし者、續々相踵くを見るに及ばゝ必ず妾の言の僞ならざるを知らむ。抑々女子は其良人に對する關係に、三種の狀態あり、曰く情人、曰く顧問、曰く僕婢これなり、即ち情人としては其溫雅の愛情を捧げて、良人を慰藉せざるべからず、この情人としての慰藉は、實に其良人に對して無限の價値を有するものにして、隨ひて又無限の効果あるものなり、顧問としては最も誠懇忠實に良人の爲めに、委覆奬勵し以て內助の功を奏せざるべからず、而して僕婢としては、勤勉從順に良人に奉仕せざるべ

からず、又母親としての責任は、妻女としての責任に比して毫も軒輕する所なし、奈破崙嘗て人に語りて曰く予の心志、勉力、自治心は皆予が母の教育に頼りて得たるものなりと、兒女に對する母の感化力は實に偉大なるものあり、孟母の孟子に於ける、楠夫人の小楠公に於ける、皆然らざるはなし、而して其人に對するの言動は、又直に其兒女を教育する所以にして、かゝる家庭に於ける好摸範は、教育上至大の價値を有するものなり、ウチリス曰く、上帝は各所に在る事能はず故に母を作れりと要するに母は直に愛情の權化たらざるべからず、母が其兒女に對して有する愛情は、自ら其兒女をして從順ならしめ隨て能く教育の効果を奏するものなり、唯だ此の際注意すべきは、舐犢の愛に溺れて、其の子を賊はざらむこと是れなり、先哲既に之を盡せり、則ち、ミルトン曰く、女は其理否に論なく、男子と爭ふ時は當に否と齎ろ、との語、一

婦人風



新橋停車場

讀奇怪なるが如しと雖も、再思すれば毫も怪むに足らず、何となれば、男子と爭ふ時女子の一大生命たる、温順の美德を根本的に破壞するものなればなり、此點より言へば、女子は尙鷄の如く、男子は猶石の如し、石鷄を擊つも鷄石を擊つも結局鷄の害たるを免れず、要するに愛と温順と

は、女子の二大美徳を具備するものにして、始めて女子天使たるの任を全し得べきものなり。

〰〰〰〰〰

大阪　岡崎亀鶴子

妾不幸にも幼くして母を亡ない父君の手一ツに育てられしが母君の亡せ給ひしより何事もいすかの嘴とくいちがひ商業上の失敗も少なからず妾が十四の春高等小學を卒へし頃には家政のいたくかたむきければ進みて女學校へ入學も得せて本意なくも學ひの道をたちぬ其後三とせあまり叔父の許に食客の身となり居たりしに忙がしき家の事なれば學びし書の復習さへなすひまなく徒らに月日を送りしに嬉しくも去年の春父上の手許に引取らるゝ身となりぬ世の幸福なる君達は日々學び舎に登りては親切なる師の君のみ教を享け家庭に在りては慈愛深き母君に侍つきて其いましめを聞き給へとも妾はさる幸福に浴する事叶はず學びの志はいだきながら抱志をはたす事能はずさはいへむなしく暮さんも本意なければたとへ教べん取りて教へられざる共精神一到何事か成さらんと云ふなしへも有なれば古へ人の金言には劣る共書中の君を師とあをぎてひたすら獨習をはげみつゝあるなりされば毎月五日の女學世界十五日のをんな二十五日の女學講義一ツとし

## 俗雜觀



婦人雪合羽

て待れざるなく晝は家事多忙にて書讀むひまもあられども夜はさせる用事もあられば毎夜燈火の下無形なる師の君の前に端座して其みをしへを受けつゝあるなり

中にも女學世界詞藻欄の趣味多き天下才媛の君達がものし給へる小說圖文和歌新體詩など何つれ妾が爲には良師たらざるなく其中最も愛慕の念高きは北信なる宮澤の君和歌山なる藤田の君にこそ此君達の文の流暢にして爽快なる未だ相見ざる君なれともそゞろに御慕く思ふになむ

あわれ天下才媛の君達よ願はくは此不孝なる獨習者をとこしへにあわれみ給ひて末長くみをしへを授け給はん事を

こは學びの窓てふだいには叶はざれともいさゝか天下の媛達に同情をこはんのみ

東洸女史

學の窓になれし友垣のいつしか過ぎてかたみに袖を絞りつゝ立ち別れしもをよび折りつゝはや昔となりて浪風あらき社會に處して其消息やいかにあるは猶奥深く學のわざ極むる人もあらんあるは旣に樂しきホームの主婦となり妻とよばれ母と慕はるゝ友もあるべし顧れば身は碌々としてあはれ宇宙の一隅に漂ふ蜉蝣にも似たる哉いてや世に一度生を受けたるもの誰か死なからん身沒して名垂る先哲の偉なりとする所假令纎弱事に堪へずとするも徒に目前の安樂に耽けり醉生夢死胡蝶の眠のはかなくも朝の露と消え失すべけんや志を決して獨學の窓に倚り友とするは寸尺に充ざたざる紙硯あるのみ以て天地の大を寫し以て自然の美を畫かんとす雲表に聳へたる富嶽の景琛播をやどしたる琶琵の漣波嵐山の致吉野の櫻花も物かは我に一縷の希望あり我に天地の萬象あり仰いて無盡藏の風光に對し倚りて造化の神秘を探る希ふ所は富貴にあらず靜穩にあらず之を天職として樹立せんとす偏に千艱萬酸を排し百折不撓の精神もて其成功を期すあゝ惠深き春の神よ菜の色ふかき葉は野ににほへり鶯は樹にうたへり趣味は多し野に山にあたゝかなる慰藉の賜物は前途幾多悲慘の運命橫はれるを覺悟しつゝこの逆境にある我等が身に余りありと云ふべし

陸中　菅野富士

少し許、裁縫の道修め得たればとて、近き邊の幼子日毎に訪ひ來つるも否れにはこよなき、喜びぞかし、針の運びうときが日を經るまゝに、進み以て行くなれば、心は常に少女等の身の上にはしりて、夢路に通ふことのあり

さはれ、すぎにし夏の方より來れる少女の夢見月のはじめ、不圖したる風邪の心地とて、打ふしけるが立たずなりぬさらぬだに多くもあらぬ習ひ子の一人を失ふ事の、如何にもつらしや、

あゝ、光子、高き希望をもて、我かやとの敎へ子となりしより、二月、旣に行く末の、確かなる萌しは見えつ、……行く先きの、まどかなる望を有しながら思ひかけざる、病の床に唯七日にして、枕邊に、得あらぬに及びぬ、其のきはに

行く末ののぞみもたえてしきたへの
　枕に露を宿す頃かな

と打ちふるふ手に物しそと枕の下に、置けるとか、あわれ、哀れ、春雨の降りしきる夜中、光子は如何に歎き、如何に苦しみつゝ、世を終りしか、光子は、下宿の間に逝へりし、薄命の少女にてありき、一年兄を失ひて、家内の事々は少女が双肩を休むるを許さゞりし、かゝる悲歎の間に、五歳になれる妹と、六十路に近き父親とを殘して遂に逝けり

かゝる身はたとへうとしとも、歎きの涙は添ふなるべし、況してや、數へ子の果敢なくなりぬるをや

かく思ひ續くる度毎に、今更に爾ほ忍び勝ちなるは、庭の櫻の散りふくにこそ

少女の世にありし時、花見がてら、近き邊りに野遊びを儘さんと三月節句の日を撰みつ、されど其の日の、如何にふつらん、櫻もはやし、昔の三片四片見んも憂し、など種々に、たづまつる事のありて、それなりになれる、あはれ一日の遊びなりともありしならんには、あゝ、望をもてる少女は去り、學びの窓いとしめり勝にのみ沈み行くなり

あゝ、思ふまじ、去れるはおふの不かなるを……只……只管に、爾ほ……望み多き少女を養はん哉

行きなれし里の小路の夕くれて
わが訪ふ者の宿しばし見つ

信濃　小林つれ子

◎只我が家に遊ばせ置きては、さまぐ惡しきことどもして困れば早く學校に通はしめよと祖母の君のたびぐ父上をそのゝかすに、予は七歲の春より小學の生徒となりにける、細き筆と墨のみは新らしく求めたれど硯は可笑しく凹みたるー叔父上のつかひふるしたるー者にて、文字習ふべく與へられし帥紙は姉上の古き作文帳を翻り返しゝ者なり。讀書入門は友より借りて來ぬ。大方の用意も整ひたれば、母上の洗ひくれし風呂敷に包みて、明日の事ども思ひ詫びたり。

明くれば空は麗らかにて庭の柿の木に雀の囀るも面白く、絕えて梳らざりし髮さへ今朝は美はしう結ひて、母上の縫ひ替へ給ひしメリンス友禪の衣纏ひ風呂敷包みを小さ頁ひにして、父上に伴はれ、山を超え橋を渡りて、半里ばかり隔たりたる小學校に着きたり。

美しき、汚なき、あるは大なる、小なる下駄草履などの取亂されたる所に予も下駄脫ぎて階段を昇り二階なる生徒控所に伴はれぬ。旣に幾人の生徒遊べり、予と同じく今日入るべき人々と共に少時く一室に待ち、こちらへと小使の案內につれて進めば、爰は黑板一方にかゝり教壇ありて、小さき卓いくつとなく列べる教場なり。いかめしく洋服着けたる、あるは羽織袴正しく嚴あるなど、見るめも畏しく急に我家へ返らまほしく思ひしもおかし、父上は洋服の人と語り、髯ある人と話しかくすと稍々暫くにして、附添の父兄等は皆歸り去り、婦人の教師來りて皆さんの名を呼ぶ程に應え玉へとて、一々高らかに呼びぬ。小さき聲にて應ふるは殆ど聞きとり難き程なり、順は來りて我名は呼ばれぬ、予の聲の餘り大いなりしため教師なる人も微笑を洩しぬ、定めし惡太郎の仲好しと心にうなづきしなるべし。

小刀ぎつ、爪あと、さては落書など多き机に、予が名前書きたる紙札貼られてけれは、硯草紙など皆其中に收め＝忘れなしぞと敎へられて其日は家に歸りぬ。明日師の君より敎へらるべき處を下調せよと姉上の日ひしを聞かでふしどに入り其夜は心地よく眠りぬ。

早くぐと母上の呼び起し給ふに驚きて眼さむれば、雀は軒端に囀り友どちは庭前にうたひ、辨當、書物など皆揃ひありしかば、そこぐに用意して、母上のいさかひなしそ、師の君の仰せには背きぞなぞなと。いれもよくも聞かずして、友と打連れてゆけば、母上は門べ迄出て來りて、予等の影の森にかくるゝ迄見送りたまへり。

かくて日々通ふ程に仲よき友どちも出で來て、却て家庭にありて嚴そかなる父上に業を授けらるゝよりも、たやすくおもしろく、其頃妾に向ひて何事が一番好きなりやと問ふ人あらば＝妾必ず學校よと叫びたり

◎たゞ試驗に及第とばかりにては不可也、優等ならでは許すまじ、若し落第にてもなさば退校せしむるは素より容易くは家にも置くまじきぞ、されはよく〳〵こを思ひて常々も學業をゆめ怠りなしぞ勉めよ勵めよとは日夜父母上の妾を敎へのたまふ御言葉なるを、此たびの卒業試驗には見事優勝の月桂冠を頭上に戴せでは止むまじ、群生を抜んでゝわが肩上首席の名譽を荷はずんばやむまじと、獨りわが心に誓ひつゝ復習又復習ひたすら勉强しつ、待ちに待ちたる試驗日は來りぬ。三日に渡りて課せられたる名々の問題に滿身の精力を傾けつくす迄も無く、先は無難に事終へたり。

試驗は濟みぬ、心の重荷は輕ふなりぬ。さるにても其結果は如何！果してわれは豫期せし如く好成績たり得可きか？、否それよ父母上のみ心に應え奉るとを得可き!?かなどしかすがに氣懸ともなりつ。

一週の後、妾か携へ歸りし卒業證書と〃優等第一賞與とを見給へ、し父上は滿顔に笑み給ひ、母上は御眼に一零の露を見せたまひぬ。

岡山　まつえ

空うら〳〵とかすみわたりてます日影ものどかにゆかしくかをり軒端の梅がかは昔も今もことならさめれどかはりゆくは世の文明になんぞも〳〵いにしへは女に學問は不用とて只遊戯のみを授けて滿足し男子より遙に劣等の位地にあるものとして蔑弄視せらるゝも婦人これに甘んじて一生を送りけりとかきゝたるに明らけき大御代のかたじけなさはよろづのわざ進みゆくにつれて女子も男子とひとしく貴び重ぜらるゝに至れるこそこよならうれしけれこち日さす都はいはずもあれあまさかる鄙にいたるまて女子敎育の必要を察じ新たに女學校を設けて其道を奬勵せらるおのれらかゝるめでたき代に生れあひて日々まなびやにかよひ文の林にあそぶたのしさよれどころに導き給はる師の君は暗夜のともしびのごとくみかけによりてこの二年ばかりはあやしき道にもふみ迷はで過しぬまた朝夕交はる友は倶にして互にたすけあひたゆむわが心をもはげましめ給ふまことにわれにこの師友なくば愚かなる身のいかゞなりゆくらむをかく幸ある校にいりて何ふ自由もなく勉强し得らるゝはひとへに父母のめぐみなりけり日々家事にいそがはしき母上の勉强はいのる所なれどあまりに過して身體をなそこひぞ品行をつゝしめよとの御心そへは身にしみてありがたくはやく業をへて御側に仕へまつらんをりはいかにうれしからんなど思ひつゞくることもあり

近頃女學生をかれこれいふ人ありとかやいとなげかはしき極にこそあれつとめいそしみて女の心得べき學科をばをさめ之を實地に應用して世人悲歎の聲をたゝしめてやはこれ國のためなりわれらの責任といふべし今や女子のよみものとして書籍雜誌の數もおびたゞし出でゝ學ぶこと能はさるものゝためには通信敎授の法さへ開かれて家庭にありても勉學し得らるれば故鄕のたれかもこれらに心をみがきつゝこむ年のわれの歸鄕をばむかふならんこの貴き月日をまなびやに過せし身の彼等に耻づることありてはとおもへば一分時もおしまれて机により例の復習をなし烈女貞婦の傳までよみてそゞろに感にうたれしをりに友のちもと散歩し給はずやといふに心づきてわれにかへれば學の窓に鶯さへなくさめがほにさへづりぬ

花かたみ

妾のみなりし第五號の談話には、今や六人五人の友來まして例の談話會ははじまりぬ、妾は昨日父上母上と奈良へ、藤見に行きぬ、妾は昨日幼き妹と手を携へ、博物館に遊びて、いとも樂しく日曜を送りぬ、妾はいづこ、妾はかしこ、おのがかんじし、樂しかりし事ども語り給へと、古郷巡き

妾には、何の語るべき事もなし、

志はし言葉のときれし時一人の友は、おゝそれよ、妾はきのふ悲しき事を聞けり、そは幸ち多き君と多くの友にうらやまれ給ひし、浪子の君のことにて侍るよ、浪子の君のせの君様は、此頃御宅に入らせらるゝは、いとまれにて、多くは聞くもいまはしき、花柳の巷のみなりとかや、變りやすきは秋の天と、男心と、世には歌へども、せの君様ばかりは、と妾等にほこりて居給ひし、浪子の君のみ心の内は如何ならん、何の感じもなう聞き給ひし、入相の鐘は哀れとや聞へん、樂しと眺め給ひし月もさぞや、悲しと眺め給ふならん、と愁然として語り給へば、皆の友の冴へざへしかりし面わには、同情の色あらはれぬ、折しも八時を打つ時計と共にリンの音はかまびすくなり響けり、

はじめは家政なり、心して習へよ、母様のやさしきやさしきみ聲は、妾の胸底にかくさゝやきぬ、やかて家政終り、國文、科學、習字、裁縫終り、午後四時を打つ時計と共に、友は家路をさして歸り給ひのこるは寄宿生のみ、

やがて夜となり、復習終り、皆々床につきぬ、誰れ彼れの寢息はや聞へつるに、何故か今宵はいれがとうて、よしなき事とも思ふ折しも、吐息と共に寢かへりなし給ふ君のあるに、妾のみと思ひ居しに、さては友のありしかと、窓もる月あかりにすかし見れば、今日あらたに來給ひし新しの友、久子の君にて有し、知らぬ友のみの心細さに、別れ來ませし父母の君の、深きなさけのみ言葉を、くりかへして居給ふならん、安らけく夢のむすほれさるも、道理なりけるよ、

それにつけても思ぞ出る、四年昔の四月一日、此日は、はじめて此學の園に、數へ草を摘みたる日なりしよ、多くの友は、言葉のをかしきと笑ひ給ひ、髮の結ひ樣帶の結び樣の、田家めきたるとて、また笑ひ給ひぬ、嗚呼此時よ、此時よ、はじめて悲しと思ひしは、夜に入り床につきてはいよゝ悲しさのまさる、悲しさのまさるにつけては、慈愛深き父母の君懷かしきはらから、したはしき振りわけ髮よりの友、います古郷のいよゝ戀しうて、其夜は泣き明しつ、寢かへりしは、幾たびなりしか、久子の君の、折々もらし給ふ、しのび音を聞につけ、妾は心に堅くちかひぬ、今よりたよりなき久子の君を、妹と思ひあたゝかき愛をもて、萬づかまひ參らせんことを、折しも時計の一時を報ずるに驚きて、同情の涙にぬれし目をとぢぬ、

# 雜　　文

## ◉夏休記

重田靜子

木影になく蟬のこゑはいとゞ暑さをますかと思はれ軒の風鈴はくもの巣にかこまれ風はちとも吹かず暑さは日々に增すのみなり。かゝる時にしもあて人たちは避暑旅行とてあるは箱根のいでゆにものし或は大磯の海水浴などにいて行くなりわらわはさるのどけきゝはの身ならず頃は學びの道に事繁く家事の手傳とては心のまゝに出來ぬ身にしあればすこしにても母の手傳して日頃の思ひをはるけばやと思ひつまづ日課表を作りて朝の凉しき内二時間は日々に復習と定めつゝ終りて後、午前中は縫物をなし或はとき物、洗濯、炊事等に時を費しつる事もあり午後は暑さも强ければ庭の背栾の下吹く風にくさ〴〵の雜誌文などひもときて暑さを忘れぬ夕つがたよりは兼て父君のめで給へる鉢木などにやりみづし家内はき夕げを終り夜に入りては父母はらからまどゐして樂しき物語りに時を移し又あるは妹と共に唱歌など謳して時を移しゝ事もありき過ぎにし廿日

よりは祖母君のみもとをおとづれ一週間程宿りしてみ心を慰さめたりき

かくして過ごしつる程にはや長しと思ひし四十日の休みも一日二日となりければ廿八日に家に歸りて學びの業の道具など調べつゝつく〲と過ぎこしかたを顧れば別になす事もなくすごしゝこそいと口惜しきゝはみなれあゝ我いくたの友垣はいかにしてこの休みをすごし給ひけんかへり見ては我ながらいとはづかしくおぼえつれどありし事ども拙なき筆にかきつられて師の君にさゝげまつるになん。

評　一艱難は身を玉にす、苦學は、まことの學問なり、つとめよや君、

## ●附木賣

野州栃木町　松本はる

附木や〱と賣りあるく老翁こそあはれなれ。口さがなき童女は耳近にてあざけり、いたづらなる男童は遠くより石を投ぐ、附木や〱と賣りあるく老翁こそ氣の毒なれ。風あらき朝、みぞれ降る夕べ、賣ための一錢よく茶をにることを得るや。人情紙の如く道德地に落つる今日、僅か附木程の厚情を有するものなし。此翁の附木を賣る暗にそれ世を諷するものあるか、附木や〱と賣りあるく老翁こそ尊けれ。夜叉白晝に横行し、世界暗黒たる今日、僅か附木程の光德を有するものなし、此翁の附木を賣る暗にそれ世を誡むるものあるか、附木安い〱と賣りあるく老翁こそ尊けれ。あら彼の附木の安きを買ふもの或はあらむ、彼が訓を買ふもの世間ありやなしや。

## ●日々の務

大分縣　橋爪孝子

一、家庭の朝

家のうしろの打ち茂りたる森まだくらく小鳥の囀りは微なる頃かたこそと臺所のかたの音するは下婢のお松が起き出でゝ早や朝げの用意にかゝりしなり雨戸あくるおと二階にしたに庭掃く響きおちこちに與三や辨二もはやおき立ちしなり妾もおくれじものをとしづかに寢床をおき出でゝ庭におり出でてばお早うござります……お寒うござります……といつもながらに下女と下男が……

やがて目もさめやらぬねぼけ顔したる妹どもに寢衣きせかへててうづゝかはせ下婢を助け姉上を顧みて朝げの支度などするうちに夜はほの〲と明け渡り小鳥は軒ばに囀づり旭は窓よりさし入りて心の爽かさ氣の晴々しる何にかたとへんかくて祖母君を初め十余人の大家族は打ち揃ひて膳に向ふなりおとなりの雨戸あくる音はいつもこの頃にして我が家の早やおきはげに近所の名物の一つに數へらるゝとかとかうするうちやがて

二、學校のつとめ

に出づべき時刻とはなりぬ門を出でし東に二町歩めば大なる石の門いかめしき玄關、紀念碑、そびへ樹木生ひ茂るこゝぞ妾が一日を樂しく送るべき村の併置小學校なる群がりて「フートボール」ける男生徒の勢におされて彼所にこゝにゑび茶袴やさげがみの少女等が妾のかげを見るとひとしく廊下より玄關よりあるは唱歌となへて遊べるも樹々をめぐりて戯るゝもいひ合せたらんやうに「先生が」「々々々」「々々々」「先生お早うございます」「………」とゝかたことまじりしとやかに………先づ他の職員に挨拶して裁縫せん科の教場に入ればこゝにも妾の友はみちみちて年ましの生徒禮うくる用意正しくとゝのへて我が來るを今やおそしとまち詫びぬるのやすみには專科正科の生徒うち交へて紀念碑のまはり常盤木の下手をとりかはして遊びする唱歌の先生も時には手風琴とり

出てゝ筆を取り興を助け給へるもうれし學校のつとめは日每々々にうちかはりて參らしとにはあらねどいつもながら冬の日の短きをかこちて好ける風琴の一曲も奏てゝ

三家庭の夕

には歸るなり夕日の西の山端にかゝる頃洋燈の光りのまだ用なき時我が一家は朝の如くに夕げの膳に向ふすめばしばしのあいだ例の如くに祖母君の嗜める新聞などよみ家庭小說など話す妾が今日ありし事ども打ち語れば父上はとかくの批評を下し給ひ傍らには母上が笑ひくづれて小供等とかるたなど取りて遊び給へりかくて妾は

四學の窓

なる奥の四疊半に閉ぢこもるこゝぞ我が身の清くくつろぎたる獨占の小天地にして又勤勉の自修室なる、床には早梅の一輪二輪ひらき染めてゑましげなるを我が氣に入るやうに活け昔大分に在りし日師なる人々の染め給ひし短册のしたはしげに表裝したるかゝげ毛氈しきたる文机は書棚を左にして今か々々と我をまち顔なり

我が愛讀せる雜誌には女學世界、をんな、女學講義、才媛間叢、婦女新聞などにして遠き者の人々を師とし近き賢き諸姉を友としよみもて行けば短かゝらぬ冬の夜もいつしか深けゆきて凍たる寒月の高く庭の松が枝にかゝれるなり斯くして其の日の日誌など細々と正しく物して机の上書棚の中清らかに整へさてしづかに母君と枕ならべて臥とに入る

あゝ是ぞ我が身の日々のつとめなるされど、我が身は望みある身家庭と學校との樂みに背きていつかは飛ばんいつかは遊ばんあづまの空またの「日々のつとめ」をかくときは我は眞なる學びの窓にやあらん

## ●雛祭

清水作子

陰曆彌生の三日、雛祭りの節句はまゐりぬ、時しもあれ、日はうら〳〵と長閑けかるに、眉にこもりし柳のしなひ、三千代草の〻を貫へる桃のやう〳〵咲け初めたるなど、時を得たりかほなるに、今もなほ東流の水上に曲水の宴して、昔をしとふ人ありやなしや。

我家はもとよりさき草の、三ッ葉四ッ葉に殿造りせりなどいひろむれ〳〵しき住居ならねど、其かみより傳へ來りし內裏雛とも、いとうや〳〵しく床の間に飾りひろげて、此日祝ふと年々の習はしとはしける、されば今日また浮線綾のいときらびかなる敷きものに、おしき高つき何くれの調度まで、例の如くになし据えれば、あなかしこかゝる賤しき伏屋ながら、九重の雲深きあたりとはなりつ。

を旋たれましゝ紫裡の二神あやにかしこし、髮のさかりは丈にあまりて檜扇ひろげ持ちたる上臈の、萩紫苑など、色合ひ日なれぬ衣かづ重れて身ゆるぎもならぬ斗りいと笑しう、凡帳さしかくして居たる、あるは生絹の一重しどけなく着て、あい嬌こぼるゝ斗りの女房、狩衣姿のなまめきたる殿上人、なえばみたる初に、ほうくははきたる殿上童の、桃の香床しかりてかぎ居たるなど、いそのかみふりにし代々の有様も、まのあたり見る心地するを、誘かれ案內しよりて、何やかやと品定めしあへるこそをかしけれ。殊に家なる幼妹ぞ、終日棚のほとり離れず、よき衣着せたる人形かい抱き、いとせばき我胸展げて乳房含まする眞似しつゝ、いて我子よ泣きぞ、やんごとなきあたりのお前なるはと慰めつ、あるは背負ひて身をゆりながら、子守唄を片なりに口ずさみて、親心にもなすさまの哀れなるに、やよいまし、人の母ともなりにたらば、今少しくしとやかならでやはなどいさめたるも、彼紫の上の、雛を源氏の君に

なぞらへて、内へまゐらせなどし玉ふに、かく御男などまうけ奉らせ玉ひては、あるべかしうしめやかにてこそ見え奉らせ玉はめと、少納言の御遊びにのみ心いれ玉へるを、はづかしと思はせ奉らんとて聞えたりけん故事に、思ひたぐえてなりけり。人々もまた棚のおまへに打集ひて、白酒酌みかはしつ、盃うかす小流れもなけれど、今日がらなれば曲水亭を題として歌よみすさびなどする程に、宵の根の長き日影もいつしか暮れて讀み出てたる夕月の、桃の木末に匂ひ渡れば、はや妹は棚にみあかし奉らんと立ちさわぐめり、いて今宵は皆々御前にとのゐ申して夜の守り仕まつりてよと、妹のわがどちにそゝのかし、昨日自ら野に出てゝつみ集めてし母子草の餅など取り出して、これ食べ玉ひとすゝむるに、其名のいとゞ懐しければ、

楽しさの限りならまし母子草。

草の餅ひのまろきまとゐは。

げに樂しとも樂しかりける雛まつりや、

## ●日々のつとめ

澄子

曉より先に起き出てたれど、叔母なる人のいぎたなき子よとの、例の罵り聲は、闔の内より洩れ聞えぬ、またやう〳〵十四の乙女の、力に餘る水仕事のいたましくも、朝げの用意調へて、叔父叔母にすゝめてよりは早く父母を失ひて此處に身をよする悲しさ、かよわき胸の痛むまで、家の内より始め庭の掃除、はた雜巾がけなど、賤しきはしためのすなる業殘りなくはげみても、猶叔母の苦々しき面は、晴るゝ日少なければ、乙女の袖も干しあえねばかりなり、されど、只頼む　眞實の叔父が心から ぬ情なれど、畫の間は、勤めある身の家とそはあらぬを、叔母なる人のいといたうさいなむぞ淺ましき、悲みもて充てる乙女が胸も、夕日窓の戸にさして、叔父の歸るべき折にしなれば、憂ひの雲の晴れぬる心地して、己が手料理叔父に賞められんを樂しみに、あはれ、纎手に手桶さげ米かしぎて、羹厭はしき、色もなし、是はた叔父が惠みにて、夜は程近き夜學校に通ふをば、數々悲しき日毎の勤めの中の、只一つの樂みと雨にも雪にも怠らず、世の常の乙女子の、夢濃やかならん初更までも、復習に餘念なしとかや。

聞くまゝに胸ふさがる樣に覺えつ、掌中の玉とめでられ、錦を裝ひ玉をかざし、車ならでは學校にもえ行かじ、衣の染色よしあしなど、父母の心を煩はす姫達の耻かしからぬかは。

## ●思ひいで

臺灣　藤本みどり

### 上

君が門遠柳櫻をこき交ぜて朧月夜の靜けさよと我友の云ひにし頃ろ世は只花の眞盛りにてありにしも今宵は根に行きて有らず驚名殘を若葉につげて去にしよりやがては暮れ行く木の下陰に初音をもらす時鳥をや聞かなん文讀む窓も昨日の花の梢いといたう繁り合ひて氣も心も打濕り行くにまいて夕つ方など家居近き苗代田の蛙何を愛しとや鳴き出でたるなど詫びしさ云はん方もなし物哀れなるは秋の夕べとしいへど止どまらぬ春の名殘り又如何にうら悲しかるよさるを我友はなほ一入の悲しみを我に與へぬ

我友時雄ぬしは去年の春より、しゝこりたるいたつきに罹りたれば學の業を捨てゝ其が故郷に歸り神代ながらの靜かなる景色のうちに起伏てひたすら病をやしなひつゝあり、われも、同じ頃より春秋豐けき學の園の

撫子並び立つる役をもて此地に住まひぬ我が故郷とも程遠からぬ隣りにしあれば幼き時より同じ學屋に行きかひて互に相知れるものからいと親しう交りぬまいて友の病は我がなつかしきたらちねを暗の世遠く立たせしと同じいたつきにてありしかいと哀れさの身にしみ〳〵と如何にもして此いとほしき友を元のすこやかなる身にならせてしがなと祈りぬ

友は此程より己が住居より二三丁立はなれたる山の麓に元祖母君の世放れて昔を送り給ひしさゝやかなれどいと清らなる庵に移りすみぬおのづからなる竹むらを籬に沿ひわたしてせき入るゝ水の流れ石の立たずまひなど皆ことさらならずしなしたるに處々に植ゑ添えたる梅に櫻は其折々等に咲き出でゝ得も云ひ知れぬ眺めなるに友の病もやゝおこたりて見えぬ我がやどりとも程近かければ朝た夕べに音づれて友の病を慰めぬ

こよひも亦朧月夜のおかしきに友かり寐かるんやなど思ひけるなりから友も此景色に浮かれ出でけん訪ひ來て「かゝる夏夜に籠り居たまふことかはいざ立たせたまへそゞろあるきは如何に」と誘はるゝまゝに立出づれば緩やかに吹きかふ風のまに〳〵えならぬ花の香袂に傳へ來るもうれしく其處此處立ちもとほりつゝ何時しか我が宿の裏なる觀音堂の前に出でぬ村里より一ときは高き土地にしあれば其ながめも亦一入にて心もすが〳〵しうなるばかりなり友は勞れたりとて老たる松の根に腰打かけ今しも木の間をもれてさし出でたる十三夜の月をながめゐたりしがやゝ暫しありて池の汀に立てる我を呼びて云へり「君よ此麗るはしき月を見給はずやなほこれより十五夜迄にいと樂しき望を持てるにあらずや」と「さなり誠にうるはしき望を持ち侍るよ其が亦如何にせしや君もさる樂しき望ばしもらゝ給ふにや」打笑みて問へば友も笑ひつゝ「誠よわれも此月のこと樂しき望なきにしもあられど如何にせん我がこの甲斐なき身を……」打湿りつゝいふに「愚のことを云ひ給ふかくまでうるはしき御身とならせ給ひしを、これより如何なる望み持ちたまふとも、とげられぬことやはあるさるを御身の心一つに思ひけち給ふこといと甲斐なきことならずや苦るしからずはわれにも聞かせ給へ又よき智慧も侍らんに」友は又月を見入り居たりしがやゝありて「君にあからさまにきこえんもいと面伏せなる業なれど云はで止まれぬべきことならねば耻しぬがて申すべし浮きたることゝな思しぞ、われは君も知り給ふごと去年既に死すべかりし命なりしもゆくりなき君を友としてよりあした夕べに慰められはげまされて今はかく並の身となりぬ、こはまたく君の賜とわれは片時も忘れたる時とてはなし其忘れぬ心始の程は唯君を我が又なき友として思ふのみなりしも苦るしきかな、遂には、君よ人は感情の動物とやかあゝわれは苦るしき戀に陷りぬ……」友は己が手をしかと双手に押さへて「されど君よ如何にせん我が此戀を解するときと共に我が身の悲しきをも知りぬ君よ、君はよく我がこの心知り給ふや」青白き顔をもたげてわれをじつとみまもりつゝ云へり我れは何となくむれせまりて涙の袖におつるを覺えず「悲しきことをのりたまはるものかな、我が要なき心づくし君はさまで思しとりたまふか」われは感謝の意を友に表しつゝ「君よ我れの喜び何にたとへん、されど君は病おこたりなば再びこれより去年の學を亦ふみかへし家のため國のためつくし給はればならぬ御身なるよ、さるを甲斐なきことなど思ひ出で給ひ己が身を己れにて惡しく、なし給ふことおろかの限りならずや我れは行末遠く高き望をこそ承らめさる悲しきこと聞かんとは思ひもよらず」友は我が言葉を遮へぎりて「否とよ君は、我れを勵まさんとてそはのたまふなれど我れの病たとひ此まゝ癒ゆるとも其はかりの間の浮世の夢にて行末長く命あらんこと思ひもかけず最早我れは學の道も書も琴も一つとしてうつしみの世のこと願はしからずば此命終るまで此靜かなる里に起伏て月雪花に心をやらんのみかゝる身にし

あれば元より我が戀のならぬをも知りぬされど我がかく思ふは君に一言も語らで朽ち果つるとの悲しさにかくは君に告げ參らせては其哀れと思し給はんことを乞ふのみ……』『そは元より君の御心哀れとも悲しとも承りぬ我がなまじひに君をなぐさめまゐらせんと思ひしこそ今は中々に仇なれ我れは君と、はらからも及ばぬ親しきなかとなりたれど、君よあしくな思されぞ、まこと我れは君を我がつひのよるべにとは頼まざりしよ我れは又君の悲しきなやみを一日も早くとり去りて元のごと健やかなる身とならせ給はんことをひたすらに願ひしのみ、かつ我れは君の御なさけ受けらるべき身にもあらずされば君も今よりさる要なきこと思したまふな一筋に身を養ひたまへ學の道ふみかたくは猶其他にわけ入る道は幾多もありなんを如何てさる心細きことといひたまふ彼處に御座す父母君の御心君は何とも思さぬにやゆるしたまへ君よ我れは此外に言ふべきすべを知らず……」我は、はふり落つる涙をもろ手にて覆ひぬ友はやゝ暫し身動きもせでありしが「君よ御心騒かせし罪深きをゆるし給へ我は君の言葉を聞きて彼の御空に照れる月のごと小川に流るゝ水のごといと清らしうなりぬ……此上は斯くふくつけなる我が罪咎め給はでなほ今迄のごと同胞とし思し給はんことを』『もとより我れは兄君とも頼みぬ我がむらいをも憎ませ給はで妹としもかへりみたまひてよ』『さらばなつかしき君よ」と立上りて月を見上げ「アゝ此月も如何になり行くべきと、ひとりごちつゝ「去らまく惜しき今宵なれど、いたく夜も更けつらん又あすを契りていざ立別れなん」友は歸り行きたり我はなほ立去りも得ず

## 下

友はとみに思ひ立ちて近き出湯の病を養はんとて出立ぬ月あまりを經て花もやう〳〵散りかゝる頃歸り來ぬされど病はなほはか〴〵しうもあらず斯くて我れは何時迄も此地に住まひて幼き　生し立てはやと思ひつる

にゆくりなきことより我れは此地を遠く立はなれ南のはての臺灣にかしま立つとゝなりぬ友の聞かば如何に思はん、

さすがに此事は言ひ出で兼てありしに友は早くも何處よりか聞きけん去にし春の夕べ我が庭の櫻友に贈りしを疾くに捨てたりと思ひしに今は色あせて見るも悲しうなりたるに兼て友と取り換し我かうつしゑに添へて送り返へしぬ文していへり

君は此地を遠く立去り給ふと聞く我がこれよりの寂しさは如何ならんされど君の出立ちたまふを止むべくもあらず目出度う行かせ給へ我は今迄の君の眞心に報ゆべきすべなくて別るゝことのいと本意なう思へども今更に詮なきこととなり命だにあらば又逢見ることのありなんなれは其を樂しみに君と語りし昔思ひ出でゝひたすら勉めはげむべし君もたとへ八重の汐路遠く立放れ給ふとも此里に我れありてふこと忘れ給ふな君のかたみの品我が手もとにあらば中々に苦るしかるべし共に遠く持ち去りて我が胸の苦しみ去りてよなほ近きうちに侍らひてしみ〴〵名殘惜しみ申すべし又我が寫眞君は返へさんと言ひ給ふめれど其はしひて持ち行き給はんことを折々の思ひ出草ともなるべければ……アゝ今は何をか言はん悲しき友よ御身はさきく榮へませ我は御身の幸を常にいのりつゝあるよ君と今此處に袂を別たば再び逢見るの日はいつ……アゝ我は悲しみの種まくために此地に伏すさひし

## ●嵐山の曙

大阪　小野政子

薔薇色の雲東の空に匂ひて、まだ薄暗き小倉山の嶺、落ちかゝる殘月一痕影、淡くして夢にも似たり、薄藍の空に花を見捨てゝ歸路に急ぐ雁行一連、流石に春の色香の忍ばれて、音に鳴きつゝ行く、やよ雁金落ちよ

故郷の文言願てん。

大堰関外大堰の流に溶ふ、花間の一路、習々たる朝風に袖を吹かせてもり行けば可憐ならずや落花二三片我簇亂髪にふりかゝる。

我はさながら天津御空に遊ぶ心地して、我身まで神の子の如く思はれ、矢竹のうきふし繁き浮世の事ども忘れて、巖の一角にイみつゝやならの邊り景色打まもれば、満山は唯白模糊として、處々に薄黒き松杉の影を交え、翼の毛吹きて爽からぬ朝風に、床しき花の香は朧にも立ちこむる霞を洩れて匂ふ、それよ、薄紅に花の面包める散人の面影の薫り懐かしきにも似て。

静かに耳打澄せば、脚下千尋の底、走る大堰の川水は天の秘密を私語く神のみ聲にも似て、微なる音に巖間を縫ふて流れ行く。

あゝ静なの春の曙よ。

暁しも花を出づる山寺の曉鐘、一杵二杵、寂たる里の夢を破つて吼る時あゝ多趣なる散郡の朝景色、竹裡茅屋、背戸の櫻の一しきり朝風に吹靡して、あはれ今朝汲み初めし山の井の、乙女の栖や花ならん、聲を告ぐる鶏の聲籬の下の犬の聲、さては小川の水車の聲まで手に取る如く聞ゆ、家々幾縷の炊烟、さゝがにの糸よりも細く末は霞に消え行くめり、やがて東の空薔薇色の雲見る〳〵紅と變り、一團の紅暾は湧き出ゝ血汐をおし排して匂ひ出ず、夜は明け放れたり、嵐山の一帯白模糊は變じて見渡すかぎり、櫻花千枝又萬枝松杉の影背み行く様、天然の活動寫眞を見ゝ心地ぞすめる、蓑着て下す筏師乃管の動小に幾片の落花を載せて、聲ほがらかに節面白く舟歌唄ひ行く様長閑にて、いとも床しく聞ゆめり、霞の奥の春こそ思やらるれ。高根も谷間も爽からぬ吹雪に埋れ、霞に匂ふ百鳥の聲花に戯るゝ胡蝶の影、春の心も亂れたり、遠山は低ふして見えず嵯野より嵯峨御室朱雀路かいて燃ゆるかがろふに、やがては此仙境も亦香風影花の間に満ち満山は管絃糸竹の聲溢れなん、あなうたて。

## ◉散り行く花

駿野紫子

嗚呼如何なれば、かくてだに、我が夫の、み心は狂ひ初めしならむ、たゞ、かりそめならぬ、褒やの睦言にも、幾世久しく、友白髪の末までも、變るな變らじと、かたみにちぎりかはせしなかなるを、萬にたらわぬがちの、わが身なれば、み心にそまぬも、ことわりぞかし、されど別にとり立てゝいふべき程の、あやまちありとも思はぬに、いかなれば、かくはすげなくあたり給ふにやと、兎つおひつ、思案にくるゝ花子の身こそ、あはれなる。

そもこの花子は、幼けなき折、父母にわかれて、世にもあはれなる孤兒なりしを、伯母なる人の、いとあはれみて、已が子なきを幸ひ手許へ引取り母におとらぬ慈しみを加へて育てけるに、花子も物心つきし頃よりは、それとさとりて、さらぬだに、やさしき心を一しほやわらげて、仕へまつる程に昨日とすぎ今日とくらしつ、花子は今年十八才の妙齢を迎へぬさるゆへに伯母は一日もはやくよき緣を求めて、むかひ取り、花子に一家をゆづり己は初孫の顔なとみて、老さき短かき身を心易う送らんものと心知れる人々にはそれとほのめかす折もありけるが、ひと日某の君の來給ひて似合しきゑにしなるがいかにやと、いひ入れ給ひしが花子か今の夫秋野武男その人なりけり。

すぐ世いかなるゑにしの結ばれてあるにや双方異議もなく整ひて、やがて黄道吉日を撰びつ四海波靜かに武男は秋野一家の人となりすましぬ。かくて武男は伯母に仕へていとねむごろに。また花子をもあはれみて、

何にまれ、やさしういたわるに、伯母も花子も武男のあつき情けには一と方ならず喜び居りぬ。

されど月にむら雲花には嵐とやらにて、或る日伯母は、ふと風の心地と打ちふしけるが日頃すこやかなる身のいかにしつらん、俄に重ゝ容體と變じ醫士の手當二人の看護のしるしもなく遂に入相告ぐる鐘の音と共にあへなく彼の世へ旅立ちぬ

かくてせんすべもなく／＼花子は武男にはげまされつ伯母のなきがらを手厚く葬り七日／＼の佛事も心をつくしてぞ營みける

さる程に花子は伯母失ひてより袖に涙のかわくひまもなきにまたひとつ新らしき憂は花子の身にふりかゝりぬ

そは外ならぬ武男のこの頃の身持ちにて初めのうちは花子もそれと見て見ぬふりをよそほへど今日この頃となりてはいちゞるしく變りて家にある事はいと稀れになり行きその上ならず花子を驚かはしは亡き伯母がなさけをこめて花子にと殘し置きし黄金の今は手筥の内にあらずなりし事にぞある

かゝる事のありとは思ひ設けぬ花子はあまりの事にひたと呆れてしばしせんすべを知らざりけるがやう／＼思ひなほしてかくてこのまゝに知らず顔してあらんには一人武男のためのみならず大恩ある秋野一家にもかかわることなればと花子はいち早く思ひさだめて武男の歸へりを今か今かと待ちくらしけるがやがて格子の明く音にそれと花子は走り出でしにこは如何に武男にはあらでいかめしき男子二人いとも慇懃に案内を乞へるなりけり

花子はハツと驚きて慇懃に手をつかへ何れよりといふも口のうちにて洋服着たる男の差し出す名刺をふるへる手に取り上げ見ればあれいかにせんあざやかに執達吏熊田虎雄と記されたり

嗚呼あはれ花子が心づきしは既におそかりしなり

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此の頃世上にかまびしき詐僞事件の人名中共謀犯として秋野武男の名は折々新聞紙上へ記されぬ

こゝ巣鴨精神病院へ此の頃入院せし婦人ありけるがこの婦人は非常なる悲しみのため發狂せしとやらにてたゞなきかなしみ折々御伯母様ゆるし給へ何も／＼皆この花子が心のいたらざりしためとなき叫ぶのみ

嗚呼花子は遂に發狂せしなりあはれ……

## ●風の辭

伊勢山田古市町　前田久子

風こそいと定めなきものにはありけれ。

青柳の糸にも姿をかくし、尾花が果敢なき袖にも宿りを占め、鞦韆のすかる乙女の玉手もゆらに打ちならす、鈴に招かれ、見るよしもなき形を童が慰の風車にもてはやされ、靜かなる心を軒端の風鈴に歌はるゝは風なりけり。

天の八雲より吹き落ちては木をつんざき、家を倒し、潮の八百會より吹き上げては岩をくだき、船を覆し、荒鷲も木の葉の如く吹き飛ばされ、猪も土くれの如く吹き仆され、野とも云はず山とも云はず、すさびにすさび、狂ひに狂ふも又風なりけり。

春の晨は之れを花に厭い、夏の夕は之れを端居に待ち、秋さりくれば之れを森の葉音に悲しみ、冬立ちくれば之れを夜寒の床にかこつ。

東風と云ひ、西と云い、南と云ひ、北と云ふ、げに定めなきは風なるかな。

風や見れども見えず、とれどもとれず、有るが如くなきが如し、さはれ明けき今の大御代こそは、天文臺とやらんもの備へられて、しかく量りがたき風の心をすらしるなりけれ。

（完）

### ●無縁塔

それがし

雨風に晒されて並び立てる事幾歳、世は盂蘭盆の永へに眠れる靈を慰めんとて、靈は香花の臺床しく、夜は燈火の煙寒き時も、香花手向られし事なく、幸薄き乙女子が無き母の墓塋の飾り無縁といへる名の可憐の心痛く突きたりけん、戰慄く手先寒の野花手折りて捧げし後、花は色あせ葉は枯れて今や朽果んとすれど、道行人の顧るもあらさりき。あはれ墳墓の下に眠れる其人よ、過世如何なる罪やありけん、親兄弟も友も無き無縁塔とは唯がつけし名ぞ。石は傾き苔蒸して草叢々と生茂り月冷かに墳墓を照す時如何に心無き里人も物の哀は感ずべきに線を捧げて悠々と烟草管くわへて過行を見れば何處迄も汝は此世に縁無き身なり。野山は花の錦を織れど是には花も咲かずして萎れたる菫一本嬉しげに小鳥の聲も聞えざるは世にも花にも捨られしかはた捨しか。森蔭を出ては匿れ幾度と數しれぬ汽車の往來を日々に眺むる汝が眼には富にへつらひ權におもれり、戀に悶ゆる世の中を如何に思ふと問はんとすれば冷たき石碑我手に觸れて無縁の文字のみ鮮かに讀まれぬ。花は散り木の葉落る事の幾かへり無縁塔の名苔に埋るゝの時石は運ばれ地は崩されて、采種花咲き胡蝶遊ぶの地となるべし。かゝるを共思ひつゝ夕日輝きて塒に歸る鳥の二ッ三ッ四に飛び行けど我は猶ほ其處に佇めば熊負ひて行く賤の女に不思議なる顏して見入らるゝもうたてし。さらば無縁の墳墓よ

### ●春興

山城宇治　まゑ子

ものゝあはれは秋ぞまされると云ひしはそれもさなれど長閑やかなる春の日こそなか〳〵にたのしけれ。霞こめたる野末に思ふどちうちむれて花の梢にうたふ百千鳥のゆかしきしらべ聞きつゝ雲雀の床にすみれをつみ萌出る岸のむしろにつはななぬきなどして青柳のいと永き日の暮るもしらず行きくれては野邊の雲に花の宿かるこそおかしけれ。老も若きもおしなべて心のうき立つものは春になん、うるはしう咲く花を見てはもの思ひもなしと古しへ人の仰られしもことはりにておかしくもありたのしくもあるは春なりけり。

### ●たれこめし友の許に

岡山　まつゑ

そよ〳〵とふく風に香をや送りけむ谷の戸の鶯も今はわが園に宿しめ一一人梅花の面目をそふるに道ゆく人も立よりて言の葉かけ候をかれて契りし御許様の御こしなきはもし御身に御惱もやと昨日ふみ子ぬしのとむらはれしまゝ御うかゞひ申候ところ御許様にはこの頃とかく御こもりがちなるよし承りさては例のみ心に世の無情をなげきおはすにはあらざるかと思ひ出らるゝも二なき友とたのみまつりしわが心つかひとゝがめ給ふなあまりに物思ひに沈めはおのづから病をもひきおこしとか申候へは何事も心のどかにおぼし給へ野にはゑみつゝむかふる花ありよろこびをうたふ鳥ありて心を慰めざるはなしなとてたれこめてのみ過し給ふべきや君が清き御心は神も知りまさむを時來れば梅の花も霜雪をしのぎて匂ひいづたゞ自然にまかせて思ひな過し給ひぞなつかしの友よ快活なるもとの御身にたち歸りたまひて心身の御攝養遊はさるべくかたみに袖つられてのそゝろありきに春の日をなほ短しとかこちあるは又初聲に胸のちりはらひてゆく末の希望まど語りあひしこともありけるものをまつとしきかばとうき立せ給へあなかしこ

●懸賞和歌兼題

## 春雨、野邊

（四月分）締切三月十五日

（天○、地○、人○、の外秀逸十種を選び金壹圓以下の圖書切符を呈す）投稿は端書に限る

●懸賞文才媛詞藻

抒情文
叙事文
消息文
韻文

二十四字詰
四十行限
〆切
四月二十日

（甲賞金參圓、乙賞金貳圓、丙賞金壹圓、圖書切符を呈す）

## 夏季增刊懸賞文募集

（詳細は前號わか艸誌上にあり）

●懸賞文課題

## 日本婦人

## 家庭小說懸賞募集

新しき家庭の讀物に適する純潔清健なる小說を募集す▲家庭小說の投稿者は男女を論ぜず普く募集に應ずる事を得。▲原稿は二十四字詰二百行限（投稿締切四月三十日迄）投書の封筒に『家庭小說』と朱書すべし▲『家庭小說』は甲乙の二種を選び當選の作は女學世界小說欄へ掲載す賞金左の如し但し原稿は凡て返戻せず

甲賞　金拾圓
乙賞　金五圓

投稿規程　投稿用紙は半紙又は野紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

| Reading | English | Japanese |
|---|---|---|
| バンブー | Bamboo | 竹 |
| パイン トリー | Pine tree | 松 |
| プラム トリー | Plum tree | 梅 |
| ピーチ トリー | peach tree | 桃 |
| アップル トリー | Apple tree | 林檎 |
| チェリー トリー | Cherry tree | 櫻 |
| メープル トリー | Maple tree | 楓樹 |
| スイート オレンヂ トリー | Sweet orange tree | 蜜柑 |
| チエスナット | Chestnut | 栗 |
| オレンヂ トリー | Orange tree | 橙 |
| レモン トリー | Lemon tree | レモン |
| ペーア トリー | Pear tree | 梨 |
| ウオルナット トリー | Walnut tree | 胡桃 |
| エプリコット トリー | Apricot tree | 杏 |
| ゼ ヂヤパンニース パアシンモン トリー | The Japanese persimon tree | 柿 |
| フラワー | Flower | 花 |
| グラッス | Glass | 草 |
| リーフ | Leaf | 葉 |
| ルート | Root | 根 |
| ブランチ | Branch | 枝 |
| バッド | Bud | 蕾 |
| アクアイチック プラント | Aquitic plant | 藻 |
| クリサンセマス | Chrysanthemum | 菊 |
| ダッフオデール | Daffodil | 水仙 |
| バイオレット | Violet | 菫 |
| ダンデリアン | Dandelion | 蒲英公タンポ |
| フイグ | Fig | 無花果 |
| ハーブ | Herb | 一年草 |
| ローズ | Rose | 薔薇 |
| ピンク | Pink | 石竹 |
| リリー | Lily | 百合 |
| フラッグ | Flag | 菖蒲 |
| タイガ リリー | Tiger lily | 巻丹 |
| ウイーズ | Weeds | 雜草 |
| ストーク | Stalk | 莖 |
| トリー | Trees | 樹木 |
| シーダア | Ceder | 杉 |
| サイプレッス ゼ ヂアパンニース | Cypress the Japanese | 檜 |
| オーク トリー | Oak tree | 槲 |
| ゼ トランク オフ エ トリー | The trunk of a tree | 幹 |
| シー ウヰーズ | Sea weeds | 海草 |

# 雜報

## ●村雲日榮尼公

京都瑞龍寺門跡大僧正村雲日榮尼公は故伏見一品邦家親王第十王女にして安政二年二月十七日伏見宮御邸に誕生あり御幼稚より同寺前門跡日尊大比丘(貫伯母)の資となり佛門に入らせられ先規に依り前關白九條尚忠公の猶子とならせらる同寺は豐太閤の姉君瑞龍寺殿の開創にして以來高貴の比丘九條公の猶子となりて住職せらるゝの規範にして宮中御由緒寺院の一なりき然るに明治維新となり法親王丼に大比丘尼の方々は御還俗又は復歸仰せ出されしが尼公時に齡十五六なるにも係らず一時佛門に身を委したる限り還俗すべからずと誓はせられたる後廢佛毀釋の聲高き中を打凌がせられ日蓮宗に於て活如來と仰がれ到る處に說法法話を爲して飽かず傍ら婦人の道義を勵ます愛國護法婦人會を創立し一方には赤十字社の事業に付篤志看護婦人會を設けて多くの會員を勵まし旦夕瑞龍寺佛殿の勤行また懈怠なく洛南深艸瑞光寺(元政庵)の比尼薩台巖和尚を師とせられ師として遇せらるゝこと弟子の分を越へず一書を贈らるゝにも師の子を署し玉ふとなしとぞ故に和尚感泣尼公より贈らるゝ處の一書一字たりとも淸函に秘藏すといふ、日蓮宗一般に於て尼公の法德の大なるは今更らに辯ずるの要なきも尼公の法壇に上らるゝや聽聞の男女實に仰拜感涙せざるなしとぞ善光寺大本願二條淸岡院は尼公の御姉君にして御兄弟には小松大宮殿下伏見宮殿下を始め奉り親王家中に御四人御はしけり又同尼公は本年一月の頃輕症の氣管支炎を患ひられて一時は餘程の重態なりしが爾後追ひ〳〵輕快となり今は全く御本服にならせられしといふ。

## ◎尼公の美德

此程の事なりとか、神戶西野小學校長高橋寅雄氏は、尋常科生徒數十名を率て、須磨の近鄉に野外敎授を試み、皈途大手村の梅林淸友園を過ぎり、將に園内に入らんとする時、一名の警官來り、只今當地御微行中なる村雲尼公當園において、觀梅の御催しあれば、つとめて靜肅を守り、不敬の振舞なき樣注意せよとのことなるより、校長は生徒に其由を告げ、萬一尼公の御淸遊を妨ぐる樣の事ありては畏多しと、靜に避け奉らんとせしに、尼公には自分一人の故を以て無邪氣なる數多兒童の遊樂

を妨ぐる事勿れ、との命を傳へさせられ一同を御座所近く召させられ、梅樹槎枒たる園中に整列せしめ、尼公は無限の御愛情を滿面に湛させられつゝ、生徒の一群を覽そなはし、最も慇懃に愛らしき子供よ、自分は一時の好奇心に驅られ痛く汝等の雅遊を妨げたり、との御言葉に添へて、一同に蜜柑數百個を賜はり、緩々休憩して今日の勞を慰めよとの御令旨あり。一同皆身に餘る光榮を拜謝し、校長は家令に導かれ、再び御前に進みて其恩を謝せしに、尼公は懇なる御挨拶あらせられ、校名及び職氏名など御下問あり、御手から又御前の蜜柑一籠を授けられしかば、同校長は惶懼措く能はず幾回となく御辭退申上げしも、是非受けよとの仰せあるより謹で拜受し、厚く恩を謝し引取りしとなん。

## ●臺灣士林女學校の卒業式

臺北國語學校第三附屬士林女學校は臺北を北に去ると一里餘山水明美の地に設けらる我等一行は式に參列する爲め二番列車にて臺北を出士林驛に着き停車場を出で、數步畑に沿ひて道を廻れば早や其處に國旗は麗かなる朝日を受けて飜れり校舍は士人家屋を修繕したるものなれば美しといふにあらねどよく掃き清められて婦人來賓休息所の設けもあり老たる本島婦人の案內によりて內に入れば彼女は忠實々々しく茶を汲み煙草を進めなどし室の中央卓子の上には枝ぶり面白き紅梅に黃菊の花を添へ(時に二月の下旬なりし)たるが眞の花と見まがふばかり美しくさゝれたり其下にはガラス箱の中に生徒の手になりし花簪幾本も陳べられたり其業を見るにいと巧に造り成したるは驚くばかりなりしやがて古賀女教師の先導に從ひて室を出で右に廻れば其處は遊步場にて數多の生徒美しう着飾りたるが三々五々と遊びつゝあり多くは皆頭に赤き毛糸を卷き付あり其は本島婦人の未婚のしるしなりとかや其處を通り過ぐれば又幾ならびかの教室ありて生徒の成績品造花刺繡あるは本島衣服雛形等順序よく飾られたり。

本校在籍生徒數は本科生八十九名手藝科生四十名專修科生十名合計百三十九名にして其內百九名受驗し八十一名の及第者あり又學術優等品行方正等にて賞を受けしもの四十名ばかり尙今年新に入學せしもの四十五名ありて年每に生徒の數の增し行くはいとうれしき事なりなほ其學科の程度は本科は尋常科に等しく齡も十歲ばかりより十四五歲にて手藝科は年も稍長じ中には既婚者もありて重に造花刺繡裁縫等をなし專修科は既婚

婦人多く學科も稍々高尙なるものを學べり、うち學科につきて生徒のいと困難なるは算術と圖畫にして數理のむつかしきことは元よりさることなれど造花と最も關係多き繪畫の何故かたきやといふに多くは曲線の美を畫くこと能はざればなりとされど手藝は最も巧にしてこぞ辱くも故北白川宮妃殿下御渡臺の節親しく同校にならせ給ひ製作品御買上の榮を蒙りたり。

(臺北みどり女)

◎女子寄宿好學園の設置　帝國敎育會の千田時次郎氏は、近時都下の女學生中、親戚知己の家に寄寓し、又は自炊等と稱し、甚だしきは下宿屋に起臥して、女子にあるまじき自儘の生活を營めるもの鮮からざるを憂ひ、今般成瀨女子大學校長、嚴本明治女學校長、三輪田女史、松村介石、島田三郎諸氏の賛助に由り、麴町區三番町六十八番地に、好學園と稱する家庭的の女塾を設け、此等の女子を收容し、諸學校に通學せしむる傍、園内にありて家政的訓練を與へ、且つ夜間敎育、兒童心理、實踐倫理、家事衞生等に關する講話をなすといふ。

◎女子學院の卒業式　麴町區下二番町なる女子學院にては、去月二十七日を以て、第十二回卒業式を行ひたるが、今回の卒業生數は、全科卒業生四名、英語中學科卒業生三名、日本中學科修業生十名にして、石川もと子(邦語)曾根まさ子(仝)水登みす子(仝)鳥山きあい子(英語)木村かつ子(英語)等學生の文章朗讀あり、證書授與の式を終へたる後、米國公使バック氏の一場の演説ありしといふ。

◎高等學術の講義會　神田一ツ橋なる帝國敎育會にては豫てより高等學術講義會なるものを設け、時々專門の學者を招聘して、同會を開設し、頗る世上の好評を博し來れるが、今回開設すべき同會には、學科を「實踐道德學」と定め、講師を渡邊音樂學校長に委囑し、來る十九日(土曜)より每週壹回土曜日を以て開講し、凡そ十回を以て完結すべき見込みにて、會場は敎育會講堂、聽講料は金壹圓、篤學の士は何人にても聽講を許すべく、講義終了の上は、證明狀を附與すると云ふ。

◎京都淑女學校　京都市下京區不明門通、中珠數屋町南入同校は昨春開校以來田島校長の熱心なる育英に依り生徒は已に滿員に達し現在の假校舍は益々狹隘に至れるを以て今回同校北隣なる廣壯なる家屋に移轉し現在の假校舍を寄宿舍とし此の際大に生徒を募集するよし。

◉女子靜修學館　日本橋小舟町なる同館は實業有志の賛成に依り昨年四月設立せられ專ら實業家の子女を訓育し婦女子に日常必須の技藝學術を授け他日商工實業家の良妻賢母を養成するを以て目的とする由本學年にて本撰科共各四十名を募集す。

◉ホニームーンの起源　新婚旅行を西洋にてホニームーンと稱するは、昔し歐羅巴の北部諸州にて、新婚の翌日より數へて一と月（即ちムーン）の間、蜜（即ちホニー）にて製せられたる一種の酒を毎日夫婦にて飲みたるより起りしなりと云ふ、左ればホニー、ムーンとは新婚の月を稱するものなるに過ぎざるを以て新婚後は業を休むも休まざるもホニームーンはホニームーンなり、休まざればホニームーンにあらずと云ふは誤りなりと英國の某雜誌に見ゆ

◉新刊圖書

▲改良服圖説　本書は衛生學者として有名なる山根警察署長が、其の衛生的見地より考案されたる改良服の圖説にして、同氏考案の改良服の裁ち方仕立方等を圖解もて説明し、別に改良服に關する意見として現今婦人服の弊害、帶の弊害、紐紐の多き弊、頭髮の飾、男子服の弊害、衣服改良の來歷、西洋衣服の弊、改良服の利益、改良服と學校生徒の關係、古代の日本服等の各項に分ち衛生上、且つ經濟上の利害を丁寧反覆に説明されたるものなり。同氏の改良服考案は諸事簡單を旨として專ら實用の點より割り出したれば差向き學校服として採用さるゝの價値なり。（仲鶴堂藏板）

▲繪畫の栞　此書は繪畫の定義起原より繪畫に關する用材即ち絹紙、繪具の用法を説き、畫法、裝飾、應用の道を詳細に説述して斯道に關するあらゆる注意を網羅したるものなれば、斯の道に入らんと欲するものの指南車として有益なる好著なり、著者は木田寬栗氏附錄として日本繪畫年表、日本繪畫史を添ふ。（定價五十錢發行所麻布飯倉四丁目松聲社）

▲家庭の新風味（卷の四）　堺枯川氏の同書は家庭の親愛と題して其第四卷を發行せり。家庭の新風味として現今の風俗習慣に適應すべきや否やは知られど其の説く所ろ斬新切實にして文章又簡潔家庭改良の一助たるべし。（定價二十錢内外出版協會藏版）

▲饒舌　家庭並びに社會の一局部を論評したる文學雜誌にして所々奇抜なる觀察あり理屈七部詩味三分の小册子なり。（三番町美育社發行）

▲小説信夫摺　著者は米澤の才媛大栄信子篇中收むる所ろも男の顔、金時計等あり、婦人の處女作としては比較的文章暢達し、間に健筆驚く



# 女學世界第貳卷第六號記事要目

（五月五日發行）


▲婦人の健康（論說）警察醫長　山根正次君
▲花看半開（女子敎育談）‥‥棚橋絢子女史
▲題未定（女子敎育意見）‥三輪田眞佐子君
▲家庭隨感‥‥‥ドクトル　川瀨元九郞君
▲素人看病法‥‥‥醫學士　佐藤恒久君
▲春の自然（下）‥高等女子師範講師　藤堂梅軒君
▲感化院の話（實驗談）感化院長　高瀨眞卿君
▲家事經濟の心得‥成女學校講師　嘉悅孝子君
▲室內裝飾の心得‥‥‥禮法師範　近藤嘉三君
▲新案化學遊戲‥‥‥‥‥‥淺野松琴君
▲詠歌のしをり‥‥‥‥文學士　武島羽衣君
▲伊勢の大輔（史傳）‥文學士　尾上柴舟君
▲忍耐の說（女德）‥‥‥‥‥野中千代子君
▲日蝕の話（科學）‥‥‥‥‥‥岡田光子君
▲春の別墅（家庭小說）‥‥‥田山花袋君
▲美代子（家庭小說）‥‥‥‥楓葉女史
▲慈善家の妻‥‥‥‥‥‥‥‥橫山天涯君


其他例により材料豊富

## 毎月一回五日發行

### 定價表

| | | |
|---|---|---|
| 一冊（紙數二百八頁） | ‥ | 金二十錢 |
| 四冊（三ヶ月分） | ‥‥‥ | 前金七十五錢 |
| 八冊（半ヶ年分） | ‥‥‥ | 前金一圓四十五錢 |
| 十六冊（一ヶ年分） | ‥‥‥ | 前金二圓八十錢 |

內（定刊數‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥十二冊　増刊四回‥三、六、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

### 廣告料

| 等級 | 一行（二十四字詰） | 半頁卅二行 | 一頁六十四行 |
|---|---|---|---|
| 特等 | ‥‥ | ‥‥ | 割引三十三圓 |
| 一等 | 四十三錢 | 十三圓七十六錢 | 割引二十七圓 |
| 二等 | 三十五錢 | 十一圓二十錢 | 割引二十二圓 |
| 三等 | 三十錢 | 九圓六十錢 | 割引十八圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

## 注文略規

◉本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
◉御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
◉郵劵代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る。
◉總目錄御入用の方は二錢劵相添へ申込あれ。


明治三十五年四月五日發行　第貳卷第五號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍（東京市京橋區西紺屋町二十六七番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

# 博文館諸雜誌發行表

## 定價

| 雜誌 | 定價 | 郵税 | 發行 |
|---|---|---|---|
| 太陽 | 一冊三拾錢 | 郵税三錢 | 每月一回 |
| 少年世界 | 一冊拾錢 | 郵税壹錢五厘 | 每月一回 |
| 中學世界 | 一冊貳拾錢 | 郵税貳錢 | 每月一回 |
| 女學世界 | 一冊貳拾錢 | 郵税貳錢 | 每月一回 |
| 文藝俱樂部 | 一冊廿五錢 | 郵税二錢五厘 | 每月一回 |
| 太平洋 | 一冊六錢 | 郵税五厘 | 每月曜日 |
| 圖書世界 | 一冊三錢 | 郵税五厘 | 每月一回 |

## 四月發兌表

### 六大雜誌

| 雜誌 | 號 | 發行 |
|---|---|---|
| 太陽 | 第四號 | 五日發行 |
| 中學世界 | 第五號 | 十日發行 |
| 女學世界 | 第五號 | 五日發行 |
| 文藝俱樂部 | 第五號 | 一日發行 |
| 少年世界 | 第五號 | 一日發行 |
| 圖書世界 | 第四號 | 十五日發行 |
| 文藝俱樂部四月増刊 京都と奈良 | 第六號 | 十五日發行 |
| 少年世界四月増刊 動物園 | 第六號 | 十日發行 |

### 太平洋

| 號 | 發行 |
|---|---|
| 第十四號 | 一日發行 |
| 第十五號 | 八日發行 |
| 第十六號 | 十五日發行 |
| 第十七號 | 廿二日發行 |
| 第十八號 | 廿九日發行 |

## 廣告料

| 雜誌 | 料金 | 備考 |
|---|---|---|
| 太陽一行一回 | 金四拾五錢 | 五號活字十八字詰 |
| 少年世界同 | 金四拾錢 | 五號活字廿四字詰 |
| 中學世界同 | 金三拾錢 | 五號活字廿四字詰 |
| 文藝俱樂部同 | 金四拾錢 | 五號活字廿四字詰 |
| 女學世界同 | 金三拾錢 | 五號活字廿四字詰 |
| 太平洋同 | 金四拾錢 | 五號活字廿二字詰 |
| 圖書世界同 | 金拾五錢 | 五號活字廿四字詰 |



（後付の一）

（後付の四）

# 再版出

| 版 | 著者 | 書名 | 正價 | 郵稅 |
|---|---|---|---|---|
| 九版 | 日比野正吉君著 | 劍舞術教範（全壹冊） | 十八錢 | 四錢 |
| 七版 | 野崎左文君著 | 日本名勝地誌（七） | 三十錢 | 八錢 |
| 七版 | 小林鍵太郎君著 | 圍碁入門（全壹冊和製） | 十五錢 | 四錢 |
| 三版 | 小林鍵太郎君著 | 圍碁定石（全壹冊和製） | 十五錢 | 四錢 |
| 七版 | 大和田建樹君著 | 聖德太子（全壹冊） | 八錢 | 四錢 |
| 七版 | 大和田建樹君著 | 惡七兵衞（全壹冊） | 八錢 | 四錢 |
| 八版 | 大和田建樹君著 | 相模太郎（全壹冊） | 八錢 | 四錢 |
| 九版 | 巖谷小波君著 | 源三位（全壹冊） | 六錢 | 二錢 |
| 十二版 | 巖谷小波君著 | 白虎隊（全壹冊） | 六錢 | 二錢 |
| 七版 | 巖谷小波君著 | 朝比奈（全壹冊） | 六錢 | 二錢 |
| 七版 | 巖谷小波君著 | 草薙劍（全壹冊） | 六錢 | 二錢 |
| 八版 | 巖谷小波君著 | 日吉丸（全壹冊） | 六錢 | 二錢 |
| 六版 | 巖谷小波君著 | 文覺上人（全壹冊） | 六錢 | 二錢 |
| 七版 | 巖谷小波君著 | 和唐内（全壹冊） | 六錢 | 二錢 |
| 七版 | 巖谷小波君著 | 高千穂（全壹冊） | 六錢 | 二錢 |
| 十七版 | 巖谷小波君著 | 玉の井（全壹冊） | 六錢 | 二錢 |
| 十六版 | 巖谷小波君著 | 松山鏡（全壹冊） | 六錢 | 二錢 |
| 十五版 | 巖谷小波君著 | 花咲爺（全壹冊） | 五錢 | 二錢 |
| 十九版 | 巖谷小波君著 | 舌切雀（全壹冊） | 五錢 | 二錢 |
| 十五版 | 巖谷小波君著 | かち〱山（全壹冊） | 五錢 | 二錢 |
| 十三版 | 巖谷小波君著 | 瘤取り（全壹冊） | 五錢 | 二錢 |
| 十四版 | 巖谷小波君著 | 文福茶釜（全壹冊） | 五錢 | 二錢 |

發兌元　東京日本橋區

（後付の七）

（印內製本）

女學世界
毎月壹回五日發行
第貳卷第五號
(明治參拾參年貳月廿五日第參種郵便物認可)
(明治參拾五年四月五日發行)



 東京秀英舍印刷